

茨城県結城郡八千代町

一本木遺跡
発掘調査報告書

平成9年3月

八千代町教育委員会
一本木遺跡調査会



双耳坏



绿釉陶器

序 文

八千代町長 大久保 敏夫

このたび、国営霞ヶ浦用水農業水利事業に伴い、八千代町仁江戸の一本木遺跡が発掘調査され、町にとって新しい発見がありました。その成果が報告書としてまとめられ、出版のはこびとなりましたことは、誠によろこびに堪えません。

八千代町では、平成3年度から第3次総合計画アクセス21によって、自然と人間が調和する町づくりを進めています。その中の一つに文化の創造があります。文化財の保護・保存・活用についても総合的な計画の中で実施されています。また、霞ヶ浦用水事業も生産基盤の整備の一つの事業であり、開発と保護の調整が必要となってきます。

今回の調査は遺跡の記録保存を目的としたもので、発掘調査した部分は遺跡全体から見れば一部分ではありますが、形はなくなってしまいます。1200年前の文化が現在に残されてきたことを思うと感慨深いものがありますが、その分出土した遺物や調査された記録が、歴史の重要な資料になってきます。

文化財は、町にとって先人たちが私たちに残してくれた貴重な宝であります。これからも、文化財を活用した町づくりを進めて行く上で、一本木遺跡の発掘調査は大きな意義があったと考えます。

終わりに、調査を担当された常総考古学研究所の藤原均先生をはじめ、調査にご理解ご協力いただきました関係諸機関、地元の方々、また調査に参加されましたみなさんに厚くお礼申し上げます。

序文

八千代町教育委員会
教育長 坂入誠一

仁江戸地域にまつわる伝説を耳にしてから久しい。特に、桔梗は植えないとか、桔梗の模様の着物は作らないとか、桔梗姫にかかわる言い伝えが、今でも地域の風習として守られているとか……他の地域にない、昔とのかかわりのある地域のように思っていた。

昭和30年代の半ばの頃かと思うが、仁江戸の小口さんの所で石棺が発見され、現物を見せてもらった事があった。その時も素人考えで、古い時代から人々が住みつき、大変な力を持った豪族が住んでいたのではないかと考えていた。

この地域の中にある一本木という地区では、前々から一本木遺跡として町に登録されていた。このたび、国営の霞ヶ浦用水農業水利事業の配水管布設工事が、仁江戸の一本木地区を通過するため、工事前に試掘がおこなわれ、遺跡の確認をしたから、本格的な発掘調査が開始されたわけです。

初めから、この地域に伝承されるものとは違った、もっともっと古い時代の歴史が眠っているのではないかそういう楽しみがあったわけです。

地域の方々も、自分の耕作地の下に、先人の生活が眠っているなんて、考えても見なかったことでしょう。それにしても、畑を耕しながら、土器の破片や貝殻などに出会った事など、ずいぶんたくさんの方々が経験されていたはずです。自分の畑だから、自由に発掘してみようという試みもなく、自然の不思議とでもいう思いで、先祖から子孫へと受けつながれ今日に至っていたのです。

今回、常総考古学研究所の藤原均先生のご指導によって、この土地に、調査のメスが入れられたのは、平成8年7月5日のことでした。11月15日までの4か月余の歳月は、仁江戸一本木に縄文人が住んでいたことや、奈良・平安時代の大集落跡があることを立証してくれました。

本来、この地区全体に及ぶ発掘を試みることをすれば、もっともっとすばらしい、先人の生活を振り当てられるかも知れません。そう思うとわくわくして来ます。そして、このままそっくり保存して置きたい等と、遠方もない想いを抱いています。

このように、すばらしい発見の事業にご協力下さいました皆々様に、心から感謝のことばを捧げて、序文のことばといたします。

例　　言

- 1、本報告書は、茨城県結城郡八千代町大字仁江戸字一本木に所在する「一本木遺跡」の調査報告書である。
- 2、本遺跡の調査は、国営霞ヶ浦用水農業水利事業による配水管布設工事に先行する埋蔵文化財の発掘調査である。調査面積は、長さ600m、幅4.25m～4.50m及び一部拉張部分を含め2,600m²で、6区の調査区に分けて発掘調査を実施した。
- 3、本遺跡の調査は、平成8年1月に町教育委員会が行なった確認調査の結果を得て、同年7月より11月上旬まで本調査を行なった。
- 4、本調査は、調査会を組織して行い調査は藤原 均（常総考古学研究所、日本考古学協会員）が担当した。
- 5、調査会の組織は、別項に示した。
- 6、本報告書の挿図、挿表、図版目次は作成せず、その都度関係図版等を示した、それ以外は、その都度示した。
- 7、本報告書の縮尺は、以下の通りとしたが水系レベルはその都度示した。スクリーンの表示は、凡例に示した。

住居跡	1/50	カマド内遺物出土状況	1/20	石製品	1/4
掘立柱建物跡	1/100	カマド実測図	1/40	縄文式土器	1/2
土坑	1/50			石器	1/2
溝	1/50	土師器・須恵器	1/4		
全測図	1/500	鉄製品	1/2		

- 8、本遺跡の調査に際し、下記の方々の御協力・御指導があったので、記して謝意を表する。

茨城県教育庁文化課、茨城県県西教育事務所、茨城県教育財團、茨城県立歴史館、国立歴史民俗博物館、農林水産省関東農政局霞ヶ浦用水農業水利事業所、千代川村教育委員会、小川建設、八千代町耕地課、八千代町建設課

瓦吹 堅、川井正一、岡田茂弘、平川 南、赤井博之、小川由男

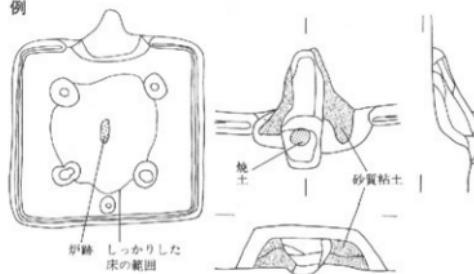
砂見 寿（双耳坏・墨書き土器等貴重な資料を提供していただいた。）

目 次

序 文 八千代町長 大久保敏夫
序 文 八千代町教育委員会教育長 坂入誠一
例 言
目 次
調査会組織

- I. 遺跡の位置と環境
- II. 調査に至る経緯
- III. 調査経過
- IV. 調査結果の概要
- V. 遺構と遺物
 - 1. 住居跡
 - 2. 掘立柱建物跡
 - 3. 方形周溝墓
 - 4. 土坑
 - 5. 溝
 - 6. 出土遺物
 - 1) 住居跡内出土遺物
 - 2) 掘立柱建物跡出土遺物
 - 3) 土坑内出土遺物
 - 4) 関連遺物
- VI. まとめ
 - 1. 住居跡
 - 2. 出土遺物について
 - 1) 土師器
 - 2) 須恵器
 - 3) 緑釉陶器
 - 4) 墨書き土器
 - 5) 鉄製品
 - 6) 双耳壺
 - 7) 旧石器、縄文、弥生時代の遺物
 - 結び

凡例



一本木遺跡調査会組織

調査会委員

坂入誠一	(八千代町教育委員会教育長 遺跡調査会会长)	吉村光夫	(八千代町役場耕地課長) (生涯學習課長)
大久保莊司	(八千代町文化財保護審議會 會長)	高野市郎	(仁江戸東行政区長) (生涯學習課長)
藤原均	(調査担当、常總考古学研究所)	高野光雄	(仁江戸西行政区長)
青井 隆	(霞ヶ浦用水農業水利事務所長)	大島利夫	(地権者代表)

地権者

古橋脩平、前野潤一、中山正一、古橋清一郎、高野初雄、岡村 明、大島利夫、中山一雄
廣瀬美代子

調査班

藤原均(調査担当、常總考古学研究所、日本考古学協会員)、沢辺仁子(調査員、川村学園
女子大OB)、金子邦子(現場事務員)

作業員

中山隆光、中山正一、森 幸三、福田 宏、高野長二郎、永瀬よし子、篠崎 健、永瀬成世、
佐々木和恵、砂見加代、大島千代子、高野とみ江、中島弥希、相田久美子、相田香織、大倉雅司
平間智明、安良岡秀二、國府田幾美、片平智子、中久喜佑美、鶴見恭子、山口裕美、柴 明夫
古沢雄一、小口将人、名古屋拓磨、大久保 泰(以上現地作業員)
新海静子、加藤美智子、園部八重子、黒沢一枝、高橋初子、野口 緑(以上整理作業員)

事務局

湯本充一	(生涯學習課長)	石島和男	(前生涯學習課主査 兼文化係長)
古橋洋一	(前生涯學習課長)	山野井哲夫	(生涯學習課文化係)
秋葉進	(生涯學習課長補佐 兼文化係長)	佐野史子	(生涯學習課文化係)

I. 位置と環境

一本木遺跡は、茨城県結城郡八千代町大字仁江戸字一本木に所在している。当遺跡が所在する八千代町は茨城県の西部に広がる結城台地の南東部に位置し、東側で下妻市、西側で三和町、北側で結城市、南側で猿島町・石下町・千代川村に接している。

八千代町は、鬼怒川と飯沼川とに挟まれた台地上に所在しており、この2河川に流入する小河川が台地内陸部まで樹枝状に入り込み、複雑な地形を形成している。標高は八千代町の北西部で約29m、南東部で21mと南にかけて低くなっている。当遺跡もこのような台地上に所在している。

当遺跡は、鬼怒川に流入する2本の小河川により開削され南北方向に伸びる台地上に所在し、東側と西側には広く浅い開析谷があり南方で合流している。当遺跡の東側台地には、5~7世紀にかけて築造された仁江戸古墳群があり、同古墳群の香取神社古墳は5世紀の築造とされている。また、北方には柴崎古墳群が所在している。

当遺跡の西側では、入沼排水路のある谷津に沿った台地上に、旧石器時代から奈良・平安時代の遺跡が所在している。これらは、台地の先端部分に集中する傾向を示しており、内陸部に入るにつれて次第に減少する傾向を示している。八千代町全体を見ても、多くの遺跡は舌状台地の先端部で谷津に向した部分に所在しており、内陸部にはあまり見られない。

なお、遺跡名は『八千代町史・資料編I』による名称である。

II. 調査に至る経緯

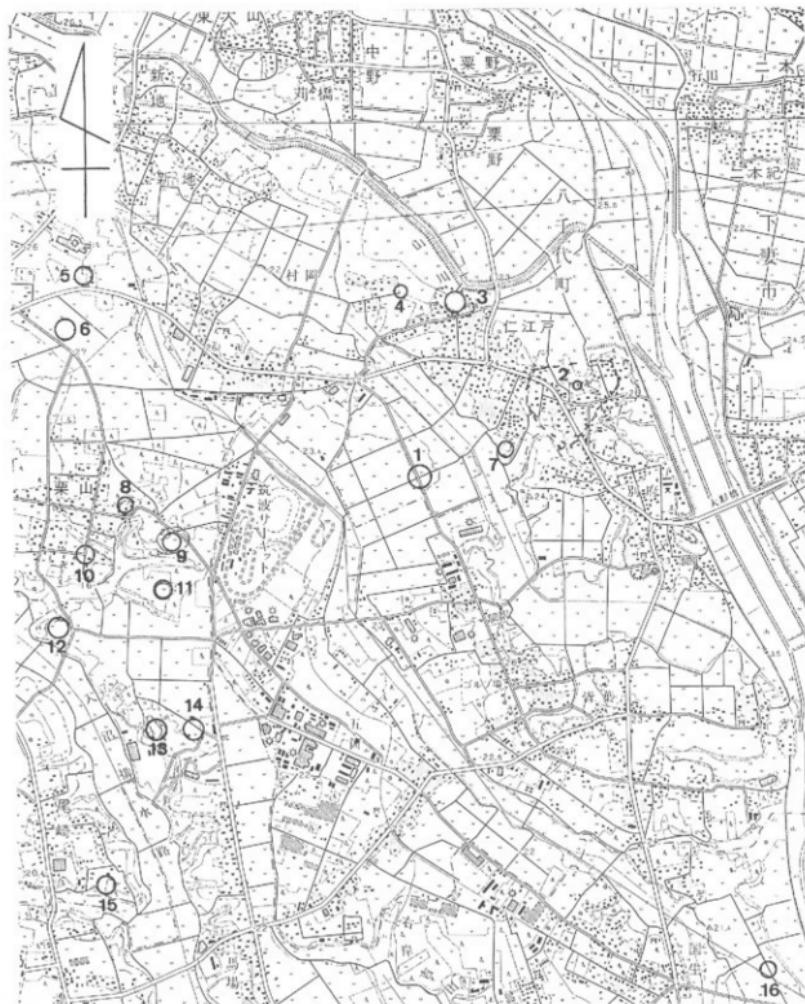
国営霞ヶ浦用水農業水利事業は、霞ヶ浦から茨城県西南部の22市町村の水田及び畠地帯に用水を供給するもので、水路の延長は実に220kmにも及ぶ。昭和55年から実施されたこの事業は、平成6年度で約70%が完成している。平成7年度から8年度にかけては、千代川線の工事が計画されて、平成7年11月に関東農政局霞ヶ浦用水農業水利事務所から、工事計画について事前説明を受けた。

この路線は、八千代町の新井調整池から南へ進み、千代川村村岡を経て八千代町仁江戸に入り、再び千代川村へ抜ける路線である。千代川村村岡から八千代町仁江戸にかけては遺跡が存在し、すでに千代川村教育委員会では試掘調査を実施していた。八千代町仁江戸には一本木遺跡がこの路線上にあるため遺跡の保存について協議したところ、記録保存をすることで今後進めて行くことになった。

一本木遺跡は、昭和56年から63年にかけて実施された八千代町史編さん事業で確認された遺跡であるが、それ以前から地元では「一本杉」や「石塚」と呼ばれた塚があったことや、遺物が出土することが知られていた。昭和52・53年には土地改良がなされ、現在の畠地に整備されている。そこで、本調査に先立ち、遺跡の範囲及び遺構の状態を確認する目的で、平成8年1月に試掘調査を実施した。

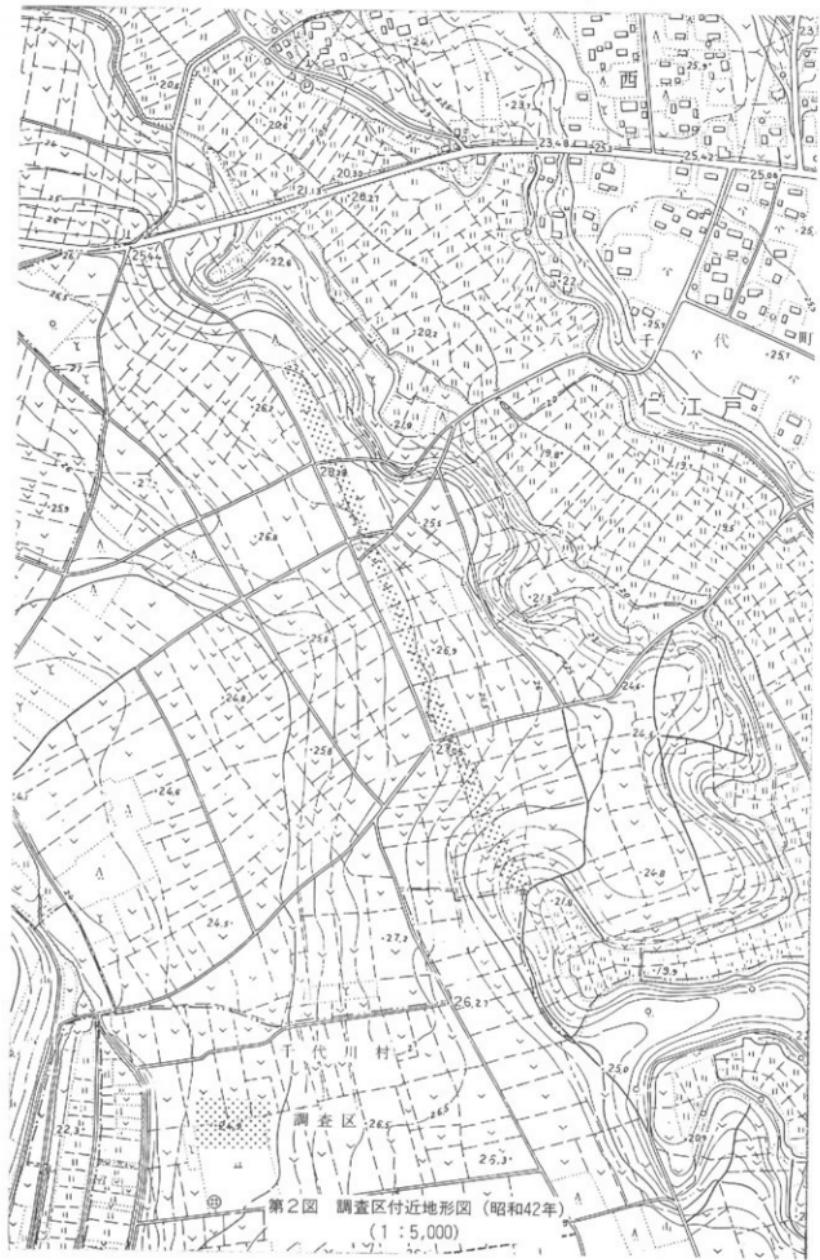
試掘調査は、分布調査で確認された6筆を対象とし、配水管の通る600mの線上に1辺3mのグリットを12か所設定し調査を進めた。その結果、6か所のグリットから遺構が確認された。

この試掘調査の結果を踏まえ、八千代町教育委員会では常総考古学研究所に発掘調査を依頼し、平成8年7月から9月にかけての予定で、発掘調査を実施することになった。



- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1) 一本木遺跡 | 5) 西原遺跡 | 9) 氏神A遺跡 | 13) 矢尻A遺跡 |
| 2) 仁江戸古墳群 | 6) 鴻巣台遺跡 | 10) 矢尻C遺跡 | 14) 矢尻B遺跡 |
| 3) 仁江戸西遺跡 | 7) 仁江戸南遺跡 | 11) 氏神C遺跡 | 15) 尾崎前山遺跡 |
| 4) 柴崎古墳群 | 8) 氏神B遺跡 | 12) 古堂遺跡 | 16) 国生本屋敷遺跡 |

第1図 遺跡位置図 (25,000)





第3図 調査区付近地形図(平成3年) (1/2,500)

III. 調査経過

一本木遺跡の調査は、平成8年1月に八千代町教育委員会が行なった遺構確認調査の結果を得て、同年7月より本調査を開始した。調査は、農作物が未収穫の調査区も存在することから調査可能な調査区から開始した。調査は、南側の1区、2区の表土除去より開始し、表土除去後遺構調査に移行したが、1区中央より南側は自然湧水のため調査を一時中止した。また、表土の除去は調査の進行に合わせて行なった。

1区と2区の調査は、表土除去後の7月8日より遺構調査を開始した。1区では住居跡7軒、土坑6基、溝1条を調査したもの南側の2軒は湧水により後回しとした。2区は住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟、土坑3基の調査を行ない7月30日に終了した。3区と4区は7月29日より遺構確認作業を開始し、30日より遺構調査を行なった。3区では、住居跡5軒、土坑5基を調査した。4区は住居跡2軒と溝1条を調査して、8月23日に終了した。5区と6区は8月26日より確認作業を開始し、5区では住居跡10軒と方形周溝墓1基、土坑1基を調査して9月13日に終了した。6区は9月10日より遺構調査を開始し、住居跡11軒、土坑1基を調査し9月20日に終了した。この後、カマドの調査を行ない10月18日に1区南側の2軒を残し終了した。

1区南側の調査は11月11日より開始し、15日で全作業が終了した。整理作業は、一部現地調査と併行して進め平成9年2月末日に全作業を終了した。

IV. 調査結果の概要

本遺跡の調査は、前項でも述べたように耕作地1筆ごとに6筆を南側から、1区～6区までの調査区として南側の1区から順次調査を開始した。（第4、5図、第1～5表、図版68、69）

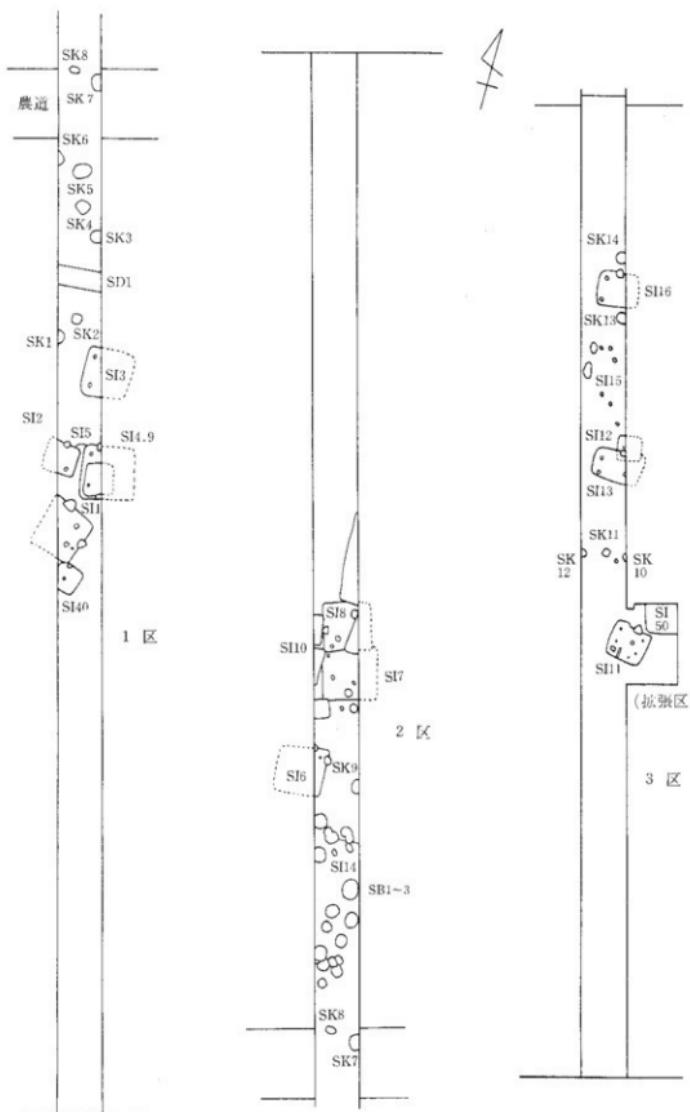
1区は2区中央部以南から緩斜面となっており、1区北端から南側60m付近が一本木遺跡南側谷津の谷底部に相当し、この北側に遺構（住居跡）が集中している。発見された遺構は、7軒の住居跡（第1号、2号、3号、4号、5号、9号、40号住居跡）、土坑が6基（第1号、2号、3号、4号、5号、6号土坑）、溝1条（第1号）である。

7軒の住居跡は、古墳時代から奈良・平安時代の住居跡で最南端は第40号住居跡（S I-40）である。第40号住居跡は、第1号住居跡（S I-1）の南壁を振り切っている。第1号住居跡（S I-1）は、北東コーナー部から西壁の南側まで粘土を厚く貼り付けた住居跡で、北壁と東壁にカマドを有している。また、第11号住居跡（S-11）も壁に粘土を貼り付けている。

重複関係は、第1号住居跡（S I-1）と第40号住居跡（S I-40）、第2号住居跡（S I-2）と第4号住居跡（S I-4）が第5号住居跡（S I-5）を切っている。このため、第5号住居跡（S I-5）はその一部を残す程度である。また、第4号住居跡（S I-4）は第9号住居跡（S I-9）と重複している。第3号住居跡（S I-3）は、西壁が孤状にやや湾曲している。

6基の土坑は、第3号住居跡（S I-3）の北側から1区北端にかけて所在している。時期的には、第6号土坑（SK-6）の覆土の中央より須恵器坏が1点出土しており、各土坑内からも奈良・平安期の遺物が出土している。よって、土坑6基は住居跡の時期と同様、奈良・平安期の土坑と推定される。

第1号溝（SD-1）は、第3号住居跡（S I-3）の北側に所在しており、旧表土が遺構内に堆積していることから新しい時期の溝と推定される。



第4図 調査区造構全測図1 (S ~1/500)

第1表 造構一覧表1

名 称	規 模 (m)			方 位	形 状	カマド	炉 跡	貯藏穴	柱 穴	備 考
	東 西	南 北	深 さ							
SI-1 (第1号住居跡)	4.30	5.00	0.52	N-20°-E	長方形 状	北壁中 央西側			3	中央部以西は、調査区域外 南側は、SI-40に切られる。 東壁中央にカマド有り。
SI-2 (第2号住居跡)	2.40	2.90	0.27	N-10°-W	正方形 状	北壁中 央東側			1	SI-5と重複、壁溝は東壁中 央部のみ。西側は区域外の ため不明。
SI-3 (第3号住居跡)	2.00	4.95	0.60	N-0°-E	隅丸方 形狀				2	中央以東は区域外のため不 明。壁溝、カマドは未確認
SI-4 (第4号住居跡)	1.95	5.00	0.43	N-10°-W	長方形 状	北壁中 央西側			2	中央以東は区域外、カマド は西に寄るか。SI-9と重複 している。
SI-5 (第5号住居跡)	0.55		0.25							SI-1.4と重複するためにその 一部以外不明。コーナーの 一部のみ残。
SI-6 (第6号住居跡)	1.80	5.25	0.06	N-10°-E	長方形 状	北壁中 央東側				SI-9と重複、中央以西は 調整区域外、遺構の大部分は 耕作擾乱のため消失。
SI-7 (第7号住居跡)	3.50	5.10		N-16°-W	正方形 状			中央南 側	3	東側は区域外、遺構の大部 分は耕作により消失。
SI-8 (第8号住居跡)	3.75	5.00		W-10°-S	正方形 状	西壁中 央部			2	SI-7と重複、耕作擾乱が 著しい。壁と床面は消失。 工房跡か。
SI-9 (第9号住居跡)	1.30	3.40	0.43	N-10°-W	正方形 状	南壁中 央部				SI-4を堀り込む、東側は区 域外。子細不明。
SI-10 (第10号住居跡)	1.15	3.50	0.22	N-0°-E	正方形 状				1	1/2以上が西側区域外、耕作 擾乱が著しく子細不明。
SI-11 (第11号住居跡)	3.58	3.50	0.27	N-5°-E	正方形 状	北壁中 央東側		南西コ ーナー	2	北西コーナーが突出し、中 央に柱穴を有する。
SI-12 (第12号住居跡)	1.00	2.60	0.05	N-7°-W	正方形 状				1	壁のほとんどは耕作擾乱に より消失。一部に床面残る SI-13を切る。
SI-13 (第13号住居跡)	3.70	3.40	0.26	N-5°-E	長方形 状	北壁中 央部		南壁中 央東側	3	SI-12に上面を切られ、厚く 床を貼っている。東側は、 区域外。

2区は中央部南側が、1区と同様に緩斜面部となっている。遺構は5軒の住居跡（第6号、7号、8号、10号、14号住居跡）、3棟の掘立柱建物跡（第1号、2号、3号建物跡）、3基の土坑（第7号、8号、9号土坑）が発見されている。

5軒の住居跡は、第1号、2号、3号建物跡（SB-1・2・3）の北側に集中する傾向を示しているが、耕作擾乱を著しく受けている。これらの住居跡は、3軒の住居跡（第7号、8号、10号住居跡）が重複しており、第7号住居跡（SI-7）と第8号住居跡（SI-8）は耕作擾乱により壁とカマドの大部分を消失している。また第8号住居跡（SI-8）には、工作ピットと推定される遺構が認められる。第14号住居跡（SI-14）は、掘立柱建物跡内に所在しが跡と壁の一部が確認されたのみである。住居跡5軒は、第14号住居跡（SI-14）を除き奈良・平安期の住居跡である。

建物跡は、第14号住居跡（SI-14）と重複しており、3棟ともほぼ同様北東方向に長軸を有する建物跡で、5×3間又は5×4間程度の建物跡と推定される。時期的には、奈良・平安期と推定される。

土坑は、建物跡（SB-1・2・3）と第7号住居跡（SI-7）との間に1基（第9号土坑）と南側に2基（第7号、8号土坑）が所在している。第9号土坑（SK-9）は、第6号住居跡（SI-6）の東壁の一部を掘り切っている。他の土坑は、その覆土内に土師器や須恵器の小破片を含んでいるが、耕作土坑を中心のようである。

2区では、第8号住居跡（SI-8）から2区北側端部まで遺構は何ら認められず、1区と2区で集落の一グループを形成するような配置となっている。

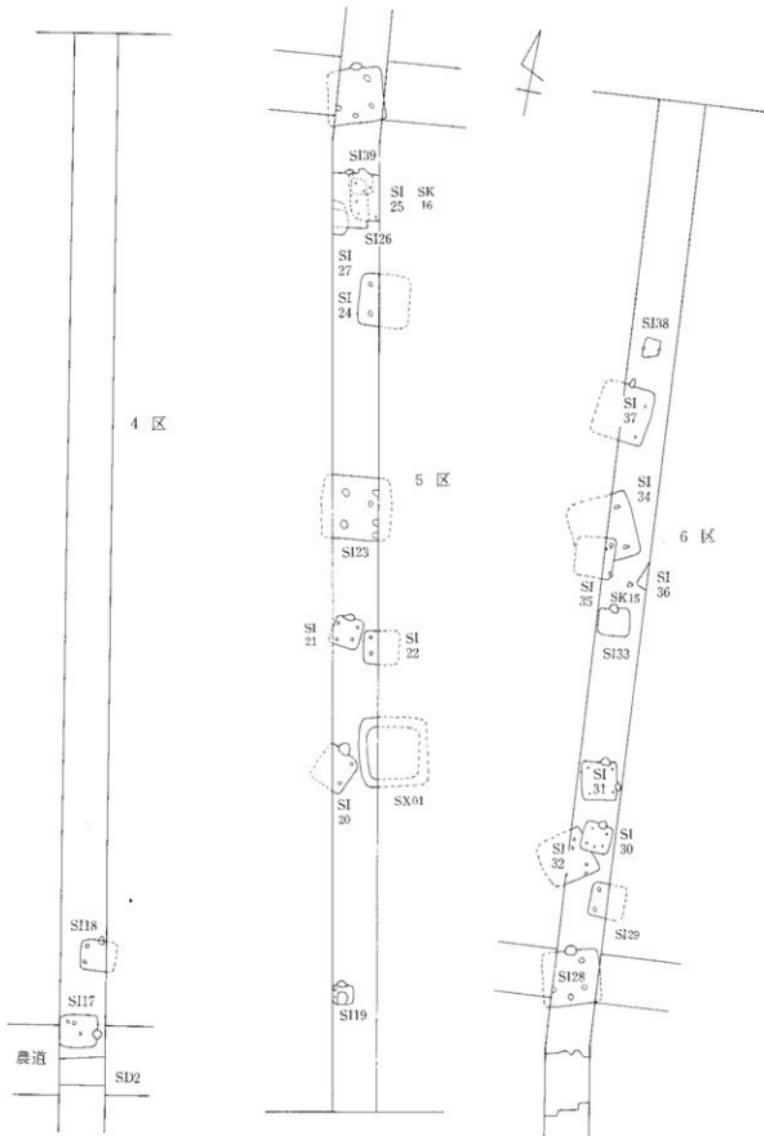
3区は、5区まで続く台地上の平坦部に相当する区域である。3区での遺構は、4軒の住居跡（第11号、12号、13号、16号住居跡）、5基の土坑（第10号、11号、12号、13号、14号土坑）、不明1基が発見されている。

4軒の住居跡は平安期に入る住居跡で、第13号住居跡（SI-13）は、第12号住居跡（SI-12）と重複しているため遺構の上面を掘り切られている。第11号住居跡（SI-11）は、拡張して全面調査を行った住居跡で、北西コーナー部が突出し北壁に粘土を貼っている住居跡である。第13号住居跡（SI-13）と第16号住居跡（SI-16）は床面を厚く貼している住居跡で、第16号住居跡（SI-16）カマドの南側床面を一段高くしている。また、第11号住居跡（SI-11）を東側に拡張した時新たに第50号住居跡（SI-50）を1軒確認した。不明の1軒は、第15号住居跡（SI-15）である。第15号住居跡（SI-15）は、耕作擾乱により壁、床、か等が消失しており、7本の柱穴が確認されたのみである。炉跡と推定された部分は、耕作土坑の覆土に焼土ブロックと焼上粒子を含んでいることから、ここに本跡がか跡があったことと推定される。

土坑は、第11号住居跡（SI-11）の北側に3基（第10号、11号、12号土坑）と、第16号住居跡（SI-16）の北側と南側に各々1基計2基（第13号、14号土坑）の合計5基が発見されている。出土遺物としては、少量の土師器片と須恵器片が出土していることから奈良・平安期の土坑と推定される。

これら3区の遺構は、3区の中央部から北側までの約45m間に集中する傾向を示している。第16号住居跡（SI-16）の北側で、4区第17号住居跡（SI-17）までの約22m間と、第11号住居跡（SI-11）の南側から2区第8号住居跡（SI-8）までの約100m間には、何ら遺構を発見することは出来なかった。このことから、一本木遺跡での一集落グループを形成しているようである。

4区は、3区同様台地の中央部に位置する区域である。4区の遺構は他の調査区域と異なり、非常に少なく2軒の住居跡（第17号、18号住居跡）と溝1条（第2号溝）を発見したのみである。2軒の住居跡は、耕作擾乱を著しく受けている。また、第17号住居跡（SI-17）は東側にカマドを有し北東コーナーが突出している。



第5図 調査区造構全測図2 (S~1/500)

第2表 遺構一覧表2

名 称	規 模 (m)			方 位	形 状	カマド	炉 跡	貯藏穴	柱 穴	備 考
	東 西	南 北	深 さ							
S I -14 (第14号住居跡)	4.50	6.00	0.10	N-22°-E	正方形 状		中央北側			北壁の一部が遺存。南壁消失。床面は直床状。SB-1.2と重複。
S I -15 (第15号住居跡)	8.00	4.50		N-12°-E			中央北側か		6	耕作のため壁、炉跡等消滅 子細不明。炉跡の痕跡有り
S I -16 (第16号住居跡)	2.45	3.50	0.35	N-2°-W	隅丸正 方形状	北壁中 央西側			2	耕作のため西壁が一部崩れ 床の中央西側に高い部分有り。 東側は区域外。
S I -17 (第17号住居跡)	3.50	3.60	0.25	N-6°-S		東壁中 央西側			3	北東部を擾乱される。東側 カマドで、上面は耕作によ り消失。
S I -18 (第18号住居跡)	2.43	3.20	0.10	N-11°-W	正方形 状	北壁中 央西側			2	遺構上面耕作により消失。 カマドは斜めを向く。東側 は区域外。
S I -19 (第19号住居跡)	1.90	2.05	0.19	N-9°-W	正方形 状	北壁中 央部		北西コ ーナー	1	耕竹攪乱のため、遺構の大 部分が消失。中央南側に耕 作攪乱あり。
S I -20 (第20号住居跡)	3.20	4.10	0.28	N-4°-E	正方形 状	北壁中 央東側			2	西壁は区域外。床面に二段 貼有。カマドは長い煙道を 有す。
S I -21 (第21号住居跡)	2.90	3.10	0.26	N-0°-E	正方形 状	北壁中 央部			4	南北コーナー一部区域外、北 西コーナー一部は丸味を有し ている。
S I -22 (第22号住居跡)	1.80	3.05	0.30	N-0°-E	正方形 状				4	中央以東は区域外、間じ切 溝有り。
S I -23 (第23号住居跡)	4.50	5.05	0.39	N-11°-W	隅丸方 形状		東側中 央北側	南東コ ーナー	4	中央部以外は区域外、中央 部の床は0.03mほど低くな っている。
S I -24 (第24号住居跡)	1.85	5.18	0.28	N-7°-W	正方形 状				2	中央西側以外は区域外、中 央に耕作土坑有り。奈良 時代か。
S I -25 (第25号住居跡)	1.80	4.60	0.14	N-17°-W	正方形 状	北壁中 央部			3	SI-26を切りSI-39に切られ る。東側は区域外。カマドは 一部のみ調査。
S I -26 (第26号住居跡)	2.60	0.12	0.21	N-13°-W	正方形 状				1	SI-25.39に切られ、SI-27 を切る。西側は区域外。古 墳時代か。

第3表 造構一覧表3

名 称	規 模 (m)			方 位	形 状	カマド	炉 跡	貯藏穴	柱 穴	備 考
	東 西	南 北	深 さ							
SI-27 (第27号住居跡)	1.00	2.60	0.24	N-9°-W	正方形 状					SI-26に切られ、西側は区域外。縄文期の住居跡か。
SI-28 (第28号住居跡)	4.10	5.65	0.32	N-18°-W	隅丸長 方形状	北壁中 央東側			4	西側と南東コーナーは区域外、カマドの両側が一段高くなっている。
SI-29 (第29号住居跡)	1.70	3.37	0.28	N-2°-E	正方形 状	北壁中 央部			2	中央東側が区域外、西側のみ調査。
SI-30 (第30号住居跡)	2.85	2.90	0.34	N-10°-W	隅丸正 方形状	北壁中 央東側			5	SI-32を切り、カマドの一部は擾乱を受けている。造構全城調査。
SI-31 (第31号住居跡)	3.65	3.85	0.25	N-17°-W	隅丸正 方形状	北壁中 央東側			5	北西コーナーは、耕作擾乱を受けている。東側にカマド有り。全城調査。
SI-32 (第32号住居跡)	3.90	4.60	0.10	N-52°-W	隅丸正 方形状		東側中 央北側	南東コ ーナー	3	SI-30に切られ、跡は東側に寄る。古墳時代の住居跡
SI-33 (第33号住居跡)	3.05	2.58	0.29	N-11°-W	長方形 状	北壁中 央西側			5	壁溝は、部分的に認められる。P4が南西に寄る。造構全城調査。
SI-34 (第34号住居跡)	4.00	5.90	0.13	N-25°-W	隅丸長 方形状				2	SI-35と耕作土坑に切られ、柱穴に新旧有り。古墳時代の住居跡。
SI-35 (第35号住居跡)	1.25	3.12	0.12	N-10°-W	隅丸正 方形状				2	SI-34を切り、西側は区域外
SI-36 (第36号住居跡)	0.70	1.75	0.25	N-29°-E						南西コーナー部を確認したのみであり、子細不明
SI-37 (第37号住居跡)	3.00	3.70		N-16°-E	隅丸正 方形状	北壁中 央部			2	カマドと壁溝で確認したのみで、壁と床は消失。全容は不明。
SI-38 (第38号住居跡)	2.40	1.95	0.06	N-83°-W	長方形 状				2	東側の壁は消失、小窓穴と判断される。全城調査
SI-39 (第39号住居跡)	2.30	2.22	0.16	N-11°-W	正方形 状	北壁中 央部			2	SI-25,26を切り、カマドは耕作擾乱を著しく受ける。

第4表 遺構一覧表4

名 称	規 模 (m)			方 位	形 状	カマド	炉 跡	貯藏穴	柱 穴	備 考
	東 西	南 北	深 さ							
S I - 40 (第40号住居跡)	3.10	2.80	0.24	N- 9°-E	長方形 状	北壁中 央部			5	SI-1と重複し、北西コーナー一部は擾乱されている。上面は、耕作で消失。
第1号方形周跡	2.00	7.20	0.35	N-19°-W						東西径は、確認部分で7.20mを計測するか。
S B - 1 (第1号建物跡)	2.00	7.90		N-19°-E	長方形 状				6	4間×2間の建物跡と推定 SB-2と重複
S B - 2 (第2号建物跡)		11.5		N-16°-E	長方形 状				6	5間×3間の建物跡と推定 SB-1と重複
S B - 3 (第3号建物跡)	3.20	2.50		N-42°-E	長方形 状					SB-2と一部重複。 1間2面以外子細不明
S D - 1 (第1号溝)	長 4.50	幅 2.00	深 0.18	N- 0°-E						東西方向に掘り込まれている。近世の溝と推定。
S D - 2 (第2号溝)	長 4.50	幅 2.55	深 0.20	N-82°-E						ほぼ東西方向に掘り込まれている。旧道路状の遺構。
S K - 1 (第1号土坑)	0.65	1.20	0.48	N-76°-E	楕円形					中央以北は、調査区域外のため不明。
S K - 2 (第2号土坑)	1.17	1.21	0.65	N-77°-E	円 形					底面西側に楕円形状の掘り込み有り。
S K - 3 (第3号土坑)	1.05	1.21	0.63	N-48°-E	楕円形					東側は区域外のため、全容不明。
S K - 4 (第4号土坑)	1.50	1.35	0.16	N-78°-E	楕円形					底面中央の深さ0.05mの小pit有り。
S K - 5 (第5号土坑)	1.92	1.60	0.54	N-64°-E	楕円形					中央部に楕円形の土坑を含んでいる。
S K - 6 (第6号土坑)	0.85	1.30	0.28	N-79°-E	楕円形					西側は調査区域外。中位層より坏1点出土。

第5表 遺構一覧表5

名 称	規 模 (m)			方 位	形 状 カマド	炉 跡	貯藏穴	柱 穴	備 考
	東 西	南 北	深 さ						
SK-7 (第7号土坑)	0.78	1.50	0.10	N-25°-W	楕円形				北西壁に接して小pit1基(-0.21m)有り。
SK-8 (第8号土坑)	1.21	0.80	0.21	W-5°-S	楕円形				
SK-9 (第9号土坑)	0.90	1.48	0.46	N-19°-E	隅丸長方形				SI-6を堀り切り、南東部に小土坑を有する。
SK-10 (第10号土坑)	0.43	0.88	0.26	N-11°-W	円 形				
SK-11 (第11号土坑)	0.90	0.98	0.09	N-47°-E	不整円形				南東部底面小pit1有り。
SK-12 (第12号土坑)	0.65	1.00	0.11	N-11°-E	不整方形状				中央西側は調査区域外。
SK-13 (第13号土坑)	1.00	1.05	0.17	N-9°-W	円 形				
SK-14 (第14号土坑)	1.00	1.25	0.22	N-78°-E	楕円形				東側は、調査区域外のため不明。
SK-15 (第15号土坑)	0.42	1.26	0.11	N-4°-W	隅丸長方形				東壁中央部に、東方への突出部有り。
SK-16 (第16号土坑)	0.75	0.96	0.16	N-5°-W	楕円形				SI-25の下位で北側床面下に位置する。

4区では、第18号住居跡（S I - 18）以北には何ら遺構を認めることは出来なかった。この2軒は、北側と南側の集落グループから離れた一集落グループのようである。

5区は、台地の北側で台地上平坦部の北側に相当する区域である。5区では10軒の住居跡（第19号、20号、21号、22号、23号、24号、25号、26号、27号、39号）と方形周溝墓1基及び土坑1基が発見されている。また、旧石器時代の遺物も発見されている。

10軒の住居跡等は、縄文、古墳、奈良、平安時代の住居跡等である。旧石器時代の遺物は、第25号、26号、39号住居跡（S I - 25、26、39）の下位面で発見されているが、ごく一部分のようであり、縄文期の住居跡は、第26号住居跡（S I - 26）に切られた第27号住居跡（S I - 27）1軒のようである。古墳時代の住居跡は、第23号、26号住居跡（S I - 23、26）の2軒があり、奈良・平安時代では第19号～22号、24号・25号・39号住居跡（S I - 19～22・24・25・39）の7軒である。

方形周溝墓は、その出土遺物から古墳時代中期（和泉期）と推定されるが、土坑は時期不明である。5区でのこれらの遺構は、第24号住居跡（S I - 24）～第39号住居跡（S I - 39）と第20号住居跡（S I - 20）～第23号住居跡（S I - 23）の集落グループに分かれるようである。前者は、6区のグループと関連するようであるが、第19号住居跡（S I - 19）のみが集落グループより離れたような所に位置している。

6区は、台地上平坦部の北端に位置する区域であるが、遺構の分布状況は南端の1区と異なった状況を示している。発見された遺構は、11軒の住居跡及び土坑1基である。11軒の住居跡は、古墳時代の住居跡2軒（第32号、34号住居跡）と、奈良・平安時代の住居跡9軒（第28号～31号、33号、35号～38号住居跡）である。第38号住居跡（S I - 38）は、炉跡とカマドを有していないものの柱穴と厚く床を貼っているため「住居」としての小窓穴と判断され、時期的には平安期に入る小窓穴と推定される。

6区のこれらの遺構は、第28号～31号住居跡（S I - 28～31）と第33号～38号住居跡（S I - 33～38）との、2つの集落グループに区分されそうである。また、重複関係も5区北側同様に著しく第30号住居跡（S I - 30）と第32号住居跡（S I - 32）、第34号住居跡（S I - 34）と第35号住居跡（S I - 35）があり、第31号住居跡（S I - 31）は北壁と東壁にカマドを有している。

全調査区からの出土遺物は、旧石器では石刀、縦長削片等があり、縄文時代の遺物としては縄文式土器、石斧、敲石等が少量ながら出土している。古墳時代では、土師器坏、高坏、塊、甕、瓶等が出土している。奈良・平安時代では、土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、高台付坏、甕、瓶、刀子、釣、転用紡錘車、縁種陶器皿等が出土しており、坏と高台付坏には内面黒色処理されたものも出土している。また、少量ではあるが墨書き器も出土している。これらは、遺構内出土遺物であり遺構に供わない遺物としては、調査区東側の畑より農作業中に数点の須恵器坏、双耳坏が出土している。

以下では、各遺構ごとに記述していく。

V. 遺構と遺物

遺構

本項では、調査で発見された遺構と遺物について記述する。記述順は、住居跡、掘立柱建物跡、土坑溝等の順で、調査順に記述し遺物は一括して記述する。遺構に供わない遺物と、調査区域外からの出土遺物は別項で一括して記述する。なお、方位は真北よりの方位である。

1、住居跡

第1号住居跡、(S I - 1、図版1~4、55、56、63、70、92、93、96、99 第6~8表)

第1号住居跡は、調査区南側(1区中央部)の緩斜面部に位置しており、住居跡の中央部以西は調査区域外のため、その全容は不明である。また、南壁は第40号住居跡(S I - 40)に切られ消失している。確認面での大きさは、東西径4.30m、南北径5.00m、深さ0.52mを計測し長方形状を呈しており、方位をN-20°-Eに有している。緩斜面部に位置するため、東壁南端部は北壁より0.30m程度低くなっている。床面は柱穴の内側がしっかりした床面であり、柱穴から壁にかけては柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北東コーナー部から西壁中央南側まで粘土が厚く貼り付けられている。粘土は、北東コーナー部で0.40~0.60m、西壁部で0.10~0.20mの厚さを計測する。この貼り付け粘土までが、新住居といえよう。壁溝は、貼り付け粘土の下位で西壁に沿って掘り込まれているものの、貼り付け粘土壁に沿っては掘り込まれていない。旧壁では、東西径が約6.00mと推定される。壁溝は、カマドの西側と西壁沿いに北東コーナーから西側中央南端まで掘り込まれており、幅0.15m、深さ0.04~0.10mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は、3本(P 1~3)掘り込まれている。旧西壁に伴なう柱穴は、P 1とP 3でP 1とP 2は貼り付け粘土壁に伴なう柱穴と推定されるが、本調査部分を加味するならば4~5本程度と考えられる。

土層は、住居跡内に黒褐色土(3層に細分)が厚く堆積しており、遺構上面から旧表土までは黒褐色土(2層に細分)が堆積している。旧表土は、黒褐色土(第6、7層)である。旧表土から現表土までは、耕地整理に伴ない重機で移動された土層が、厚く(厚さ0.90~1.00m)堆積している。

カマドは、北壁中央や西側と東壁中央部とに計2基設置されている。2基のカマドは、ともに焚口部と両袖が破壊されて消失している。北カマドと比較すると、東カマドは貧弱なカマドである。

北カマドは、全長2.10m、幅1.70m、床面から0.60mの高さを計測する。両袖と焚口部は、破壊されて消失している。基底部は床面より0.15m程度掘り下げられており、暗褐色土(第8、9層)が堆積している。燃焼部は基底部上面に位置しており、燃土(第6層)が0.05mの厚さで堆積している。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、煙道部先端は北壁より0.09m程度突出している。煙道部には、黒褐色土(第11、13層)と煙道部先端には赤褐色土(第12層)が堆積している。天井部は粘土質の黒褐色土(第1、10層)、暗褐色土(第2層)、黒色土(第3層)を用いて構築しているが、粘土そのものは認められなかった。壁の部分は赤褐色土(第13層)、暗褐色土(第14層)、黒褐色土(第15、16層)を用いて構築している。また、壁の一部は耕作擾乱を受けている。

東カマドは、全長1.55m、幅0.85m、床面から0.35mの高さを計測する。焚口部と両袖は、破壊され

第6表 第1号住居跡(S1-1)出土遺物一覧表1

番号	名称	器種	出土位置 (m)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
			口径	底径	現高	合径	台高	脚径					
1	須恵器	坏	+ 0.01	13.0	6.3	4.3			明灰褐色 長石、石英の 微粒子含	良好	明色 灰 褐	体部外面下半までロクロ整 形、体部下半手持ちヘラ削 り底面ヘラ削り後ヘラナデ	体部少、底 部少程度欠損 接合資料
2	須恵器	坏	+ 0.03	推 12.9	6.0 × 5.7	4.3			暗灰褐色 長石、石英、 季母の細粒含	良好	暗色 灰 褐	体部外面弱いロクロ整 形、体部下半手持ちヘラ削り、 底面ヘラ削り後ヘラナデ	体部少程度遺 存 接合資料
3	須恵器	坏	床面	推 13.4	5.8	3.6			暗灰褐色 長石細粒を含 む	良好	暗色 灰 褐	体部下半まで外面ロクロ 整形、下半手持ちヘラ削り 底面ヘラ削り後ヘラナデ	体部少程度残 底面一部欠 接合資料
4	須恵器	坏	+ 0.15	14.2 × 13.0	6.0 × 5.0	4.3 × 4.0			灰褐色 長石、石英の 細粒含	良好	灰 褐色	体部外面下半までロクロ整 形下半手持ちヘラ削りヘラナ デ、底面ヘラ削りヘラナデ	体部少程度残 底面少程度欠 接合資料
5	須恵器	坏	床面	推 13.0	推 8.0	4.8			暗灰褐色 長石の細粒を 微量に含	良好	暗色 灰 褐	体部内外面ロクロ整形、体部 下端手持ちヘラ削り、底面 回転ヘラ切り後ヘラナデ	少程度残
6	須恵器	高坏 台付	高坏 + 0.08	14.9 × 14.0	6.1 × 5.3	8.5 × 7.5			灰褐色、長石 石英の微粒子 織密	良好	灰 褐色	体部下半まで外ロクロ整 形下半ヘラ削り後ヘラナデ 底面回転ヘラ切りヘラナデ	体部少、高 台部分少 ゆがむ
7	須恵器	盤	床面	14.6	3.0 × 2.9	7.5 1.0			淡灰褐色 雲母、長石、 石英の細粒含	良好	淡色 灰 褐	内外面とも著しく磨滅して いるため整形不明、 粗い胎土である。	完形
8	須恵器	盤	+ 0.20	推 13.0	3.0	7.0	0.9		明灰褐色 長石の細粒子 を含	良好	明色 灰 褐	体部内外面ロクロ整形、坏 部底面回転ヘラ削り、高台 部ヘラナデ	全体に磨滅 坏少、高台 少程度残
9	須恵器	盤	+ 0.16	13.3	6.7 3.0 6.2	1.0			暗灰褐色 石英、長石の 細粒含	良好	暗色 灰 褐	坏内外面ロクロ整形、高台 は貼付け後ヘラナデ、坏底 面回転ヘラ切り後ヘラナデ	坏部底面に 膜を有す
10	須恵器	盤	床面	推 13.0	8.0 2.5 7.0	0.8			暗灰褐色 長石、石英の 細粒少量含	良好	暗色 灰 褐	坏部内外面ロクロ整形、底 面回転ヘラ切り後ヘラナデ 高台部ヘラナデ	坏部少程度残 高台部少程度 欠損
11	土師器	坏	+ 0.24	14.4 × 13.8	7.2 × 7.0	3.5			雲母、石英の 微粒子含 織密	良好	明内 褐色	体部外面、底面磨滅により 焼形不明、内面無色処理で ヘラミガキ	口縁~底部 まで少程度欠 接合資料
12	土師器	坏	床面	推 13.3	6.2	4.0			雲母、長石の 微粒子 織密	良好	明 褐色	体部外面ヘラミガキ内面 ヘラミガキ底面回転 糸切り後ヘラナデか	内面黑色处 理、底面磨 減している
13	須恵器	坏片	+ 0.33	推 8.0	1.2				明灰褐色 雲母、石英の 細粒含	良好	明色 灰 褐	体部は内外面とも磨滅し、 整形不明、底面回転糸切り 織密な胎土	少程度残

て消失しており煙道部の一部も攪乱を受けている。燃焼部は消失しており、煙道部には黒褐色土(第7層)が堆積している。燃焼部と推定される部分は、第3層の暗褐色土上面と推定される。この暗褐色土は、その覆土中に焼土粒子と焼土ブロック等を多量に含んでおり、焼土等を含む土層は第3層のみである。第3層は、0.06~0.10mの厚さを有している。天井部には、黄白色砂質粘土(第1層)と粘土質の黒褐色土(第2層)が用いられている。煙道部先端は、西壁より0.83m程度突出している。

出土遺物は、住居跡覆土内から土師器と須恵器が出土しており、その出土量は今回行った調査中最大量で土師器壺、高台付壺、甕、須恵器壺、高台付壺、瓶、釘、鎌が出土している。出土状況は住居跡のほぼ全域から出土しており、カマドの南側に集中する傾向を示している。出土遺物の多くは、覆土内では、北方よりの流入を示している。また床面及び、床面付近からは、土師器壺、須恵器壺、高台付壺甕が出土している。北側カマド内からは、土師器壺、甕、高台付壺、須恵器壺、高台付壺、甕等が出土しており、東側カマドからは須恵器壺、土師器甕等が出土している。これらの出土遺物で図示し得たのは1~32までの32点で、図版55、56、63、92、96、99、第6~8表に示した。

1は須恵器壺で、床面上0.01mより出土した擦合資料であり、体部と底部を各々 $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。2は須恵器壺で、床面上0.03mより出土した接合資料であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。3は須恵器壺で、床面より出土した接合資料であり、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。4は須恵器壺で、底部と体部を各々 $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており、床面上0.15mより出土している。5は須恵器壺で、全体で $\frac{1}{2}$ 程度の小破片であり、床面よりの出土で体部が直立ぎみに外傾している壺である。6は須恵器高台付壺でいびつな器形であり、床面上0.08mより出土している。7は須恵器盤であり、高台部の先端を一部欠いているがほぼ完形品である。体部は大きく直線的に外傾しており、P2上面よりの出土である。8は須恵器盤であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部はほぼ水平に外傾し、口縁部も斜めに立ち上がっており床面上0.02mより出土している。9は須恵器盤で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。底面に傷を残し床面上0.16mより出土している。10は須恵器盤で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片であり、床面からの出土である。11は土師器壺で内面黒色処理が施され体部の一部を欠損しており、床面上0.24mより出土している。12は土師器壺で内面黒色処理されており、体部の一部と底部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。底面は、回転糸切りが施されているようであるが、不明な点が多く床面からの出土である。13は須恵器壺底部で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。底面に回転糸切りが施されており、床面上0.33mより出土している。14は須恵器壺底部片で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。底部はヘラ削りが施されており、床面上0.20mより出土している。15は小型の土師器甕で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内外とも磨滅しており、床面上0.15mより出土している。16は須恵器甕口縁部片で口唇下端に3条1単位の櫛引きによる波状文が画かれており、床面上0.49mより出土している。17は釘で先端の一部を欠損しているがほぼ完形であり、床面上0.29mより出土している。18は鎌の先端部片で、0.3cmと薄い鎌先であり床面からの出土である。19、20は、釘先端部片である。19は床面より出土し、20は床面上0.38mより出土している。

21~30、32は、北カマドからの出土遺物で、31は東カマドからの出土遺物である。21は須恵器壺の完形品であり、22は土師器壺で $\frac{1}{2}$ 程度の破片であり底面に糸切りが施されている。23は土師器壺の $\frac{1}{2}$ 程度の破片であり、22と同様内外面とも磨滅している。24は須恵器盤で、体部が直線的に大きく外傾している。25は須恵器盤で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度と高台部先端を欠損している。26は須恵器盤で、内面が磨り減っていることから転用硯と考えられる。27は土師器盤状坏片で、内外面が磨滅しており、体部の一部と高台部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。また体部は直線的に外傾している。28は須恵器高台付壺であり $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。29は土師器甕の完形品で、ややいびつな器形である。30は土師器小型甕で、体部の一部を欠損し

第7表 第1号住居跡(SI-1)出土遺物一覧表2

番号	名称	器種	出土位置 (m)					胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考	
			口径	底径	現高	台高	脚径							
14	須恵器	环片	+ 0.20		7.0	1.7		淡灰褐色 雲母、長石の 微粒子含	淡色 灰褐色	体部下半手持ちヘラ削り 体部内面磨滅	淡色 灰褐色	体部下半手持ちヘラ削り 体部内面磨滅	程度残	
15	土師器	甕	+ 0.15	13.0		6.4		長石、石英 の細粒子含 織密	暗色 灰褐色	口縁部横位へラナデ、体部 縦位へラ削りへラナデ、内 面磨滅、光程度残	暗色 灰褐色	口縁部横位へラナデ、体部 縦位へラ削りへラナデ、内 面磨滅、光程度残	接合資料	
16	須恵器	甕片	+ 0.49					明灰褐色 小石、長石、 石英粒含、粗	明色 灰褐色	ロクロ整形、頸部に3本6 単位の櫛引きによる波状線 を施す。	明色 灰褐色	ロクロ整形、頸部に3本6 単位の櫛引きによる波状線 を施す。		
17	鉄製品	釘	+ 0.29	長 9.0	幅 0.6	厚 0.5				頂部はほぼ水平に折れ、 0.6cmを計測する。 錯が多い		完彩	重19.5g	
18	鉄製品	鍔片	床面	長 7.2	幅 2.1	厚 0.3				鍔刃先端の小破片である。		重13.0g		
19	鉄製品	釘片	床面	長 4.2	幅 0.5	厚 0.5				両端を欠損している。		重2.5g		
20	鉄製品	釘片	+ 0.38	長 3.8	幅 0.7	厚 0.5				先端部片で、内湾している		重2.4g		
21	須恵器	环	- 0.47	13.4	6.5	4.0		明灰褐色 長石の細粒子 多く含	明色 灰褐色	体部下半までロクロ整形、 下半手持ヘラ削りへラナデ 底面へラ削り後へラナデ	明色 灰褐色	体部下半までロクロ整形、 下半手持ヘラ削りへラナデ 底面へラ削り後へラナデ	北カマド内 出土 完形	
22	土師器	坏	- 0.51	推 12.3	4.4 5.5	X 4.0		長石、雲母の 微粒子含 織密	明 褐色	体部外面と底面は磨滅 内面はヘラミガキ、底面回 転糸切り後端部へラナデ	明 褐色	体部外面と底面は磨滅 内面はヘラミガキ、底面回 転糸切り後端部へラナデ	体部光程残 北カマド内 出土	
23	土師器	坏	- 0.48	13.5	7.0	X 3.8		織密	普通 褐色	体部外面著しく磨滅し整形 不明、内面ロクロ整形底面 ヘラ削り後へラナデ	普通 褐色	体部外面著しく磨滅し整形 不明、内面ロクロ整形底面 ヘラ削り後へラナデ	口縁～底部 にかけ光程 北カマド	
24	須恵器	盤	- 0.43	14.0 13.0		7.8 2.7	X 7.4	淡灰褐色 長石、石英の 細粒含	淡色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、坏 底面回転ヘラ切り後へラナ デ高台部ロクロ整形	淡色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、坏 底面回転ヘラ切り後へラナ デ高台部ロクロ整形	坏部内面や や磨滅、い びつな器形	
25	須恵器	盤	- 0.44	13.0		2.4	7.6	0.4	明灰褐色 石英、長石の 粒子含、粗	明色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、底 面回転ヘラ切り後へラナデ 高台部はへラナデ	明色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、底 面回転ヘラ切り後へラナデ 高台部はへラナデ	北カマド内 出土 内面磨滅
26	須恵器	盤	- 0.51	推 14.8		2.7	8.5	1.3	明灰褐色 雲母、石英の 細粒含	明色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、底 面回転ヘラ切り後へラナデ 底部内面に使用痕残	明色 灰褐色	体部一部 高台光程残 転用祝か	

第8表 第1号住居跡(S I - 1)出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土位置 (m)	法 量 (cm)						胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径					
27	土師器	盤状坏	- 0.35	推 13.2		2.8	6.7	0.7		雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗褐色	体部内外面磨滅し整形不明 底面回転ヘラ切り後ヘラナデ、高台部ヘラナデ	北カマド内 出土
28	須恵器	高坏 台片付	- 0.61			2.6	推 9.0	0.9		灰褐色 長石、石英の 繊粒含、粗	良好	灰色	体部内外面ロクロ整形、底 面回転ヘラ切り後ヘラナデ 程度の破片	北カマド内 出土
29	土師器	盤	0.24 0.47	16.0 15.3	8.5 8.3	20.8 20.6				小石、雲母 長石を含 粗	良好	明色 茶褐色	口縁～体部上半横位ヘラナ デ、下半縦位ヘラナデ、下端横位ヘラナデ、内面ナデ はほぼ完形	北カマド内 出土
30	土師器	小型 盤	- 0.45	11.0 10.4	5.7 5.0		11.0			雲母、長石 石英粒含 粗	良好	明褐色	口縁部から体部上半まで横 位ヘラナデ、下半縦位ヘラ ナデ削り口部内面横位ヘラナ デ	完形、体部 に孔有 北カマド内 出土
31	須恵器	坏	- 0.15	13.2 13.0	5.6 5.5					暗灰褐色 長石、石英の 繊粒含、粗	良好	暗色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、体 部下半手持ヘラ削りヘラナ デ、底面ヘラ削りヘラナデ	完形、全體 的に粗い 東カマド内 出土
32	須恵器	要盤	- 0.55	推 27.4	14.2 28.0					明灰褐色 長石粒を含 粗	良好	明色 灰褐色	口縁部回転ヘラナデ、体部 ヘラナデ後敲め、下半横 位ヘラ削り、接合資料	北カマド内 出土 口縁～体部 粗

ており、体部上半には整形後に穿かれた孔（径1.6×1.3cm）がある。31は、須恵器坏の完形品である。

32は須恵器盤の接合資料で、底面の孔部を欠損している。

これらの出土遺物から、本跡は平安時代に入る住居跡と判断される。

第2号住居跡 (S I - 2、図版5~6、56、57、63、71、92、93、95、99、第9表)

第2号住居跡は、1区中央南側の緩斜面部で第1号住居跡 (S I - 1) の北側に位置しており、第5号住居跡 (S I - 5) を掘り切り、第1号住居跡と同様に西側は調査区域外に所在している。確認面での大きさは東西径2.40m、南北径2.90m、深さ0.27mを計測し正方形形状を呈し、N-10°-Wに方位を有している。床面は直床状でやや柔弱な床となっており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、西壁中央部にのみ長さ0.75m、幅0.15~0.18m、深さ0.02mで掘り込まれており、断面はU字状を呈している。柱穴は南東部で1本(P 1)認められたが、深さ0.02mと浅い掘り込みとなっている。柱穴は、P 1以外確認出来なかった。カマドは、北壁の東側で北東コーナーに近い所に配置されている。

上層は住居跡内に北方より黒色土、黒褐色土、暗褐色土が流入した状況で堆積しており、黒褐色土と暗褐色土は各々2層に細分される。遺構上面は、第1号住居跡と同様の状況を呈している。

第9表 第2号住居跡(SI-2)出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土位置 (m)	法 量 (cm)						胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径					
33	土師器	壺	+ 0.25	5.5 13.6 5.3	4.3 × 4.2					長石、石英の 粒子含 粗	良好	明 褐色	体部下端まで内外ロクロ整 形下端手持ちヘラ削りヘラ ナデ底面ヘラ削りヘラナデ	内面磨滅 口縁～体部 下半 $\frac{1}{2}$ 程欠
34	土師器	壺	- 0.25 0.18	14.0 13.8	5.8 5.5	4.6 3.7				小石、長石 石英の粒子含 粗	良好	明色 黒褐	体部内外崩滅し整形不明 底面ヘラ削り後ヘラナデ 口縁部煤付着、灯明皿か	体部と底部 の一部欠 接合資料
35	須恵器	高壺	+ 0.52				6.5			雲母、長石、 石英の微粒子 含	良好	暗色 灰褐	体部内外ロクロ整形、底面 回転ヘラ切り後ヘラナデ	体部上半欠 粗粒土
36	須恵器	盤	- 0.12	13.4		3.2 × 3.1	6.8 × 6.5	0.8		長石、雲母の 微粒子含	良好	暗色 灰褐	体部内外ロクロ整形、下半 高台部ヘラナデ、底面回転 ヘラ切り後ヘラナデ	カマド内出 土、坏部 $\frac{1}{2}$ 程欠 損
37	須恵器	盤	- 0.12	13.8		2.6	6.4	0.6		長石、雲母の 粒子含、粗	良好	暗色 灰褐	体部内外ロクロ整形、底部 回転ヘラ切り後ヘラナデ、 全体に磨滅	口縁～体部 $\frac{1}{2}$ 程欠、カ マド内出土
38	土師器	壺	- 0.07	推 14.1	6.4	4.1				雲母、長石 石英の微粒子 含、織密	良好	暗 褐色	体部下半まで内外ロクロ整 形、下半手持ちヘラ削り 底面ヘラ削り後ヘラナデ	カマド内出 土、体部は $\frac{1}{2}$ 程残
39	土師器	甕	- 0.20	20.0		21.9				長石、石英 雲母の粒子含 粗	良好	暗 褐色	口縁部内外横位のナデ、 体部内外面ヘラナデ、底部 欠損、接合資料	カマド内出 土、口縁 $\frac{1}{2}$ 体部 $\frac{1}{2}$ 程残
40	土師器	甕	- 0.15		7.3	32.0				雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗 褐色	体部上半内外ヘラナデ、下 半縦→横位ヘラ削り、下端 横位ヘラ削り、底面木裏痕	カマド内出 土、底部 $\frac{1}{2}$ 体部 $\frac{1}{2}$ 程残
41	土師器	甕	- 0.20	20.0		15.0				小石、雲母 長石の粒子含 粗	普通	暗 褐色	口縁部内外横位のナデ、体 部内外横位ヘラナデ、体部 下半以下欠損、接合資料	カマド内出 土、 $\frac{1}{2}$ 程残 外側磨滅
42	須恵器	變甕	- 0.17		16.5	16.5				明灰褐色 石英、雲母の 細粒含	良好	明色 灰褐	体部上半と底面欠、体部下 半横位ヘラ削り後ヘラナデ 底面孔はヘラ削り出し	カマド内出 土、接合資 料、 $\frac{1}{2}$ 程欠
43	土師器	甕	- 0.03	17.0		9.1				長石、雲母 粒子含 織密	良好		口唇部横位のナデ、口唇～ 体部内外ヘラナデ、体部下 半欠損、接合資料	カマド内出 土、 $\frac{1}{2}$ 程度 残
44	鉄製品	釘片	- 0.25	長 4.4	幅 0.7	厚 0.7							両先端を欠損し、全體的に 鎌が多い、カマド内出土	重 7.5 g

カマドは長さ1.26m、幅1.16m、床面からの高さは0.30mを計測する。燃焼部はカマドの中央部に位置しており、焼土（第4層）が厚く堆積している。カマドの基底部は、床面から0.05m程度掘り下げて明褐色土（第13層）を用いて構築しており、この上面に燃焼部がある。燃焼部下位には、基底部を掘り込み火床部が造られており赤褐色土（第5層）が堆積している。燃焼部上面には、暗褐色土（第3層）が堆積している。煙道部は、燃焼部より北へ約0.23m程度突出した後緩やかに立ち上がり、先端部は北壁より0.08m程度突出している。壁と天井部は、暗白色砂質粘土（第1層）と粘土質の暗黒色土（第2層）、暗黒褐色土（第10層）を用いて構築されている。

出土遺物としては覆土内より土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、高台付坏、甕等が出土しておりカマド内からは土師器坏、甕、須恵器坏、甕、釘等が出土している。覆土内での出土状況は、北西部から南東部にかけて流入した状況を呈しており、カマド内では燃焼部上面のほぼ中央部から出土し、壁の補強材として使用されたようである。これらの出土遺物で、図示し得たのは33～44までの12点である。

33は土師器坏で、口縁部～体部下半まで約 $\frac{1}{2}$ 程度を欠損しており、床面上0.25mより出土している。34は土師器坏で、体部と底部を各々一部欠損する接合資料であり、内外面とも著しく磨滅している。口縁部の内外面には、一部媒が付着しているため灯明皿として使用されたようである。接合資料のため床面上0.25～0.18mより出土している。35は須恵器高台付坏片で、床面上0.52mより出土している。36は須恵器盤で、カマド内より出土しており坏部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。37は須恵器盤で、カマド内より出土し体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており、全体的に磨滅している。38は土師器坏で、カマド内より出土し $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。39は土師器甕で、底部を欠損しており体部は長削化している。40はカマド内より出土した土師器甕で、口縁部を欠き体部と底部が $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程度遺存するのみである。体部は長削化しており底部には木葉痕が見られる。41は土師器甕で、カマド内より出土し体部下半を欠損している。42は須恵器甕で、底部を欠損している。43は土師器甕で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。44は、カマド左袖内より出土した釘片である。

これらの出土遺物から、本跡は平安時代の住居跡と判断される。

第3号住居跡（S I - 3、図版7、72）

第3号住居跡は、1区南側緩斜面部で第2号住居跡の北東部に位置しており、中央部以東は調査区域外に所在している。確認面での大きさは東西径2.00m、南北径4.95m、深さ0.60mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、住居跡の長軸方向からN-0°～Eと推定される。床面は粘土層で直床状を呈しており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。また、西壁はやや西方に弧を描いている。壁溝は認められず、柱穴は2本（P 1、2）認められたもののP 1は0.24m、P 2が0.14mと比較的深い柱穴である。炉跡は、認められなかった。

土層は、住居跡内に黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土が堆積しており、黒色土が2層に黒褐色土が2層に細分される。これらの堆積状況は、黄褐色土（第6層）が同時期的に堆積した後北方から黒色土が堆積し（第4層）た後南方から黒褐色土（第3層）と暗褐色土（第5層）が堆積している。この後黒色土（第1層）と黒褐色土（第2層）が北方より堆積して、本跡が埋まっている。各土層は、粘性に富んだ土層である。

出土遺物はきわめて少なく、覆土内から19点の遺物が出土したのみである。この19点は土師器坏、甕、須恵器坏、甕の小破片であり、第2層中よりの出土である。出土した遺物は、小破片であるため図示出

来なかった。また出土遺物が第2層中の出土で床面からは何ら出土しなかったため、本跡の具体的な時期を決定することは出来ないが、住居跡の形状などから古墳時代の住居跡と推定される。

第4号住居跡（S I - 4、図版8、57、72、93、第10表）

第4号住居跡は、1区南側緩斜面部で第2号住居跡（S I - 2）の東側に位置しており、第5号住居跡（S I - 5）を掘り切り、第9号住居跡（S I - 9）に南側を切られている。住居跡の中央以東は、東側区域外に所在している。また本跡は、粘土層中に掘り込まれている。

本跡の大きさは、東西径1.95m、南北径5.00m、深さ0.43mを計測し、長方形状でN=10°-Wに方位を有している。床面は粘上面で地床状を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、北東部から西壁中央部までと南側に幅0.22m、深さ0.06mの規模で部分的に掘り込まれており、断面はU字状を呈している。柱穴は、西側に2本（P 1、2）認められたのみである。2本の柱穴は、P 1が-0.40mとやや深い掘り込みであるのに対して、P 2は-0.26mと浅い柱穴となっている。カマドは、北壁中央部付近に設置されているが、左袖は破壊された粘土層として廃棄されている。

土層は粘土質の黒褐色土が堆積しており、細分すると5層に細分される。第1層～6層までが、S I - 9の覆土で、第7層～11層までが本跡の上層である。堆積状況は、北方からの流入を示す自然堆積である。

出土遺物としては土師器壺、高台付壺、甕、須恵器壺、高台付壺等が出土している。これらの中で図示出来たのは45、46、49、51の4点である。45は床面上0.05mより出土した須恵器壺（又はコップ型壺）で、体部を1/2程度欠いている。46は床面0.05mより出土した須恵器壺で、底面が剥離し体部も磨滅している。49は床面上0.10mより出土した土師器壺で、1/2程度の破片である。51は床面上0.12mより出土した土師器甕で、1/2程度の破片で口唇部が小さく摘み出されており、接合資料でいびつな口縁部となっている。

以上がS I - 4に伴なう遺物で、床面接着遺物はなく本跡廃棄後まもなくして流入したようである。これらの遺物から本跡は、平安期の住居跡と判断される。

第5号住居跡（S I - 5、図版5、57、71、92、第11表）

第5号住居跡は、1区南側緩斜面部に位置し第2号住居跡（S I - 2）と第4号住居跡（S I - 4）とに切られているため、遺構の一部が遺存する程度である。

現在する遺構は東西径0.55m、深さ0.25mを計測する。確認された部分は、住居跡の北西コーナー部に相当することから、隅丸方形状を呈する住居跡と推定される。方位としては、北東方向に主軸を有するようである。床面は直床状で、壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝と柱穴は認められなかった。土層は、粘土質の黒褐色土が1層堆積している。

出土遺物としては、土師器壺と甕が覆土上面から出土しており、53と54の2点がある。53は床面上0.15mより出土した土師器壺で、体部を一部欠損し内面黒色処理されており、全体的に磨滅している。54は床面上0.17mより出土した土師器甕で、1/2程度の破片であり、口唇部が外齊している。

この2点から、本跡は平安期の住居跡と推定される。

第10表 第4・9号住居跡(SI-4・9)出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土位置 (m)	法 量 (cm)						胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
				口径	底径	現高	合径	台高	脚径					
45	須恵器	壺	+ 0.05	推 13.0	10.0	9.7				長石、石英の 繊維含	良好	暗色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形下端 手持ちヘラ削り後ヘラナデ 底面回転ヘラ切りヘラナデ	口唇 $\frac{1}{2}$ 、体 部 $\frac{1}{2}$ 程度残 緻密な粒土
46	須恵器	壺	+ 0.06	推 13.0	8.0	3.5				長子の粒子微 量、緻密	良好	明色 灰褐色	底面削離、全体に磨滅して いる。 体部 $\frac{1}{2}$ 程度残	SI-4出土
47	土師器	壺	+ 0.05	推 13.9	10.8	1.9				緻 密	良好	淡色 黒褐色	体部外面回転ヘラナデ内面 口唇部ヘラ削り下半ヘラナデ 底面回転ヘラ切り後ナデ	$\frac{1}{2}$ 程度残 SI-9出土
48	土師器	壺	+ 0.02	推 16.0		3.3				雲母、長石 石英の粒子含 やや粗	良好	暗褐色	口縁～体部内外面回転ヘラ ナデ、 体部下半以下を欠損	$\frac{1}{2}$ 程度残 SI-9出土
49	土師器	壺	+ 0.10	推 18.0		3.7				緻 密	良好	明褐色	体部外面ヘラ削り後ヘラナ デか、体部内外面磨滅 体部下端以下欠損	$\frac{1}{2}$ 程度残 SI-4出土
50	土師器	甕 床面	床面 推 20.0		11.2					小石、雲母 長石含 粗	普通	暗褐色	口唇及体部上半内外横位ヘ ラナデ、体部縦位ヘラナデ 内面ヘラナデ、接合資料	$\frac{1}{2}$ 程度残 SI-9出土
51	土師器	甕	+ 0.12	推 22.0		6.5				小石、雲母 長石含 粗	良好	暗色 茶褐色	口縁部内外面横位ナデ、体 部内外面ヘラナデ、口唇部 いびつ、接合資料	$\frac{1}{2}$ 程度残 SI-4出土
52	鉄製品	釘	床面	長 3.6	幅 0.7	厚 0.6							肉先端を欠損している 鋼が多い	SI-9出土 重10.5g

第11表 第5号住居跡(SI-5)出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土 位置 (m)	法 量 (cm)						胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
				口径	底径	現高	合径	台高	脚径					
53	土師器	壺	+ 0.15	12.8	7.5 X	4.3 X				小石、雲母 石英、長石の 粒子含、粗	良好	暗色 黒褐色	体部外面磨滅、内面ロクロ 整形で黑色処理、底面回転 ヘラ切り後ヘラナデ	体部一部欠 全体に磨滅 している
54	土師器	甕	+ 0.17	推 21.0		8.7				長石、石英の 粒子含 緻 密	良好	暗褐色	口縁部内外面横位ヘラナデ 体部内外面ヘラナデ 接合資料	$\frac{1}{2}$ 程度残

第6号住居跡(SI-6、図版9、17、57、73、第12表)

第6号住居跡は、2区南側中央部で緩斜面部から平坦部となった部分に位置している。本跡は、中央

第12表 第6号住居跡(S I-6)出土遺物一覧表

番号	名称	基標 (m)	法量(cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
			口径	底径	現高	台高	脚径					
55	土師器	坏 + 0.01	6.3	X 6.0	1.9			雲母、石英、長石の微粒子含、粗	良好	明内黒色	体部下端手持ちヘラ削りへラナデ、内面黒色処理、底面へラ削り後ヘラナデ	

以西が西側区域外に所在し、東壁北側は第9号土坑(S K-9)に切られている。

確認面での大きさは東西径1.80m、南北径5.10m、深さ0.06mを計測し、正方形状を呈する住居跡と推定され、方位をN-10°-Eに有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、しっかりした床面となっている。壁溝は認められず、柱穴は北東部に1本(P 1)認められたが-0.22mと浅い柱穴である。カマドは北壁中央東側に設置されているが、焚口と袖は破壊され消失している。

土層はローム粒子を含む黒褐色土が1層堆積しているものの、耕作の影響を受けているため上面は攪乱されている。

カマドは北壁中央東側に設置されており、長さ0.78m、幅0.90m、高さ0.10m(床面上)を計測する。焚口と両袖は耕作攪乱により消失しており、カマド自体も破壊されているが、現存する部分は燃焼部の先端部分と右壁の部分である。燃焼部先端は良く焼けており、焼土が厚く(0.05m)堆積している。壁はローム上に白色砂質粘土(第1層)、黒色土(第3層)、黒褐色土(第4層)、黄褐色土(第5、6層)を用いて構築されている。

出土遺物としては覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、甕等が出土している。土師器坏では、内面黒色処理(内黒)されている坏が、比較的多く出土している。これらの出土状況は、住居跡の東側で北東から南西方向にかけて出土していることから、北東方向からの流入を示している。図示可能な遺物としては、土師器坏1点(55)のみである。

55は、床面上0.01mより出土した土師器坏底部片で、内面黒色処理(内黒)されており、器壁が厚く直線的に外傾する体部となっている。体部下半には、ヘラ調整が施されている。

これらの出土遺物から本跡は、奈良時代の住居跡と推定される。

第7号住居跡(S I-7、図版10、57、73、92、第13表)

第7号住居跡は、2区中央南側に位置しており壁溝、柱穴、貯蔵穴を確認したのみである。遺構上面は耕作攪乱により消失しており、北側中央部と南西コーナー部は耕作土坑により消失し、北西部は第10号住居跡(S I-10)に切られ、中央以東は東側区域外に所在している。

確認面での大きさは東西径3.50m、南北径5.10mを計測し、正方形状を呈するようで、N-16°-Wに方位を有している。床面はしっかりした部分が認められず、直床状の床となっている。壁溝は、北西部からS I-10に切られながら南西コーナー部まで遺存しており、幅は0.14~0.18mで深さが0.02~0.03mを計測しU字状を呈している。柱穴は3本(P 1~3)確認されているが不規則な柱穴配置で、P 3が-0.36mとやや深い掘り込みである以外は浅い掘り込みの柱穴である。貯蔵穴は住居跡の中央南側に位置し、東側に一段のテラスを有している。全体では東西径1.15m、南北径0.82m、深さ0.27m(最大

第13表 第7号住居跡(S I-7)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高					
56	土師器	壺	+ 0.01	5.9 13.5 5.8	4.6				長石、石英 雲母の粒子合 粗	良好	明色 黒褐色	体部外面ロクロ整形、下 端手持ちヘラ削りヘラナデ 底面ヘラ削り後ヘラナデ	貯藏穴出土 体部各程欠 接合資料

深度)を計測する。東側のテラスは東西径0.85m、南北径0.83m、深さ0.12mを計測し、長方形状を呈している。壁は斜めに掘り込まれており、底面は中央部に向い緩やかに下降している。中央部は東西径0.78m、南北径0.73m、深さ0.27mを計測し、方形状を呈している。底面は鍋底状をなし、壁はほぼ直角に掘り込まれている。貯藏穴内の土層は、黒褐色土(ローム粒子を含む)が1層堆積している。カマドは、認められなかった。

出土遺物としては、住居跡確認作業中に土師器壺、甕、須恵器壺の小破片が出土し、貯藏穴内よりは土師器壺が出土している。図示可能な遺物としては、貯藏穴内より出土した土師器壺(56)1点のみである。56は底面上0.01mより出土した土師器壺の接合資料で、体部を約1/2程度欠いている。

この遺物から本跡は、奈良時代の住居跡と判断される。

第8号住居跡(S I-8、図版11、17、73)

第8号住居跡は、2区中央南側平坦部で第7号住居跡(S I-7)に南側を切られている。また耕作擾乱を著しく受けているため、壁、壁溝、床は消失している部分が多く、中央部以東は東側区域外に所在している。

確認面での大きさは東西径3.75m、南北径5.00mを計測し、正方形状を呈するようである。方位は、W-10°-Sで西向きの住居跡と判断される。壁は消失しており、壁溝は幅0.11m、深さ0.05mでU字状をなし、北西部でその一部分を確認した程度である。床面は、P 2の北側と南側にしっかりと床が部分的に遺存する程度である。柱穴は3本(P 1~3)認められ、P 1は大きな柱穴で-0.34mとやや深い柱穴であるが、P 2は-0.16mと浅い柱穴となっている。P 3は、柱穴の底面中央に細い円形の掘り込みを有していることから工作Pitと判断される。

本跡の土層は耕作擾乱により消失しており、出土遺物も小破片化している。出土した遺物は、土師器壺、甕、須恵器壺の小破片が出土した程度で、図示は不可能である。

カマドは西壁中央南側に設置されていたようで、東西径0.68m、南北径1.02m、高さ0.01m(床面上)を計測する程度である。土層もカマドとしての土層は見られず、基底部も不明瞭である。

本跡の時期は、その出土遺物から奈良時代の住居跡と判断される。

第9号住居跡(S I-9、図版8、57、63、72、99、第10表)

第9号住居跡は、1区中央南側で第4号住居跡(S I-4)の中央南側を掘り切っており、中央部以東は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.30m、南北径0.40m、深さ0.43mを計測し、正方形状を呈するようである。方位は南北方向のようであることからN-10°-Wと推定される。床面はS I-4と同様の状況を呈しているが、壁の中央部と南壁部分が焼けている。壁溝は認められず

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、柱穴は認められなかった。

土層は粘土質の黒褐色土と黑色土が堆積しており、黒褐色土が5層に細分される。第5層と6層の黒褐色土は、多量の施肥ブロックを含んでいる。

出土遺物としては土師器壺、塊、甕等が覆土内より出土しているが図示出来たのは、土師器壺（図版57、47）、土師器塊（図版57、48）、土師器甕（図版57、50）、釘（図版63、52）の4点である。

これらの出土遺物から本跡は、奈良時代に入る住居跡と判断される。

第10号住居跡（S I -10、図版10、73）

第10号住居跡は、2区中央南側でS I -7を掘り切った状況で確認されたが、東壁付近を確認したのみで遺構の大部分は西側区域外に所在している。

確認面での大きさは東西径1.15m、南北径3.30m、深さ0.22mを計測し、正方形形状を呈するようである。方位はN - 0° - Eと推定される。床面は柱穴の内側がしっかりと床面となっているが、壁付近は柔弱な床面となっている。壁溝は認められず、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、北東部に小さく浅い柱穴（P 1）を確認したのみである。

上層は、黒褐色土（ローム粒子とロームブロックを含む）が1層堆積しているのみであるが、上面は耕作の影響で攪乱されている。

出土遺物は土師器壺、甕、須恵器壺の小破片が少量出土したのみで、図示可能な遺物は発見されなかった。これらの出土遺物は平安期に位置付けられる遺物であるため、本跡も平安期の住居跡と推定される。

第11号住居跡（S I -11、図版12、13、57、58、63、64、74、75、92、93、95、96、98、99、第14、15表）

第11号住居跡は、3区中央南側に所在しており当初調査区域内での調査であったが、地権者等の協力を得て東側に拡張し、全面調査を行った。また、拡張時に本跡の東側で新たに1軒を確認したが、調査せずに、そのまま埋めもどした。この住居跡を、第50号住居跡（S I -50）とした。

本跡は、住居跡内で一度改築を行っている。この改築は、S I -1と同様に粘土を住居址の壁に貼り付けて新しい壁としている。旧住居跡は東西径3.58m、南北径3.50m、深さ0.27mを計測し、正方形形状を呈しているが、北西隅（カマドの西側）は約0.45m突出している。方位は、N - 6° - Eである。床面は柱穴の内側がしっかりと底面となっているが、壁付近では比較的柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマドの東側と西側を除く部分で全周しており、幅0.27~0.12、深さ0.04~0.07mを計測し断面U字状を呈している。柱穴は、対角線上に4本（P 1~4）と中央南側に1本（P 5）が掘り込まれているものの、P 1~4は-0.03~0.08mと深い柱穴であるが、P 5はP 1~4よりやや深く-0.13mを計測する。P 5の西側には間仕切り溝が長さ1.20m、幅0.30m、深さ0.11mの規模で掘り込まれており、南側は駁溝に接して断面はU字状を呈している。貯蔵穴は南西コーナー部に所在し、東西径0.55m、南北径0.50m、深さ0.20mを計測し不整円形形状を呈している。底面は鍋底状をなし、壁は斜めに掘り込まれている。

新住居跡はカマドの東側0.60mと西側0.65m間に、厚さ0.10m、高さ0.20mの規模で粘土を貼り付けた北壁としている。このために、旧住居跡より南北径が3.40mと短くなっている。床面は、旧住居跡の床面上に厚さ0.01mでしっかりと床を塗いている。柱穴は、中央やや南側に1本（P 6）が新たに

第14表 第11号住居跡(SI-11)出土遺物一覧表1

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径						
57	陶器	皿	- 0.19	14.9	4.2 X 4.3	7.2 0.7		長石微粒子含 級 密	良好	緑色	体部外面ロクロ整形後ヘ ラナデ、底面ヘラ削り、高 台ヘラ削り、薄く施塗	貯藏穴出土 体部欠損 焼台3個有り	
58	陶器	皿	床面		2.4	推 9.0		長石微粒子含 級 密	良好	緑色	体部外面ロクロ整形後ヘ ラナデ、底面ヘラ削りヘラ ナデ、薄く施塗	%程の破片 焼古痕有り	
59	須恵器	高坏 台付	床面	17.5 X 17.2	7.1 X 6.9	8.5 1.0		雲母、長石含 級 密	良好	明色 灰褐色	体部外面ロクロ整形下半 手持ちヘラ削りヘラナデ底 面ヘラナデ、内面使用痕有	完型、体 部一部剥離 転用硯か	
60	土師器	壺	床面	13.4 X 13.2	7.3	4.1		織 窒	良好	暗内 褐黑色	体部ロクロ整形、内面ヘラ ナデヘラミガキ、黒色処理 底面回転ヘラ切りヘラナデ	完型、 No.59の中よ り出土	
61	土師器	壺	+	推 0.09	16.9	6.4		雲母、長石の 微粒子含 級 密	良好	明内 黑黒色	体部外面ロクロ整形、内面 ヘラナデヘラミガキ 内面黒色処理	%程度残	
62	土師器	壺	+	0.16	17.1	7.0		雲母、長石の 微粒子含 級 密	良好	暗内 褐黑色	体部外面ロクロ整形、内面 ヘラナデヘラミガキ 内面黒色処理	%程度残	
63	須恵器	甕	+	0.05	16.0	3.9		長石、石英の 粒子含 級 密	良好	明色 灰褐色	体部横位ヘラ削り後ヘラナ デ、内面ヘラナデ 体部欠損黒色	体部欠損	
64	土師器	壺	+	0.05	推 8.0	1.1		織 窒	良好	暗内 褐黑色	体部ロクロ整形、下端手持 ちヘラ削り、底面回転ヘラ 切り、内面黒色処理	底面「右」 の墨書き %程度残	
65	土師器	壺	+	0.06				織 窒	良好	暗内 褐黑色	体部に墨書き有、字不明	小破片	
66	鉄製品	刀子	+	全長 0.05	刀長 12.1	茎長 7.5	幅 4.6	厚 1.2			平造りで、先端を欠損	重12.0g	
67	鉄製品	刀子	+	全長 0.06	刀長 6.9	茎長 2.3	幅 4.6	厚 1.2			基部中心の破片で、刀部の 大部分欠損、茎部に炭化木 質付着	重10.8g	
68	鉄製品	刀子	床面	全長 4.0	幅 0.8	厚 0.4					刀部の小破片で平造り	重 5.5g	
69	土師器	甕	+	21.0 X 0.14	推 9.0	34.5		長石、雲母 粒子含 級 密	良好	明褐色	口縁部横位ナデ、体部中半 までヘラナデ下半横位ヘラ 削り後ヘラナデ	カマド出土 体部欠 接合資料	

掘り込まれており、この時点でP 1～4は埋められている。P 6が新住居跡の柱穴であることは、柱穴上面から横位で炭化材が出土したことからも、容易に判断できる。この部分以外は、旧住居跡と同様であり、カマドは北壁中央東側に設置されている。

土層は暗褐色土、黒褐色土、焼土、炭化材が堆積しており、暗褐色土は3層（第2、9、11層）に黒褐色土は5層（第3、4、6、7、8層）に細分される。焼土及炭化材は、床面上0.05～0.15m間に堆積しているが、床面が焼けていないことから本跡廃棄後の焼失である。このこととP 6との関係から焼失するまで柱が遺存していたことと判断される。

カマドは、北壁中央部東側に設置されているが焚口部は破壊され消失している。大きさは、長さ1.31m、幅1.20m、高さ0.36m（床面上）を計測する。燃焼部は、カマドの手前に位置するようであるが焼土の堆積はあまり見られず、黒褐色土（第3、4層）と黒色土（第5層）が堆積しており、床面より約0.10m程度低くなっている。火床部は第3～5層の下位で、東西径0.50m、南北径0.53m、深さ0.13mを計測し不整円形状を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。火床部には黄褐色土（第7層）、黒色土（第8～10層）が堆積している。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端部は北壁より0.69m程度突出している。煙道部には黒褐色土（第12～14、21層）、暗褐色土（第20層）が堆積している。壁及び天井部は、暗白色砂質粘土（第22層）、砂質粘土（第24、25層）、黒褐色土（第1、2層）、暗褐色土（第11、24層）を用いて構築しているが、天井部に粘土は用いられていない。

出土遺物としては、覆土内より多量の炭化材、土師器坏、高台付坏、須恵器坏、甕の破片が出土し、床面からは縁釉陶器、上師器坏、塊、墨青土器、須恵器高台付坏、甕、刀子等が出土しており、貯蔵穴内より縁釉陶器が出土している。カマド内の天井部、東壁、火床部からは土師器坏、甕、須恵器坏、甕自然石等が出土している。カマド内の遺物、壁の補強材として使用されたものが主である。これらの遺物で図示出来たのは、新住居跡より出土した57～76までの20点で57～68までが覆土内よりの出土で69～76がカマド内よりの出土遺物である。旧住居跡に伴なう遺物は、認められなかった。

57は貯蔵穴内より出土した縁釉陶器で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。釉は内外面全体にしっかりと施釉されており、底部の内外面には焼台痕が各3個認められる。58は床面より出土した縁釉陶器で $\frac{1}{2}$ 程度の破片で底部内外面には、焼台痕が各1個認められる。59は床面より出土した須恵器高台付坏で逆位で発見され、内面に磨り減った所があることから転用硯と判断される完形品である。60は59の内部より逆位で出土した土師器坏の完形品で、内外面とも良く磨かれており、内面は黒色処理されている。61は床面上0.09mより出土した土師器塊で、内面黒色処理（内黒）されている。62は床面上0.16mより出土した土師器塊で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。内面黒色処理（内黒）されており、体部下端がやや磨滅している。63は床面上0.05mより出土した須恵器袋で、体部の $\frac{1}{2}$ 程が黒色に変色している。64は床面上0.05mより出土した土師器坏底部片で、底面に「右」と推定される墨書が見られる。65は床面上0.06mより出土した墨書土器で、土師器坏の体部に墨書きされているが墨書きは不明である。66は床面上0.05mの所より出土した刀子で、先端を欠いている。67は床面上0.06mより出土した刀子で、刀部の中央以上を欠き基部には炭化した木質が遺存している。68は床面から出土した刀子片である。69は土師器甕で、体部を $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{3}$ 程度欠損している。体部の最大径は中位で23.7cmを計測し、長胴化した体部である。70は土師器甕のほぼ完形品で、口唇部は外脣するように削り出されている横幅のある甕である。71は土師器甕の接合資料で体部の一部を欠き、いびつな口縁部となっている。口唇部は、短かく大きく外脣するように削り出されている。72は土師器甕の接合資料で、下半以下を欠損しており口唇部は、小さく直

第15表 第11号住居跡（S I -11）出土遺物一覧表2

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	合径	合高					
70	土師器	甕	+	15.7 0.43	9.9 × 15.3	15.3 × 9.5			小石、雲母 長石の粒子含 粗	良好	明色 黒 褐	口縁部横位ナデ、体部上半 縦位ヘラナデ、下半横位ヘ ラ削り、ほぼ完型	カマド内出 土
71	土師器	甕	-	14.5 0.15	8.0 × 13.3	14.8 × 7.8			雲母、石英 長石の粒子含 粗	良好	明色 黒 褐	口縁部横位ナデ、体部上半 ヘラナデ下半横位ヘラ削り ヘラナデ、荒い整形	カマド内出 土、接合資 料
72	土師器	甕	-	17.8 0.16		25.0			長石、石英 雲母の粒子含 粗	良好	茶 褐 色	口縁部横位ナデ、体部縦位 ヘラ削り後ヘラナデ、内面 横位ヘラナデ、体部下半欠	カマド内出 土、接合資 料
73	須恵器	甕	0.16 0.30	13.5 13.0		7.2	18.5		長石、石英の 粒子含、緻密	良好	明色 灰 褐	口縁部横位ナデ体部上半縦 位ヘラ削りヘラナデ下半横 位ヘラ削りヘラナデ	カマド内出 土、体部下 半程度欠
74	土師器	壺	-	推 0.10	16.0		4.0		緻密	良好	明色 暗 褐	体部ロクロ整形、内面ヘラ ナデヘラミガキ、下半手持 ちヘラ削り、底部欠損	カマド内出 土、体部少 程度残
75	土師器	壺	-	推 0.20	15.0		3.7		緻密	良好	暗 褐 黑色	体部ロクロ整形、内面ヘラ ミガキ、黒色処理、下半手 持ちヘラ削り、底部欠損	カマド内出 土、体部少 程度残
76	石	-	長 0.15	幅 25.9	厚 11.1		8.5		自然石			一方の先端を欠損している カマド右袖補強材として使 用したもの	

線的に外側へ削り出されている。73は須恵器甕で、体部下半を少程度欠損し煙道部より逆位で出土している。74は土師器壺で、少程度の破片である。75は少程度の土師器壺破片で、内面黒色処理されている。76は自然石でカマド右壁補強材として使用され、先端の一部を欠損している。

本跡は、57、58の縫縫陶器（猿投）から平安時代の住居跡である。

第12号住居跡（S I -12、図版14、76）

第12号住居跡は3区中央部に位置し、第13号住居跡（S I -13）の上面を掘り切っているが、遺構の大部分は耕作擾乱により消失している。確認出来た範囲は、床面の一部、1本の柱穴、壁の一部のみである。大きさは東西径1.08m、南北径2.67m、深さ0.05mを計測し、隅丸方形状を呈している。床面はしっかりと床面で、壁は斜めに掘り込まれている。壁構は認められず、柱穴は西側に1本（P 1）認められたのみである。

上層は、黒褐色土と暗褐色土の2層が堆積しており、各土層とも耕作擾乱を受けている。出土遺物は少量の土師器壺、須恵器壺が小破片で出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から、本跡は平安時代の住居跡と判断される。

第13号住居跡（S I-13、図版16、17、58、76、92、93、第16表）

第13号住居跡は3区中央部に位置し、第12号住居跡（S I-12）に北側上面を掘り切られており、東壁は東側区域外に生存している。大きさは東西径3.67m、南北径3.37m、深さ0.22mを計測し、東西方に長軸を置く長方形状を呈している。方位は、N-5°-Eである。床面は柱穴の内側がしっかりとした床面となっているが、柱穴から壁にかけては柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁は南方へやや突出するように掘り込まれている。柱穴は対角線上に3本（P 1~3）掘り込まれており、各柱穴とも比較的深く-0.20~-0.30m程掘り込まれている。カマドは、北壁中央部付近に設置されているようである。

土層は黒褐色土、暗褐色土、ロームブロックが堆積しており、黒褐色土が4層に細分される。また、3ヵ所に耕作擾乱が認められる。土層の堆積状況は、南方よりの流入を示す自然堆積である。

カマドは北壁中央部付近に設置されているようであるが、上面はS I-12に破壊されており、カマド自体も破壊されている。大きさは長さ1.02m、幅0.85m、高さ0.18m（床面上）を計測する。燃焼部と火床部は認められないが、第3層の黄褐色土が良好に分解していることからこの第3層が、火床部の可能性を有しており深さは床面から0.15m程度を計測する。袖は左袖が遺存しており、黒褐色土（第2層）黄褐色土（第5層）、暗褐色土（第6層）の土層で構築されているが、右袖は認められなかった。

出土遺物は住居跡覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、甕、瓶等が南西方向より流入した状況で出土し、床面及床面付近からは須恵器坏、土師器坏が出土している。カマド内からは、須恵器坏片が出土している。これらで、図示出来たのは77~82までの6点である。

第16表 第13号住居跡（S I-13）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径					
77	須恵器	坏	+	13.4 0.03	8.2 13.3	3.9 3.6		微量の長石結 含、 織密	良好	明色 灰 褐	体部外面へラナデ、内面口 クロ整形、底面回転へラ切 り後へラナデ、体部一部欠	
78	須恵器	坏	+	13.8 0.03	7.2 3.3	3.4		長石、石英の 微粒子含 織密	良好	明色 灰 褐	体部内外ロクロ整形、下端 回転へラ削り後へラナデ 底面回転へラ切りへラナデ	ほぼ完型 口縁一部欠
79	土師器	坏	+	13.0 0.17	7.7 12.7	3.7		雲母、長石の 粒子を含 粗	良好	明色 茶 褐	口縁部内外横位へラナデ 体部へラナデへラミカキ 底面へラナデ、内面磨滅	口縁一部欠
80	土師器	坏	+	12.2 0.06	7.5 12.5	4.0 3.5		織密	良好	暗 褐色	体部内外へラナデへラミカ キ、口縁横位へラナデ、底 面へラ削り後へラナデ	口縁一部欠 内面やや剥離
81	土師器	坏	+	15.0 0.17		3.3		織密	良好	明 褐色	口縁部横位へラナデ、体部 へラナデへラミカキ、底面 へラ削り後へラナデ	体部口縁 程度 欠、内面 やや磨滅
82	土師器	甕	+	推 0.20		10.0		小石、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗 褐色	口縁部横位へラナデ、口唇 部擴み出し、体部横位へラ ナデ、少程度遺存	

77は床面上0.03mより出土した須恵器坏で、体部を一部欠損し口唇部がやや肥厚化している。78は床面上0.03mより出土した須恵器坏で、口縁部を一部欠損しているもののほぼ完形品といえよう。器高が低く、口径の大きな坏である。79は床面上0.17mより出土した土師器坏で、全体的にややいびつな器形となっている。口縁部の一部を欠き、内面は磨滅している。80は床面上0.06mより出土した土師器坏で、口縁部の一部を欠き内面はやや剥離している。81は床面上0.09~0.17mより出土した土師器坏の接合資料で体部を少しごく程度欠損しており、内外面がやや磨滅している。82は床面上0.20mより出土した土師器坏で、少しごく程度の破片であり口縁部は大きく外側しており、口唇部はやや摘み出されている。

これらの出土遺物から本跡は、平安期の住居跡と判断される。

第14号住居跡（S I-14、図版18、77）

第14号住居跡は2区南端部で緩斜面部に位置し、第1、2号掘立柱建物跡（SB-1、2）と重複している。確認された遺構は、北側の壁溝と炉址及び柱穴1本のみである。また、住居跡の中央部を確認したのみで東側及び西側端部は、区域外に所在している。

遺構の大きさ（推定径）は東西径4.50m、南北径6.00mを計測し、長方形形状を呈する住居址と推定される。方位は、N-22°-Eである。遺構の上面は耕作擾乱により消失しており、SB-1・2の柱穴により壁溝・床面は数か所破壊されている。床面は直床状で炉跡の中央北側に位置し、北西方向に向く良く焼けている。壁溝は幅0.11~0.15m、深さ0.05mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は、南東部に浅い柱穴が1本（P 1）認められたのみである。

遺物は炉跡の北側から土師器表片が1点出土したのみで、図示可能な遺物は発見されなかった。出土した遺物から本跡は、古墳時代前期の五領期に位置する住居跡とに推定される。

第15号住居跡（S I-15、図版19、64、77、第17表）

第15号住居跡は、3区北側で炉跡と柱穴から確認された住居跡である。遺構上面は耕作擾乱により消失しており、炉跡も耕作土坑により破壊されてその痕跡を残す程度である。

住居跡の推定径は東西径4.50m、南北径8.00mを計測し、円形又は梢円形状を呈するようであり、方位をN-12°-Eに示している。柱穴は、7本（P 1~7）認められたがP 3が-0.45mと深い柱穴である以外は、全て0.20m程度の比較的浅い柱穴となっている。また、P 1~4は梢円形状に配置されているもののP 5~7は、直線的に配置されているが、P 1の西側からは1本も認められなかった。炉跡は、P 6西側の耕作土坑内覆土に焼土ブロックが混入していることから、この部分に炉跡が位置していたものと判断され、P 5北西部の土坑も耕作土坑である。

第17表 第15号住居跡（S I-15）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高						
83	石製品	敲石	床面	長 10.0	幅 6.2	厚 5.9							自然石をそのまま利用し、一面上面に磨り減った使用痕有	

出土遺物は、少量の土器器坏と敲石が1点(83)出土したのみである。敲石は床面より出土しており、自然石をそのまま使用し、1か所に使用痕を残しているのみである。この敲石から本跡は、縄文時代後期の住居跡と推定される。

第16号住居跡 (S I - 16、図版17、20、58、77、94、97、98、第18表)

第16号住居跡は3区北側に位置しており、中央東側以東は区域外に所在している。確認面での大きさは東西径2.45m、南北径3.50m、深さ0.35mを計測し、隅丸方形を呈しており、方位はN-2°-Wである。床面は柱穴の内側がしっかりと床面となっているが、柱穴から壁にかけては柔弱な床となっている。また、カマドの南西部には床面上に長径1.05m、短径0.45m、高0.16mの規模で、一段高く貼り付けられた部分がある。上面は、比較的平坦でカマドの手前左側であることから、土器置き台ではなかろうか。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西壁はやや樹曲しており、南壁中央部は攪乱を受け広がっている。壁溝はカマドの部分を除き全周しているよう、幅0.10~0.32m、深さ0.02~0.06mの規模で掘り込まれており、断面はU字状を呈している。柱穴は西側の2本(P1・2)を確認したが、2柱穴とも0.02m以下と浅い掘り込みである。カマドは、北壁中央部に設置されている。

土層は黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が5層に暗褐色土は2層に細分される。これらの堆積状況は、レンズ状に堆積する自然堆積の状況を呈している。

カマドは北壁中央部付近に設置されているようであるが、中央から東側は区域外に所在している。大きさは長さ1.15m、幅0.92m、高さ0.33m(床面上)を計測する。燃焼部はカマドの中央部で、焼土層の堆積は見られず暗褐色土(第3層)と黒褐色土(第9層)が堆積し、火床部は床面より0.08m程度掘り込まれている。燃焼部の左側は、中央部より0.10m程度低く赤褐色土(第5層)が厚く堆積している。

第18表 第16号住居跡(S I - 16)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径					
84	須恵器	蓋	+ 0.22	14.0		1.7				長石の粒子含 緻密	良好	暗色 灰 褐色	口縁部ヘラナデ、体部ロク ロ整形、頂部回転ヘラ削り 口縁部に墨書き2字有	小破片
85	土師器	坏	0.07 3 0.10	12.7 × 12.4	4.1 × 3.8					緻密	良好	暗色 褐黑色	体部ロクロ整形、内面ヘラ ナデヘラミガキで黒色処理 底面回転糸切り	体部少程欠
86	須恵器	高坏 台付	+ 0.12			2.1	8.0	1.3		雲母、白色 微粒子含 緻密	良好	暗色 灰 褐色	外面ロクロ整形、底面回転 ヘラ削りヘラナデ、高台内 面回転ヘラ削り、	
87	土師器	坏	+ 0.14		6.0	1.4				緻密	良好	暗色 褐黑色	体部外面磨滅で整形不明 内面黒色処理、底面回転糸 切り	小破片
88	須恵器	裏	+ 0.10		15.5	7.6				雲母、小石含 緻密	良好	明色 灰 褐色	体部横位ヘラ削りヘラナデ 内面横位ヘラ削り、粘土紐 痕有、底面ナデ	体部上半欠

煙道部は燃焼部より斜めに立ち上がっており先端は、北壁より0.50m程度突出しており一部耕作擾乱を受けている。煙道部には黒褐色土（第10層）と暗褐色土（第7層）が堆積している。天井部には粘土質の黒褐色土（第1、2層）を用いて構築し、左袖は基底部は床面から0.10m程度掘り下げて黒褐色土（第20層）を用い、地山と合せて左袖基底部を構築している。この上面には、粘土質や砂質の黒褐色土（第13～19層）を用いて構築している。

出土遺物としては、住居跡の覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、高台付坏、坏蓋、甕等が出土しており、床面及び床面付近からは土師器坏、須恵器坏等が出土している。出土状況は、西面及び南方よりの流入を示している。これらの出土遺物で、図示出来たのは84～88までの5点である。84は床面上0.22mより出土した須恵器坏蓋の小破片で、外面上部に墨書が2字認められる。85は床面上0.07～0.10mより出土した土師器坏の接合資料で、体部を%程度を欠き内面黒色処理（内黒）されている。86は、床面上0.12mより出土した須恵器高台付坏片である。87は、床面上0.14mより出土した土師器坏底部の小破片である。内面は黒色処理（内黒）されているものの、内外面とも磨滅している。88は、床面上0.10mより出土した須恵器甕の底部片である。

これらの出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡と判断される。

第17号住居跡（S I - 17、図版14、15、58、59、78、94、第19表）

第17号住居跡は、4区南端部で農道の下位に所在している。このため住居跡の覆土は固くしまっており、遺構上面も耕作擾乱を受けて消失している。また、住居跡の北東部も擾乱を受けて床が消失している。住居跡の西壁は、西側区域外に所在している。

確認面での大きさは東西径3.50m、南北径3.60m、深さ0.25mを計測し、隅丸方形を呈して方位を

第19表 第17号住居跡（S I - 17）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)						胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
			口徑	底徑	現高	台徑	台高	脚径						
89	須恵器	坏	+ 14.0 0.14	× 5.6 13.0	3.8				小石、白色 微粒子含 鐵 疊	明色 灰 褐	体部内外ロクロ整形、下半 手持ちヘラ削り、底面ヘラ 削りヘラナデ	体部%程度 欠損、内面 磨滅		
90	土師器	高付	+ 15.2 0.15		5.8	8.5	1.2		雲母、長石 石英の粒子含 粗	暗内 褐黑 色	体部ロクロ整形、内面ヘラ ナデ、黒色処理、底面圓軋 ヘラ削りヘラナデ	部%程度 内面磨滅		
91	土師器	坏	+ 3.7 0.13	5.7 13.2					雲母、長石 石英の粒子含 粗	明色 黑 褐	体部内外ロクロ整形、下半 手持ちヘラ削り、底面ヘラ 削りヘラナデ	体部%程度 内面磨滅		
92	土師器	坏	+ 3.5 0.15						織密	良好	暗内 褐 墨書有	体部ロクロ整形、内面ヘラ ナデヘラミガキ、黒色処理	小破片	
93	須恵器	甕	0.10 0.24						小石、長石 石英含 粗	青色 普通 灰 褐	製体部片、上半鼓占め痕有 下半ヘラナデ、内面著しく 磨滅、接合資料	カマド内出 土		

E - 6° - S に有する東向きの住居跡である。床面は中央部がしっかりした床面となっているものの壁付近は柔弱な床面となっている。また、北東部は擾乱を受けて消失している。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。北壁北側は、カマド南側壁より0.40m程西側に位置しており、北東部コーナーは東方へ0.45m程突出している。壁溝は東壁南側と南壁に掘り込まれており、幅0.18~0.23m、深さ0.07mを計測し断面U字状を呈している。柱穴は、3本（P 1 ~ 3）確認されたが不規則な柱穴配置である。P 1は中心線よりやや北側に寄っており、0.18mの深さを計測する。P 2は北西壁に位置しており、0.30mの深さを計測する。P 3はP 1と対比するように掘り込まれているが、0.03mと深い柱穴である。カマドは東壁中央南側に設置されており、長い煙道を造り出している。

上層は暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が3層に細分される。堆積状況は、南方より流入した状況を示す自然堆積である。

カマドは東壁中央南側に設置されており長さ1.55m、幅1.20m、高さ0.33m（床面上）を計測する。燃焼部はカマドの中央部で底面が良く焼け、焼土ブロック化しているが焼土の堆積は無く、焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土（第1層）が堆積している。火床面は床面より0.06m掘り下げており、暗赤褐色土（第2層）が堆積している。またこの前方（東側）には暗褐色土（第12、13層）が堆積している。この上面が燃焼部で、暗赤褐色土以外に黒褐色土（第9層）が堆積している。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は東壁より0.88m突出している。煙道部には、暗褐色土（第8、10層）が焼土粒子や粘土粒子を含みながら堆積している。天井部と壁は粘土質の黒褐色土（第1層）、砂質の黒褐色土（第20、21層）、暗白色砂質粘土（第14、22層）、砂質の暗褐色土（第15、16、19、23、24層）、赤褐色粘土（第17層）、赤褐色土（第18、25層）、ロームブロック（第26層）を用いて構築しているが、粘土の量は比較的少量である。

出土遺物としては覆土内より土師器坏、高台付坏、土師器甕、須恵器坏、須恵器甕が覆土内より出土しており、カマド内からは土師器坏、甕、須恵器坏、甕が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは89~93の5点である。89は床面上0.14mより出土した須恵器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており内面は磨滅している。90は床面上0.15mより出土した土師器高台付坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。内面は磨滅しているが、一部に黑色処理（内黒）された部分を残している。91は床面上0.13mより出土した $\frac{1}{2}$ 程度の土師器坏の破片であり、内面は磨滅している。92は床面上0.15mより出土した墨青土器で、坏体部に墨書が見られるが判読不明である。93はカマド内より出土した須恵器甕部片で、内面は著しく磨滅している。

出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡である。

第18号住居跡（S I - 18、図版21、59、78、第20表）

第18号住居跡は、4区南端部でS I - 17の北東部に所在しており、中央以東は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径2.43m、南北径3.20m、深さ0.10mを計測し、隅丸正方形状を呈して、方位をN-11°-Wに有している。床面は柱穴の内側はしっかりした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているものの、北壁は西側が東側より長くなっているようである。このため、カマドは北方向（磁北）を向いた斜めに設置されている。壁溝は南壁で認められたのみで、幅0.15m、深さ0.05mの規模で掘り込まれ断面U字状を呈している。柱穴は、北西及び南西コーナー部に各1本の計2本（P 1、2）認められたのみである。P 2はP 1よりやや西に寄った位置に掘り込まれており、比較的浅い柱穴となっている。カマドは、北壁中央部付近

第20表 第18号住居跡（S I - 18）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	合径	台高	脚径					
94	須恵器	壺	床面	8.0	1.4					長石、石英の 粒子含 織密	良好	灰 褐色	底部の破片、体部内外面口 クロ整形、底面回転ヘラ削 りヘラナズ	接合資料

に設置されている。

土層は黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が2層に細分される。黒褐色土は自然堆積の状況を示しており、暗褐色土は壁溝に堆積している。

カマドは、北壁中央部付近に設置されている。焚口部は破壊され消失し、右袖の一部が遺存する程度で、規模は長さ0.80m、幅1.06m、高さ0.10m(床面上)を計測する。焚口部と推定される部分は、カマドの手前に位置するようで床面より-0.05mの深さを有し、燃焼部と推定される部分は床面より0.08m、焚口部より0.03mの深さを有するが、焼土粒子等を含む暗褐色土(第2層)が堆積しているのみで焼土の堆積は見られず、下位もほとんど焼けていない。煙道部は不明である。壁と天井部は砂質の暗褐色土(第1層)、赤褐色砂質粘土(第5層)、暗白色砂質粘土(第6層)で構築している。

出土遺物としては、土師器壺、高台付壺、甕、須恵器壺、甕等が出土しているが、ほとんど破片で床面から出土しているものの図示出来たのは94の須恵器壺底部片1点のみである。94は、床面より出土した須恵器壺底部片の接合資料である。

出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡である。

第19号住居跡（S I - 19、図版22、59、79、92、第21表）

第19号住居跡は、5区南端部に位置し孤立したような状況を呈している。遺構の大部分は、耕作擾乱により破壊消失している。遺存している部分はカマド、貯蔵穴、柱穴、南壁のみで、北壁と東壁は推定壁である。また、中央部から南壁にかけて擾乱坑があり、西壁は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.90m、南北径2.05m、深さ0.19mを計測し、正方形状を呈しN-9°-Wに方位を有している。床面は中央部が比較的しっかりした床面となっているが、壁付近は柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。柱穴は中央西側に1本(P1)認められたのみで、0.20mの深さを計測する。貯蔵穴はカマドの西側にあり、東西径0.40m、南北径0.45m、深さ0.08mを計測し、楕円形状を呈している。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。カマドは、北壁中央部に設置されている。

土層は1層で黒褐色土が堆積しているものの、上面は耕作擾乱を受けており、貯蔵穴内には黒色土が堆積している。

カマドは北壁中央部に設置されており、長さ0.98m、幅0.92m、高さ0.12m(床面上)を計測する。天井部は、その多くが破損され消失している。焚口部も一部を残す程度であるが、両袖は比較的良好に遺存している。焚口部は、カマドの手前で床面上0.04mの所にあり、燃焼部に向かい0.07m程度下降している。焚口部には焼土ブロックを含む黒色土(第3層)が堆積し、燃焼部はカマドの中央部に所在し床面から0.13m程度掘り下げ暗褐色土(第5層)、黒褐色土(第11層)を用いて下位を構築しており、ここ

第21表 第19号住居跡（S I - 19）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	合径	台高	脚径					
95	土師器	壺	+ 0.05	推 14.4	3.9					長石、石英の 粒子を含 粗	良好	暗 褐色	体部外ロクロ整形、下半 手持ちラブ削り、底面ヘラ 削りヘラナダ、内外面磨滅	
96	土師器	壺	+ 0.03		4.6					緻密	良好	暗 褐色	体部ロクロ整形、内面ヘラ ナダヘラミガキ、下半ヘラ 削り、底面ヘラ削り	体部外側 有、体部 程残

の上面に燃焼部がある。燃焼部には赤褐色土（第2層）と黒褐色土（第6層）が堆積しており、煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上っている。煙道部下位には黒褐色土（第7層）、暗白色砂質粘土（第8層）、黄褐色土（第9層）を用いて構築している。天井部は砂質の黒褐色土（第1層）を用いており、両袖は暗白色砂質粘土（第10層）、暗褐色土（第12、13層）を用いて構築し粘土は比較的多く使用されている。

出土遺物としては覆土内より少量の土師器壺、甕、須恵器壺の小破片が出土しており、貯蔵穴内より土師器壺が2点重なった状況で出土している。これらのうち図示出来たのは、貯蔵穴内より出土した2点の壺（95、96）である。95は底面上0.05mより出土した土師器壺で、約1/2程度の破片で内外面がやや磨減している。96は95の下位で底面上0.03mより出土した土師器壺で、体部を約1/2程度欠損し体部には幅0.03cm、長さ3.2cm程度の傷が見られる。

出土遺物から、本跡は平安時代の住居跡と判断される。

第20号住居跡（S I - 20、図版23~25、59、63、64、79、80、92、97、99、第22、23表）

第20号住居跡は5区中央南側に位置しており、中央以西は西側区域外に所在している。また、本跡の東側には第1号方形周溝墓（S X - 1）が所在している。

確認面での大きさは東西径3.20m、南北径4.10m、深さ0.28mを計測し、N-4°-Eに方位を有し正方形状を呈している。床面は中央部がしっかりと床面となっているが、中央部から南側にかけては二重の貼床となっていることから、改築が認められる。壁はほぼ垂直に掘り込まれているものの、北壁は南方へ彎曲し、東壁は北側が彎曲している。南壁は、中央西側が北側へ向かって彎曲し一部擾乱を受けている。このように、各壁は外側へ向かってやや彎曲している。壁溝は東壁と南壁で認められ、幅0.18~0.28m、深さ0.05~0.07mの規模を計測し、断面U字状を呈している。柱穴は北東部に1本（P 1）と南西部に1本（P 2）認められ、2本とも浅い柱穴でP 2はP 1より小さく浅い柱穴となっている。

二重貼床の部分は中央部から南側にかけての部分で、東西径2.30m、南北径1.35m、厚さ0.02mの規模を計測し、下位の床面が緩やかに下降している。東側には粘土、焼土、灰が検出され甕を伴なうことから旧カマドのようである。また、新カマドは北壁中央東側に設置されている。

土層は黒褐色土、暗褐色土、赤褐色土、黑色土が堆積しており、黒褐色土と暗褐色土が4層に、赤褐色土と黑色土が各々2層に細分される。とくに、第2、3、6、9、10、11、12、13の各層は焼土を含んでいる。また、第7層の暗白色粘土は旧カマドを埋めて貼床とした土層であり、堆積状況としては人為的な堆積である。

第22表 第20号住居跡(SI-20)出土遺物一覧表1

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径					
97	須恵器	坏	+	推 0.17	5.0 13.6	3.7 4.8				微粒子含 緻密	良好	暗色 灰褐色	体部内外クロ彫形、下半 手持ちヘラ削り後ヘラナデ 底面ヘラ削り後ヘラナデ	体部少残
98	土師器	坏	+	推 0.05	5.3 13.8	3.7				緻密	良好	明色 茶褐色	体部内外クロ彫形、下半 手持ちヘラ削り後ヘラナデ 底面ヘラ削り後ヘラナデ	体部少残 体部下半は 粗い整形
99	土師器	坏	+	推 0.02	3.9 6.0 14.1					小石、雲母 長石の粒子含 粗	良好	暗内 褐黑色	体部外面は、底面まで磨滅 し整形不明、内面ヘラナデ ヘラミガキ、内面黒色処理	少程度残
100	土師器	坏	+	推 0.16	4.8 13.9	5.5 X				緻密	良好	明色 褐色	体部上半と内面クロ彫形 中半以下手持ちヘラ削りヘ ラナデ底面ヘラ削り後ナデ	体部一部欠
101	土師器	坏	+	15.0 0.05	4.0 X 14.0	5.8 X 3.7				雲母、石英粒 子を含む 粗	良好	明内 褐黑色	体部内外クロ彫形、下半 手持ちヘラ削り後ヘラナデ 底面ヘラ削り後ヘラナデ	
102	土師器	坏	+	推 0.11	推 14.6	推 6.4	3.9			緻密	良好	暗内 褐黑色	体部クロ彫形内面ヘラナ デヘラミガキ下半手持ちヘ ラ削り後ナデ底面ヘラ削り	内面黒色処 理、少程度 残
103	土師器	高坏 台付	+	15.1 0.15	4.8 X 14.8					緻密	良好	暗内 褐黑色	外面クロ彫形、体部内面 ヘラナデヘラミガキ、底面 回転ヘリカッタヘラナデ	黒色処理
104	土師器	高坏 台付	+	0.05						雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗色 茶褐色	体部クロ彫形、下半手持 ちヘラ削り後ヘラナデ、底 面回転ヘリカッタヘラナデ	体部上半欠 少程度、外 面磨滅
105	土師器	高坏 台付	+	0.22						雲母、長石 石英の粒子含 普通	良好	暗内 褐黑色	外面クロ彫形、内面ヘラ ナデ、黒色処理、底面回転 ヘラ削り後ヘラナデ	体部欠、内 面磨滅、高 白一部欠
106	須恵器	転鍤 用車輪	+	0.27	7.2 X 6.6	1.3 1.3 1.2	孔			緻密	良好	灰色 褐色	外周ヘラ削り後研磨 孔は、焼成前に穿つ 底面ヘラ削り後ヘラナデ	
107	土師器	裏床面	+	16.1 15.7		13.7				雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗色 褐色	口縁部横位ヘラナデ、体部 上半位下半右下リのヘラ 削り、内面横位ヘラナデ	口縁やや済 曲、底部欠 接合資料
108	須恵器	甕	+	推 0.06	11.3 21.0					緻密	良好	明色 灰褐色	体部上半鼓出後横位ヘラ削 り、下半横位ヘラ削り、内 面ヘラナデ	小破片 甕の破片か
109	土師器	器台	-	推 0.15	孔 6.0	3.0 1.1	孔			長石、石英 雲母粒子含 粗	良好	暗色 茶褐色	体部外面ヘラナデ、脚部横 位ヘラナデ、4孔式で整形 後穿つ	少程度 残

新カマドは両袖が破壊され消失している以外、比較的良好な遺存状態であり、長さ1.75m、幅1.20m高さ0.34m（床面上）を計測する。焚口部は上からの圧力で潰れているが高さ0.04mを計測し、焼上粒子を含む暗褐色土（第8、10層）が堆積している。火床部は焚口部下位より煙道部先端付近まで暗白色砂質粘土（第6層）、黒褐色土（第7、13層）、黒色土（第9層）、暗褐色土（第19層）を用いて構築している。燃焼部は火床部の上面で、焼土（第5層）が厚さ0.04mで堆積し、焼上層以外には黒褐色土（第4層）、暗褐色土（第12層）、赤褐色土（第21層）が堆積している。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は北壁より1.07m突出し赤褐色土（第14層）が堆積している。天井部は砂質の暗褐色土（第1、2層）、暗白色砂質粘土（第3層）、赤褐色土（第15層）、暗褐色土（第18層）で築き側壁は暗白色砂質粘土（第3層）、暗赤褐色土（第17、21層）、砂質の暗褐色土（第22～24層）を用いて構築されており、粘土の量は多量である。

旧カマドは東西径0.88m、南北径0.83m、深さ0.12mを計測し、中央東側端部には甕が逆位で埋設されている。焼上は中央部と埋甕の西側に薄く（厚さ0.02m）堆積しており、下位には灰が南側の床面に堆積している。東側と北側には、黄白色粘土（第1層）、赤褐色土（第2層）、黒褐色土（第3層）などが堆積しているが、煙道部等は確定出来なかった。南北の土層を見ると、焼上層より北端が緩やかに立ち上がりっていることから、カマドの基底部と推定される。東側の埋甕は甕内口縁部付近（下位）を黄白色粘土（第1層）で固定し、さらに開口を黒色土（第7層）で固定していることからカマド袖部と推定される。以上の点から旧カマドと推定した。

出土遺物としては、住居跡覆土内より土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、甕、須恵器転用紡錘車、鉄鏃、敲石、繩文式土器等が出土しており、床面及び床面付近からは土師器坏、高台付坏、甕、刀子が出土している。カマド内からは土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、高台付坏、甕が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは97～118までの22点である。97～109と115～118は覆土内及び床面からの出土遺物であり、110～114はカマド内よりの出土遺物である。とくに新カマド内からは土師器坏、高台付坏、甕が逆位で5点が重なった状況で出土している。出土状況を見ると北東方向、南西方向、西方からの流入で覆土内よりの出土が主流を占めているために、本跡廃棄後の流入と判断される。

97は床面上0.17mより出土した須恵器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存し口唇部がやや肥厚化している。98は床面上0.05mより出土した土師器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存し休部下半は粗い整形であり、口唇部が肥厚化している。99は床面上0.02mより出土した土師器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。内面は黒色処理（内黒）されているが、外面は底部まで著しく磨滅しているため整形不明である。100は底面上0.16mより出土した土師器坏で、休部を一部欠いているがほぼ完形品である。ややいびつな器形で、口唇部が肥厚化し休部中央以下はへら彫整されている。101は床面上0.05mより出土した土師器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。いびつな器形で内面は黒色処理されており、体部は直線的に外傾しており、内面は黒色処理されている。103は床面上0.15mより出土した土師器高台付坏で、ほぼ完形品である。ややいびつな器形で口縁部はやや外彎しており、内面は黒色処理されている。104は床面上0.05mより出土した土師器高台付坏で、休部上半を欠損している。高台部は、長方形状に貼付けられている。105は床面上0.22mより出土した土師器高台付坏で、休部を欠損し内面は黒色処理（内黒）されており、高台部は長い逆台形状に貼付けられている。106は床面上0.27mより出土した須恵器坏底部を転用した紡錘車であり、体部を削り落してから研磨し孔を穿っている。107は旧カマド北側の床面より出土した土師器甕で、体部下半を欠損している。口縁部はややいびつで口唇部が小さく、垂直に摘み出されている。108は床

第23表 第20号住居跡(SI-20)出土遺物一覧表2

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高						
110	土師器	高台付	—	推0.09	14.0	5.0	9.0	1.3	雲母、長石の粒子含粗	良好	暗褐色	内外面著しく磨滅、内面へラナデヘラミカキが一部に残る	坏矢残、高台部欠カマド内出土	
111	土師器	高台付	—	推0.14	15.0	8.0	5.0	×	長石、石英雲母の粒子含粗	良好	暗褐色	外面磨滅、内面へラナデヘラミカキ、底面凹凸へラ切り後へラナデ、体部ノ残	カマド内出土	
112	土師器	甕	—	14.0	×	11.0	—	—	雲母、長石石英、小石含粗	良好	暗褐色	体部右下りのヘラ削り後へラナデ、内面へラナデ、底面へラナデ、内面磨滅	カマド内出土	
113	須恵器	甕	床面	—	16.2	5.3	—	—	小石、雲母長石粒含粗	良好	明色黒褐	体部ヘラ削り後へラナデ、内面著しく磨滅ノ程度残	旧カマド内出土	
114	土師器	甕	床面	推22.0	9.2	推25.0	—	—	緻密	良好	明褐色	口縁部横位へラナデ、体部瓶位下半横位へラ削り後へラナデ、内面磨滅	旧カマド内出土、推定復元	
115	鉄製品	刀子	+	全長0.17	13.8	刀長5.4	茎長8.4	巾0.5	—	—	—	刀部先端を欠損している	重22.5g	
116	鉄製品	刀子	床面	—	全長7.2	刀長6.2	茎長1.0	巾0.5	—	—	—	両先端を欠損している	重39.0g	
117	鉄製品	刀子	+	推長0.19	11.8	巾0.4	厚0.6	—	—	—	—	先端部分と中央部欠損	重11.5g	
118	石製品	礫石	+	長0.15	9.8	中7.5	厚5.5	—	—	—	—	一方の先端を欠損両側面と先端部に使用痕を有している	—	

面上0.06mより出土した須恵器甕で体部小破片で、体部上半は敲整形であるが下半はヘラ削りが施されている。109は床面上0.15mより出土した土師器器台で、ノ程度の破片である。脚部下半を欠損しており、脚に3か所と上端中央部に1か所の孔が穿たれ1.1cmを計測する。110は新カマド内よりの出土で、5点重ねられた土師器(110~112)の最上面の遺物で、土師器高台付坏片である。カマド上面より0.09m下位より出土したノ程度の破片で内外面は著しく磨滅しており、高台部が外脛ぎみに外傾している。111は110の0.05m下位(上面より0.14m)より出土した土師器高台付坏で、体部がノ程度遺存している。内外面は著しく磨滅しており、口縁部がやや肥厚化し高台は外脛ぎみに外傾している。112は111の0.11m下位(上面より0.25m)より出土した土師器甕で、体部上半を欠損しており、内面は著しく磨滅している。113は旧カマド上面より出土した須恵器甕で、ノ程度の破片である。体部上半を欠損しており、内面は磨滅している。114は旧カマド上面より出土した土師器甕で、接合資料である。体部

中央を欠損しているため、推定復元した遺物である。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は「く」字状に削り出されている。115は床面上0.17mより出土した刀子で、先端部を欠損している。116は床面より出土した刀子片で、茎部先端と身部先端を欠損している。117は床面上0.19mより出土した刀子片で、刃部の中央と先端を欠損している。118は床面上0.15mより出土した敲石である。一方の先端を欠き、両側面と先端に使用痕を有している。

これらの出土遺物から本跡は、平安時代に入る住居跡と判断される。

第21号住居跡（S I -21、図版26、33、59、60、81、92、第24表）

第21号住居跡は5区中央南側に位置しており、南西コーナーは西側区域外に所在している。また、本跡の東側には第22号住居跡（S I -22）が所在している。

確認面での大きさは東西径2.90m、南北径3.10m、深さ0.26mを計測し、正方形状を呈し方位をN-E-W-Sに有している。床面は柱穴の内側がしっかりと床面となっているが、柱穴の外側から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁は垂直に掘り込まれており、壁溝はカマドの部分を除き全周し、幅0.20~0.27m、深さ0.03~0.06mを計測し断面U字状を呈している。柱穴は対角線上に4本（P 1~4）掘り込まれているが、-0.13m程度と浅い掘り込みの柱穴である。カマドは、北壁辺中央部に設置されている。

カマドは長さ1.53m、幅1.28m、高さ0.30m（床面上）を計測する。焚口部は約程度遺存し東西径0.50m、南北径0.70m、深さ0.10m程度を計測し、暗褐色土（第12、13層）、黒褐色土（第14層）、暗白色砂質粘土（第15層）、黒色土（第16層）が堆積している。燃焼部はカマド手前に位置し、下位は黒褐色土（第11層）を用いて構築している。焼土の堆積は見られないが、赤褐色土（第7層）、黒褐色土（第8、9層）が堆積している。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は北壁より0.57m突出している。煙道部には黒褐色土（第8、20層）、暗褐色土（第21層）、赤褐色土（第22層）、黒色土（第25層）が堆積している。天井部は砂質粘土（第2層）、砂質の黒褐色土（第3~5層）と砂質の黒褐色土（第6層）で構築しており、両袖は黒褐色土（第17、25層）と赤褐色土（第19、24層）を用いて構築しているが、粘土はごく少量使用されている程度である。

土層は黒色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が3層に、黒褐色土が4層に各々細分される。堆積状況は、自然堆積を示すレンズ状堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器壺、甕、須恵器壺、甕等が出土しており、床面及び床面付近からは須恵器壺、土師器甕が出土している。出土状況は、北方よりの流入状況を示すことから本跡廃棄後の流入を示している。これらの出土遺物で、図示出来たのは119~123までの5点である。

119は床面上0.13mより出土した土師器壺で体部を約程度欠損しており、内面はやや磨滅している。120は床面上0.08mより出土した須恵器壺で体部を約程度欠損しており、体部中央以下はヘラ調整が施されている。121は床面上0.08mより出土した土師器甕で、約程度の破片で体部がやや磨滅しており、口唇部は垂直に摘み出されている。122は床面上0.06~0.09mより出土した土師器甕の接合資料で、約程度の破片である。体部は長胴化しており、口唇部はやや外側に摘み出されている。123は、床面上0.06~0.09mより出土した須恵器甕片の接合資料である。

これらの出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡と判断される。

第24表 第21号住居跡（S I -21）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	法量 (cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
			出土位置 (m)	口径	底径	現高	台徑					
119	土師器	壺	+ 0.13	13.1	5.2	4.1		長石、石英の 粒子含 粗	良好	明 黒 色	体部ロクロ板形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	体部沿程残 内面磨滅
120	須恵器	壺	+ 0.08	推 12.8	6.2	X 4.2		長石、石英の 粒子含 粗	良好	灰 褐 色	体部ロクロ板形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	体部沿程残
121	土師器	甕	+ 0.08	推 20.0		6.0		長石、石英の 粒子含 粗	良好	明 褐 色	口縁部横位ヘラナデ、体部 ヘラナデ、内面ヘラ削り、 ヘラナデ、X程の破片	
122	土師器	甕	+ 0.06	推 19.0		12.5		長石、石英の 粒子含 粗	良好	暗 茶 褐 色	口縁部横位ヘラナデ、体部 縦位ヘラ削りヘラナデ、内 面ヘラナデ、内面磨滅	接合資料
123	須恵器	甕	0.06					小石、長石 石英含 粗	良好	明 灰 褐 色	体部の破片で、上半敲占め 板形、下半ヘラ削りヘラナ デ、接合資料	

第22号住居跡（S I -22、図版27、60、81、92、第25表）

第22号住居跡は5区中央南側に位置し、中央部以東は東側区域外に所在している。また北西コーナーは、耕作擾乱を受け消滅しており、本跡の西側にはS I -21が隣接している。

確認面での大きさは東西径1.80m、南北径3.05m、深さ0.30mを計測し、隅丸方形状を呈して方位をN-0°-Eに有している。床面は柱穴の内側がしっかりとした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は北壁の部分を除いて幅0.15~0.20m、深さ0.03~0.06mの規模で掘り込まれており、断面U字状を呈している。また、北西コーナー部の壁は擾乱を受けて消滅している。壁溝から見ると、北壁は南壁より短くなっているようである。柱穴は2本（P1と2）確認されたのみであるが、浅い掘り込みの柱穴でP1の東側には、北壁に接する間仕切り溝が長さ0.88m、幅0.13~0.16m、深さ0.06mの規模で掘り込まれており、断面はU字状を呈している。

上層は黒褐色土、焼土、炭化物、暗褐色土、黄褐色土が堆積しており、黒褐色土が3層に細分される。焼土層（第4層）と炭化物（第6層）が堆積しているが、第6層下の床面は焼けていないため本跡廃棄後の流入である。堆積状況は、第3層~7層が堆積してから第1層~3層が堆積しているため、前者は人為堆積のようであり後者は自然堆積である。

出土遺物としてはごく少量で、複土内より土師器高台付壺、甕、須恵器壺、甕等が出土し、床面及び床面付近からは土師器壺が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは124、125の2点のみである。124は床面上0.09mより出土した土師器壺で、体部がX程度遺存している。内面はやや磨滅しており、黒色処理（内黒）が施されている。また口唇部は、やや外脣している。125は床面上0.03mより出土した土師器壺で、体部がX程度遺存しほば直線的に外傾しており、口唇部は肥厚化している。

出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡と判断される。

第25表 第22号住居跡(SI-22)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
			位置 (m)	口径	底径	現高	台径	台高					
124	土師器	坏	+	推 0.09	14.0	7.0	3.7		織密	良好	明内 褐色 黑色	体部クロコ形、内面ヘラナデヘラミガキ、底面ヘラ削りヘラナデ、内面磨滅	体部少残 内面黑色處理
125	土師器	坏	+	推 0.03	14.0	8.0	4.2		雲母、長石 石英の粒子含 織密	良好	暗 褐色 黑色	体部クロコ形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	体部少残 内面一部黑色處理

第23号住居跡(SI-23、図版28、29、60、64、82、92、97、99、第26表)

第23号住居跡は5区中央部に所在しており、住居跡の東壁と西壁は、各々調査区域外に所在している。調査は、住居跡の中央部で行ったのみである。

確認面での大きさは東西径4.50m、南北径5.05m、深さ0.39mを計測し、隅丸方形状を呈する住居跡と推定され、方位をN-11°-Wに有している。床面は全体的に直床状を呈しており、中央部は周囲より0.03m程度低くなっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれおり、壁溝は幅0.10~0.20m、深さが0.10~0.13mの規模で北壁と南壁で確認され、断面U字状を呈している。本來は全周しているものと推定される。炉跡は中央東側でP1の南側に位置し東西径0.28m、南北径0.55m、深さ0.10mを計測し、楕円形で底面は良く焼けている。柱穴は対角線上に4本(P1~4)掘り込まれており、大きく深い柱穴である。貯蔵穴はP2の南側で住居跡南東部に位置しており、東壁は東側区域外に所在している。大きさは東西径0.80m、南北径0.55m、深さ0.19mを計測し、長方形を呈している。底面は鍋底状で、壁は斜めに掘り込まれている。

上層は黒色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が4層に細分される。これらの堆積状況は、暗褐色土と黒褐色土(第2~6層)が自然堆積した後、黒色土が厚く堆積している。本跡発掘後の、自然堆積を示している。また貯蔵穴内には黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積している。

出土遺物としては、覆土内より土師器壺、高壺、坏、高台付壺、石斧、繩文式土器片、磨石等が出土している。床面及び床面付近からは、土師器壺、高壺等が出土し、磨石はP2内より出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは126~131までの6点である。126は床面と床面上0.08mより出土した土師器壺の接合資料で、体部の一部を欠損し体部中央に最大径(23.1cm)を有している。頸部には、刷毛目整形痕を残している。127は床面上0.12mより出土した土師器高壺脚部片で、約1/2程度を欠損しており脚に孔を3個有している。また外面は、朱彩されている。128は土師器台付壺脚部で、約1/2程度の破片である。129は床面上0.17~0.32mより出土した土師器高壺の壺部で接合資料であり、体部を約1/2程度欠損している。130は床面上0.37mより出土した磨製石斧であり、一部剥離しているが全面が良く研磨されている。131はP2内より出土した磨石であり、上下両面は良く使用されている。

これらの出土遺物から、本跡は古墳時代前期末(五領期末)頃に位置する住居跡と判断される。

第26表 第23号住居跡(SI-23)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径						
126	土師器	甕	0 ↓ 8.0	18.1 × 17.1	6.7 × 6.5	20.1		長石、石英の 粒子含 穢 密	良好	明 黒 色	口縁横位ナデ内面刷毛目整 形部上半ヘラナデ下半刷 毛目整形、底面木葉痕有	接合資料	
127	土師器	高坏	+ 12.0			5.5		13.2 雲母の粒子含 普 通	良好	赤 褐 色	外面横位ヘラナデ後赤彩 内面刷毛目整形、3ヶ所に 整形後の孔(径1.3cm)有	少程度欠損	
128	土師器	台付甕	+ 4.0			6.9		長石、石英 雲母の粒子含 穢 密	良好	黑 色	外面刷毛目整形、内面ヘラ 削り、坏部内面ヘラナデ 削り程度残		
129	土師器	高坏	32.0 ↓ 17.0	23.0		5.4		長石、石英 雲母の粒子含 穢 密	良好	暗 茶 褐	体部内外面縦位のヘラナデ 体部少程度欠損 接合資料		
130	石 器	磨片 製 石	+ 37.0	長 巾 厚	7.2 6.0 2.1						全面良く研磨されている 上部少剝離している ほぼ完型		
131	石製品	磨石	-	長 幅 厚	10.0 12.2 13.8 8.3						自然石の四邊を割り、上下 両面に良く磨り減った部分 を有す。P2内出土		

第24号住居跡(SI-24、国版30、60、83、92、93、第27表)

第24号住居跡は5区北側に位置しており、中央部以東は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.85m、南北径5.18m、深さ0.28mを計測し、正方形状を呈しており方位をN-7°-Wに有している。床面は、柱穴の内側はしっかりした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているものの、南壁はやや弧を画くように掘り込まれている。壁溝は確認面で全周し、幅0.12~0.18m、深さ0.04~0.07mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は西側の2本(P1と2)が確認されたのみで、深くしっかりした柱穴である。また、住居跡の中央部には耕作土坑がある。

土層は暗褐色土、黑色土、焼土、黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が4層、黑色土が3層、黒褐色土が3層に細分される。堆積状況は、レンズ状に堆積している自然堆積である。焼土は、廐棄後に流入している。

出土遺物としては覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、甕等が出土し、床面及び床面付近からは土師器坏が出土しているが、出土量はきわめて少量である。これらの出土遺物で、図示出来たのは2点(132、133)のみである。

132は、床面上0.03mの所より出土した土師器坏の完形品である。棱は見られず、口縁部は内傾ぎみに直立している。133は床面上0.03mの所より出土した土師器坏で、少程度欠損している。全体的に半球状をなす器形である。

出土遺物から、本跡は古墳時代終末から奈良時代にかけての住居跡と判断される。

第27表 第24号住居跡(S I-24)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径					
132	土師器	壺	+ 3.0	14.0		3.8	稜 14.5	雲母、長石 石英の粒子含 織 疊	良好	明色 黒 褐	口縁部横位へラナデ、下半 ヘラ割りへラナデ、内面へ ラナデへラミガキ	完型
133	土師器	壺	+ 3.0	推 14.8		4.3		雲母、長石の 粒子含 織 疊	良好	明色 黒 褐	口縁部内外面横位へラナデ 体部へラナデへラミガキ、 内面磨滅	体部ノ程欠 損、口縁一部残

第25号住居跡(S I-25、図版31~33、60、83、94、第28表)

第25号住居跡は5区の北端部に位置し、第26号住居跡(S I-26)、第39号住居跡(S I-39)と重複している。新旧関係は、S I-39が本跡を切り、本跡がS I-26を切っている。中央以東は、東側区域外に所在している。

確認面での大きさは東西径1.80m、南北径3.70m、深さ0.14mを計測し正方形状を呈しており、方位をN-17°-Wに有している。床面は柱穴の内側はしっかりと床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は西側中央北側まで掘り込まれており、幅0.18~0.28m、深さ0.13mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は西側に2本(P1、2)と中央南側に1本(P3)の3本が本跡の柱穴であるが、他の2本は耕作によるものである。カマドは、北壁中央部に設置されている。

カマドは中央部以東が東側区域外に所在し、西側の袖はS I-39により切られている。また天井部と焚口部は、攪乱のために一部消滅している。燃焼部はカマドの中央部で、床面から0.08m程度下位に位置し焼上(第9層)が堆積している。また煙道部にかけては、赤褐色土(第1層)が堆積しており、赤褐色土の下位は良く焼けている(第8層)。煙道部は燃焼部より穏やかに立ち上がり、先端は北壁より0.20m程度突出している。煙道部には黒褐色土(第2層)、黒色土(第3層)、暗褐色(第4層)が堆積している。また煙道部下位は、一部分解(第7層)している。天井部と袖はその一部を遺存するのみで、砂質の暗褐色土(第5、10層)と黒褐色土(第6層)、赤褐色土(第11層)を用いて構築しているが、粘土は認められなかった。

土層は黒褐色土、砂質粘土、暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が3層に、暗褐色土は3層に各々細分される。黒褐色土は、レンズ状に堆積しており、砂質粘土と暗褐色土(砂質)はカマドの土層である。

出土遺物としては住居跡の覆土内より土師器壺、甕、須恵器壺、甕が出土しており、カマド内からは土師器壺、甕、須恵器壺等が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは134~137までの4点である。134は床面上0.08mより出土した須恵器壺で、体部をノ程度欠損している。135は床面上0.12mより出土した須恵器壺で、底部を一部欠損しておりやいびつな器形になっている。136は床面上0.04mより出土した須恵器壺で、体部をノ程度欠損している。137は床面上0.01mより出土した須恵器壺で、体部の一部を欠損しており、体部に「土」の墨書きが認められ、体部内面には媒が一部付着している。

出土遺物から本跡は、平安時代に入る住居跡と判断される。

第28表 第25号住居跡（S I-25）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径						
134	須恵器	壺	+	8.0	13.2	6.7	×		4.9		雲母、長石 小石含 粗	良好	暗色 灰褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 回転ヘラ切りヘラナデ	体部少程度欠
135	須恵器	壺	+	12.0	12.0	6.6	4.3	×	6.4	4.0	長石、石英の 粒子含 緻密	良好	灰褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	ほぼ完型
136	須恵器	壺	+	4.0	13.2	7.3	4.5				小石、雲母 長石含 緻密	良好	暗色 灰褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 回転ヘラ切りヘラナデ	体部少程度欠
137	須恵器	壺	+	11.0	12.3	7.0	4.6				小石、長石 石英含 粗	良好	灰褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	体部一部欠 「土」の墨書有

第26号住居跡（S I-26、図版31、34、60、83、93、第29表）

第26号住居跡は5区北側の北端部に位置し、S I-25とS I-39に切られS I-27を切っている。中央以西は、西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径2.60m、南北径4.90m、深さ0.21mを計測し、正方形状を呈しており方位をN-13°-Wに有している。床面は直床状をなし、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南壁は緩やかな弧を描いている。柱穴は、貯蔵穴内に1本(P 1)と中央南側に1本(P 2)の2本認められたのみで、比較的深くしっかりと掘り込まれている。貯蔵穴は、南東コーナー部に位置して東西径0.43m、南北径0.43m、深さ0.43mを計測し、円形状を呈している。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。炉跡や焼土塊は、認められなかった。

土層は黒色土、黒褐色土、暗褐色土が堆積しており、暗褐色土と黒褐色土が各々3層に細分される。これらの堆積状況は、ほぼレンズ状に堆積している自然堆積であり、1か所に耕作擾乱を受けている。また、第6層（暗褐色土）北側のロームは、耕作擾乱を受けていない自然層である。

出土遺物としては覆土内より土師器塊、壺、甕、黒曜石が出土しており、床面及び床面付近からは土師器塊、甕、石器が出土している。これらのうちで、図示出来たのは138~141までの4点である。石器は、一括して後述する。出土状況としては、北側と南側に集中する傾向を有していることから、北側と南側からの流入を示している。138は床面と床面上0.24mより出土した土師器塊の接合資料で、体部の一部を欠損しており、体部にはヘラミガキが施されているが、やや粗い整形である。139は床面上0.06~0.10mより出土した土師器塊の接合資料で、体部を約程度欠損している。体部内面には中半から下半にかけて放射状の暗文が見られ、体部のヘラミガキは138より良好である。140は床面上0.04~0.19mより出土した土師器塊の接合資料で、口縁部から体部にかけて約程度欠損している。141は床面上0.06~0.16mより出土した土師器甕の接合資料で、口縁部を約程度と体部を約程度遺存している。これらの出土遺物から本跡は、古墳時代中期（和泉期）に位置する住居跡と判断される。

第29表 第26号住居跡（S I - 26）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径					
138	上師器	塊	0 1 24.0	4.3 17.7 3.8						緻密	良好	明褐色 ガキ、底面ヘラ削り	口縁部横位ヘラナデ、体部 ヘラ削り後ヘラナデヘラミ	接合資料
139	上師器	塊	6.0 10.0	18.4 16.8						緻密	良好	明褐色 ガキ、内面放射状の暗文有	口縁部横位ヘラナデ、体部 ヘラ削りヘラナデヘラミガ	接合資料
140	土師器	塊	4.0 1 19.0							緻密	良好	明褐色 ガキ、口～体部まで残	口縁部横位ヘラナデ、体部 ヘラ削りヘラナデヘラミガ	接合資料
141	土師器	甕	6.0 1 16.0	推 20.0	5.8	14.2				長石、石英の 粒子含 緻密	良好	黒褐色 ガキ、口縁部殆ど残	口縁部横位ヘラナデ、体部 ヘラ削りヘラナデヘラミガ	接合資料

第27号住居跡（S I - 27、図版31、34）

第27号住居跡は5区の北端部に位置し、S I - 26に造構の大部分を切られており、中央部以西は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.00m、南北径2.60m、深さ0.24mを計測し、正方形形状を呈し方位をN - 9° - Wに有している。床面は直床状で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝、柱穴、炉跡は、認められなかった。

土層は明褐色土（第10層）と暗褐色土（第11層）が、南方より流入した状況で堆積している。この2層は、ローム粒子とロームブロックを含んでいる。

出土遺物としては、何ら出土しなかったもののS I - 26より出土している黒曜石、石器が、本跡に結び付く可能性を有している。

出土遺物が皆無のため、時期を決定することは出来ないが縄文時代の住居跡と推定される。

第28号住居跡（S I - 28、図版35、37、60、63、64、84、97、99、第30表）

第28号住居跡は、5区と6区間で農道の下位に位置し西壁が西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径4.10m、南北径5.65m、深さ0.32mを計測し隅丸長方形形状を呈しており、方位をN - 18° - Wに有している。床面は柱穴の外側までしっかりした床面となっているが、壁付近は柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北東コーナーがやや突出している。このために、カマド東側の壁はやや彎曲している。壁溝はカマドの部分を除き全周しているよう、幅0.15~0.33m、深さ0.05~0.07mを計測し、断面U字状を呈している。カマドは、北壁中央部東側に設置されているようであり、袖の両側は床面より0.03~0.04m程度高くなっているため、土器置き台と推定される。東側は東西径0.67m、南北径0.69m、高さ0.03mを計測し三角形形状を呈し、上面はほぼ平坦である。西側は東西径0.70m、南北径0.73m、高さ0.04mを計測し長方形形状を呈し、上面はほぼ平坦で西端は西側区域外に所在している。柱穴は、対角線上に3本（P 1 ~ 3）と、中央南側に1本（P 4）が認められた。P 1と2は大きくしっかりと掘り込まれているが、P 3と4はやや浅く掘り込まれている。また、P 1

第30表 第28号住居跡(SI-28)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	台高	脚径					
142	土師器	壺	+ 推 2.0			3.8				小石、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗 褐色	口縁部横位ヘラナデ、体部 上半ヘラナデ下半ヘラ削り 接合資料 ヘラナデ、内面ヘラミガキ	
143	須恵器	壺	+ 50.0		15.0 X 6.0 14.5					雲母、長石 小石含 粗	良好	明 黑色	体部上半敲型、下半ヘラ 削りヘラナデ、底面ヘラナ デ、内面磨滅	
144	土師器	甕	+ 17.0	16.0 X 15.0	6.0	20.3				雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	明 褐色	口縁部横位ヘラナデ、体部 概位ヘラ削りヘラナデ、底 面ヘラナデ、少程度残	
145	鉄製品	刀子	+ 22.0	長 峰 3.8	厚 0.6	0.8							刀子茎部片である	重 7.5g
146	石	自然石	+ 8.0	長 上幅 16.3	下幅 4.5	厚 4.7	6.1						自然面のみで、使用痕なし	
147	石製品	敲石	+ 0.15	長 幅 9.2	厚 7.0	2.3							自然石を使用 両側面に使用痕有 完形	

~3の柱穴底面には柱を建てた部分が固くしまった状況で認められた。この部分から判断すると、P1が0.22mでP2と3が0.15mの柱を使用していたと推定され、北側に太い柱を用いていたことと判断される。カマドは、北壁中央東側に設置されているようである。

カマドは長さ1.46m、幅1.34m、高さ0.27m(床面上)を計測し良く遺存している。火床部は床面から0.14m程度掘り下げ、暗褐色土(第7層)と黒褐色土(第8層)を用いて構築しており、この上面に焚口部と燃焼部がある。焚口部は幅0.51m、高さ0.10mで、黒褐色土(第4層)が堆積している。燃焼部は下位に黒褐色土(第5、6層)があり、焚口部下位に赤褐色土(第17層)が堆積しており、焼土の堆積はなく焼土ブロック(第10層)が堆積している。また燃焼部上面には、赤褐色土(第3層)が堆積している。煙道部は燃焼部より水平に0.42m突出後直立に立ち上がり、先端は北壁より0.43m程度突出しており、黒色土(第12層)、暗褐色土(第13層)が堆積している。天井部は黒褐色土(第1層)と赤褐色土(第2層)を用い、袖等は地山上に暗褐色土(第17層)、黒褐色土(第18層)、ロームブロック(第19層)、黒褐色土(第20、21層)を用いて基底部を構築した後、砂質粘土(第13層)、黒褐色土(第14層)、赤褐色土(第15層)を用いて壁を構築している。またカマドは、壁と壁溝を塗いた後に設置されている。壁溝はカマド基底部でも認められたが同一線上にはならず、カマド左袖下位でされている。

上層は黒褐色土、粘土、暗褐色土、黒色土が堆積しており、黒褐色土が5層に黒色土が2層に細分され、堆積状況はレンズ状に堆積する自然堆積である。

出土遺物としては、住居跡覆土内より土師器壺、甕、須恵器壺、刀子、敲石等が出土しており、床面及び床面付近からは土師器壺、須恵器壺、石等が出土している。出土状況は、北東方向からの流入

を示している。これらの出土遺物で図示出来たのは、142～147までの6点である。142は床面上0.02mより出土した少程度の土師器坏で、接合資料である。143は床面上0.50mより出土した須恵器甕底部片で、内面が磨滅しており覆土上面よりの出土で、本跡本来の深さを示す遺物である。144は床面上0.17mより出土した土師器甕で、少程度遺存し口縁部は「く」字状に外傾している。145は床面上0.22mより出土した刀子茎部片である。146は床面上0.08mより出土した自然石である。147は床面上0.15mより出土した敲石で、両側面に使用痕を有している。

出土遺物から本跡は、奈良時代の住居跡と判断される。

第29号住居跡（S I-29、図版36、37、61、63、64、84、98、99、第31表）

第29号住居跡は、6区南端部に位置し中央部以東は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.70m、南北径3.37m、深さ0.28mを計測し正方形形状を呈しており、方位をN-2°-Eに有している。床面は、柱穴の内側がしっかりとした床面となっているが、壁付近は柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外全周しているようで、幅0.14～0.25m、深さ0.04～0.07mの規模で掘り込まれ、断面U字状を呈している。柱穴は、西側の2本（P1と2）を認めただけであり、2柱穴とも浅く小さな柱穴である。カマドは、北壁中央部に設置されているようである。

カマドは、焚口部の先端より南側天井部は破壊され消失している。火床部は床面から0.23m程度掘り下げて、暗褐色土（第13、14層）と黒褐色土（第15層）を用いて構築している。焚口部は第15層の上面で黒褐色土（第12層）が堆積している。この先端に赤褐色土（第4層）があり、第12層と合せ燃焼部を構成している。燃焼部先端には、黒褐色土（第7層）を用いて燃焼部北壁を構築している。煙道部は、燃焼部より0.30m程度水平に突出してからほぼ垂直に立ち上がり、先端部は北壁より0.65m程度突出している。壁は黄白色砂質粘土（第2、5層）、粘土質の暗褐色土（第3層）、黒褐色土（第8層）を用いて構築している。粘土の量は比較的多く使用されており、カマドの規模は長さ1.42m、幅0.47m、高さ0.28m（床面上）を計測するが、中央西側を調査したのみである。

土層は黒褐色土、ロームブロック、黒色土が堆積しており、黒褐色土が4層に細分される。堆積状況は、レンズ状堆積の自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、甕が出土しており、床面及び床面付近からは土師器坏、刀子、砥石等が出土している。出土状況は、北側と南側より流入した状況を示している。これらの出土遺物で、図示出来たのは148～153までの6点である。148は床面上0.10mより出土した土師器坏底部で、少程度の破片である。内面は黒色処理（内黒）されているものやや磨滅している。149は床面上0.02mより出土した土師器坏で、底部を一部欠き体部下端に墨書が見られる。墨書は、不明である。150は床面上0.03mより出土した土師器坏底部片で、底面に「月」の墨書が見られる。151は床面上0.14mより出土した須恵器坏の接合資料で、遺存率は体部が少なくて底部は少程度である。152は床面上0.04mより出土した刀子片で、刀部中央以上を欠損している。153は床面上0.03mより出土した砥石で、全面が良く使用されている。

出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡と判断される。

第31表 第29号住居跡(SI-29)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径					
148	土師器	壺	+ 10.0		7.0	1.3		織密	良好	暗内 褐色 黑色	体部ロクロ整形内面へラナ デヘラミガキ、下端手持ち ヘラ削り、底面回転糸切り	内面黒色処理、沿縁の 破片
149	土師器	壺	+ 2.0		5.0	1.6		織密	良好	暗内 褐色 黑色	体部ロクロ整形内面へラナ デヘラミガキ、黑色処理、 底面回転糸切り、墨書き	
150	土師器	壺	+ 3.0		7.8	0.6		織密	良好	暗内 褐色 黑色	体部下端手持ちヘラ削りへ ラナデ、内面へラナデへラ ミガキ、底面回転糸切り	内面黒色処理、底面に 墨書き
151	須恵器	壺	+ 14.0	推 13.0	6.0	4.4		雲母、長石、 石英含 粗	良好	灰 褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	接合資料 約～程度 遺存
152	鉄製品	刀子	+ 4.0	全長 6.0	刀長 3.0	茎長 3.0	峰 0.5				刀部先端を欠いている	
153	石製品	砥石	+ 3.0	長 6.5	幅 5.3	厚 3.6		砂岩質			全面良く使用されている	

第30号住居跡(SI-30、図版38、39、61、63、85、94、第32表)

第30号住居跡は、6区南側で第32号住居跡(SI-32)を掘り切り、カマドの東側上面が搅乱を受け消失している。調査区域内で、住居跡全域を調査した4軒中の1軒である。

大きさは東西径2.85m、南北径2.90m、深さ0.34mを計測し、隅丸方形状を呈しN-10°-Wに方位を有している。床面は柱穴の内側がしっかりとした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマドと北壁東側を除いて全周し幅0.15~0.23m、深さ0.05~0.08mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は対角線上に4本(P1~4)と中央南側に1本(P5)の5本認められたが、すべて浅い柱穴である。カマドは北壁中央東側に設置されており、右上面が搅乱を受け消失している。

カマドは長さ0.92m、幅1.17m、高さ0.26m(床面上)を計測する。燃焼部は床面より0.06m掘り下げて火床部としているが、焼土の堆積は見られず下位もほとんど焼けていない。燃焼部には黒褐色土(第3層)、暗褐色土(第4層)、赤褐色土(第5層)が堆積しているのみである。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は北壁より0.49m程突出しており、黒褐色土(第6~8層)が堆積している。壁はローム上に黒褐色土(第10層)、暗褐色土(第11層)で基底部を構築し、さらに暗黄色粘土(第2層)と暗白色砂質粘土(第9層)を用いている。粘土の量は今回の調査で発見された住居跡カマドの中で、最も多くの粘土を使用している。

土層は黒褐色土、暗褐色土、黒色土、黄褐色土が堆積しており、黒褐色土が4層に暗褐色土が3層に各々細分される。これらの土層は、レンズ状に堆積していることから自然堆積である。

第32表 第30号住居跡(SI-30)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)						胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口縁	底縁	現高	台縁	台高	脚縁						
154	須恵器 壺		4.0 9.0							長石、石英 白色粒子含	良好 褐	暗色 灰	体部クロ彫形、下半手持 ちヘラ削りヘラナナ、底面 ヘラ削りヘラナナ	内外面や 度残	
				14.7	6.8	4.6									
155	鉄製品 鎌片	鎌片	+	全長 4.0	身長 7.9	茎長 0.5	身幅 7.4	茎幅 0.5	0.6					両先端を欠損し、身部は丸く茎部は角型となる	重21.5g

出土遺物としては、覆土内より土師器壺、甕、須恵器壺、甕等が出土しており、床面及び床面付近からは須恵器壺、鎌等が出土しているが、出土量はきわめて少量である。これらの出土状況は、西方よりの流入を示しており、図示出来たのは154と155の2点のみである。154は床面上0.04~0.09mより出土した程度の須恵器壺の接合資料で、体部はやや外彎曲に外傾しており口縁部が肥厚化している。155は鉄鎌茎部片で、身部の一部が残っている。

出土遺物から本跡は、平安期に入る住居跡と判断される。

第31号住居跡(SI-31、図版40、41、61、63、64、86、93、99、第33表)

第31号住居跡は、6区南側に位置し調査区内で構造全般を調査し得た4軒中の1軒である。大きさは東西径3.65m、南北径3.85m、深さ0.25mを計測し隅丸正方形状を呈し、方位をN-17°-Wに有している。床面は、柱穴の内側がしっかりと床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北西コーナーは擾乱を受けている。壁溝はカマドの西側から西壁、南壁、東壁南端部にかけて掘り込まれているが、東壁の中央部とカマドの東側では認められなかった。規模は、幅0.12~0.30m、深さ0.02~0.08mのを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は対角線上に4本(P1~4)と中央南側に1本(P5)の5柱穴が認められたが、5柱穴とも小さく浅い柱穴である。カマドは、北壁中央東側と東壁中央南側の2ヶ所に設置されている。北側カマドが良く使用されているのに対して、東側カマドはあまり使用されていない。

北カマドは焚口部が破壊され消失しているが、長さ1.33m、幅1.37m、高さ0.31m(床面上)を計測し、北壁中央東側に設置されている。焚口部に相当する所には、天井部の白色粘土(第4層)が崩れ寒い状況を呈している。燃焼部はカマドの中央部で焼土(第12層)が厚く堆積しており、焼土の上面には暗褐色土(第2、3層)が堆積している。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は北壁より0.72m程度突出して黒褐色土(第8、10層)と暗褐色土(第9層)が堆積している。天井部と壁は砂質の黑色土(第1層)、白色砂質粘土(第13層)、黒褐色土(第5、6層)、黑色土(第7層)、暗白色砂質粘土(第11層)を用いて構築している。粘土は、比較的多く使用されている。

東カマドは両袖と焚口部が破壊され消失しているが、長さ0.95m、幅0.06m、高さ0.21m(床面上)を計測する。燃焼部はカマドの中央部に位置するようであるが焼土の堆積は無く、焼土粒子と焼土小ブロックを含む黒褐色土(第8、9層)と、先端に焼土粒子を含む黒褐色土(第7層)が堆積している。煙道部は燃焼部先端よりほぼ垂直に立ち上がり、先端は東壁より0.42m程突出している。煙道部には暗褐色土(第4層)、黒褐色土(第5層)、ロームブロック(第6層)が堆積しており埋められた状況を

第33表 第31号住居跡(SI-31)出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径					
156	土師器	環	+ 7.0	15.0 × 7.5 13.0	7.5	4.3		長石、石英 雲母の粒子含 普	良好	暗 褐色	体部ロクロ形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	×程度残 内面やや磨 減
157	土師器	環	- 0.10	推 14.5	6.5	3.9		長石、石英 雲母の粒子含 粗	良好	明色 茶褐	体部ロクロ形、下端手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	口縁ノ程度 残、北カマ ド内出土
158	土師器	甕	- 0.10	22.5		12.4		長石、石英の 粒子含 粗	良好	暗 褐色	口縁部横位ヘラナデ、体部 内外ヘラナデ、内外面磨減 カマド内出土	×程度欠損 北カマド内 出土
159	須恵器	甕	- 0.11	推 29.0		25.9		雲母、長石 石英含 粗	良好	明色 黒褐	口縁部横位ヘラナデ、体部 下半まで截凸め、下半ヘラ 削り、内面ヘラナデ	北カマド内 出土
160	土師器	甕	0.09 ↓ 0.27	推 18.0		17.8		雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	暗色 茶褐	口縁部横位ヘラナデ、体部 横位ヘラ削りヘラナデ、内 面ヘラナデ、×程度残	北カマド内 出土
161	鉄製品	釘	+ 17.0	全長 9.8 6.8	身幅 0.8	身厚 0.7	重 g 24.5				先端部を欠損している 頭径は、 2.1×0.9 cmを計測 する	
162	石製品	敲石	+ 0.07	長 8.4	幅 5.4	厚 4.3					側面を加工し、上下両面に 使用痕を有している。 完形	

呈している。壁は暗白色砂質粘土(第2、3層)、粘土質の暗褐色土(第4、13層)を用いて構築している。

土層は黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が4層に暗褐色土が2層に各々細分される。堆積状況は、レンズ状に堆積する自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器環、高台付环、甕、須恵器环、甕、釘等が出土し、床面及び床面付近からは土師器環、甕等が出土している。カマド内からは、北カマドと東カマドから土師器環、甕、須恵器甕等が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは156~162まで7点である。156は床面上0.07mより出土したノ程度の土師器環で、内面はやや磨減しており口唇部が肥厚化している。157は北カマド内より出土した土師器甕で、口縁部がノ程度遺存している。158は北カマド内より出土した土師器甕の接合資料で、ノ程度を欠き口縁部がやや肥厚化している。159は北カマド内より出土した須恵器甕で、底部を欠き体部もノ程度を欠損している接合資料で、口唇部がやや肥厚化している。160は北カマド内より出土したノ程度の土師器甕片で、口唇部の摘み出しに特徴が有している。161は床面上0.17mより出土した角釘で、先端を欠いている。162は床面上0.07mより出土した敲石で、上下両面に使用痕を有している。

これらの出土遺物から、本跡は平安時代に入る住居跡と判断される。

第32号住居跡（S I -32、図版38、39、85）

第32号住居跡は、6区中央北側でS I -30に東側中央部を切られた状況で確認され、中央部以西は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径3.90m、南北径4.60m、深さ0.10mを計測し、隅丸正方形を呈しN-52°-Wに方位を有している。床面は、柱穴の内側がしっかりした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。柱穴は対角線上3本（P 1～3）認められ、深くしっかりと掘り込まれている。炉跡は中央東側で北に寄った所に設けられており、長径0.67m、短径0.45mを計測し、良く焼けている。貯蔵穴は南東部で壁に接するように掘り込まれており、東西径0.70m、南北径0.60m、深さ0.58mを計測し、不整方形を呈している。底面は斜めになっており、既に垂直に掘り込まれている。土層は覆土として暗褐色土（第11層）と黒褐色土（第3層）が堆積しており、貯蔵穴内には黒褐色土が堆積している。

出土遺物としては覆土内より土師器壺、甕の小破片が出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。出土した遺物は五領期に位置付けられる遺物であることから、本跡は五領期の住居跡と判断される。

第33号住居跡（S I -33、図版42、61、63、87、93、94、第34表）

第33号住居跡は、6区の中央部に位置しており調査区域内で、遺構全域を調査出来た4軒中の1軒である。大きさは東西径3.05m、南北径2.58m、深さ0.29mを計測し、長方形を呈しN-11°-Wに方位を有している。床面は、柱穴の内側がしっかりした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南東コーナーと南西コーナーは耕作擾乱により変形しているが壁溝の部分が壁となる。このため南東コーナーと南西コーナーは隅丸になっていたことと推定され、形状も隅丸長方形を呈していたことと判断される。壁溝は東壁中央部から南東コーナーにかけてと、西壁中央部と南西コーナー部にかけて掘り込まれているが全周していない。壁溝は幅0.12～0.20m、深さ0.02～0.03mの規模で掘り込まれており、断面U字状を呈している。柱穴は対角線上に4本（P 1～4）と中央南側に1本（P 5）の5本確認されたが、P 4はカマド側に寄っておりP 3は南西コーナーで壁溝に接している。このため、主柱穴はやや不規則な配置となっており、深さも0.10～0.20m程度の浅い柱穴である。カマドは、北壁中央部に設置されている。

カマドは北壁中央に設置されており、長さ1.37m、幅1.20m、高さ0.23m（床面上）を計測し、焚口部口付近は破壊されている。焚口部には、黒褐色土（第3、7層）と黄褐色土（第6層）が堆積し燃焼部はカマドの中央部に位置し、焼土層の堆積は見られないが黒褐色土（第5層）が堆積している。煙道部には燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は北壁より0.42m程度突出している。煙道部には、明黒褐色土（第9層）と暗褐色土（第12層）が堆積している。天井部は粘土質の黒褐色土（第1層）、黄白色砂質粘土（第2層）、黒褐色土（第3、8層）を用いて構築しており、側壁は粘土質の黒褐色土（第13、16層）、暗褐色土（第14、15層）、黄白色砂質粘土（第2層）を用いて構築しているが、左側袖には掘り残しのロームがあり、粘土の量は比較的少量である。

土層は黒褐色土、暗褐色土、ロームブロックが堆積しており、黒褐色土が3層（第1～3層）、暗褐色土が2層（第4、5層）に細分される。また、一部耕作擾乱を受けているが、土層の堆積状況はレンズ状に堆積する自然堆積である。

出土遺物としては覆土内より土師器壺、高台付壺、甕が出土しており、床面と床面付近からは須恵器

第34表 第33号住居跡（S I-33）出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土 法量 (cm)						胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
			位置 (m)	口径	底径	現高	台径	台高					
163	須恵器	壺	+	0.02	13.0	7.1	3.8		長石、石英含 級 密	良好	灰 褐 色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラ削りヘラナデ	体部少欠
164	須恵器	壺	+	0.01	13.2	7.4	4.4	×	小石、白色粒 子多量含 粗	良好	暗 灰 褐	体部ロクロ整形、下半同転 ヘラ削りヘラナデ、底面回 転ヘラ切りヘラナデ	ほぼ完形 体部一部欠
165	鉄製品	釘	+	0.09	7.6	0.8	厚 0.6					先端部を欠く角釘である	重25.0g

壺、甕、釘が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは163～165まで3点である。

163は床面上0.02mより出土した須恵器壺で、体部を少程度欠損している。164は床面上(+0.01m)より出土した須恵器壺で、ほぼ完形である。165は床面上0.09mより出土した釘で、先端を欠損している。

これらの出土遺物から、本跡は平安時代の住居跡と判断される。

第34号住居跡（S I-34、図版43、61、64、88、93、94、第35表）

第34号住居跡は、6区の中央部に位置しており第35号住居跡（S I-35）に切られ、中央部以西は西側区域外に所在している。また東壁中央南側の一部は、耕作土坑により消失している。確認面での大きさは東西径4.00m、南北径5.90m、深さ0.13mを計測し、隅丸長方形状を呈しN-25°-Wに方位を有している。床面は、柱穴の内側がしっかりした床面となっているが、柱穴から壁にかけてはやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが北壁東側、東壁中央部以南、南壁中央部西側の壁は0.03～0.05mオーバーハングしている。柱穴は、東側の2本（P1、2）と中央南側の1本（P3）の3柱穴が確認された。P1、2には新旧があり、東側の柱穴が新柱穴でP2には側柱穴が建てられていたようである。また、P1、2には柱痕が認められており、この痕跡から柱の径0.20～0.24m程度の柱材が使用されていたようである。壁溝は確認部分では全周し、幅0.13～0.20m、深さ0.07～0.15mを計測し、断面U字状を呈している。貯蔵穴は、中央南側で壁溝に接し、大きさは東西径0.50m、南北径0.30m、深さ0.23mを計測し、不整長方形状を呈している。底面は鍋底状を呈し、壁は斜めに掘り込まれている。カマドは北壁中央部付近に設置されているようで、床面の北側からP1北側にかけて砂質粘土が散乱した状況で堆積している。

土層は暗褐色土、黒褐色土、黒色土が堆積しており、暗褐色土が3層に黒褐色土が3層に各々細分される。堆積状況は、レンズ状に堆積する自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器壺、塊、甕、須恵器壺、甕等が出土し、床面及び床面付近からも須恵器壺蓋、甕、土師器壺、塊、怪石等が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは6点(166～171)のみである。166は床面上0.09～0.11mより出土した須恵器壺の接合資料で、器高が低く底面の器肉が薄い器形で、口縁部を少程度欠損している。167は床面上0.02mより出土

第35表 第34号住居跡（S I - 34）出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土位置 (m)	法 量 (cm)					胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
				口径	底径	現高	台径	台高					
166	須恵器	坏	0.09 5 0.11	13.3	推 8.0	3.1			長石、石英の 粒子含 織 密	良好	灰 褐色	体部ロクロ整形後ヘナナデ 底面回転ヘラ切り後ヘナナ デ、口縁%程欠	接合資料
167	須恵器	蓋	+ 0.02	16.0		3.0	宝珠 高	宝珠 径	雲母、長石 石英含 粗	良好	明色 灰 褐色	宝珠は貼付け、上半回転ヘ ラ切り、体部ロクロ整形、 約%程度の破片	
168	土師器	塊	0.02 3 0.09	推 20.0		7.1			長石、石英の 粒子含 織 密	良好	暗 褐色	口唇部ヘラ削り出し、体部 横位ヘナナデ、内面ヘナナ デ、外面やや磨滅%残	接合資料
169	土師器	坏	+ 0	14.0 × 13.0		4.5			雲母、長石 石英の粒子含 粗	良好	茶 褐色	口縁部横位ヘナナデ、体部 内外面ヘナナデ、内面磨滅 %程度欠損	
170	須恵器	甕	+ 0.02						淡灰褐色 織 密	良好	淡色 灰 褐色	要部の破片 外面は叩き占め	
171	石製品	軽石	+ 0.06	長 7.2	幅 5.2	厚 4.6						側面を削り出し、一面（上 面）を「く」字状に削り出 している	

した須恵器坏蓋で、%程度の破片である。168は床面上0.02~0.09mより出土した土師器塊で%程度の接合資料である。口唇部は丸く摘み出されており、体部は厚い器壁となっている。169は床面から出土した土師器坏で%程度を欠損しており、体部は半球状を呈している。170は床面上0.02mより出土した須恵器甕の体部で、外面には叩きの痕跡を有している。171は床面上0.06mより出土した軽石である。

出土遺物から本跡は、古墳時代後期に位置する住居跡と判断される。

第35号住居跡（S I - 35、図版44、61、88、93、第36表）

第35号住居跡は、6区の中央部でS I - 34を掘り切っているが、中央部以西は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.25m、南北径2.50m、深さ0.12mを計測し、隅丸正方形を呈する小型の住居跡で、方位をN-10°-Wに有している。床面は全体にしっかりした床面で、壁は垂直に掘り込まれているものの東壁中央南側で0.03m程度オーバーハングしている。壁溝は確認面では全周しておらず、幅0.13~0.18m、深さ0.11~0.15mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は北東部（P 1）と南東部（P 2）に計2本認められたが、P 2は壁柱穴である。カマドは認められなかった。

土層は黒褐色土、白色粘土、黑色土が堆積しており、黒褐色土が5層に、黑色土が2層に細分されるが白色粘土（第3層）と黒褐色土（第4層）は攪乱で、第9層の黒褐色土は本跡の床面である。

出土遺物としては、床面付近からの出土遺物が中心で土師器坏、高台付坏、甕、須恵器坏、坏蓋、甕等が出土しているが、出土量は少量で南東方向よりの流入を示すようである。出土遺物で図示出来たの

第36表 第35号住居跡（S I-35）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径	合高					
172	土師器	高台付	+ 0.07	12.8		4.8	7.6	1.5	長石、石英の 粒子含 粗	良好	暗褐色 台まで磨滅、内面ヘラナデ ヘラミガキ、黒色処理	体部ロクロ整形、中や高 台まで磨滅、内面ヘラナデ ヘラミガキ、黒色処理	口縁部少程度 欠損
173	須恵器	甕	+ 0.05	推 20.2	推 12.6	14.4			級密	良好	灰色 白色	体部中半までヘラナデ、下 半横位ヘラ削りヘラナデ、 内面磨滅、小型の甕	少程度残
174	須恵器	壺蓋	+ 0.02	16.0		1.6	宝珠 3.3		小石、長石 白色粒子含 粗	良好	淡色 灰褐色	外側は貼付で、体部は内 外面ロクロ整形、接合資料	

は172~174までの3点である。172は床面上0.07mより出土した土師器高台付壺で、口縁部を少程度欠損している。外面は著しく磨滅しており、内面は黒色処理(内墨)されている。高台部は逆台形状で、細長く外に開いている。173は床面上0.05mより出土した須恵器甕で、少程度の破片である。体部は肥厚で、上半にヘラナデが施され中半以下はヘラ削り後ヘラナデが施されている。174は床面上0.02mより出土した須恵器壺蓋で少程度の接合資料である。

出土遺物から本跡は、平安時代に入る住居跡と判断される。

第36号住居跡（S I-36、図版44、89）

第36号住居跡は、6区の中央部に位置しており、遺構の南西コーナー部を調査したのみである。遺構の大部分は、東側区域外に所在するため詳細は不明である。確認面での大きさは東西径0.70m、南北径1.75m、深さ0.25mを計測し、方位はN-29°-Eを示すようである。床面はやや柔弱な床面で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は確認面では全周しており、幅0.16~0.23m、深さ0.15mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は認められなかった。

土層は黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が4層に細分される。土層の堆積状況は、レンズ状に堆積している自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より少量の土師器壺、甕、須恵器壺、甕の小破片が出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

出土遺物から本跡は、平安時代の住居跡と推定される。

第37号住居跡（S I-37、図版45、89）

第37号住居跡は、6区の北側に位置しておりカマド、壁溝、柱穴で確認した住居跡である。確認面での大きさは東西径3.00m、南北径3.70mを計測し、隅丸正方形を呈しN-16°-Eに方位を有している。床面と壁は消失しており、壁溝は北側(カマドは東側と西側)と南東コーナー部を消失している。大きさは幅0.12~0.17m、深さ0.04~0.05mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は、東側の2本(P1と2)を確認したのみで、小さく浅い掘り込みである。カマドは、北壁中央部付近に設置されていたものと推定される。

カマドはその大部分が破壊消滅しているため、袖、燃焼部、煙道部等は不明な部分が多い。大きさは、長さ1.10m、幅0.98m、深さ0.17m（床面より）を計測する。カマドの北側には赤褐色土（第7層）があり、この前面と下位の黄褐色土（第8層）は良く焼けている。このため、この赤褐色土（第7層）の部分が燃焼部と推定される。手前には砂質粘土（第5層）、暗褐色土（第1～3、6層）が堆積していることからカマドの構築土層と推定される。

出土遺物としては、赤褐色土（第7層）の西側より須恵器片が1点出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。須恵器は、平安期に位置することから本跡も平安期の住居跡と判断される。

第38号住居跡（S I-38、図版27、89）

第38号住居跡は、6区の北側に位置しており耕作攪乱により東壁、南東コーナー、南壁東側と床面の一部を消失しているが、遺構全域を調査できた4軒中の1軒である。大きさは東西径2.40m、南北径1.95m、深さ0.06mを計測し、長方形状を呈しN-83°→Wに方位を有している。床面は全体的にしっかりした床面となっているものの、北西部と南東部は消失している。壁溝は認められず、壁は斜めに掘り込まれている。柱穴は、東壁中央部に1本（P1）と西壁中央部に1本（P2）の2本認められたのみである。炉跡、カマド等は、認められなかった。

土層はローム粒子を含む黒褐色土の1層が堆積しているのみである。また、出土遺物も皆無であるため正確な時期決定が出来ないが、平安期の小竪穴と推定される。

第39号住居跡（S I-39、図版31～33、62、83、93、第37表）

第39号住居跡は、5区の北端部でS I-25、26を掘り切った状況で確認された。また、カマドはその大部分が耕作攪乱を受け消滅している。確認面での大きさは東西径1.75m、南北径1.75m、深さ0.16mを計測し、正方形状を呈する住居跡と推定される。床面はやや柔弱な床面となっており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は認められず、柱穴は中央部の東西に2本（P1、2）認められた。カマドは北壁中央部に設置されているが、大部分は破壊され消滅している。燃焼部は床面より0.05m程度掘り下げているが焼土の堆積は見られず、焼上粒子を含む黒褐色土（第6層）が堆積している。煙道部は燃焼部より直立に立ち上がってから先端に向い緩やかに立ち上がり、先端は北壁より0.33m程度突出している。壁は暗白色砂質粘土、黑色土（砂質）、黒褐色土（砂質）を用いて構築している。土層は、黒褐色土が1層堆積しているのみである。

出土遺物としては、覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、甕等が出土しており、床面及び床面付近か

第37表 第39号住居跡（S I-39）出土遺物一覧表

番号	名 称	器種	出土 位置 (m)	法 量 (cm)					胎 土	焼 成	色 調	器形・整形の特徴	備 考
				口徑	底径	現高	合径	台高					
175	土師器	坏	+ 0.10	13.0	6.0	4.7			雲母、長石 石英の粒子含 組	良好	暗 褐 色	体部上半クロ整形、下半 手持ちヘラ削りヘラナデ、 底面ヘラ削りヘラナデ	体部欠
176	土師器	甕	+ 0.11	推 17.0		22.8			小石、長石 石英の粒子含 組	良好	暗 褐 色	口縁部横位ヘラナデ、体部 上半縱位ヘラ削り下半横位 ヘラ削り後ヘラナデ	程度残 カマド右袖 内出土

らは土師器坏、甕が出土し、カマド内からは土師器甕が出土している。出土状況としては、北方よりの流入を示している。これらの出土遺物で、図示出来たのは175と176の2点のみである。

175は床面上0.10mより出土した土師器坏で、体部を少しがれています。部位中半以下はヘラ調整されており、口唇部がやや肥厚化している。176はカマドの右袖内より出土した土師器甕で、底部を少しがれ程度の破片である。長胴化した甕で、口唇部は削り出されている。

これらの出土遺物から、本跡は平安期に入る住居跡と判断される。

第40号住居跡（S I - 40、図版46、62、89、94、第38表）

第40号住居跡は、1区中央部南側の緩斜面に位置しS I - 1と重複している。また、南西コーナーは西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径3.10m、南北径2.80m、深さ0.24mを計測し、隅丸長方形を呈し、N - 9° - Eに方位を有している。床面は中央部がしっかりした床面となっているが、中央部～壁にかけてやや柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド、北壁西側、西壁を除く部分で全周しており、幅0.15～0.20m、深さ0.02～0.03mを計測し、断面U字状を呈している。柱穴は、カマドの南側で中央部に1本認められたのみで、浅い掘り込みの柱穴である。カマドは北壁中央部に設置されているが、西側は破壊され消失している。また、北西部は耕作擾乱を受けているため一部床面が消失している。カマドは、北壁中央部に設置されている。

カマドは長さ1.20m、幅0.79m、高さ0.28m（床面上）を計測するが、中央西側は破壊され消失している。燃焼部はカマドの中央部で、焼土層は堆積していないが焼土を含む黒褐色土（第2層）が堆積しており、下位は床面より0.05m程度掘り下げている。煙道部は燃焼部より緩やかに立ち上がり、先端は北壁より0.02m程度突出している。煙道部には、黒褐色土（第4層）が堆積している。壁は粘土質の黒褐色土（第1層）、暗褐色土（第5層）を用いており、粘土は西側に一部が認められた程度である。

土層は粘性を有する黒褐色土がローム粘子、粘土ブロック、粘土粒子を含みながら、北方より流入した状況で堆積している。

出土遺物としては、覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏、談が出土しており、床面及び床面付近からは須恵器坏、高台付坏が出土している。遺物の出土状況は、北方から流入を示している。これらの出土遺物で、図示出来たのは177～179までの3点である。177は床面上0.02mより出土した須恵器坏で、口

第38表 第40号住居跡（S I - 40）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)					胎 土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備 考
			口徑	底徑	現高	台徑	台高					
177	須恵器	坏	+ 0.02	13.9 X 13.7	4.6 X 4.3			小石、長石 白色粒子含	良好	灰 褐色	体部内外面クロコ整形、下 半手持ちヘラ削りヘラナデ 底面回転ヘラ切りヘラナデ	口縁一部欠
178	須恵器	高坏 台付	+ 0.01		7.8 2.9 7.1			緻密	良好	明色 灰 褐色	体部と高台部クロコ整形、 底面回転ヘラ切りヘラナデ 内面やや磨滅	
179	土師器	甕	+ 0.12	6.5 X 6.0	7.4			小石、雲母 長石、石英含 粗	良好	暗色 茶 褐	体部内外ヘラナデ、下端ヘ ラ削り後ヘラナデ 体部やや磨滅、小型の甕	

縁部を一部欠損しているがほぼ完形品である。ややいびつな器形で、肥厚な器内となっている。178は床面上0.01mより出土した須恵器高台付坏片で、高台部を一部欠損している。内面がやや磨滅しており高台部は細長く直線的に外傾している。179は床面上0.12mより出土した土師器裏で、小型妻と推定され、体部下端にはヘラ調整が施されている。

これらの出土遺物から本跡は、平安時代に入る住居跡と推定される。

第50号住居跡（S I - 50、第5図、図版62、94、第39表）

第50号住居跡は、第11号住居跡の全城を調査するため東側へ拡張した時に発見された住居跡で、その一部の範囲を確認したのみであり、全測図にその範囲を示した。プランは、正方形状を呈しており、須恵器坏(180)が遺構確認面から発見されている。遺構内の調査は、行わずその範囲を確認したのみである。須恵器は体部を少程度欠損しており、緻密な胎上で、体部下半にはヘラ調整を施している。

第39表 第50号住居跡（S I - 50）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎	土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台高	脚高						
180	須恵器	坏		13.0	×	6.4	4.2		雲母、白色の 粒子含 緻密	良好	明色 灰褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削り後ヘラナデ	×	×
				12.0										×

2、掘立柱建物跡（図版47、48、62、90、94、第40表）

掘立柱建物跡は、2区南側で平坦部から南側緩斜面部に重複するように3棟発見された。第1、2号建物跡（S B - 1、2）は南北に桁行を有する建物跡であるが、第3号建物跡（S B - 3）はS B 1、2より東側に向いている。調査区域内では、3棟とも全容を明らかにすることは出来なかった。以下に、各建物跡について記述する。

第1号掘立柱建物跡（S B - 1）

第1号掘立柱建物跡（S B - 1）は、2区南側で第2号掘立柱建物跡（S B - 2）の内側に位置しているが、S B - 2とは柱穴配置から別々の建物跡であり、北東部と南西部は各々区域外に所在している。確認面での大きさは、梁行（東西径）が2間で3.40m、桁行（南北径）は3間で5.80mを計測し、長方形をなす建物跡でN-19°-Eに方位を有している。柱穴の配置は、北東部と南西部が区域外に所在するため全容は不明である。確認面での桁行柱間径は、東面と西面からP 4～5間が2.40m(8.0尺)、P 1～P 2間が2.40m(8.0尺)、P 2～P 3間が1.80m(6.0尺)を各々計測することから桁行は、8尺+8尺+6尺の柱間径であったと推定される。梁行は、北面で見るとP 4～P 6が2.55m(8.5尺)、P 6～P 7間が2.10m(7.0尺)を計測するようであることから、梁行は8.5尺+7尺の柱間径と推定される。またP 6に対応する柱穴が南面で認められなかったため、南面は北面とは逆の柱穴配列である可能性を有している。

柱穴は比較的しっかりした掘り込みであるが、大きさと形状は不規則である。柱穴の底面には、柱痕

を有する柱穴（P 3）がある。P 3には径0.21mの柱痕部を残していることから、同程度の柱が使用されていたことが推定される。柱穴内の土層は、黒褐色土、黑色土、黄褐色土、暗褐色土を用いて柱を固定しており、柱の部分には暗褐色土と黒褐色土が堆積している。

出土遺物としては、各柱穴内より少量の土師器坏、甕、須恵器坏、甕の小破片が少量出土しているが図示出来たのはP 1内より出土した須恵器坏底部片（181）1点のみである。181は須恵器坏底部片で、底面には糸切り痕を残している。これらの出土遺物から本跡は、平安期の建物跡と推定される。

第2号掘立柱建物跡（SB-2）

第2号掘立柱建物跡（SB-2）は、SB-1の外側に位置し6本の柱穴を確認したのみで、北東部と西面及び南西部は、区域外に所在するためSB-1と同様にその全容は不明である。確認面では北面5.10m（17.0尺）、東面6.00m（19.0尺）、南面2.15m（7.1尺）で、推定径は東面から12.0m（40.0尺）が桁行であるものの、梁行は8.10m（27.0尺）程度と推定され方位をN-16°-Eに有し長方形をなす大型の建物跡である。柱間は桁行東面（P 1～2とP 2～3間）が2.40m（8.0尺）であり、梁行は南面（P 3～4間）が1.80m（6.0尺）を計測するが、北側は4.35m（14.5尺）と広い柱間となっている。

柱穴は梁行北面の柱穴を除き比較的大きくしっかりと掘り込まれているが、柱穴の形状と規模は不規則である。柱穴の底面には、柱の柱痕部を残す柱穴（P 1、2、4）がある。その痕跡は径0.28m（9.5寸）を計測することから、同程度の柱が使用されたようである。柱穴内には暗茶褐色土、暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土を用いて柱を固定しており、柱の部分には暗褐色土が堆積している。

出土遺物としては、各柱穴内より土師器坏、甕、須恵器坏等が破片で出土しており、図示出来たのは182～184までの3点である。182はP 1より出土した土師器坏で、体部約1/3程度を遺存し、体部はやや内傾ぎみに外傾している。183はP 2より出土した土師器坏で、1/3程度の破片であり、体

第40表 掘立建物跡（SB-1～3）出土遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台径					
181	須恵器	坏	P 1	5.0	1.5			長石の粒子含粗	明色 良好	底部内面クロ整形、底面 静止糸切り後沿縁部へラナ デ		SB-1
182	土師器	坏	P 1 推 14.1	7.7 X 5.7	3.4			小石、長石 石英を含粗	明 褐色 色 良好	体部内外ロクロ整形、下半 手持ちヘラ削りヘラナデ、 底面ヘラ切り、ヘラナデ		SB-2 底部1/3、体 部1/3残
183	土師器	坏	P 2 推 13.0	推 6.0	3.9			緻密	明 褐色 色 良好	体部内外ロクロ整形、下半 手持ちヘラ削りヘラナデ、 底面ヘラ切り、ヘラナデ		SB-2 1/3程度の破 片
184	土師器	坏	P 2 推 14.0	6.0 X 5.5	3.5			緻密	明 褐色 色 良好	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 ヘラナデ		SB-2 体部1/3程度 残
185	土師器	坏	P 4					緻密	暗 褐色 色 良好	表面磨滅、墨書きを有するが 判読不能、内面黒色処理 小破片		SB-3

部は肥厚な器内で内傾ぎみに外傾している。184はP 2より出土した土師器坏で、体部が少しひき出している。下半から口唇部にかけて肥厚化している。これらの出土遺物から本跡は、SB-1と同様平安時代の建物跡と判断される。

第3号掘立柱建物跡 (SB-3)

第3号掘立柱建物跡 (SB-3) は、SB-2の南面と重複しており、3本の柱穴を確認した以外は不明である。北側のP 3は、SB-2のP 4に掘り切られ一部を残すのみである。柱間径はP 1とP 2間が1.65m(5.5尺)と狭くなっているのに対し、P 1～P 3間は2.70m(9.0尺)と広い柱間になっている。P 1、2の底面には柱の柱痕部と推定される痕跡があり、径0.21～0.24m(7～8寸)を計測することから、同程度の柱が使用されていたと推定され、方位をN-42°-Eに有している。

出土遺物としては、P 1～3より少量の土師器坏、甕、須恵器坏の小破片が出土しており、図示可能な遺物としては、185が1点出土したのみであり、時期的には平安期に入る建物跡である。

3、方形周溝墓 (図版49、90)

第1号方形周溝墓 (SX-1)

第1号方形周溝墓 (SX-1) は、5区中央南側でSI-20の東側に隣接しており、中央部以東は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径2.00m、南北径7.20mを計測し、N-19°-Wに方位を有している。溝は幅0.70～0.80m、深さ0.25～0.30mを計測する。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。溝内には、暗褐色土(3層に細分される)とロームブロックが堆積している。

主体部は東側区域外に位置するものと推定されることから、方形周溝墓と推定されるものの遺構の一部を調査したのみである。

出土遺物としては溝の北側より土師器壺形土器片が出土し、南側と西側からは須恵器坏、甕小片が少量出土している。土師器は和泉期に位置付けられる遺物であることから、本跡は同期の遺構と判断される。

4、土坑 (SK-1～16、図版50～52、62、91、94、第41表)

土坑としては、調査区全域より第1号土坑 (SK-1) より第16号土坑 (SK-16) まで16基発見されている。16基の土坑は、1区に6基(SK-1～6)、2区に3基(SK-7～9)、3区に5基(SK-10～14)、5区に1基(SK-16)、6区に1基(SK-15)のように分布しており、調査区の南側で1区に集中する傾向を示している。以下、各土坑ごとに記述する。

第1号土坑 (SK-1)

第1号土坑 (SK-1) は、1区北側でSI-3の北西部に位置しており、中央部以西は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径0.65m、南北径1.20m、深さ0.48mを計測し、楕円形状でN-76°-Eに方位を有するようである。底面はやや斜めになっているがほぼ平坦で、南壁はほぼ垂直に掘り込まれ、その他の壁は斜めに掘り込まれている。土層は黒色土とロームブロックが堆積しており、黒色土は3層に細分される。

出土遺物としては覆土内より少量の土師器坏、甕、須恵器坏が小破片で出土しているため図示不能であるが、これらの遺物から奈良～平安時代にかけての土坑と推定される。

第2号土坑（SK-2）

第2号土坑（SK-2）は、1区の北側中央部でSI-1の北東部に位置している。大きさは東西径1.17m、南北径1.21m、深さ0.65mを計測し、円形状でN-77°-Eに方位を有している。土坑は西側の楕円形をなす部分と、東側のテラス部とからなっている。西側の部分は東西径0.50m、南北径0.80m、深さ0.65mを計測し、楕円形状を呈している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。テラス部は東西径0.60m、南北径1.21m、深さ0.23~0.35mを計測し、円形状を呈している。底面は中央部に向かって傾斜しているが、平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒色土とロームブロックが堆積しており、黒色土が3層に細分される。出土遺物としては覆土内から少量の土師器坏、甕の小破片が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から、奈良~平安期の土坑と推定される。

第3号土坑（SK-3）

第3号土坑（SK-3）は、1区北側でSI-2の北側に位置しており、東側端部は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.05m、南北径1.21m、深さ0.63mを計測し、楕円形状を呈し方位をN-48°-Eに有している。底面は皿状を呈しており、壁は斜めに掘り込まれている。土層は黒色土と黒褐色土が堆積しており、黒褐色土が2層に細分される。

出土遺物としては土師器坏、甕の小破片が少量出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から本跡は、奈良~平安期の土坑と判断される。

第4号土坑（SK-4）

第4号土坑（SK-4）は、1区の北側中央部でSI-3の北西部に位置している。大きさは東西径1.50m、南北径1.35m、深さ0.16mを計測し、楕円形を呈しN-78°-Eに方位を有している。底面は鍋底状で、中央部に小ピット(0.20×0.18×0.05m)が1本掘り込まれており、壁は西壁がほぼ垂直である以外、斜めに掘り込まれている。

土層はローム粒子を含む黒褐色土が1層堆積しており、出土遺物としては土師器坏、甕の小破片が出土した程度で図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から本跡は、奈良~平安期の土坑と推定される。

第5号土坑（SK-5）

第5号土坑（SK-5）は、1区の北端部中央でSK-4の北側に位置しており、土坑部（A）とテラス部（B）とからなっている。全体での大きさは東西径1.92m、南北径1.50m、深さ0.54mを計測し楕円形を呈し方位をN-64°-Eに有している。土坑部Aは、東西径1.40m、南北径1.22m、深さ0.54mを計測し楕円形状で、土坑とは逆向きのN-75°-Wに方位を有している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面中央部には、深さ0.09mを計測する小ピットが1本掘り込まれている。テラス部Bは、深さ0.07~0.09mと土坑部Aに向い緩やかに傾斜しているがほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒色土が堆積しており、細分すると3層に細分され、自然堆積の状況を示している。また土層から検討すると、土坑部Aをテラス部Bが掘り切った状況を示している。

出土遺物としては、土師器甕、須恵器甕の小破片が少量出土した程度で、図示可能な遺物は出土しな

かったため、時期を決定することはできなかった。

第6号土坑（SK-6）

第6号土坑（SK-6）は、1区北端部でSK-5の北西部に位置しており、中央部以西は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径0.85m、南北径1.30m、深さ0.28mを計測し、楕円形状を呈しており、方位をN-79°-Eに有している。底面は皿状をなし、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒色土と黒褐色土がレンズ状に堆積しており、第1層の黒色土層中位より土師器坏、須恵器高台付坏、坏などが出土している。これらのうち図示出来たのは、186の1点である。186は須恵器高台付坏底部片で、少しひ程度を欠損している。186より本土坑は、平安期の土坑と判断される。

第7号土坑（SK-7）

第7号土坑（SK-7）は、1区と2区間の道路下でSK-6の北東部に位置しており、中央部以東は東側区域外に所在している。土坑の北西部には、ピットが1本掘り込まれている。確認面での大きさは東西径0.78m、南北径1.50m、深さ0.10mを計測し、楕円形状でN-25°-Wに方位を有している。土坑の底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。小ピットは0.40×0.45×0.21mを計測し、不整形円形状を呈している。底面は丸味を有し、壁は斜めに掘り込まれている。土層は、土坑内に黒褐色土が堆積し小ピット内には黒色土が堆積している。

出土遺物としては覆土内より土師器坏、甕、須恵器坏が破片で出土しているが、図示できたのは須恵器坏1点（187）のみである。187は、底部の破片で一部を欠損している。この遺物などから本跡は、奈良～平安期に入る土坑と判断される。

第8号土坑（SK-8）

第8号土坑（SK-8）は、2区の南端部中央でSK-7の北西部に位置している。大きさは東西径1.21m、南北径0.80m、深さ0.21mを計測し、楕円形でW-5°-Sに方位を有している。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は1層でローム粒子を含む黒褐色土が堆積しているが、道路のため上面は固くしまっている。出土遺物としては、少量の土師器坏小片が出土したのみであり、時期的には奈良～平安期にかけての土坑と判断される。

第9号土坑（SK-9）

第9号土坑（SK-9）は、2区の南側でSI-6と重複した状況で確認されている。新旧関係は、本跡がSI-6を掘り込み、2基の土坑（AとB）が重複している。全体での大きさは、東西径0.90m（中央部幅）、南北径1.48m、深さ0.46m（最大深度）を計測し、隅丸長方形を呈している。幅は南壁が北壁より0.33m広く、北壁は中央部より0.19m短くなっている。SK-9 Aは深さ0.20mを計測し、底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。SK-9 Bは東西径0.72m、南北径0.79m、深さが0.39mを計測し、不整形形状を呈し方位をN-23°-Eに有している。底面は鍋底状で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

土層はSK-9 A、Bともローム粒子を含む黒褐色土が堆積しており、土坑Bの底面付近には黒色土が堆積している。土層からは新旧の判断は出来なかつたが、遺物の出土状況からBがAを切っているこ

とが判明した。

出土遺物としては、SK-9Aよりの出土は無くBより土師器壺、甕、須恵器壺、甕等の破片が出土している。出土状況は、北西方向よりの流入を示している。これらの出土遺物で、図示出来たのは土師器壺（188～190）3点である。188は壺底部片で約程度を欠損し、外面は磨滅し内面は黒色処理（内黒）が施されている。189は須恵器壺で体部に墨書き有り、190は須恵器壺で体部の一部を欠いている。

これらの出土遺物から、本跡は平安期の土坑と判断される。

第10号土坑（SK-10）

第10号土坑は、3区の中央部に位置しており中央部以東は、東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径0.43m、南北径0.88m、深さ0.26mを計測し、円形状でN-11°～Wに方位を有している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

土層はローム粒子を含む黒褐色土が堆積しており、少量の土師器甕片が出土したのみで具体的な時期は不明であるが奈良、平安期の土坑と推定される。

第11号土坑（SK-11）

第11号土坑（SK-11）は、3区の中央部でSK-10の西側に位置し、土坑内に小ピット1本を有している。大きさは東西径0.90m、南北径0.98m、深さ0.09mを計測し、円形状を呈している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。小ピットは南東部に掘り込まれており、0.23m×0.25m×0.15mを計測し、橢円形を呈している。土層はローム粒子を含む黒褐色土が1層堆積しており、出土遺物としては少量の土師器甕、壺の小破片が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。

出土遺物から本跡は、SK-10とはほぼ同時期と推定される。

第12号土坑（SK-12）

第12号土坑（SK-12）は、3区中央部でSK-11の西側に位置しており、中央部以西は西側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径0.65m、南北径1.00m、深さ0.11mを計測し、不整形形状（もしくは長方形形状）を呈している。底面は皿状をなし、壁は斜めに掘り込まれている。

土層はローム粒子を含む黒褐色土が1層堆積しており、少量の土師器壺、甕小破片が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。時期的にはSK-10、SK-11と同時期と推定される。

第13号土坑（SK-13）

第13号土坑（SK-13）は、4区北側でSK-16の南側に位置している。大きさは東西径1.00m、南北径1.05m、深さ0.17mを計測し、円形状でN-9°～Wに方位を有している。底面は皿状を呈しており、東壁、西壁、南壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、北壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、黒褐色土が3層に細分される。これらの堆積状況は、ほぼレンズ状の自然堆積である。出土遺物としては、土坑内より土師器壺、甕、須恵器壺の小破片が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から本跡は、平安期に入る土坑と判断される。また、第14号土坑（SK-14）と同様にSI-16に隣接していることから、関連する土坑と推定される。

第14号土坑 (SK-14)

第14号土坑 (SK-14) は、4区北側でSK-16の北側に位置し、中央部以東は東側区域外に所在している。確認面での大きさは東西径1.00m、南北径1.25m、深さ0.22mを計測し、楕円形状を呈しおりN-78°-Eに方位を有するようである。底面は皿状を呈し、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒褐色土と暗褐色土がほぼレンズ状に堆積しており、黒褐色土が3層に細分される。出土遺物としては、土坑内より土師器壺、甕、須恵器壺、甕の小破片が少量出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から平安期に入る土坑と推定され、SK-13と同様の状況を示すといえる遺構である。

第15号土坑 (SK-15)

第15号土坑 (SK-15) は、6区中央北側でSI-35とSI-36の間に位置しており、東側が一部突出する「T」字型をなす土坑である。中央部は東西径0.42m、南北径1.26m、深さ0.11mを計測し、隅丸長方形を呈している。底面は皿状をなし、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。東側突出部は、東西径0.75m、南北径は東端で0.42m、西端で0.55mを計測し、深さ0.07mを計測する。底面は中央部に向い緩やかに下降しており、壁は斜めに掘り込まれている。

上層は多量の炭化物と焼土粒子を含む黒色土が1層堆積しているが、底面と壁面には火熱を受けている所は認められなかった。また、出土遺物も皆無であることから時期の決定は不能である。

第41表 土坑内出土遺物

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)			胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高					
186	須恵器 台付	壺			6.6		長石、石英含 粗	良好	灰 褐色	体部ロクロ整形、下半手持 ちヘラ削りヘラナデ、底面 回転ヘラ切りヘラナデ	SK 6 (第 6号土坑) 出土
187	須恵器	壺		4.2	×	1.0					
				6.5							
188	土師器	壺		7.2	1.2		雲母、長石 小石含 粗	良好	暗 灰色 褐	体部下端手持ちヘラ削りヘ ラナデ、底面ヘラ削りヘラ ナデ、火程欠	SK 7 (第 7号土坑) 出土
189	須恵器	壺		6.0	1.5						
				14.0	5.5	2.0					
190	須恵器	壺		15.0	6.0		雲母、長石 石英含 粗	良好	明 灰色 褐	体部ロクロ整形、底面ヘラ 削りヘラナデ	SK 9 (第 9号土坑) 出土
				×	×	3.8					
				13.0	5.5						
191	鉄製品	鐵		全長 11.5	身長 5.5	茎長 5.5				尖先端を欠損している	耕作土坑内 重20.5g

第16号土坑（S K-16）

第16号土坑（S K-16）は、5区北側でS I-25の北側床面下で認められた土坑である。大きさは東西径0.75m、南北径0.96m、深さ0.16mを計測し、橢円形でN-5°-Wに方位を有している。底面は、北側より三段のテラスが形成されており、北側が0.12mで中央は0.18m南側が0.20mの深さを有している。北側のテラスが、中央に向いやや下降している以外は平坦となっている。

土層は黒褐色土と暗白色砂質粘土が堆積し、砂質粘土は土坑の底面に厚く堆積している。出土遺物としては、黒褐色土中より2点の土師器表片が出土したのみであり、時期を決定するまでには至らなかつたが、S I-25よりは古い時期である。

5、溝（図版53、90）

溝としては、1区北側及び3区と4区の境をなす道路下で発見された。前者が第1号溝（S D-1）で、後者が第2号溝（S D-2）である。以下に、各溝について記述する。

第1号溝（S D-1）

第1号溝は1区北側中央部に位置しており、南東～北西方向（N-0°-E）に掘り込まれ、幅2.00m、深さ（最大深度）0.18mを計測する。溝は、中央部が北側と南側より0.26m程度深くなっている。北側は深さ0.24m程度を計測し、南側は0.10m程度を計測する。底面は、北側と南側は中央部に向い緩斜面となっているが平坦で、中央部は皿状をなし壁は全体に斜めに掘り込まれている。

土層は黒色土と黄褐色土が堆積しており、黒色土が3層に細分される。土層の堆積状況は、北方からの流入を示す自然堆積である。

出土遺物は、何ら出土しなかったため、時期を決定することはできないが、中・近世の溝と推定される。

第2号溝（S D-2）

第2号溝は、3区と4区の境をなす道路下で発見された溝で、南東から北西方向（N-82°-E）に掘り込まれている。中央部には土手状に掘り残した部分があり、北側と南側には狭く浅い溝が2条掘り込まれている。確認面での規模は、幅2.55m、最大深度0.20mを計測し、北側は幅0.60～0.80m、深さ0.11～0.13mを計測する。また、南側は幅1.00～1.15m、深さ0.20～0.24mを計測する。

2条の溝とも上面が固く踏み固められており、溝内覆土も固くしまっている。また、溝の型態も不規則で擾乱が著しいことから、道路として使用された溝と判断される。溝内の土層は、固くしまった黒褐色土が1層堆積している。

出土遺物としては、陶器蓋、土師器坏、甕、須恵器坏の小破片が出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から本跡は、近世以降と判断される。

6、出土遺物

出土遺物としては、住居跡内出土遺物、掘立柱建物跡柱穴内出土遺物、土坑内出土遺物に分けられるが、個々の出土遺物としては土師器坏、高台付坏、高坏脚、壇、甕、須恵器坏、高台付坏、蓋、甕、瓶

須恵器坏転用筋鉢車、刀子、鏡、釘等が出土している。以下では、遺構ごとに出土遺物を記述するが、遺物番号は第1号住居跡（S I - 1）の1よりの通し番号である。

1) 住居跡内出土遺物（図版55～64、92～99）

1から32までは、第1号住居跡（S I - 1）よりの出土遺物であるが、17～20までは鉄製品であることから後述する。1は須恵器坏の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程と底部を $\frac{1}{2}$ 程欠損している。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、体部下端にヘラ調整が施されている。胎土は、長石と石英の微粒子を含んでいる。2は須恵器坏の接合資料であり、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は、やや彎曲しながら外傾しており、体部下端にはヘラ調整が施されている。胎土には、長石、石英、雲母の細粒を含んでいる。3は須恵器坏の接合資料で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に外傾しており、体部中半はロクロ整形により薄い器壁となっている。体部の下端部には、ヘラ調整が施されており、体部下端のヘラ調整幅は1、2より狭くなっている。4は、須恵器坏の接合資料である。全体的にややいびつな器形で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存し底部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は直線的に大きく外傾しており、口唇部が小さく外脣し、胎土には長石と石英の細粒子を多量に含んでいる。5は須恵器坏で $\frac{1}{2}$ 程度の少破片で、体部下端の端部にはヘラ調整が施されており、体部は直線的に外傾し底径と口径との差は小さくなっている。胎土は緻密である。6は須恵器高台付坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存し、高台部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は大きく直線的に外傾しており、口唇部が小さく外脣している。高台部は逆台形状で、直線的に外開し、胎土は緻密である。7は、須恵器盤の完形品である。体部は直線的に大きく外傾しており、口縁部下端内面には低い稜を削り出している。胎土は粗く、内外面とも著しく磨滅している。8は須恵器盤で、坏部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存しており、高台部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は大きくやや内傾ぎみに外反し、口縁部も下端から直立ぎみに外傾している。高台部は、直線的に大きく外反している。全体的にやや磨滅している。9は、須恵器盤である。体部は直線的に大きく外傾しており、口唇部はやや肥厚化している。高台部は逆台形状で、直線的にやや外反している。底面には傷を有しており、胎土には白色粒子と石英、長石の細粒子を含んでいる。10は須恵器盤で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は直線的に大きく外傾しており、口縁下端から直立ぎみに外傾しているが、8より弱い立ち上がりである。11は、土師器坏の接合資料で口縁部から底部にかけ $\frac{1}{2}$ 程度欠損し、体部は下端が内傾ぎみに外傾しているが、体部中央から口縁部にかけては直線的に外傾し、口唇部は肥厚化している。体部と底部の外側は磨滅しているが、内面には黒色処理が施されている。ややいびつな器形で、胎土は緻密である。12は土師器坏で、口縁～底部にかけて大部分を欠損しており、底部も $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部がやや外脣している。胎土は緻密で、体部内面には黒色処理が施されている。13は須恵器坏底部片で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに外傾しており、底面には糸切り痕が残る。14は須恵器坏底部片である。体部は内傾ぎみに外傾し、体部下端は強いヘラ削りが施されている。15は小型の土師器盤で、体部下半以下を欠損している。口縁部は直線的に外傾しており、口唇部が直立ぎみに掘み出されている。16は、須恵器盤の口縁部片である。頸部には3条1単位の櫛引きによる波状文が2列1組で2組施文され、口唇部は直立している。17～20までは鉄製品である。17は釘の完形品で、先端がやや折れ曲がっている。18は鍊先端部分の破片である。19と20は、釘の先端部片である。21～32は、カマド内よりの出土遺物である。21は、北カマド内より出土した須恵器坏の完形品である。体部は直線的に外傾しており、下端には強いヘラ削りが施されている。底面には3文字かヘラ状工具で刻書されているが、判読できない。

きない部分が多い。3文字は肉眼で判明せず、混搭では「少方四」又は「小方四」と判読できそうである。22は北カマド内より出土した土師器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は小さく外傾している。底部は糸切り後、辺縁部にヘラナデを施している。23は北カマド内より出土した土師器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。内外面は著しく磨滅しており、胎土は緻密である。体部は直線的に外傾しており、体部下半から口縁部にかけて次第に肥厚化している。24は須恵器盤で、坏部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しておりいびつな器形となっている。体部は直線的に大きく外傾しており、高台部は直線的に大きく外反している。胎土に、長石と石英の細粒子を含んでいる。25は北カマド内より出土した須恵器盤で、坏体部を $\frac{1}{2}$ 程度と高台部先端を欠損しており坏部は肥厚な器壁で、体部はやや内傾ぎみに外傾しており、高台部は外反している。内面はやや磨滅しており、粗い胎土である。26は北カマド内より出土した須恵器盤で、口縁部が一部残る程度で、高台部は $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に大きく外傾しており、口縁部下端からやや立ち上がりっている。高台部は先端が細い逆台形状で、やや外脛ぎみに外反している。底部内面中央部が磨り減っていることから、転用視として使用されたようである。27は北カマド内より出土した土師器高台付坏で、坏部の一部と高台部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。28は北カマド内より出土した須恵器高台付坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部が直線的に外傾しており、高台部は直線的に外反している。29は北カマド内より出土した土師器甕の完形品であるが、ややいびつな器形となっている。口縁部は直線的に外傾し、口唇部がほぼ垂直に摘みだされている。体部は内傾ぎみに外傾し、上半に最大径を有している。30は北カマド内より出土した土師器小型甕で、ほぼ完形品である。体部下半に、整形後の孔が1個ある。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部は直線的に外傾し口唇部が小さく摘み出されている。31は、東カマド内より出土した須恵器坏の完形品である。ややいびつな器形で体部は内傾ぎみに外傾しており、下端にはヘラ調整が施されている。32は須恵器瓶片の接合資料である。口縁部は外反した後に、口唇部が垂直に立ち上げられている。体部は直線的に外傾しており、底部の孔は4孔式と推定される。

33~44は、第2号住居跡(S 1-2)よりの出土遺物である。33は土師器坏でややいびつな器形であり、体部下半まで $\frac{1}{2}$ 程を欠損している。体部はやや内傾ぎみに外傾し、体部の下端部にはヘラ削りが施されており、粗い胎土である。34は土師器坏の接合資料で、いびつな器形となっており口縁部内外面には媒が付着していることから、灯明皿として使用されたようである。体部は直線的に外傾しており、内外面とも著しく磨滅している。35は須恵器高台付坏片である。高台部は逆台形状をなし、垂直に貼付けられている。36~43までは、カマド内より出土遺物である。36は須恵器盤で、坏部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は直線的に大きく外傾し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり高台部は直線的に開いている。37は須恵器盤で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は直線的に外傾しており、口縁部が下端より上方へやや立ち上がりっている。高台部は低い逆三角形状で、ほぼ垂直に貼り付けられている。38は上師器坏で、口縁部より体部下半まで $\frac{1}{2}$ 程度が遺存している。体部は内傾ぎみに外傾し、体部中半から口縁部にかけしだいに肥厚化し、体部下端らはヘラ調整が施されている。39は上師器甕の接合資料で体部下端以下を欠損し長胴化している体部で、口縁部は直線的に外傾しており口唇部は直立ぎみに摘み出されている。40は土師器甕の接合資料で、体部 $\frac{1}{2}$ 、底部 $\frac{1}{2}$ 程度を遺存している。体部は長胴化しており中半までヘラナデ、中半から下半までは縦位→横位のヘラ削り、下半は横位ヘラ削りが施されており、底部には木葉痕が見られる。41は土師器甕で、体部下半以下を欠損している。体部は長胴化しており、口縁部は肥厚で直立ぎみに外傾し、口唇部が鋭く摘み出されている。42は須恵器甕瓶で体部中半以下の破片である。体部は直線的に外傾し、底面の孔は5孔のようである。43は上師器甕の接合資料で、体部中半以下を欠損

している。体部はあまり膨らんでいない長胴化している。口縁部はやや外傾ぎみに外傾しており、口唇部を直立ぎみに掲み出している。44は釘の先端部片で、カマドの袖部より出土している。

45、46、49、51は、第4号住居跡（S I - 4）からの出土遺物であり、47、48、50、52は第9号住居跡（S I - 9）よりの出土遺物である。45は須恵器坏であり、体部中半まで $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。体部は直立ぎみにやや外傾しており、下端にヘラ調整が施されている。45は器形的には「コップ型」といえよう。46は須恵器坏であり、体部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に外傾しており、内外面とも著しく磨減している。緻密な胎土で、長石粒子をごく少量含んでいる。47は土師器坏であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。底部と口縁部との差はあまりなく、器高も著しく低い器形となっている。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、胎土は緻密である。48は土師器塊であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに外傾しており、口唇部が大きく外脛している。49は土師器坏であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに外傾しており、内外面ともやや磨減しており、緻密な胎土である。50は土師器表の接合資料で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は大きく外反し口唇部が垂直に掲み出されている。51は土師器表の接合資料で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片であり、いびつな口縁部となっている。体部は内傾ぎみに立ち上がっており、口縁部は直線的に外傾し、口唇部がほぼ垂直に掲み出されている。胎土は粗い胎土である。52は釘身部片で、両先端を欠損している。

53、54は、第5号住居跡（S I - 5）よりの出土遺物である。53は土師器坏で体部を一部欠損しており、全体的に磨減している。底面は肥厚で、体部は口縁部下端まで次第に器壁が薄くなり、やや内傾ぎみに外傾し、口縁部は肥厚でやや外脛している。体部内面には、黒色処理が施されている。54は土師器表の接合資料で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反し、口唇部がやや平直に掲み出されている。

55は、第6号住居跡（S I - 6）よりの出土遺物で、土師器坏の底部片である。底部内面中央部より体部にかけては肥厚で、体部下端にはヘラ調整が施されており、内面は黒色処理が施されている。

56は、第7号住居跡（S I - 7）よりの出土遺物である。土師器坏で、貯蔵穴内より出土し、体部を $\frac{1}{2}$ 程欠損している。体部は直線的外傾しており、体部下端にはヘラ調整が施されている。底面には5文字程度ヘラ書きされているが、ヘラ調整痕により不明な部分が多い。判読された文字は左側に匱田、中央部に□艸□、左側に田、とヘラ書きされているようである。

57~76までは、第11号住居跡（S I - 11）よりの出土遺物であり、57と58は縁釉陶器である。57は貯蔵穴内より出土し、体部を $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部下端で直立ぎみに立ち上がっている。釉は、厚く体部内外面に施釉されている。底部内外面には、各3個の焼台痕がみられる。高台部は逆台形状で、やや外反ぎみに開いている。58は、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。57よりやや肥厚で、底部内外面に各1個の焼台痕が見られる。床面よりの出土である。59は床面より出土した須恵器高台付坏の完形品であり、ややいびつな器形となっている。体部は直線的に外傾しており、体部下端にはヘラ調整が施されている。高台部は逆台形状をなし、直線的に開いている。体部内面には、一部削り減った部分が認められることから転用窯として使用された可能性を有している。緻密な胎土で、器高の高い高台付坏である。60は、59と重なった状況で出土した土師器坏の完形品である。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部がやや外反している。体部内面は黒色処理が施されており、胎土は緻密で内外面とも良く磨かれている。61は、土師器高台付坏であり、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部がやや外反している。緻密な胎土で、体部内面は黒色処理が施されている。62は、61と同一器形の土師器である。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部がやや外反している。緻密

な胎土で体部内面には黒色処理が施されている。63は須恵器縁で、体部下端以上を欠損している。体部はヘラ調整が施され、緻密な胎土である。64は土師器坏の底部で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片であり底面に墨書が見られる。体部は内傾ぎみに立ち上がっており、体部下端にはヘラ削りによる棱を有している。体部内面は黒色処理が施され、底面の墨書「右」のようである。65は土師器坏体部片の墨書き上器である。上部に点があり、下位は不明である。66~68は、刀子である。66は先端部分を欠損しており、67は身部片で両端を欠損している。68は、刀子の茎部片である。茎部には木質が付着しており、身部は端部で平造りである。69~75は、カマド内よりの出土遺物である。69は土師器甕の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。長胴化した縁で、体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外脛ぎみに外傾している。また、口唇部は外傾ぎみに摘み出されている。70は土師器小型縁のはば完形品であるが、ややいびつな器形となっている。体部は内傾ぎみに立ち上がっており、口縁部は小さく外脛ぎみに外反している。口唇部は、鋭い棱を造り出しながら外脛ぎみに摘み出されている。71は、70と類似した器形である。体部は70より丸味を有し、口縁部は直線的に外傾しやや肥厚になっている。口唇部は鋭い棱を造り出した後、先端部を水平に折り返している。いびつな器形で、全体的に粗い整形である。72は土師器甕の接合資料で体部下半以下を欠損し、長胴化した縁で体部がやや膨らんでいる。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は直線的に摘み出されている。73は須恵器小型縁で、体部下半を $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は直線的に外傾している。口唇部は肥厚化しており、先端は小さくやや直立ぎみに摘み出されている。緻密な胎土で、体部はやや磨滅している。74は土師器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部はやや肥厚で、直線的に外傾している。緻密な胎土で、体部下端にはヘラ調整が施されている。75は土師器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、内面が黒色処理されている。76は、カマドの右袖内に補強材として埋設された自然石で、一方の先端を欠いている。

77~82は、第13号住居跡（S I-13）よりの出土遺物である。77は須恵器坏で体部の一部を欠損しており、ややいびつな器形である。体部は直立ぎみに外傾しており、口縁部がやや外脛している。体部はヘラ調整痕が見られず、ロクロ整形である。78は須恵器坏で、口縁部を一部欠損しているがほぼ完形品である。緻密な胎土で、体部は直線的に外傾しており、下端にヘラ調整が施されている。79は土師器坏で口縁部の一部を欠損し、ややいびつな器形となっているが、ほぼ完形品である。体部は中半まで内傾ぎみに外傾し、口縁部にかけてはやや内傾ぎみに直立している。胎土は粗く内面は磨滅している。80は79の下位より出土した土師器坏で、口縁部の一部を欠損しているがほぼ完形品で、ややいびつな器形となっている。体部は中半まで内傾ぎみに外傾しており、口縁部までは垂直に立ち上がっている。体部内外面には、ヘラミガキが施されているが内面はやや磨滅している。79と80は、法量と整形に差を有しているが同一タイプの坏である。81は土師器坏の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部はやや内傾ぎみに外傾し、口唇部は斜めに削り出されている。胎土は緻密で、内外面ともやや磨滅している。82は土師器縁で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外脛ぎみに開き口唇部は摘み出されている。

83は、第15号住居跡（S I-15）より出土した敲石である。自然石をそのまま使用したもので、一部に使用痕が見られる。敲石として使用したものである。

84~88までは、第16号住居跡（S I-16）よりの出土遺物である。84は須恵器坏蓋の小破片で、体部に墨書が見られる。体部は、内傾ぎみに外へ開き口縁部は、垂直になっている。体部の墨書は、「四万」である。85は土師器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。底部は薄い器壁となっており、体部は直線的に外傾し、口唇部は丸く整形されている。胎土は緻密で、体部内面は黒色処理が施され、底部は回転糸切

り底である。86は、須恵器高台付坏の高台部片である。体部は直線的に外傾し、高台部は直線的に外開きしているが、内面には削り出しによる棱が見られる。87は土師器坏底部で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部内面には黒色処理が施されており、底面は回転糸切り底である。88は、須恵器甕の底部片である。胎土は緻密で、体部にはヘラ調整が施されている。

89~93は、第17号住居跡（S I-17）よりの出土遺物である。89は須恵器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は直線的に外傾し、口縁部は肥厚化している。体部下端にはヘラ調整が施されており、緻密な胎土である。90は土師器高台付坏の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は内傾ぎみに外傾し、内面には黒色処理が施されている。高台部は直線的に大きく外に開き、底面は水平にヘラ削りされている。胎土は粗く、内面は磨滅している。91は土師器坏の接合資料で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は器壁がやや薄く、直線的に外傾している。体部下端には、ヘラ調整が施されている。胎土は粗く、内面は磨滅している。92は土師器坏の墨書き土器であるが、小破片のため文字は不明である。93は須恵器甕体部片である。外面に、敲痕が明瞭に残っているが、内面は著しく磨滅している。胎土の色調は、青灰褐色を呈している。

94は、第18号住居跡（S I-18）よりの出土遺物である。須恵器坏底部の接合資料で、体部を欠損している。器壁が薄く、体部はロクロ整形が施され直線的に外傾している。

95、96は、第19号住居跡（S I-19）よりの出土遺物である。95は土師器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに外傾しており、体部の中半から口縁部にかけてやや肥厚するように削り出されている。体部下端はヘラ調整が施されており、粗い胎土である。96は土師器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部はやや内傾ぎみに外傾し、下端から口縁部にかけて薄手となっている。体部下端の端部には、ヘラ調整が施されている。また、体部には整形後に付けられた傷が1条認められる。

97~118までは、第20号住居跡（S I-20）よりの出土遺物である。97は須恵器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部がやや肥厚化している。体部下端にはヘラ調整が施されており、緻密な胎土である。98は土師器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部が肥厚化している。体部には、ヘラ調整が施されているが、下半では粗い整形となっている。99は土師器坏で、全体で $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部は肥厚化している。外面は磨滅し内面には黒色処理が施されている。100は土師器坏で、体部と底部の一部を欠損している。体部は直線的に外傾しており、口縁部が肥厚化している。体部中半から底部にかけては、ヘラ調整が施されている。101は土師器坏で、底部を $\frac{1}{2}$ と体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており、ややいびつな器形となっている。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部がやや外脣している。体部下端部には、ヘラ調整が施されている。102は土師器坏の接合資料で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに外傾しており、体部下端部にはヘラ調整が施されている。胎土は緻密で、体部内面には黒色処理が施されている。103は土師器高台付坏で、口縁部の一部を欠損しているが、ほぼ完形でいびつな器形となっている。体部は内傾ぎみに外傾しているが、口縁部はやや外脣している。高台部は逆台形状で、細長くやや外反ぎみに開いている。緻密な胎土で、体部内面の黒色処理が施されている。104は土師器高台付坏で口縁部を欠き、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に外傾しており、体部下端はヘラ調整が施されている。高台部は長方形状で直線的に外開きしており下端は水平に切られ、底面は回転ヘラ切り後ヘラナデが施されている。胎土は粗く、外面は磨滅している。105は土師器高台付坏片であり、体部の大部分を欠損している。体部内面には、黒色処理が施されている。高台部はやや細長く、直線的に外に開いている。106は須恵器の底部を使用した転用鉢車であり、径は7.2×6.6cmを計測する。辺縁

部は、ヘラ削り後に研磨されている。孔は、整形後ヘラ状工具で上下両面より穿たれている。107は土師器甕の接合資料で、体部下半以下を欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がり口縁部は直線的に外傾し口唇部は垂直に摘み出されている。108は須恵器甕片である。推定口径21.0cmを計測し、体部下半以下を欠損している。体部は上半が敲き後に横位のヘラナデが施され、下半の横位のヘラ削りが施されている。109は土師器器台で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。110~113は、カマド内よりの出土遺物である。110は土師器高台付坏で、坏部が $\frac{1}{2}$ と高台部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、高台部は長方形で直線的に外に開き、端部は水平に削り出されている。内外面とも著しく磨滅しており、内面は一部で整形痕が確認されたのみである。111は土師器高台付坏で、坏部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、体部下端から口縁部にかけて次第に肥厚化している。高台部はやや厚めの長方形で、外脛ぎみに外に開いている。外面は、著しく磨滅しているため整形不明である。112は土師器甕で、体部下半以上を欠損している。ややいびつな器形で、内面は磨滅して粗い胎土である。甕としては、長胴の大型甕と推定される。113は須恵器甕である。体部下半以上を欠損しており、大型の甕と推定される。胎土は粗く、内面は著しく磨滅している。田カマド内より出土し、外面は明黒褐色を呈している。114は土師器甕で、体部中央を欠損しており、推定高は25.0cm程度の長胴化した甕と推定される。体部は下端から中央部にかけて内傾ぎみに立ち上がり、中央部から頸部にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。口縁部は直線的に外傾しており、口唇部がやや直立ぎみに摘み出されている。115~117は、鉄製品である。115は刀子で、刃部中央より先端部までを欠損している。116は刀子の身部片であり、117は刀子片と推定される。118は自然石を使用した敲石で一方の先端部を欠損しており、他方の先端と側面に使用痕を有している。

119~123までは、第21号住居跡（S I - 21）よりの出土遺物である。119は土師器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は直線的に外傾しており、粗い胎土で内面は磨滅している。120は須恵器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており、ややいびつな器形である。体部は直線的に外傾しており、口縁部がやや内脣している。体部中半以下にはヘラ調整が施されており、底面には2文字がヘラ状工具により刻書されているが、ヘラナデが施されているため判読不能な部分が多いが、左端に回又は回で右側は圓のようである。121は土師器甕で体部上半以下を欠損しており、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外脣ぎみに外傾しており、口唇部がほぼ垂直に摘み出されている。122は土師器甕の接合資料で、 $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、長胴化している。口縁部は直線的に外傾しており、口唇部はやや外脣ぎみに摘み出されている。123は須恵器甕体部片の接合資料であり、上半には敲きが見られ下半はヘラ調整が施されている。

124、125は、第22号住居跡（S I - 22）よりの出土遺物である。124は、土師器坏で $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は直線的に外傾しており、口縁部がやや外脣ぎみとなっている。緻密な胎土で、内面に黒色処理が施されているが内外面とも磨滅している。体部下半には、ヘラ調整が施されている。125は土師器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に外傾しており、口縁部が丸く削り出されている。緻密な胎土で、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。

126~131は、第23号住居跡（S I - 23）よりの出土遺物である。126は、土師器甕の接合資料でほぼ完形である。底部が突出して体部は半球状を呈し、口縁部が直線的に外傾している。口唇部は水平で頸部と体部下半には刷目整形が施されており、底面には木葉痕が見られる。127は土師器高坏脚部で、 $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。脚は大きく外脣し、3か所に孔（径1.3cm）を有しており、外面は亦彩されている。128は土師器台付甕脚部で、 $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。脚は直線的に外へ開いており、端部は

水平になっている。129は土師器窓坏部の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており、体部は直線的に外傾している。130は磨製石斧であり、全面良く研磨されており、刃部の使用痕はあまり見られない。131は自然石の四周を削って円形状にした後、上下両面を敲石として使用したものであり、上下両面の中央部は凹んでいる。

132、133は、第24号住居跡（S I - 24）よりの出土遺物である。132は、土師器坏の光影品である。体部は、低く大きく外傾しており弱い稜を有しており、口縁部はやや内彎ぎみに直立している。133は土師器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部は直立している。

134～137は、第25号住居跡（S I - 25）よりの出土遺物である。134は須恵器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。やや肥厚な器壁で、体部は直線的に外傾している。粗い胎土で、体部下端にはヘラ調整が施されている。135は須恵器坏で、底部を一部欠いているがほぼ完形である。体部は直線的に外傾している。緻密な胎土で、体部下端にはヘラ調整が施されている。136は須恵器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。やや器壁が薄く、体部は直線的に外傾している。緻密な胎土で、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。137は須恵器坏で、体部の一部欠損している。体部は直線的に外傾しており、体部中央には「上」の墨書が見られる。粗い胎土で、体部内面には媒が一部付着しており、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。

138～141は、第26号住居跡（S I - 26）よりの出土遺物である。138は土師器塊の接合資料で、体部を一部欠損している。底部を小さく造り出し、体部は内傾ぎみに立ち上がっている。口縁部の下端内面には低い稜を有し、口縁部は直線的に外傾している。緻密な胎土で、体部にはヘラミカギが施されているが粗い整形である。139は土師器塊の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、頸部で内面に稜を造り出してから口縁部は直線的に外傾している。口唇部は、三角形状に削り出され、体部内面には放射状の暗文がある。140は土師器塊の接合資料で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、頸部で内面に稜を造り出し、口縁部は三角形状で直線的に外傾している。141は土師器妻の接合資料で、口縁部 $\frac{1}{2}$ と体部 $\frac{1}{2}$ 程度を遺存している。体部は半球状を呈しており、口縁部は直線的に外傾して口縁部先端がやや外彎している。

142～147は、第28号住居跡（S I - 28）よりの出土遺物である。142は土師器坏の接合資料で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。底面は平底化しており、体部は内傾ぎみに立ち上がっている。143は須恵器製底部片で、体部下半以上を欠損している。体部は直接的に外傾しており、体部下半まで敲きが見られ、下端はヘラ調整が施されている。胎土は粗く、内面は磨滅している。144は土師器妻で、 $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。底部は丸味を有しており、体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外彎ぎみに外傾している。145は、刀子の茎部片で先端を欠損している。146は自然石を加工した石であろうが、使用痕は認められず、その用途は不明である。147は敲石で、両側面に使用痕を有している。

148～153は、第29号住居跡（S I - 29）よりの出土遺物である。148は土師器坏底部で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は直接的に外傾しており、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。体部内面には黒色処理が施されており、底面は糸切り底である。149は土師器坏の底部で、一部を欠損している。体部は内傾ぎみに外傾しており、内面は黒色処理が施されている。体部下端は、「一」の墨書が見られる。底面は糸切り底で、緻密な胎土である。150は土師器坏底部片で、底面に墨書が見られる。墨書は、「月」である。坏の内面は、黒色処理が施されており、底面は糸切り底である。151は須恵器坏で、底部 $\frac{1}{2}$ と体部 $\frac{1}{2}$ 程度を遺存している。体部は直接的に外傾しており、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。152は刀子で先端部分を欠損しており、153は磁石で $\frac{1}{2}$ 程度を欠損してお

り、良く使用されている。

154と155は、第30号住居跡（S I - 30）よりの出土遺物である。154は須恵器坏の接合資料で、体部を約半程度と底部の一部を欠いている。体部は外傾ぎみに外傾し、体部中央が薄く削り出され、口縁部が肥厚化している。155は鉄鎌の茎部片である。

156～162までは、第31号住居跡（S I - 31）よりの出土遺物である。156は土師器坏で、約半程度の破片である。体部は内傾ぎみに立ち上がり、体部下半にはヘラ調整が施され内面は磨滅している。157はカマド内より出土した土師器坏で、口縁部が約半程度遺存している。体部は下半が内傾ぎみに外傾したのち、直線的に外傾している。体部下半にはヘラ調整が施されており、内面は磨滅している。158はカマド内より出土した土師器壺の接合資料で、体部を約半程度欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反ぎみに外傾して口唇部を直立させている。内外面は、著しく磨滅している。159はカマド内より出土した須恵器壺の接合資料で、口縁部の一部と体部を約半程度欠損している。体部は内傾ぎみに立ち上がって半球状を呈しており、口縁部は直接的に外傾している。体部は下端にヘラ調整が施されている以外、敲きである。160はカマド内より出土した土師器壺の接合資料で、約半程度遺存している。体部は内傾ぎみに立ち上って長胴化しており、口縁部は直線的に外傾し口唇部は丸く摘み出されている。161は角釘で、先端部分を欠いている。162は敲石の完形品で、上下両面に使用痕を有している。

163～165は、第33号住居跡（S I - 33）よりの出土遺物である。163は須恵器坏で、体部を約半程度欠損している。肥厚な底部を有し、体部は直線的に外傾し、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。164は須恵器坏で、体部の一部を欠損しているがほぼ完形品である。体部は直線的に外傾しており、体部の下端部にはヘラ調整が施されている。胎土は粗く、ややいびつな器形である。165は鉄釘で、先端部分を欠損している。

166～171は、第34号住居跡（S I - 34）よりの出土遺物である。166は須恵器壺の接合資料で、口縁部を約半程度欠損している。底部は薄い器壁であるが、体部は肥厚な器壁で直線的に外傾している。167は須恵器壺蓋で、約半程度の破片である。鉢は低い宝珠形で、体部は内傾ぎみに外反しており三角形の反しが低く削り出され、体部上反にはヘラ調整が施されている。168は土師器壺の接合資料で、約半程度遺存している。底部を欠損しており、体部は内傾ぎみに立ち上がり、口唇部が丸く摘み出されている。169は土師器坏で、約半程度を欠損し内面は磨滅している。体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部でほぼ直立して弱い棱を造り出している。胎土は粗く、いびつな器形となっている。170は須恵器壺部片である。体部は敲きによる整形が施されており、緻密な胎土である。171は軽石で、一面を「く」字状に削り出している。

172～174は、第35号住居跡（S I - 35）よりの出土遺物である。172は、土師器高台付坏で口縁部を約半程度欠損している。体部は内傾ぎみに外傾し、直線的に外傾している。高台部は細く直線的に外開きしている。胎土は粗く、体部内面は黒色処理が施されており、体部外面は著しく磨滅している。173は須恵器壺で、約半程度遺存している。底面は器壁が薄く体部は肥厚で内傾ぎみに立ち上がっていいる。体部は中半までヘラナデが施され、下半はヘラ削りヘラナデが施されている。174は須恵器壺蓋の接合資料で、約半程度遺存している。鉢は低い宝珠形で、体部は直線的に開き口縁部は外傾ぎみに削り出されている。

175、176は、第39号住居跡（S I - 39）よりの出土遺物である。175は土師器坏で、体部を約半程度欠損している。体部は内傾ぎみに外反しており、体部は中半から下端までヘラ調整が施されている。

ややいびつな器形で、胎土は粗く内面は磨滅している。176はカマド右袖内より出土した土師器甕で、 $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに立ち上がっており、口縁部はやや外脛ぎみに外傾している。口唇部は垂直に摘み出されており、細い溝を有している。体部はヘラ調整が施されているが、内面は著しく磨滅している。

177～179は、第40号住居跡（S I-40）よりの出土遺物である。177は須恵器坏で、口縁部を一部欠損しており、いびつな器形である。体部は直線的に外傾しており、体部下半端部にヘラ調整が施されている。178は、須恵器高台付坏片である。体部は直線的に外傾しており、高台部は三角形状で直線的に開いている。緻密な胎土で、内面はやや磨滅している。179は、土師器甕で体部下半以上を欠損している。

180は、第50号住居跡（S I-50）よりの出土遺物である。住居跡の確認面より出土した須恵器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、体部下半にはヘラ調整が施されている。

2) 挖立柱建物跡出土遺物 (図版62、94)

181～185は、第1号～3号挖立柱建物跡（S B I-3）柱穴内よりの出土遺物で、建物跡ごとに整理した。181須恵器坏底部片で、S B-1 P 1内より出土している。粗い胎土で、底面は糸切り底である。182はS B-2 P 1内より出土した土師器坏で、体部 $\frac{1}{2}$ と底部 $\frac{1}{2}$ 程度を遺存している。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、体部下半にはヘラ調整が施されている。183はS B-2 P 2内より出土した土師器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部は肥厚で内傾ぎみに外傾しており、体部下半にはヘラ調整が施され、緻密な胎土である。184はS B-2 P 2より出土した土師器坏で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、体部下半から口縁部にかけて、次第に肥厚化している。体部下半にはヘラ調整が施されており、胎土は緻密である。185はS B-3 P 4内より出土した黒書土器で、土師器坏体部に1字墨書きが見られるが、判読不能である。

3) 土坑出土遺物 (図版62、63、94)

186～191は、土坑内よりの出土遺物である。186は第6号土坑（S K-6）より出土した須恵器高台付坏で、口縁部を欠き体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直接的に外傾しており、下端部にはヘラ調整が施されている。高台部は細い逆台形状で、直線的に開いている。187は第7号土坑（S K-7）より出土した須恵器坏底部片で、 $\frac{1}{2}$ 程度を欠損している。188は第9号土坑（S K-9）より出土した土師器坏で、体部下半を欠く $\frac{1}{2}$ 程度の破片である。体部内面は黒色処理が施されており、外面は磨滅している。189はS K-9より出土した須恵器坏で、 $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に外傾しており、体部下端に墨書きが見られるものの判読出来ない。190はS K-9より出土した須恵器坏で、体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は直線的に外傾しており、体部下端にはヘラ調整が施されている。緻密な胎土で、ややいびつな器形である。191はS I-36北側に所存する耕作土坑（芋穴）内より出土した鐵鎌片で、両先端を欠損している。

4) 関連遺物 (図版62、94、第42表)

192~197は、今回行なった調査区域内よりの出土遺物ではないが、同一遺跡内よりの出土であるため関連遺物として一括記載した。出土した地点は、3区東側の台地縁辺部の畠である。

192は須恵器環で口縁部の一部を欠損しており、底面には墨書きが見られる。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、体部下端にはヘラ調整が施されている。墨書きは「善」の1字である。193は須恵器双耳环(把手付环)で、把手の片方と体部が $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は内傾ぎみに外傾しており、体部上半で内面よりやや押し出されている。把手は体部下端に張り付けられ、先端部は大きく外反している。高台部は長方形で、直線的に開いている。体部のロクロ整形は弱く、底部内面中央は磨り減っており一部に墨が付着していることから、転用硯として使用されたものである。194は須恵器環で口縁部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損しており、ややいびつな器形である。体部は直線的に外傾しており、体部下端にはヘラ調整が施されている。195は須恵器環で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度欠損している。体部は内傾ぎみに外傾しており下端から口縁にかけて次第に薄くなっている。体部下半には、ヘラ調整が施されている。196は須恵器環で、体部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は、直線的に外傾しており口縁部は、やや内傾ぎみとなっている。体部下端には、弱いヘラ調整が施されている。197は須恵器環で、体部を $\frac{1}{2}$ と底部を $\frac{1}{2}$ 程度遺存している。体部は、内傾ぎみに外傾したのち口縁部が内面よりやや押し出されている。体部下半には、弱いヘラ調整が施されている。

第42表 関連遺物一覧表

番号	名称	器種	出土位置 (m)	法量(cm)					胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴	備考
				口径	底径	現高	台高	脚径					
192	須恵器	環			12.8	7.0	×	4.2	長石、石英の細粒含	良好	灰褐色	体部外面中半までロクロ整形 下端手持ちヘラ削り体部内面 ロクロ整形底面ヘラ削りナデ	底面に「善」の墨書き有り、 口縁一部欠
193	須恵器	双耳环	堆	12.0	7.3	5.5	6.7		長石、石英 細粒少含	良好	明色 灰褐色	体部内外面ロクロ整形、底面 回転ヘラ切りヘラナデ、高台 ロクロ整形、把手はヘラ削り	把手1方欠 口一体 $\frac{1}{2}$ 残 転用硯か
194	須恵器	環			12.3	×	×	7.2 3.7	長石、石英 粒多く含	良好	暗色 灰褐色	体部外面及内面ロクロ整形、 体部下端手持ちヘラ削り、底面 回転ヘラ切り後ヘラナデ	ロクロ $\frac{1}{2}$ 程欠 体部下端弱いヘラ削り
195	須恵器	環			12.7	6.3	4.3		長石、石英 の細粒	良好	灰褐色	体部外面及内面ロクロ整形、 体部下端手持ちヘラ削り、底面 ヘラ削り後ヘラナデ	いびつな器 型口縁 $\frac{1}{2}$ 体 部 $\frac{1}{2}$ 程欠損
196	須恵器	環			14.0				長石、石英 粒子、細粒	良好	暗色 灰褐色	体部外面及内面ロクロ整形、 体部外面下端手持ちヘラ削り、 底面ヘラ削り後ヘラナデ	口縁 $\frac{1}{2}$ 程 にかけ $\frac{1}{2}$ 程 残
197	須恵器	環			12.0	×	6.7	4.6	長石、石英 細粒含	良好	暗色 灰褐色	体部外面及内面ロクロ整形、 体部外面下端手持ちヘラ削り、 底面ヘラ削り後ヘラナデ	口縁 $\frac{1}{2}$ 程 底面 $\frac{1}{2}$ 程 残
					13.0								
					11.0								

5) 旧石器時代の遺物

旧石器時代の資料として図示したのは9点である。これらは3区・5区・6区などで住居跡やその周辺から出土したもののがほとんどで、いずれも原位置を保ったものではない。

① 石 刃 (第6図204)

当資料は全長8.9cm・最大幅2.0cm・最大厚1.4cmほどの緻密黒色安山岩製の石刃である。表面の中央部に一条の棱を有し、断面形は三角形を呈している。右側面部には部分的に刃こぼれが認められる。

② 縦 長 剝 片 (第6図200, 201, 203, 205)

200は全長5.2cm・最大幅2.9cm・最大厚1.5cmほどの縦長の剥片で、表面には各方面からの調整痕がみられ、右側縁部には刃こぼれがみられる。石材は黒曜石で、茶色の縞がみられ、先端部には白い結晶部が認められる。

201は全長5.5cm・最大幅1.6cm・最大厚0.9cmほどの頁岩製の縦長剥片で、左側縁部及び端部に加工痕が認められ、断面形は台形を呈している。

203は全長7.0cm・最大幅3.7cm・最大厚1.7cmほどの縦長剥片で、断面形は三角形状を呈し、石材は頁岩である。

205は全長7.5cm・最大幅2.9cm・最大厚1.2cmほどのチャート製品の縦長剥片で、先端部に表皮を残し、表面には縦方向を主体とした調整痕がみられる。

③ 剥 片 (第6図198, 199, 202, 206)

198は全長4.0cm・最大幅4.0cm・最大厚1.0cmほどの剥片で、表面には各方面からの調整痕が認められ、石材は緻密黒色安山岩である。

199は全長4.5cm・最大幅3.1cm・最大厚1.0cmほどの剥片で、表面には横方向からの調整痕が認められ、左側面部から先端部まで刃こぼれがあり、石材は頁岩である。

202は全長4.8cm・最大幅4.0cm・最大厚1.6cmほどのやや縦に長い剥片である。表面は左縁部に表皮を残し、縦方向を主体とする調整痕が認められ、石材はチャートである。

206は全長4.8cm・最大幅3.9cm・最大厚1.2cmほどの表面左側に表皮を残す剥片で、上下方向からの調整痕が認められる。先端部には刃潰しが認められて錐的な使用を想定され、石材は頁岩である。

これら旧石器時代の資料にはほとんど使用痕が認められ、石器素材の剥片と考えられる。石材は緻密黒色安山岩2点・チャート2点・頁岩4点・黒曜石1点である。これらのまとまりとしては203~205が39号住居跡、199・201・206が26号住居跡、200・202が29号住居跡、198が11号住居跡であり、調査が遺跡全体に及ぶものであれば石器のまとまりより明確な組成が判明するであろう。

6) 縄文時代の遺物

今回の調査によって出土した縄文土器は総数40点ほどと少量であり、その中には小片のため図化できないものも含まれ、図示できたのは31点ほどである。これらはすべて破片であり、遺構の覆土や調査区内から出土したものであるが、いずれも遺構に伴うものではない。



198



199



200



201



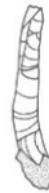
202



203



204



205



206

第 6 図

旧石器時代出土遺物実測図 (S~1:2)

① 前期の土器（第7図207～238）

前期に分類できる資料は、胎土に纖維を含む土器群（1類）と含まない土器群（2群）がみられ、数的には纖維を含む1類土器が多く、この調査によって出土した縄文土器の主体をなしている。

1 a類（第7図207～221）

胎土中に纖維を含む土器群の中で器面に縄文が施文されたものであり、単節縄文のもの（207～214）無節縄文のもの（215～218・221）、撚糸状のもの（219）などがある。単節及び無節縄文の原体のほとんどは横方向の回転で施文され、207・208にはループ文がみられる。中には器底の剥落のため縄文自体が不鮮明なものもある。

1 b類（第7図222～225）

胎土中に纖維を含む土器群の中の半截竹管による平行沈線文などの文様が施文された土器群で、224は不鮮明ながら半截竹管文が部分的に認められる。

1 c類（第7図226）

胎土中に纖維を含んだ口縁部片であるが、器面の文様が不鮮明である。

1類は前述したように胎土中に纖維を含むのが特徴であり、器面文様は縄文・撚糸文・半截竹管文と多種で、縄文施文が盛行した後半の時期の土器群で、黒浜式土器に編年される。

2類（第7図227～228）

胎土中に纖維を含まない土器群で、227は口縁部の小片であるが口辺部にジグザグ状の刻み目が施文され、口唇部は丸みを有している。228は穏やかな小波状を呈する口縁部片で、貝殻の腹縁部による貝殻文が施文されている。これらの土器は前期後半の浮島式系の土器に編年される。

② 中期の土器（第7図229～231）

中期に編年される土器は3点である。

229・230は口縁部で口片部に横位の太い沈線を有し、加曾利E式土器の特徴を示している。231も同時期の深体形土器の胴部片で、R Lの縄文が施文されている。

③ 後期の土器（第7図232～237）

232は磨消縄文の土器で沈線区画内にL Rの縄文が施こされている。233は小波状を呈する口縁部を有する深鉢形土器で、口辺部には無文帶を有し、小波状突起部には沈線が施文された棒状の粘土貼付文がみられる。238・235は同一固体と考えられる深鉢形土器の破片で、曲線及び直線の沈線文が組み合わされて施文されている。

236は胴部中央に小突起を有する鉢形土器の胴部片で、胴上部に円形の粘土貼付がみられる。237や内反した粗製土器の口縁部片で、横位の条線文を地文として斜位の沈線企画がなされ、区画内の条線は磨消されている。

時期をみれば、232が後期初頭の称名寺式土器、233～235が堀之内1式土器に編年される。また、236・237は後期末から晩期初頭のものであろうか。



第7図 繩文・弥生式土器拓影図 (S~1:2)

7) 弥生時代の遺物

当遺跡の調査区内より後期に編年される弥生土器（第7図238）が1点出土している。この土器は底径8.0cm、現高3.0cmほどの壺形土器の底部片で、胴下部には付加条縄文が施され、底面に木葉痕が認められる。内面は器壁の剥落が激しく、器面全体はやや磨耗している。色調は暗褐色を呈し、胎土中に砂粒・石英・スコリア等を含み、焼成は普通である。

VII. まとめ

1. 住居跡

今回の調査では、合計40軒の住居跡を発見し調査したが、調査区域内で住居跡の全城を調査できたのは4軒（S I-30、31、33、38）のみで、一部拡張して全城を調査したS I-11を入れてもわずか5軒（全体の12.5%）のみである。残り35軒は遺構の $\frac{1}{2}$ 以上又はその一部を調査区域外に残しているために、その全容は不明な部分が多い。遺構一覧表（第1～5表）は、遺構確認面での状況であり第43表は、住居跡の一辺長からの面積である。

住居跡の規模は、二辺の長さが判明している5軒以外を、一辺の長を用いて各四辺長を推定して住居跡の面積を計算した。面積は、少数第1位までを計上している。

40軒の住居跡は、その規模と面積及び出土遺物によってI期～VI期まで大別される。I期はI a、I b、I cの3期に、II期はII a、II b、II cの3期に細分される。III期は1時期のみである。IV期はIV a、IV b、IV cの3期に、V期はV a、V b、V cの3期に細分される。VI期は1期のみである。この時期区分で分類すると、II期とIV期に入る住居跡が中心を占めている。I期～VI期の時代としては、I期が古墳時代に相当し、II期とIII期は奈良～平安時代、IV期～VI期は平安時代に各々相当する。

I期は古墳時代に入る住居跡を一括した時期でありa、b、cの3期に細分される。I a期は、住居跡の1辺長が6.00m以上で面積も36m²以上の住居跡であり、S I-23とS I-32がI a期に相当する住居跡である。S I-26は、S I-23よりやや小型の住居跡でやや新しいようである。I a期は、古墳時代前半の五領期に相当する。I b期は住居跡の1辺長が4.60mで、面積も21m²代の住居跡であり、S I-26がI b期に相当する住居跡で古墳時代中期和泉期に相当する。I c期は住居跡の1辺長が5.65～5.90m以内、面積も31～35m²代の住居跡であり、S I-28とS I-34の2軒がある。I b期より大型化した住居跡で、古墳時代後半鬼高期に相当する住居跡である。

I期の住居跡を見ると、I a期とI b期は類似した状況を呈している。炉跡は個々の住居跡により大きさが異なっており、中央北側ではなく東部で柱穴（P 1）の南西部に位置し、南北に長径を有している。貯蔵穴は南東部で柱穴（P 2）の南側に位置し、壁に接している貯蔵穴（S I-28）と離れて造り出しを有する貯蔵穴（S I-23）がある。柱穴は、対角線上に配置されており、床面は直床状を呈している。当該期の特徴としては、炉跡が中央北側ではなく北東方向に位置することから東向きの住居跡と考えられる。I c期は北西方向を向き、北壁中央部又はやや東側にカマドを有している。柱穴は、対角線上に4本と中央南側に1本掘り込まれている。貯蔵穴は、中央南側に位置している住居跡（S I-34）と有さない住居跡（S I-28）がある。床面はしっかりした床面である。また、柱穴ではS

I-34のように建替が認められ、S I-28のカマド東側と西側には土器置き台的用途の高台が設けられている住居跡も認められる。I c期の住居跡は、最も基本的な構造を有している。

II期とIII期は奈良～平安期の住居跡で、II期は、a、b、cの3時期に細分される。II a期は住居跡の一辺長が5.00～5.20m以内で、面積も25～26m²以内の住居跡がII a期に入る住居跡あり、S I-6、7、24の3軒がある。住居跡としては大型の住居跡で、北壁中央部又は中央東側にカマドを有している。柱穴は、S I-6、24のように対角線上と中央南側に配置されている住居跡と、S I-7のように不規則な柱穴配置の住居跡もある。貯蔵穴は中央南側に設置されているが、S I-7以外は不明である。床面は比較的しっかりとした床面である。住居跡の多く又は少しが程度の調査であるため、仔細は不明な部分が多い。貯蔵穴を有することから、I c期との関係も推定される。

II b期は住居跡の一辺長が5.00mで、面積も25m²の住居跡が当該期に入り、S I-1、4、8の3軒がある。住居跡としては、II a期よりやや小型化しているが大型の住居跡といえよう。S I-8は、耕作擾乱を著しく受けているため壁溝と柱穴以外は不明で、カマドもその痕跡を残すのみである。また、柱穴も不明である。柱穴は対角線に4本配置されているようであるが、中央南側に1本配置されているかは確定し得ない。床面は比較的しっかりした床面であり、壁溝は全周していない。壁には、S I-1東壁のように粘土を貼り付けて改修した住居跡もある。カマドは北壁中央部や中央西側に設置されているが、S I-1のように東壁にカマドを有する住居跡もある。S I-4と8のカマドは、耕作擾乱を著しく受けているためその痕跡を残すのみである。とくに、S I-4はカマドの範囲を知り得たのみである。S I-1の北カマドで、焚口と両袖は破壊されて消失しており、壁に粘土はあまり使用されず砂質の褐色土が用いられ、多量の土器器と須恵器が補強材として使用されている。カマド内には厚く焼土が堆積しよく使用されているが、東カマドは貧弱なカマドである。S I-8のP 3は、工作ピットと判断されることからS I-8は工房跡と推定される。当期も、比較的基本的な住居跡構造をしている。

II c期は住居跡の一辺長が4.90～4.95m以内で、面積も24m²の住居跡がII c期に入る住居跡で、S I-3、25が当該期に入る。S I-3は、西壁が西側に向けやや突出しているため湾曲しており、柱穴は対角線上に配置されている。住居跡の構造としては、基本的な構造である。

III期は住居跡の一辺長が4.00mほどで、面積も16m²代の住居跡で、S I-20の1軒がある。S I-20は各壁とも湾曲した壁で、北壁中央部にカマドを有している。柱穴は対角線上に配置されているが、小さく浅い柱穴となっており、壁溝は全周していない。このIII期に入ると、柱穴は住居跡の大きさに反して小さく浅い柱穴となっており、この傾向は次期にも引き継がれている。カマドは壁に砂質粘土を用いて構築しているが、粘土の量は少なく砂質の褐色土を多量に使用しており、5点の謫と坏を逆位ですべて支脚に転用している。焼土は厚く堆積していることから、良く使用されたことを示している。

IV期以降は、平安時代の住居跡で1辺長が3.20～3.70m以内で面積も9～14m²以内の住居跡が、IV期に入りa、b、cの3時期に区分される小型の住居跡である。IV a期は住居跡の1辺長が3.70～3.50m以内で、面積も12～14m²以内の住居跡が当該期に入り、S I-10、11、16、17、31、37の6軒がある。当期の住居跡は、S I-11、17のようにカマドの西側又は北側（S I-17は東向きの為）が突出していることが特徴である。柱穴は、対角線上に4本と中央南側に1本の小さく浅い柱穴が掘り込まれている住居跡が多く、中には対角線上から離れた所に掘り込まれているもの（S I-11）と、柱穴配置に規則性が見られないもの（S I-17）あり一様ではない。カマドはS I-11が砂質粘土を壁に使用しており、S I-31ではカマドの基底部に粘土を使用している。使用量としては他のカマドより多いという

第43表 一本木遺跡住居跡時期区分表

遺構 No	方 位 (真北より)	規 模 東西×南北	面 積 (m ²)	時 期		遺構 No	方 位 (真北より)	規 模 東西×南北	面 積 (m ²)	時 期	
				区分	時 期					区分	時 期
S I - 1	N - 20° - E (5.00) × 5.00	25	II b	平安	S I - 21	N - 0° - E (2.90) × 3.10	8.4	IV c	平安		
S I - 2	N - 10° - W (2.90) × 2.90	8.4	V a	平安	S I - 22	N - 0° - E (3.10) × 3.10	9.5	IV c	平安		
S I - 3	N - 0° - E (4.90) × 4.95	24	II c	平安	S I - 23	N - 11° - W (6.30) × 6.30	39.6	I a	古前		
S I - 4	N - 10° - W (5.00) × 5.00	25.0	II b	平安	S I - 24	N - 7° - W (5.00) × 5.18	25.5	II a	奈良		
S I - 5				平安	S I - 25	N - 17° - W (5.00) × 4.60	23.0	II c	平安		
S I - 6	N - 10° - E (5.25) × 5.25	27.5	II a	奈良	S I - 26	N - 13° - W (6.00) × 6.12	36.6	I b	古中		
S I - 7	N - 16° - W (5.10) × 5.10	26.0	II a	奈良	S I - 27				繩文		
S I - 8	W - 10° - S (5.00) × 5.00	25	II b	平安	S I - 28	N - 18° - W (5.65) × 5.65	31.9	I c	古後		
S I - 9	N - 10° - W (3.40) × 3.40	11.5	IV b	平安	S I - 29	N - 2° - E (3.37) × 3.37	11.3	IV c	平安		
S I - 10	N - 0° - W (3.50) × 3.50	12.2	IV a	平安	S I - 30	N - 10° - W (2.85) × 2.90	8.2	V a	平安		
S I - 11	N - 5° - E (3.58) × 3.50	12.2	IV a	平安	S I - 31	N - 17° - W (3.65) × 3.85	14.0	IV a	平安		
S I - 12	N - 7° - W (2.60) × 2.60	6.7	V b	平安	S I - 32	N - 52° - W (4.60) × 4.60	21.1	I a	古前		
S I - 13	N - 5° - E (3.70) × 3.40	12.5	IV b	平安	S I - 33	N - 11° - W (3.05) × 2.58	7.8	V b	平安		
S I - 14				占塙	S I - 34	N - 25° - W (5.90) × 5.90	34.8	I c	古後		
S I - 15				繩文	S I - 35	N - 10° - W (3.12) × 3.12	9.7	IV c	平安		
S I - 16	N - 2° - W (3.50) × 3.50	12.2	IV a	平安	S I - 36				平安		
S I - 17	E - 6° - S (3.50) × 3.60	12.6	IV a	平安	S I - 37	N - 16° - E (3.70) × 3.70	13.6	IV a	平安		
S I - 18	N - 11° - W (3.20) × 3.20	10.2	IV c	平安	S I - 38	N - 83° - W (2.40) × 1.95	4.6	VI	平安		
S I - 19	N - 9° - W (2.00) × 2.05	4.1	V c	平安	S I - 39	N - 11° - W (2.30) × 2.22	5.1	V c	平安		
S I - 20	N - 4° - E (4.00) × 4.00	16.0	III	平安	S I - 40	N - 9° - E (3.10) × 2.80	8.6	V b	平安		

(古前～五領期、古中～和泉期、古後～鬼高期、奈平～奈良・平安期、I a～五領・5 C 前半代
I b～和泉・5 C 代、I C～鬼高・7 C 代、II a～8 C 代、II b～IV～9 C 代、V・VI～10 C 代)

程度で、全体的には少量である。焼土は、S I - 11と17で認められ良く使用されている。

IV b 期は住居跡の一辺長が3.40～3.50m以内で、面積も11～12m²以内の住居跡が当該期に入りS I - 9とS I - 13の2軒がある。S I - 9はS I - 4を掘り切っている住居跡である、柱穴等は不明である。S I - 13は東西に長軸を有し、対角線上よりや離れた所に柱穴を配置しているが、中央南側の柱穴は認められなかったことから柱穴配置に変化が見られる。カマドは北壁中央部に設置されているが、完全に破壊されている。

IV c 期は住居跡の一辺長が2.90～3.40m以内で、面積も8～11m²以内の住居跡が当該期に入り、S I - 18、21、22、29、35の5軒がある。平面プランは正方形の住居跡(S I - 21, 29)と、隅丸方形状の住居跡(S I - 18, 22)とがある、柱穴配置は、対角線上に配置されている住居跡(S I - 29)、対角線上から離れた所に配置されている住居跡(S I - 18, 22)、両者の中間的な配置をなす住居跡(S I - 21)とがあり、一定していない。カマドは、北壁中央部に設置されている。粘土はS I - 29ではやや多めに使用されているのみで、他のカマドはごく一部に使用されているのみで多くは砂質の褐色土を用いており、カマドとしては良く使用されている。また、S I - 22には簡じ切り溝がある。

このIV期を総体的に見るならば、住居跡の一辺長は3.00m代の住居跡で、柱穴配置は規則的な配置をしている住居跡、不規則な配置をしている住居跡、中間に位置する住居跡等があり平安期の特徴を示しているといえよう。柱穴は浅く小さな柱穴である。

V期は住居跡の一辺長が2.00~3.00m以内で、面積も4~8m²以内の住居跡が当該期に入り、S I - 2、12、19、30、33、39、40の7軒がある。細分するとa、b、cの3時期に区分される。V a期は住居跡の一辺長が2.80~2.90m以内で、面積も8m²代の住居跡が当該期に入り、S I - 2と30の2軒がある。住居跡のプランは、正方形状(S I - 2)と隅丸方形(S I - 30)をなしており、壁溝ではS I - 30がカマドとカマドの東側を除き全周しているに対し、S I - 2は東壁中央部に短く掘り込まっているだけである。柱穴はS I - 2が南西部に1本認められているが、S I - 30はやや不規則な配置を示し、対角線上に4本と中央南側に1本が配置されている。カマドは、2軒とも北壁中央東側に設置されている。V b期は住居跡の一辺長が2.50~2.80m以内で、面積も6~8m²代の住居跡が当該期に入り、S I - 12、33、40の3軒がある。住居跡の平面プランは、東西に長軸を有する長方形状を呈している。柱穴配置は、対角線上より離れた所で南側2本が壁際に寄っている柱穴配置(S I - 33)と、中央部に1本配置した住居跡(S I - 40)がある。この両者とも、内部をより広く使用することを考えたようである。カマドは北壁中央部に設置しているが、粘土は使用されておらず、壁は紗質の褐色土を用いており、比較的よく使用されたようであるが焼土層の堆積は見られず赤褐色土が堆積している。また、壁溝は全周していない。V c期は住居跡の一辺長が2.00~2.30m以内で、面積も4~5m²代の住居跡が当該期に入りS I - 19、39の2軒がある。小型の住居跡平面プランは正方形状を呈し、東西方向の中央部に2本の柱穴を配置している。壁溝は認められず、S I - 19のように北西部に貯蔵穴を有する住居跡もある。カマドは北壁中央部に設置されており、壁(側壁)にやや多量の粘土を用い比較的良好に使用されている。

VI期は、住居跡の一辺長と面積から見るとV c期に入る可能性は有するが、カマドもなく置窓を用いた痕跡も認められなかったため、1時期として区分した。床面はしっかりした床面で、ほぼ東西の中心線上で端部に2本の柱穴を有している。S I - 38が、当該期に入る。

以上が、今回の調査区域内で発見・調査された住居跡を時期別に整理した結果である。古代の住居跡は(Ⅰ期)大型の住居跡で、柱穴も対角線上と中央南側に配置されているが、炉跡は東側に寄っており、カマドは北壁中央部に設置されている。奈良時代前半代(Ⅱ期)も大型の住居跡で、平面プランもしっかりしている。カマドの位置及び柱穴等は、しっかりした配置となっている。住居跡の小型化と柱穴の小柱穴化、カマドの位置が北壁中央部から離れた所に設置されてくるのは、Ⅲ期以降のⅣ期に入ってからである。つまり、平安期から柱穴等に変化が生じている。これは、対角線上に配置されていた柱穴が、対角線上から離れた位置や壁溝に接した所に位置するようになり、小型化した住居跡内で可能な限り床面積を広く取ろうとした結果の柱穴配置といえよう。また、柱穴が認められない住居跡もあり、平安期に入るとこういった傾向が生じて来ている。特徴的な点としては、カマドの西側(北向きの住居跡)と北側(東向き住居跡)で壁を突出させている住居跡(S I - 11、17)、東壁にカマドを有する住居跡(S I - 1、31)、壁を造り変えている住居跡(S I - 1、11)等がある。

これらの位置関係としては、Ⅰ期の住居跡は1区と5区北側及び6区に所在しているが、集中する傾向が無く台地上平坦部の辺縁部に所在している。Ⅱ期は、1区の中央部と2区中央部南側とに所在している。この地域は、南側緩斜面部と台地上平坦部の南側に相当する部分で、他の地区では認められなかった点が注目される。Ⅳ期は3区から6区にかけて所在しており、3区と4区、5区、6区とのグループに分けられる。Ⅳ期の住居跡は、台地上平坦部の中央部から北側端部にかけて見られ、広く分布したこととなる。当遺跡では、このⅣ期に入る住居跡群が集落の中心になることと考えられる。Ⅴ期とⅥ期の住居跡はその遺構数も少なく、調査区全域に広がっているが散見する程度であり、住居跡数も減少

して6区に集中する傾向を有している。

以上が、今回調査された住居跡の状況である。前述してあるように、今回の調査区域は幅4.25~4.50m×長さ600mの2,600m²で、面の調査ではなく線の調査である。調査区が台地を南北に横断していることは、当台地に所在する集落を知る上では重要であるが、調査範囲が限られたため集まるデータにも限りがある。今後、面的な調査が実施されれば、今回の調査結果も面的な調査結果に包括されるものである。

2、出土遺物について（第10~13図）

今回の調査では、遺構内（住居跡、建物跡柱穴、土坑）より土師器壺、塊、甕、須恵器壺、高台付壺、高壺、蓋、甕、壺軸用紡錘車、刀子、釘、鎌、鍊等が出土している。遺構に伴わない遺物としては縄文式土器片が出土しており、旧石器時代の遺物としては石刀等が出土している。この石刀は八千代町での新資料である。

本項では、土師器と須恵器に関する編年試案を試みながら記述していくが、茨城県西部地域では9~10世紀代が不明な部分が多く、今後本資料を含む資料の増加を待って充分検討されることを期待したい。

1) 土 師 器（第8、9図）

土師器は、高壺、器台、塊、壺、高台付壺、甕が出土している。遺物は、古墳時代から平安時代（5世紀前半~10世紀前半）にかけての資料であり、Ⅷ期に分類される。第8図は、住居跡の床面及び床面付近より出土した遺物を時期別に配置した編年図（試案）で、甕は第9図に配置した。出土遺物に関しては、器種を時代ごとに述べる。

高壺は古墳時代五傾期の住居跡であるS I-23とS I-20（平安期）のカマド内より出土しているが、完形品ではなく全て破片である。高壺は、壺部と脚部の器形から3形式の高壺が出土している。高壺I類は、127のように外面赤彩されて脚が大きく外傾しながら外に開き、脚部中央に3孔を有する器形である。このI類は、壺部片である129とは接合しないが、129と類似した器形で赤彩された壺部と判断される。高壺II類は、129の壺部の器形である。体部から口縁部にかけては直線的に大きく外傾しているが、赤彩は施されていない。128は台付脚部で、直線的に小さく外開きする器形である。S I-20のカマドからは、高壺II類に編年される壺部片が出土している。これらは、5世紀前半に編年される。

器台は、109がS I-20のカマド内より出土している。小破片であるが、器台としてはこの資料1点である。 $\frac{1}{3}$ 程度の破片のため、全体の器形は不明である。脚部は直線的で小さく外へ開き、台部には指頭整形による圧痕が見られ、中央部には孔が穿たれている。S I-20は平安期に位置付けられる住居跡であるがカマドの補強材として使用されたものと推定される。

塊は、S I-29より3点（138~140）出土しており、3点とも異なる器形であることから3類に分類される。塊I類は体部が半球上で底面は丸底となっており、口縁部は直線的に外反している。口縁部内面には稜を有し、体部中半から底部にかけて放射状の暗文が見られ139がI類に入る。II類は138がある。底部は小さく削り出され、体部上半から頸部にかけてやや内傾ぎみに直立し、口縁部は直線的

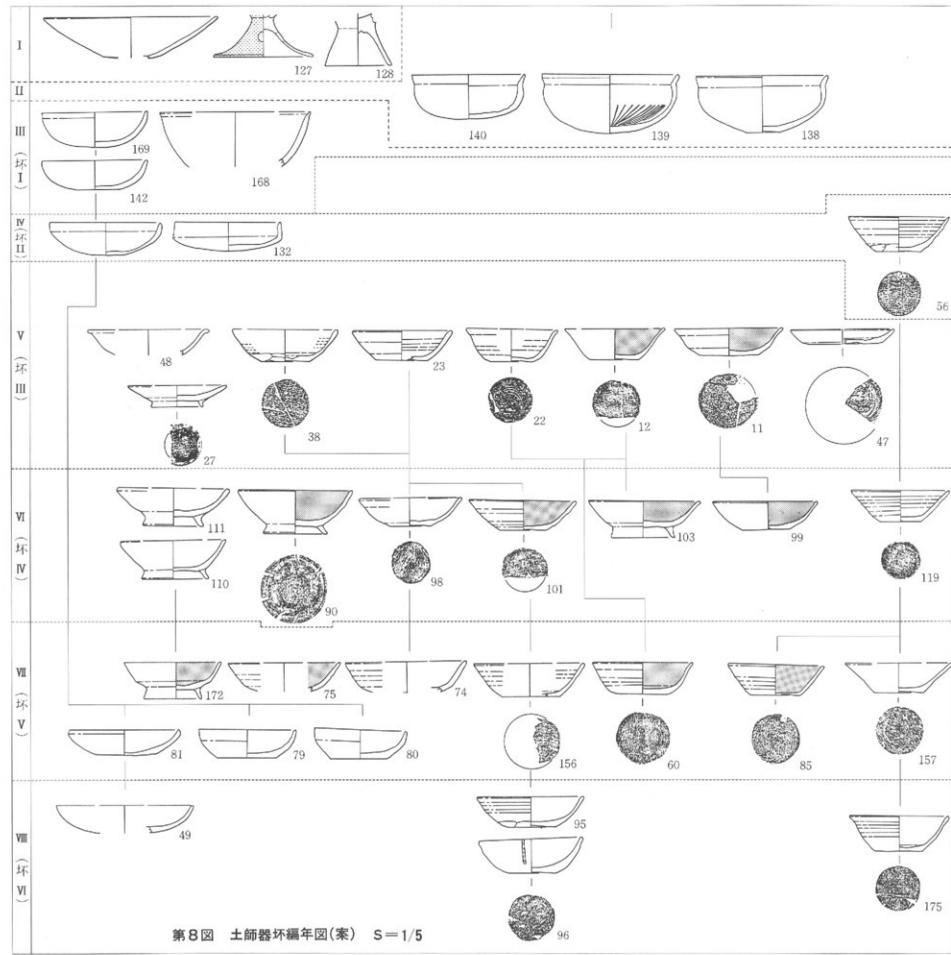
に外反し内面に棱を有するが放射状の暗文は見られない。塊III類は140がある。I・II類より小型化しており、底面は平底状の丸底となっているが明確な底部は認められない。体部はほぼ直立し、口縁部は直線的に外傾しているがI・II類より角度が浅く、鋭い口縁部となっている。この3点は、内外面とも端整な整形が施されている。時間的な差を有するようであるが、古墳時代の和泉期（5世紀代）に編年される遺物である。また、塊としては168のような器形もある。168は、S I-34より169と併出土している。内傾ぎみに立ち上がる体部から、口唇部が小さく摘み出されている。168は共伴遺物から古墳時代の鬼高期内相当する遺物で、7世紀代に編年する。

坏は鬼高期内から平安期まで器形を変化させながら使用されており、その器形からI類～VI類まで分類される。またI類～VI類は、器形に応じて細分される。坏I類は半球状をなす坏で、底面が丸底のI 1類(169)と、底面を平底に削り出しているI 2類(142)とがある。このI類は168の塊と169が共伴関係にあることから、鬼高期内の坏と判断される。この坏I類は平安時代まで引き続き製作され使用されている。

坏II類は、坏I 1類が変化したII 1類と別の器形であるII 2・3類とに別れる。II 1類は丸底で、体部から底面にかけては薄い器壁となっているが、口縁部はやや厚い器壁で直立している。II 2類は、やや低い器高で、口径が大きくなっている。底面は丸底であるが底部は削り出されておらず、口縁部はやや内傾ぎみに直立している。II 1類には133があり、II 2類には132があってS I-24から出土している。また、II 1・2類とは異なる器形の56はII 3類となり、平底で体部が直線的に大きく外傾している。体部にはロクロ整形が施され、下には手持ちヘラ削りが施されている。底面はヘラ削り後ヘラナデである。坏II類は、8世紀代に編年されるものと判断される。坏II 3類は、平安時代にも使用されている。

坏III類は、6タイプに細分される。III 1類は48が代表的であるが、数量的には少量である。体部は内傾ぎみに外傾し、口唇部には外反しておりS I-9からの出土である。III 2類は体部が内傾ぎみに外反する器形で、体部下半までロクロ整形され下半で手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されており、底面はヘラ削り後ヘラナデである。III 2類には、23と38がある。III 3類はIII 2類より口径がやや小さくなり、器高が高くなっている。体部は直線的に外傾しており、口唇部が小さく外反している。体部はロクロ整形で、体部下端には手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されており、底面は回転糸切り後にヘラナデが施されている。糸切り底の坏はごく少数で、22がある。III 4類は器高も高く口径も大きい坏で体部は薄い器壁で直線的に外傾し、口唇部がやや外反している器形で、内面に黒色処理が施されている。12が、III 4類に入る。体部外面には、ヘラナデやヘラミガキが施されている。III 5類はやや低い器高で、底径が大きくなっている。体部は内傾ぎみに外反し、口縁部がやや外傾し薄い器壁となっている。体部中半以下は肥厚な器肉で強い手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されており、内面には黒色処理が施されている。11が、III 5類に入る。III 6類は低い器高で口径と底径があまり見られない器形で、47がある。茨城県の西部地方ではあまり見られない器形で、流入品と考えられる。坏III類は、S I-1とS I-4より最も多く出土しており、住居跡の規模等と合せ考えると9世紀前半に編年される。

坏IV類は、4タイプに細分される。IV 1類は、体部が内傾ぎみに外反するタイプで98がある。体部はロクロ整形で、手持ちヘラ削り・ヘラナデは体部下端の端部にのみ施されている。IV 2類は、体部が直線的に外傾し、内面黒色処理が施されている。体部はロクロ整形で、手持ちヘラ削り・ヘラナデは体部下端の端部にのみ施されており、101がある。IV 3類は、99がある。体部は下端が内傾ぎみに外傾し、上半は直線的に外傾している。体部内面は黒色処理が施され、外面はロクロ整形と下半に手持ちヘラ削



第8図 土師器環編年図(案) S=1/5

リ・ヘラナデが施されている。IV 4 類は、119がある。直線的に外傾する体部で、体部下端までロクロ整形が施され、下端は手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている。IV 類は器高が4.5~5.0cm以内で、体部ヘラ削りは、下端の端部に狭く施されている坏が主流を占めている。また、口径と底径とでは口径の $\frac{1}{2}$ 以下が底径となっている。S I -20より、多くの坏が出土しており住居跡の大きさ等から、IV 類は9世紀中葉頃に編年される。

坏V 類は、6 タイプに細分される。V 1 類は坏I 類169の系統に入る坏で、79~81がある。79、80と81とは同一の系統を引く坏と判断されるが、器形、整形に相異があるため区別してV 1 類が81、V 2 類が79、80とした。V 1 類は半球状をなす体部で底面が平底に削り出され、口縁部は斜めに削られている。体部整形は、ヘラナデ・ヘラミガキである。V 2 類は半球状をなす体部を中半まで内傾させ、口縁部を直立させている。体部は比較的端整なヘラナデ・ヘラミガキが施されており、底面はヘラ削り・ヘラナデである。V 3 類は体部下端を内傾ぎみに外傾させた後、直線的に外傾させている。体部は下端に手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている以外はロクロ整形で、体部内面に黒色処理が施されている坏(75)と、施されていない坏(74)がある。器高では4.5cm程度である。74は23、98の系統に入るようであり、75は11、99の系統に入る坏と判断される。V 4 類は体部が内傾ぎみに外傾する坏で156があり、23、101の系統に入る坏である。体部下半に手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている以外、体部はロクロ整形である。底面はヘラ削り・ヘラナデで、器高は4.0~4.5cm以内である。V 5 類は体部が内傾ぎみに外傾した後、口縁部をやや外反させている。器高は4.0~4.5cm以内で、内面に黒色処理が施され、外面は体部下半が手持ちヘラ削り・ヘラナデである以外はロクロ整形され、底面は回転ヘラ切り後ヘラナデが施されている。V 5 類には、60があり12、22の系統に入る坏である。V 6 類は56、119の系統に入る坏で、157がある。体部は下端まで内傾ぎみに外反した後、ヘラ削りにより体部上半が直線的に大きく外反している。器高は、4.0~4.5cmである。体部は下端が手持ちヘラ削り・ヘラナデである以外ロクロ整形で、底面は回転ヘラ切り後ヘラナデが施されている。坏V 類は、S I -11、13、31より出土している。S I -11からは、縁釉陶器(猿投)が2点出土していることなどと合わせ考えると、坏V 類は9世紀後半に編年される。

坏VI 類は、3 タイプに細分される。VI 1 類はV 1 類81の系統に入り、体部が半球状をなす坏で49がある。器高は4.0~5.0cm以内で、口径が広くなっている。体部上半が直線的に外傾している。体部外面は、ヘラ削り後ヘラナデが施されている。VI 2 類はV 4 類156の系統に入る坏で、95と96がある。これらは体部が内傾ぎみに外傾する坏で、96は肥厚な体部となっている。器高は4.0~4.5cmでV 類よりやや低い器高となっており、体部には1条の漕が削り込まれているものもある。VI 3 類は坏II 3 類56の系統を引くもので、175がある。体部は直線的に外傾し、ロクロ整形により口縁部がやや肥厚化している。体部下半には、手持ちヘラ削りが施されている。器高は4.5~5.0cmである。出土した住居跡等から、坏VI 類は10世紀前半代に編年される。

高台付坏とした遺物には、盤状坏と塊がある。盤状坏は須恵器が多く、土師器は比較的少量で坏III 類に入る27が代表的な器形である。肥厚な器壁で体部が直線的に大きく外傾し、高台部は小さく外側に外傾しており、器高は3.0cmを計測する。坏III 類に入ることから、9世紀前半代と判断される。

塊としては、坏IV 類とV 類の塊が出土している。坏IV 類の塊は、口径14.0~15.0cmで器高5.0cmを計測するI 類、口径が15.0~16.0cmで器高が5.5~6.0cmを計測するII 類、口径15.0cmで器高が4.5~5.0cmを計測するIII 類、の3 タイプが出土している。I 類は、体部が内傾ぎみに外傾しており、高台部はやや外側に外開いている器形で110と111の2点がある。II 類はI 類と同一タイプの器形である

が、前者よりやや大型化しており、体部内面に黒色処理が施され高台部は直線的に大きく外へ開いている、90がある。III類は、I類やII類と異なるタイプである。体部は、内傾ぎみに大きく外傾して、口縁部がやや外反しており、体部内面は黒色処理が施されている。高台部は直線的で、直立ぎみにやや外に開いている103がある。I類～III類は、坏IV類と共伴関係にあることから9世紀中葉頃と判断される。坏V類の塊は、口径14.0cmで器高は4.5～5.0cmを計測する172がある。体部は下端を内傾ぎみに外傾させた後、下半から口縁部まで直線的に外傾し、内面は黒色処理が施されている。高台部はやや細く、直線的に小さく外に開いている。体部下半には、ヘラ削り・ヘラナデが施されている。坏V類と共に伴関係にあることから、9世紀後半代と判断される。

土師器甕としては、6類に細分される甕が出土している。I類は、高坏I～II類と共に伴する126の1点がある。突出する底部から半球状を呈する体部で、口縁部は直線的に外傾している。体部外面は、頭部と体部下半及内面には刷目整形が見られる。高坏（I・II類）との共伴関係から、5世紀前半代に編年される。

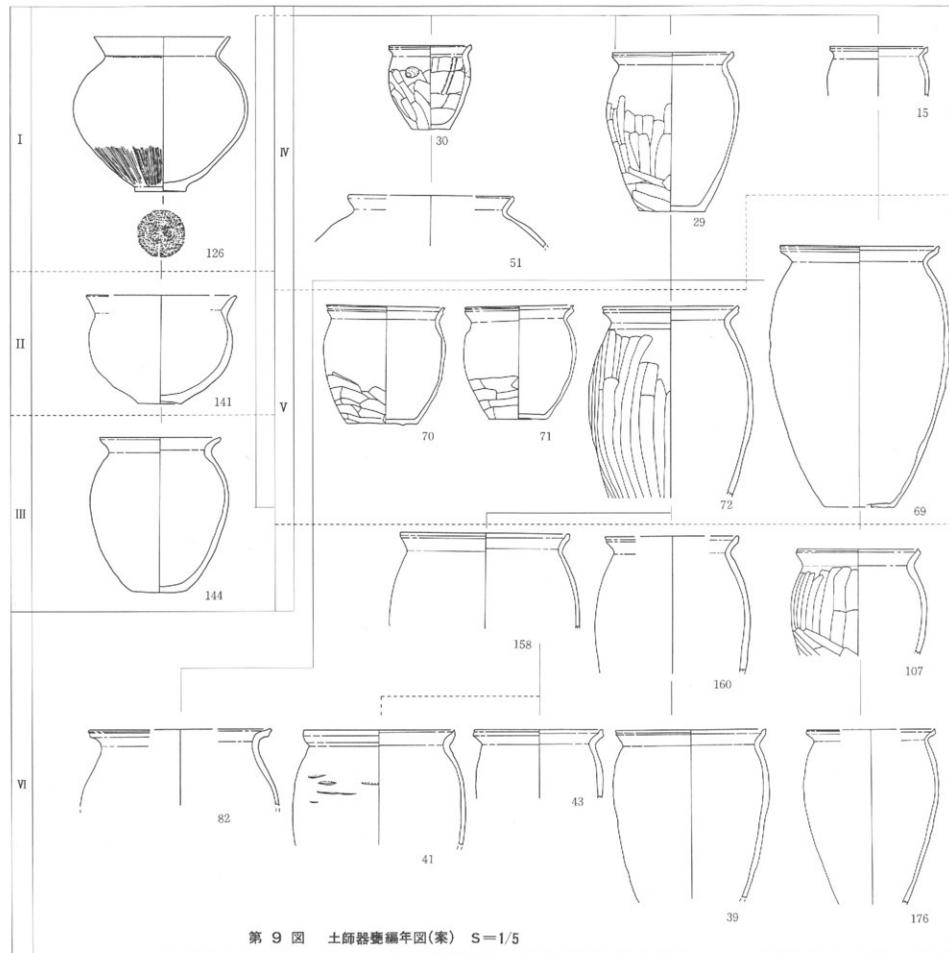
甕II類は、塊（138～140）と共に伴して141が出土している。141は平底で体部が内傾ぎみに立ち上がり、頭部内面には棱を有しながら口縁部はやや外傾ぎみに外傾している。体部外面には、ヘラミガキ等が施されている。甕II類は、塊との共伴関係から和泉期（5世紀代）に編年される。

甕III類は、坏I類の142と共に伴する144が出土している。底部は平底で体部が内傾ぎみに立ち上がり、体部上半に最大径を有して口縁部は外傾しながら外傾しており、整形はヘラナデ等が施されている。甕III類は、坏I類と共に伴することから、鬼高期の7世紀代に編年される。

甕IV類は、器形が3タイプに大別される。甕IV1類は口唇部の形状によって細分されるが、口径は10.0～13.0cmを計測し、器高が11.0cm程度を計測する小型の甕で、15と30がある。15は口唇部が小さく摘み出され、ヘラ削り・後ヘラナデが施されている。30は口唇部が斜めにヘラ削り出されており、体部内外面にはヘラ削りが施されている。器形と整形に相異を有するが、小型甕として同類とした。甕IV2類は口径が15.0～16.0cm、器高20.0cm程度を計測する甕で29がある。平底で体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は直線的に外傾して口唇部が小さく摘み出されている。体部上半から下端にかけてはヘラ削りが施されている。IV3類は推定口径22.0cmを計測する大型の甕で、51がある。体部は内傾ぎみに大きく外傾しており、口縁部は直線的に外傾している。体部外面には、ヘラナデが施されている。IV類は坏VI類と共に伴関係にあることから、9世紀前半代に編年される。

甕V類は、器形と整形から3タイプに大別される。V1類は、口唇部の形状に相異を有し口径13.0～16.0cm、器高は14.5～15.5cm以内に入る甕であり、IV1類よりはやや大型化してはいるものの小型の甕で70と71がある。底部は広い平底で体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外傾ぎみに小さく外傾しており、口唇部の摘み出しは70より71が大きく摘み出されている。この70と71は、周辺地域及び県西地区では類例がほとんど見られないことから、他地域からの搬入品と推定される。V2類は体部が長胴化した甕（大型甕）で69と72の2点がある。器形と整形から、69をV2類とし72をV3類とした。V2類は口径が20.0cm前後で、底径は口径の1/2.5程度を計測する。体部の最大径は体部上半にあり、口縁部は外傾ぎみに外傾し口唇部はやや外傾ぎみにしっかり摘み出されている。体部整形はヘラナデとヘラ削り後にヘラナデが施されている。V3類は、口径が17.0～18.0cmで、体部の最大径を体部中間に有しており、口縁部は直線的に外傾しており口唇部も摘み出されている。体部にはヘラ削りが施されている。甕V類はS I-11より出土しており、S I-11の坏は坏V類に入ることから9世紀後半代に編年される。

甕VI類は、甕の器形と口縁部の形状から5タイプに大別される。V1類は、口径24.0cm程度で口縁部



第9図 土器類編年図(案) S=1/5

が大きく外彎し、口唇部が直線的に摘み出されて外傾しているタイプであり、82がある。体部整形は、ヘラナデである。VI 2 類は口縁部が直線的に小さく外傾し、口唇部は鋭く摘み出されており、体部は内傾ぎみに立ち上がり長胴化した甕と判断される41がある。VI 3 類は、口縁部がやや外脇ぎみに外傾し口唇部が垂直に摘み出されているタイプで43と158の2点がある。43は口径17.0cmと小型であるが、158は口径22.5cmを計測する大型の甕である。体部整形は、ヘラナデが主流を占めている。VI 4 類は、体部が長胴化している甕で39と160がある。器形的に39はV 類69のタイプであり、160はV 類72のタイプで、両タイプとも密接に関連しているようである。口縁部は直線的に外傾し、口唇部も直線的に摘み出されている。VI 5 類はVI 4 類と同様に体部が長胴化した甕で、V 類69と同一タイプの甕で107と176がある。107はやや小型化した甕であり、口縁部は直線的に外傾したのち、口唇部が垂直に摘み出されている。107は体部にヘラ削りが施されているが、176はヘラ削り後にヘラナデが施されている。甕VI類は、坏V類と共に共伴関係にあることから9世紀後半で編年される。

土師器の坏と甕は、鬼高期以降平安期まで広く使用されており、平安期の9世紀前半頃から多くの器形の坏や甕が使用されている。また、他地域よりの搬入品も見られると同時に甕が9世紀前半にのみ使用され、中葉以降には見られなくなっている。これに変わって、塊が後半まで広く使用されているが、10世紀前半まで見られなくなっている。これは、10世紀代の遺構が少数があることに関係するが、いずれにせよ9世紀代に入ってからの器種構成は変化に富んだ構成となっている。

2) 須 恵 器 (第10、11図)

須恵器は、坏、高台付坏、盤、蓋、甕、瓶が出土している。坏では、I 類からV 類までの5期に分類され、盤は2類に、甕は2類に各々分類出来る。坏 I 類は口径14.0cm、器高4.5~5.0cmを計測する坏で、166がある。体部は直線的に外傾しており、やや肥厚な器壁である。体部はロクロ整形後ヘラナデが施されており、底面はヘラ削りヘラナデである。166は土師器坏169と共伴関係にあることから鬼高期で、7世紀代に編年される。

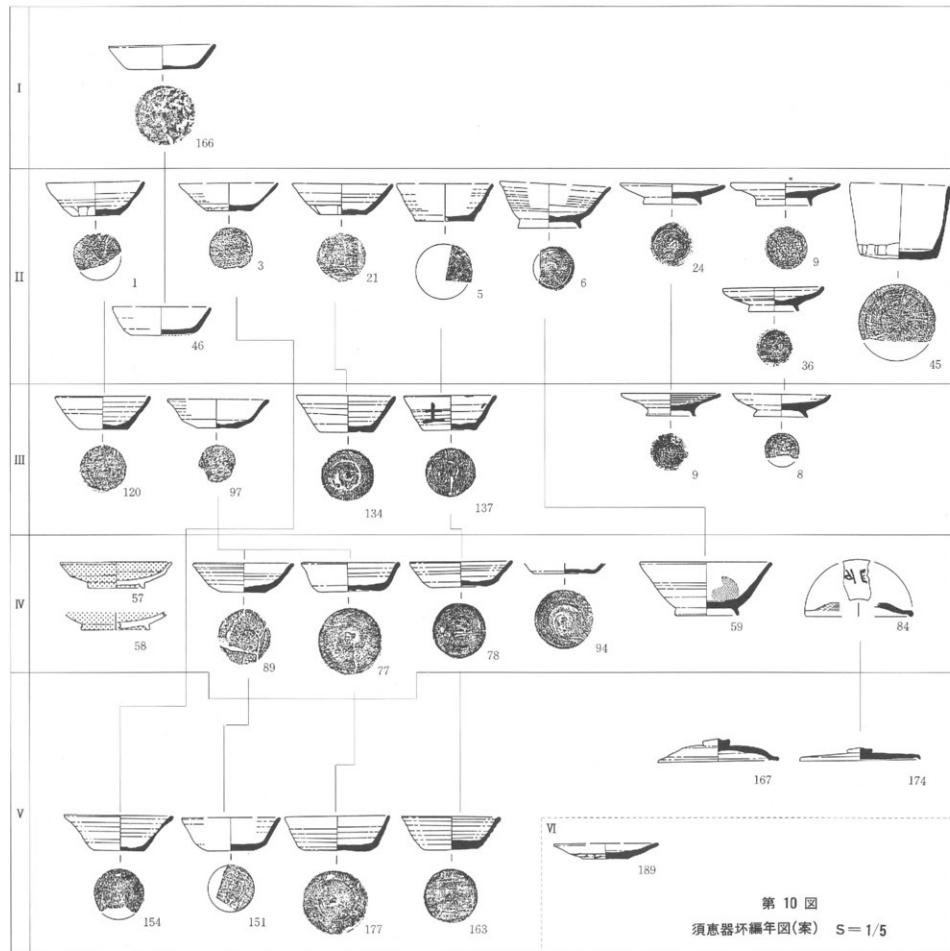
坏II類は、5タイプに大別される。II 1 類はI 類の系統を引く坏で、46がある。肥厚な器壁であり、体部が直線的に外傾している。口径13.0cm、器高3.5~4.0cmを計測し、I 類よりやや小型化している。磨滅により体部整形は不明であるが、体部下半まではロクロ整形で、下端にはヘラ調整が施されている。II 2 類は口径13.0cm、器高4.5cmを計測し、体部がやや内傾ぎみに外傾する坏で1がある。底部は肥厚で、体部はやや薄い器壁となっている。体部下半には手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている以外、ロクロ整形である。II 3 類は、口径13.0~13.5cm、器高3.5~4.0cm以内を計測する3がある。底部は肥厚で体部が直線的に外傾しており、ロクロ整形により器壁が薄く削り出されている。体部の下端部には手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されており、底部はヘラ削り・ヘラナデである。II 2 類より口径がやや広くなっているが、体部のヘラ調整は端部にのみ施されている。II 4 類は、口径13.5cm、器高4.0cmを計測する21がある。全体的に肥厚な器壁で、体部は直線的に外傾している。体部下半には強い手持ちヘラ削りとヘラナデが施されており、底面はヘラ削り・ヘラナデである。II 5 類は口径13.0cm、器高4.5~5.0cm、底径8.0cmを計測して、口径に対して底径が広く高い器高となっている5がある。底部は肥厚となっているが、体部は口縁部にかけて次第に薄くなる器壁となっている。体部下端には、手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている以外ロクロ整形であり、底面は回転ヘラ削り後ヘラナデが施されている。45は坏の器形からは除外され、適切な名称が不明で坏とした。今回の調査では、45は1点出土している。

ており、46と共に伴関係にあることからII類の時期に入れた。このII類は、土師器坏III類と共に伴することから9世紀前半代に編年される。

坏III類は、4タイプに大別される。III 1類はII 2類1の系統に入る坏で、口径13.5~14.0cm、器高4.5cm、底径6.0~6.5cmを計測する120がある。全体的に肥厚な器壁で、体部は直線的に外傾しているが、口縁部はやや内彎している。体部上半はロクロ整形で、下半は手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている。III 2類は、口径13.5~14.0cm、底径4.5~5.0cm、器高3.5~4.0cmを計測する97がある。III 1類よりやや小型の坏である。体部下端は内傾ぎみに外傾し、下半から上半までは外彎ぎみに外反しており、口縁部がやや外反し肥厚している。体部は、下半に手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている以外ロクロ整形が施されている。III 3類は口径13.0cm、底径7.0cm、器高5.0cmを計測する134があり、II 4類の21の系統に入る。肥厚な器壁で底部と体部がほぼ同じ器壁となっており、体部は直線的に外傾している。体部下端は、手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されているほかはロクロ整形が施されている。底面は回転ヘラ切り後に、弱いヘラナデが施されている。III 4類は、口径12.0~12.5cm、器高4.5~5.0cmを計測する137がある。III 3類よりやや小型化しており、底部はやや肥厚化して体部は直線的に外傾しており、口縁部にかけてだいに薄くなっている。体部下端には、手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されているほかはロクロ整形である。底面は134と同様回転ヘラ削り後、ヘラナデが施されている。坏III類は、土師器坏IV類と共に伴関係にあることから9世紀中葉代に編年される。

坏IV類は、4タイプに大別される。IV 1類はIII 2類と同一タイプの坏で、89がある。89は口径13.5cm、底径5.5~6.0cm、器高4.5~5.0cmを計測し、III 2類97とは同程度の大きさである。器壁は全体的に肥厚で、体部下端は内傾ぎみに外傾し体部下半から口縁部までは外傾しており、口唇部がやや外反している。体部下端に手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されており、底面はヘラ削り・ヘラナデである。IV 2類は、口径13.0cm、底径8.0cm、器高3.5~4.0cmを計測してする77がある。器高はやや低くなっているが底径が広く、口径の½以下となっている。体部は直線的に小さく外傾しており、口唇部が外反して全体的に肥厚な器壁となっている。体部下端に手持ちヘラ削りが施されている以外はロクロ整形で、底面は回転ヘラ切り後ヘラナデが施されている。III 2類の系統を引くようであるが、器形的に異なるため分類した。IV 3類は口径13.5~14.0cm、底径6.0~6.5cm、器高3.5cmを計測し、底径が広い器形で78がある。体部は直線的に外傾し、下端に手持ちヘラ削りが施されている以外ロクロ整形で、底面は回転ヘラ切り後にヘラナデが施されている。78は、III 4類137の系統に入る器形のようである。IV 4類94は、底径8.0cmを計測する。底部片のための全体の器形は不明であるが、器底の薄い器形で、体部下端部に手持ちヘラ削りが施されており、底面は回転ヘラ切り後端部にヘラ削り・ヘラナデが施されている。IV類は、III類の器形を持続しながら器高がやや低くなり、口径もやや小さい器形となっている。また、土師器坏V類と共に伴関係にあることからIV類は9世紀後半代に編年される。

坏V類は、4タイプに大別される。V 1類には、口径14.5cm、底径6.5cm、器高4.5~5.0cmを計測する154がある。体部は外彎ぎみに外傾して体部中央が薄い器壁のため、口縁部が肥厚化している。ロクロ整形によるものであり、体部下端には手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている。この154は、法量及び器形的にはV類よりも古いII類かIII類に入るようであるが、出土したS I-30は1辺3m以下の住居跡であることからV類とした。V 2類はIV類89の系統に入る坏で、体部の下端部に手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている坏で、151がある。151は、口径13.0cm、底径6.0cm、器高4.5cmを計測する。体部はやや外反ぎみに外傾しており、端部以外ロクロ整形で、底面にヘラ削り・ヘラナデが施されている。V 3類は口径14.0cm、底径6.5cm、器高4.5cmを計測する177がある。底部は肥厚で体部は直線的に



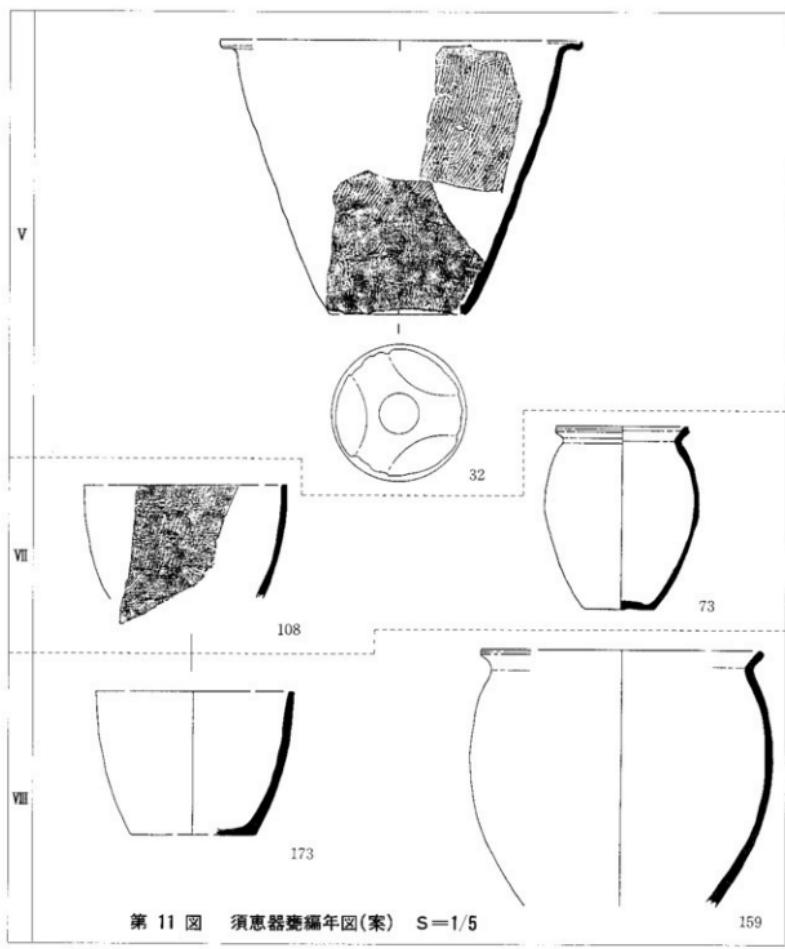
第 10 図
須意器分布年図(案) S = 1/5

外傾し、下端から口唇部にかけては薄い器壁となっている。体部はロクロ整形で、体部下端部（底部）には手持ちヘラ削りが施されている。底面には、回転ヘラ切り後へラナデが施されている。V 4 類には、口径13.0cm、底径7.0cm、器高4.0~4.5cm以内を計測する163がある。163は底部が非常に肥厚で体部が直線的に外傾しており、ロクロ整形によって口唇部がやや肥厚化している。体部の下端部には、手持ちヘラ削り・ヘラナデが施され、底面はヘラ削り・ヘラナデが施されている。V 類は口径が13.0~14.5cm、底径は6.0~6.5cmが多く、器高は4.0~5.0cmで器高4.5cmが中心となっており、体部のヘラ調整も体部下端で底部の部分に小さく施されている环が中心となっている。底面は、回転ヘラ切り後にヘラナデ、体部はヘラ削り後にヘラナデが施されている。このV 類は、土師器環Ⅳ類と共伴関係にあることから10世紀前半に編年される。

VII 類に入る环として、189は出土している。189は、SK-9より出土しており器高が2.0cmと低くなっている。口径は14.0cmで底径5.5cmである。底部はやや肥厚で、体部はやや彎曲しながら直線的に大きく外傾している。体部下端部には、手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている。また、体部下端には墨書きが見られるが破片のため判読不能である。189のタイプに入る环は、他の造構から出土していないため共伴関係は不明であるが、SB-1~3付近に位置する土坑から出土していることなどから、10世紀代の环と推定されるが今後検討を要する。

高台付环は高台部片としては比較的多く出土しているため、土师器环、須恵器环と共に広く使用されていたことと推定されが、口縁部まで遺存しているのは6と59の2点のみである。6は口径14.5~15.0cm、器高5.0~6.5cm、高台径8.5cmを計測する。体部は直線的に外傾し、口縁部が外反している。高台部は、やや内傾みに小さく外に開いており逆台形状を呈している。体部下端には、手持ちヘラ削りが施されている以外、ロクロ整形である。59は口径17.5cm、器高7.0cm、高台径8.5cmを計測する。体部は直線的に外傾し、口縁部がやや薄く整形されている。高台部は細い逆台形状で、直線的に小さく外へ開いている。体部下端には、手持ちヘラ削り・ヘラナデが施されている以外ロクロ整形である。体部内面には、磨り減っている部分があり、転用硯として使用されたようである。6は、环II類と共伴関係にあることから9世紀前半に編年され、59は环IV類と共伴関係にあることから9世紀後半に編年されるものと判断される。

盤としては、2タイプがある。I 類は体部が直線的に大きく外傾しているもので、24と9がある。24は口径13.0~14.0cm、高台径7.0~8.0cm、器高2.5~3.0cmを計測する。体部は肥厚な器壁で、高台部は三角形状でやや内傾みに外に開いている。9は口径13.0~13.5cm、高台径6.0~7.0cm、器高3.0cmを計測する。体部下半は、ロクロ整形時に薄い器壁に整形され口縁部が肥厚化している。高台部は逆台形状で、やや外彎みに外に開いている。24は环II類と共伴関係にあることから9世紀前半で、9はS I-1 廃棄後の流入であることから9世紀中葉頃と判断される。9は24と比較して器高は同程度である以外やや小型化している。II 類は体部が直線的に大きく外傾した後、口縁部が上方に立ち上がっている器形で7、36、8がある。この3点は、口縁部の形状と口径に各々差を有している。7は口径14.5cm、高台径6.0~6.5cm、器高3.0cmを計測し、体部は直線的に大きく外傾した後口縁部がやや直立ぎみに立ち上がってている。高台部は器壁が薄い逆三角形状で、直立ぎみに小さく外へ開いている。36は口径13.0~13.5cm、高台径6.5cm、器高3.0~3.5cmを計測し、体部は直線的に大きく外傾しており口縁部は直立ぎみに立ち上がってている。高台部は逆三角形状で、直線的に外へ開き7より広くなっている。8は口径13.0cm、高台径7.0cm、器高3.0cmを計測し、36より小型している。体部の外傾は、36より大きくほぼ水平に近い状況を呈しており、口縁部は鋭く斜め上方に立ち上がってている。高台部は逆三角形状で、



第 11 図 須恵器縦編年図(案) S=1/5

直線的に大きく外に開いている。I類とII類の7と36は、坏II類と共に伴関係にあることから9世紀前半代と編年される。またI類9は、坏III類と共に伴関係にあることから9世紀中葉代に編年され、II類8も同時期に入る。

坏蓋は図示可能な遺物が少なく、その多くは小破片で出土している。このため、図示出来たのは84、167、174の3点だけで各々異なる器形である。84は、S I-16より出土した小破片で「四万」の墨書き見られる。体部は外脣ぎみに外へ開き、口縁部はやや肥厚で垂直に削り出されている。体部上半には、ヘラ削り・ヘラナデが施されている以外は、ロクロ整形である。167は、S I-34より出土している。体部上半は、やや内傾ぎみに水平で口縁部もほぼ水平となっており、鉢は擬宝珠型である。口径16.0cm、器高3.0cmを計測する。174は、S I-35より出土している。体部は直線的になっており、口縁

部はやや外に開きぎみに削り出されており口径16.0cm、器高1.6cmを計測する。167よりも器高、宝珠とともにやや小型化している。84は、土師器坏85と共に共伴関係にある。85は土師器坏V類に入ることから、84は9世紀後半に編年される。167と174は、出土遺物から坏V類と同時期の10世紀前半と編年される。

甕・瓶としては体部の破片で多数出土しているが、器形が判明又は推定できるものは少なく32、73、108、159、173の5点のみである。タイプとしては甕が1タイプで、甕は2タイプに分類される。瓶は、S I - 1より出土した32がある。体部はやや内傾しながら外傾し、口縁部はほぼ水平に大きく外反した後、口唇部が垂直に削り出されている。底面は欠損しているが、4孔式と判断される。体部下半はヘラ削り・ヘラナデのはかは、敲占めである。32は土師器坏III類と須恵器坏II類と共に共伴関係にあることから、9世紀前半に編年される。甕は、2タイプに分類される。I類は体部は内傾ぎみに外反している甕で108と173がある。2類は体部が内傾ぎみに立ち上がり、口縁が直線的に外傾しているタイプで73と159がある。I類では、108が敲占めとヘラ削り・ヘラナデであるのに対し173はヘラナデとヘラ削りのみで敲占めは認められない。口径は、108が21.0cmであり173は20.0cm程度で2点とも同程度の大きさとなっている。108はS I - 20より出土しており、173はS I - 35より出土している。II類は159が大型の甕で、口唇部の摘み出しは見られない。73は、S I - 11より出土し159はS I - 31より出土している。108と73は、土師器坏V類、須恵器坏IV類と共に共伴関係にあることから9世紀後半で、173と159は10世紀前半に各々編年される。

3) 緑釉陶器

緑釉陶器は、S I - 11の床面と貯蔵穴内より各1点の計2点(57、58)出土している。57は体部の一部を欠き、58は小破片である。57は58より器壁がやや薄く、高台径2.0cm程小さくなっている。58は高台径から見ると、57よりやや大きい器形である。猿投の緑釉陶器で、体部内外面にはロクロ整形後にヘラナデが施されている。釉は淡緑色でやや厚く、全面に施釉されており、底部内外面に焼痕が各3個ずつ認められる。

S I - 11の出土遺物と合せ考えると、9世紀後半に編年されるようである。緑釉陶器は他の住居跡から出土していないことから、集落の中心的な性格を有する住居跡であった可能性を有している。

4) 墨書き土器

墨書き土器としては、土師器坏や須恵器坏の体部と底部に墨書きされた土器が出土しており、S I - 11より2点(64、65)、S I - 16より1点(84)、S I - 17より1点(92)、S I - 25より1点(137)、S I - 29より2点(149、150)、S B - 3より1点(185)、S K - 9より1点(189)、関連遺物で1点(192)の合計10点がある。この10点で、墨書きは判読出来た土器は5点(64、84、137、150、192)である。64は土師器坏で、底面に墨書きされている。墨書きは、「右」と判読出来そうである。84は須恵器坏蓋で、体部に墨書きされており、「四万」と判読される。137は須恵器坏で、体部に墨書きされている。墨書きは「士」であることから、当遺跡より軍團に兵士が派遣されていたのであろうか。150は土師器坏で、底面に墨書きされている。墨書きは、「月」と判読される。関連遺物の192は、須恵器坏で底面に墨書きされている。墨書きは「善」である。

これら以外の墨書き土器は、全ての文字の一部が遺存する程度で判読は不能である。

5) 鉄 製 品

鉄製品としては、刀子、鎌、鎌、釘が住居跡内より出土している。刀子は合計 8 点出土しているが完形品ではなく、全て破片である。S I - 11 からは、茎部に炭化した木質が付着した平造りの刀子 1 点 (67) が出土している。鎌は先端部片が 1 点出土しており、鎌は 2 点出土しているもの的小破片である。耕作土坑より出土した 19I は、先端部分を欠損する程度で良く遺存している。釘は 7 点出土しており、S I - 1 より 3 点出土している以外各 1 点の出土で、完形品が多く出土している。同一遺構内の出土例は、S I - 20 から刀子が 3 点、S I - 1 より釘と鎌が出土しているのみで、他の遺物はそれのみの出土である。

6) 双 耳 坯

双耳坯は、調整区外の東側畑より耕作中に須恵器坏と共に出土したものである。体部を約半分欠損しているために、突手は一方のみ遺存している。色調は明灰褐色で、胎土には白色粒子が少量含んでいる。内外面ともロクロ整形である。体部内面下半から底部内面にかけては、磨り減った部分があり墨が付着していることから転用視として使用された可能性が有している。

当遺跡の周辺では、三和町浜ノ台窯跡より 4 点が報告されており、関城町下木有戸遺跡 S I - 17 より 1 点、水海道市大生郷遺跡第 24 号住居跡より 1 点とその出土例はごく少量である。浜ノ台より 4 点と報告されていることは、浜ノ台が生産地であった可能性を示しており、他の遺跡は消費地であったことを示していることといえよう。出土遺物としては、茨城県内では西部地域の遺跡で出土している点が注目される所である。

7) 旧石器、繩文、弥生時代の遺物

旧石器時代から弥生時代の遺物としては、古墳時代から平安時代の住居跡覆土内等から出土したもので、遺構に伴うものではない。しかし、旧石器時代から弥生時代までの遺物が出土していることから、当遺跡内に当該期の生活空間部分が包蔵されていることを示している。

旧石器時代の遺物としては、石刃、縦長剥片、剥片が出土している。石刃は 1 点で、S I - 39 の床面下より出土しており、当八千代町では最初の発見である。縦長剥片は、S I - 26 床面下より 1 点、S I - 29 より 1 点、S I - 39 より 2 点の計 4 点が出土している。剥片は、S I - 11 より 1 点、S I - 26 より 2 点、S I - 29 より 1 点の計 4 点が出土している。縦長剥片と、剥片が主流を占めている。

繩文時代の遺物としては、土器片と石器がある。土器片は全て小破片であり、前期、中期、後期末～晩期初頭にかけてのもので、住居跡の覆土内より出土している。前期では、黒浜式期と浮島式系の土器が出土している。中期では加曾利 E 式期の上器が出土しており、後期以降では称銘寺式期と堀之内 I 式期等の土器片が出土している。

石器では、敲石、磨石、軽石などが出土しているが、全て古墳時代以降の住居跡覆土内からの出土であり、現位置を保っていない。出土遺物の量としては、敲石と磨石が中心である。これ以外にも自然石が少量出土しているが使用痕が見られずその用途は不明である。

弥生時代では、底部片が 1 点と磨製石斧が完形で 1 点が出土している。土器片は、表採品であるが磨製石斧は S I - 23 覆土上面より出土しており、全面良く研磨されている。

結び

今回の調査は、10万m²以上の面積を有する一本木遺跡全体の中で、限られた範囲の調査であったが、古墳時代から平安時代までの遺構が多数発見されたことと、住居跡の立地に特色を有していることは充分注目し得る点である。また、S I-11から縁軸陶器が出土したことや、調査区外の東側畠地から耕作中に須恵器坏、双耳坏が出土していることは、当集落が台地全域に広がっていることを示し、9世紀後半代の集落が台地の辺縁部に沿うように営まれていることを示している。特に双耳坏は、茨城県内では数例しか報告されておらず、しかも県西地区に集中していることは注目される点である。

今回発見された住居跡は、古墳時代より平安時代まで9世紀代の住居跡が中心となっている。10世紀代の住居跡も発見されているが軒数は少なく、8世紀代の住居跡も少ない。しかし、この結果は限られた調査範囲内での結果であることから、遺跡全体では各期の住居跡が多数所在することは確実であると同時に、S I-38のように小竪穴とでもいべき住居跡（10世紀以降）も発見されていることは、充分注目し得る点である。

限られた調査範囲にもかかわらず、雨や自然湧水により調査期間が延び充分な整理期間が得られなくなったことが、残念でならない。しかし、前述したようにそれなりの調査成果が得られ茨城県西部地域における9～10世紀代の集落及び土師器、須恵器に新資料を加えることができ、今後の編年研究が大いに進歩することを期待したい。

現地調査、整理作業に対して御協力下された関係者各位に対して、文末であるが謝意を表する次第である。

平成9年3月31日

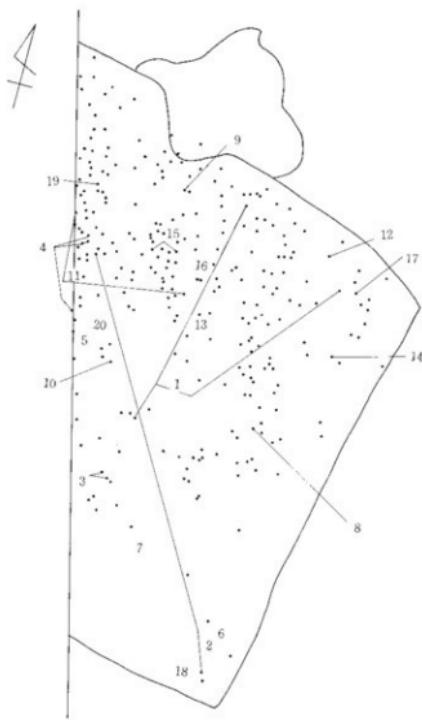
〔参考文献〕

- 『八千代町史』通史編、資料編Ⅰ、Ⅱ、昭和63年11月、八千代町
- 『三和町史』資料編、原始古代中世、平成4年10月、三和町
- 『龍ヶ崎市、別編Ⅰ、龍ヶ崎の原始古代』、平成3年1月、龍ヶ崎市
- 『栗山矢尻古墳発掘調査報告書』、昭和51年、八千代町教育委員会
- 『尾崎前山』、八千代町埋蔵文化財調査報告書2、1981年3月、八千代町教育委員会
- 『和歌（島）城跡確認調査報告書』、八千代町埋蔵文化財調査報告書3、昭和63年3月
八千代町教育委員会
- 『太田古墳』、八千代町埋蔵文化財調査報告書4、1989年3月、八千代町教育委員会
- 『下栗野万台遺跡発掘調査報告書』、千代川村埋蔵文化財調査報告書1、平成5年3月
千代川村教育委員会
- 『下栗野万台遺跡発掘調査報告書』、千代川村埋蔵文化財調査報告書2、平成8年3月
千代川村教育委員会
- 『宮内東遺跡』、第1次緊急発掘調査報告書、小山市文化財調査報告書第19集
1987年3月 小山市教育委員会
- 『寺野東遺跡緊急発掘調査報告書』、栃木県小山市文化財調査報告書第36集
平成8年3月 小山市教育委員会
- 『寺野東遺跡Ⅷ』（歴史時代編）、栃木県埋蔵文化財調査報告書185集
1996年3月、栃木県教育委員会、小山市教育委員会、（財）栃木県文化振興事業団
- 『北野原遺跡調査報告書』、平成8年12月、龍ヶ崎市北野原遺跡調査会
- 阿部義平「国生本屋敷遺跡の発掘調査」『歴博32』1998年12月、国立歴史民俗博物館
- 『大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書』、昭和56年9月、（財）茨城県教育財団
- 『下木有戸遺跡発掘調査報告書』、平成3年10月、つくば関城工業団地内埋蔵文化財発掘調査会
- 『鬼怒川中流域における古墳の調査』『古墳測量調査報告書1 所収』1991年
筑波大学先史学、考古学研究調査報告5、筑波大学
- 『8世紀末～9世紀前半の器種構成について』『研究ノート創刊号』平成3年、茨城教育財団
- 『9世紀後半の器種構成とその割合について』『研究ノート2号』平成4年、（財）茨城教育財団
- 『茨城県内における施釉陶器の検討1』『研究ノート4号』平成6年、（財）茨城教育財団
- 『茨城県内における施釉陶器の検討2』『研究ノート5号』平成7年、（財）茨城教育財団
- 『新治窯跡群須恵器杯A I の変化』、赤井博之・佐々木義則、『婆良岐考古』第18号
- 『茨城県新治群新治村東城寺桑木窯跡採集の須恵器』、赤井博之
1992年3月、『法政考古学』第17集所収
- 『須恵器成因図録第4卷東日本編II』、1995年11月、雄山閣

報告書抄録

フリガナ	イッポンギイセキ ハックツチョウサ ホウコクショ							
書名	一本木遺跡発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ番号	八千代町埋蔵文化財調査報告書第5集							
編著者	藤原均							
編集機関	常総考古学研究所							
所在地	〒285 佐倉市栄町21-15-401							
発行年月日	西暦1991(平成9)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード	緯度		調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
一本木遺跡	茨城県結城市八千代町仁江戸字	08521	133	36° 9'	139° 39'	1996.7.1 1997.3.25	国営霞ヶ浦用水農業水利事業千代川線実施に供なう事前調査	
	一本木2994-2 他5箇			15"	17"			
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
一本木遺跡	集落址	旧石器		石刀、縦長剣片、剥片			東側の畠地より双耳坏1点出土している。	
		縄文		縄文式土器(前期、中期、後晩期)				
		弥生		弥生式土器				
		古墳	住居跡	土師器(塊、甕)				
		奈良	住居跡	土師器(坏、甕)				
		平安	住居跡	須恵器(坏、甕)				
		近世	建物跡3 溝2条	上師器(坏、高台付坏、甕、甌) 須恵器(坏、蓋、盤、甕)				

図版1 第1号住居跡(SI-1) 実測図1

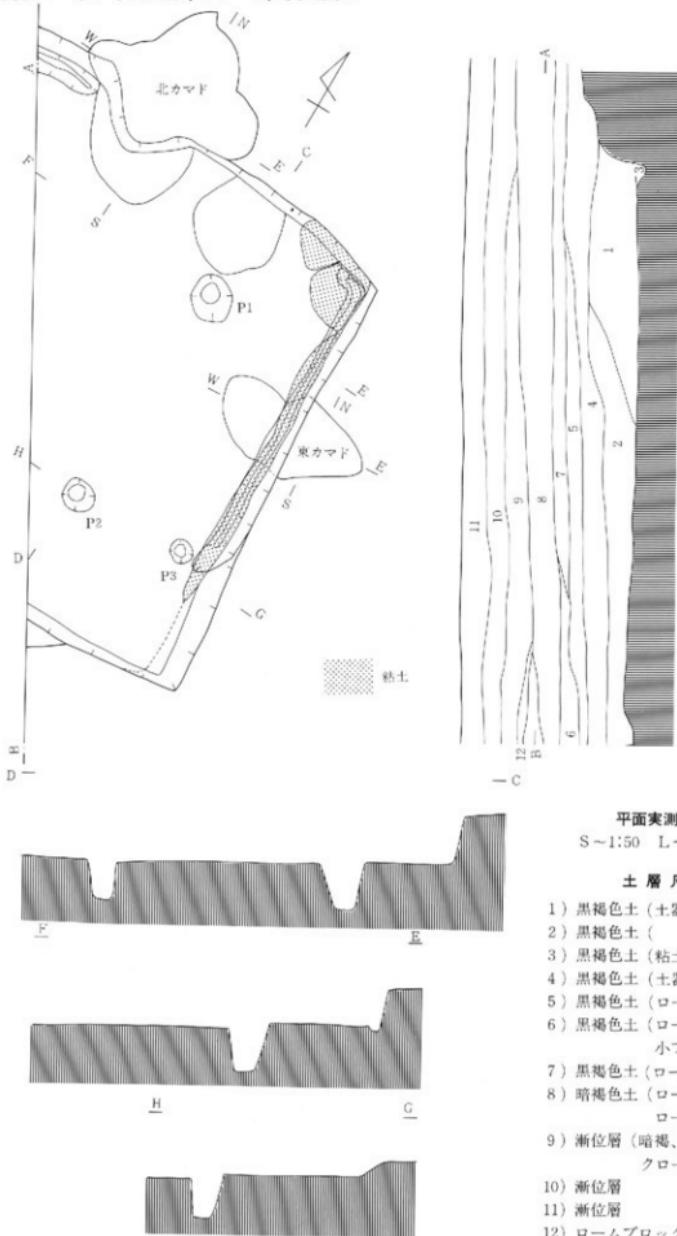


第1号住居跡(SI-1)

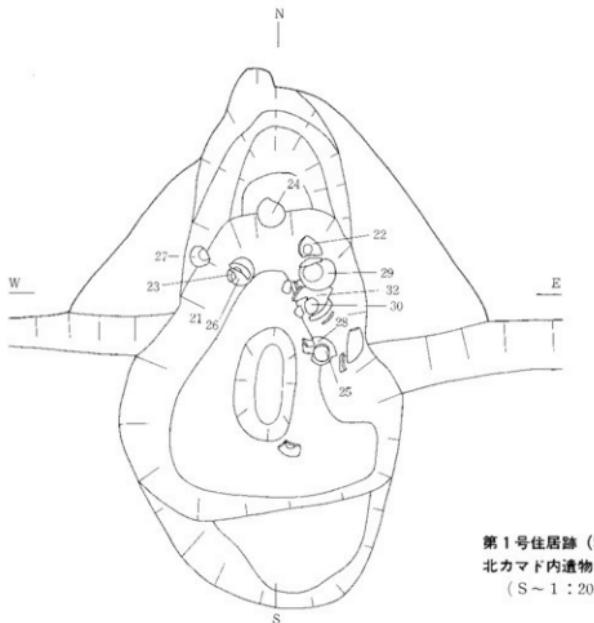
遺物出土状況図

S ~ 1 : 50

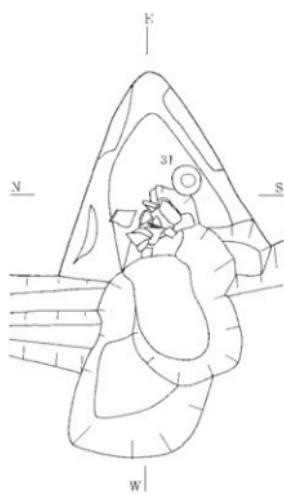
図版2 第1号住居跡(S 1-1) 実測図2



図版3 第1号住居跡(SI-1) カマド実測図1

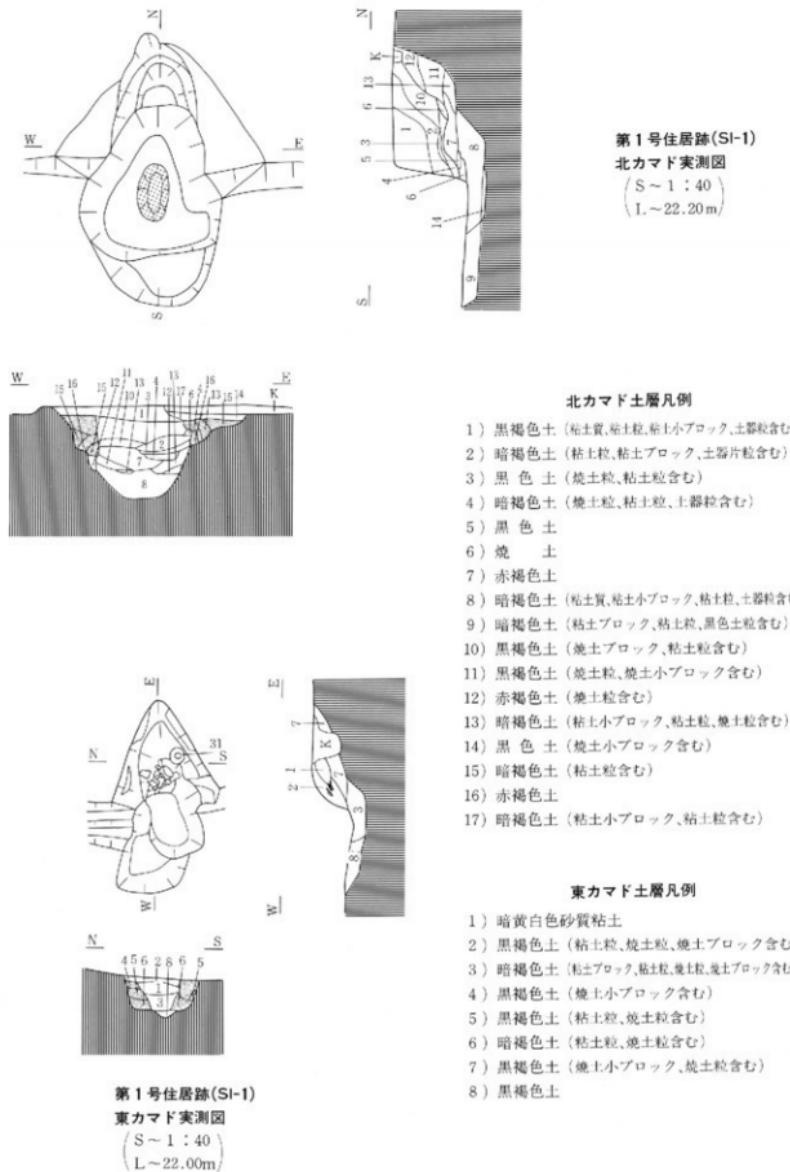


第1号住居跡(SI-1)
北カマド内遺物出土状況図
(S ~ 1 : 20)

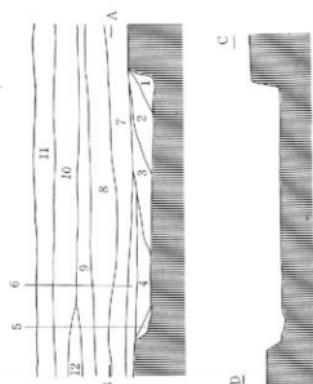
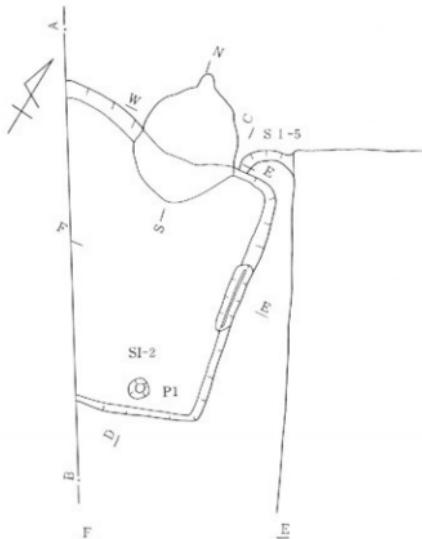


第1号住居跡(SI-1)
東カマド内遺物出土状況図
(S ~ 1 : 20)

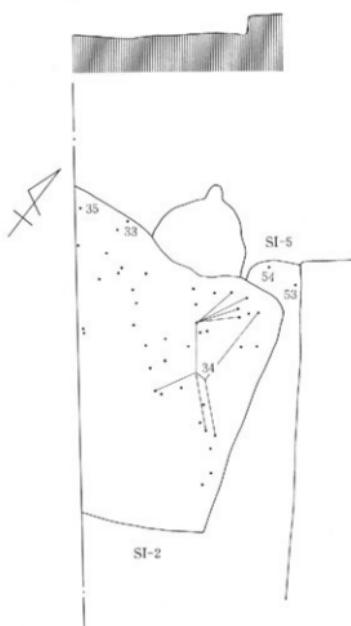
図版4 第1号住居跡(SI-1) カマド実測図2



図版5 第2号、5号住居跡 (SI-2、5) 実測図



第2号、5号住居跡 (SI-2、5) 実測図 $\left\{ \begin{array}{l} S \sim 1:50 \\ L \sim 22.50m \end{array} \right.$

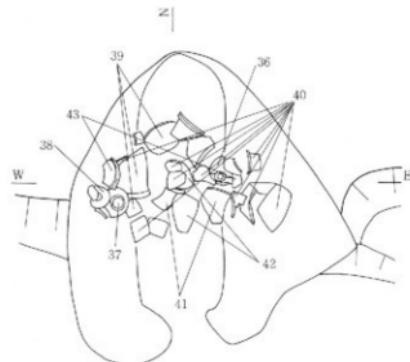


土層凡例

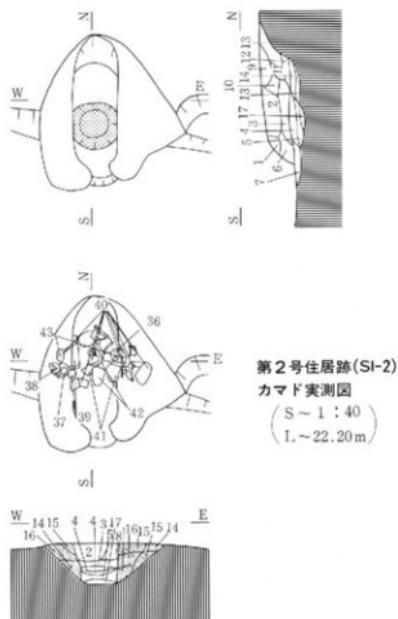
- 1) 黒褐色土 (土器粒含む)
- 2) 黒褐色土 (土器粒含む)
- 3) 黒褐色土 (粘土粒、土器粒含む)
- 4) 黑褐色土 (土器粒含む)
- 5) 黑褐色土 (ローム粒含む)
- 6) 黑褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 7) 黑褐色土 (ローム粒含む)
- 8) 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒含む)
- 9) 渐位層 (ロームブロック、ローム粒含む)
- 10) 渐位層
- 11) 渐位層
- 12) ロームブロック

第2号、5号住居跡 (SI-2、5) 遺物出土状況図
(S ~ 1:50)

図版6 第2号住居跡(SI-2) カマド実測図



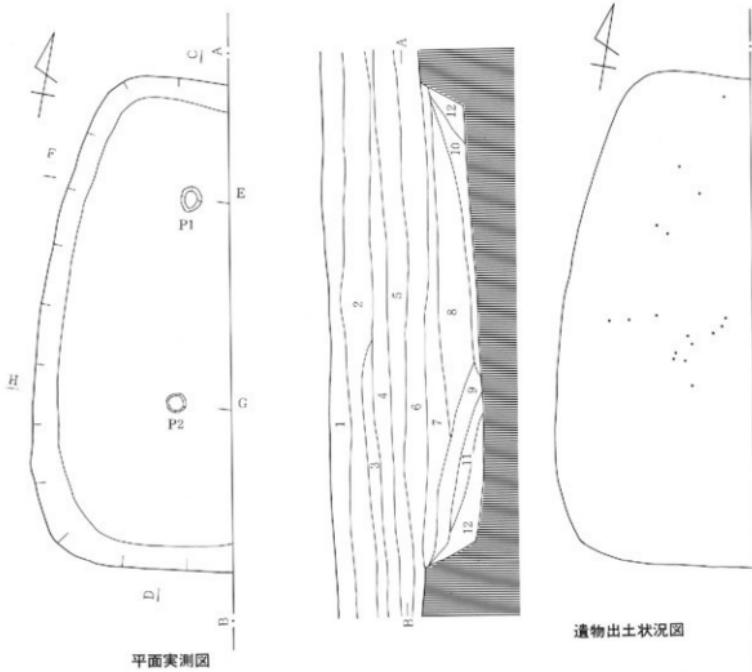
第2号住居跡(SI-2)
カマド内遺物出土状況図
(S ~ 1 : 20)



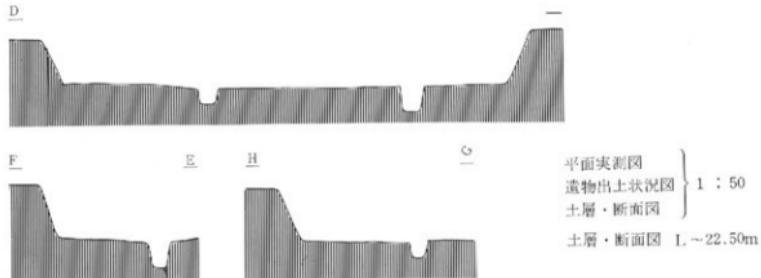
カマド土層凡例

- 1) 暗白色砂質粘土
- 2) 暗黒色土 (粘土粒、炭小ブロック含む)
- 3) 暗褐色土 (粘土粒、焼土粒、炭化物含む)
- 4) 焼 土
- 5) 赤褐色土
- 6) 黒褐色土 (粘土粒含む)
- 7) 黑褐色土 (粘土粒、焼土粒含む)
- 8) 黑 色 土 (粘土粒含む)
- 9) 暗白色砂質粘土 (暗褐色土含む)
- 10) 明黒褐色土 (粘土粒、土器粒含む)
- 11) 明黒褐色土 (土器粒含む)
- 12) 黑褐色土 (焼土粒、土器粒、粘土粒含む)
- 13) 明褐色土 (粘土質のローム、燒土粒含む)
- 14) 黑褐色土 (焼土粒、粘土粒含む)
- 15) 黑 色 土 (粘土粒含む)
- 16) 暗褐色土 (粘土粒含む)
- 17) 赤褐色土

図版7 第3号住居跡(SI-3) 実測図



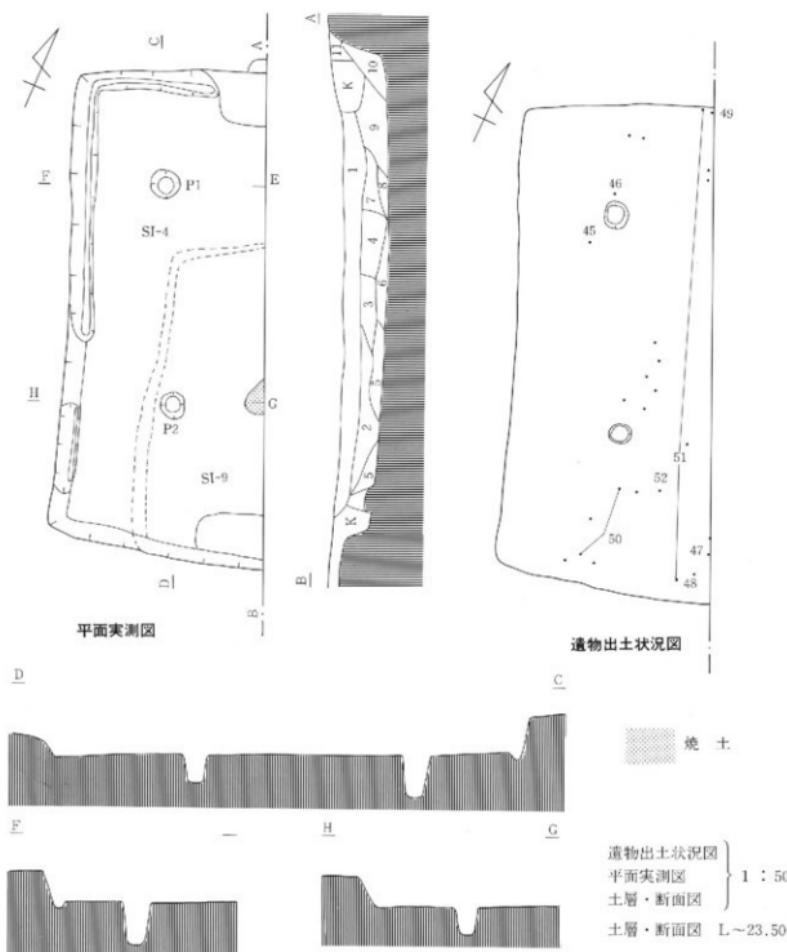
遺物出土状況図



土層凡例

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1) 耕作土 | 7) 黒色土 (ローム粒含む) |
| 2) 暗褐色土 (客土) | 8) 黑褐色土 (ロームブロック、ローム粒含む) |
| 3) 暗褐色土 (ロームブロック、客土含む) | 9) 黑褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む) |
| 4) 黑褐色土 | 10) 黒色土 (ローム粒含む) |
| 5) 黑褐色土 | 11) 暗褐色土 (ローム粒、ロームブロック含む) |
| 6) 黑褐色土 | 12) 黄褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む) |

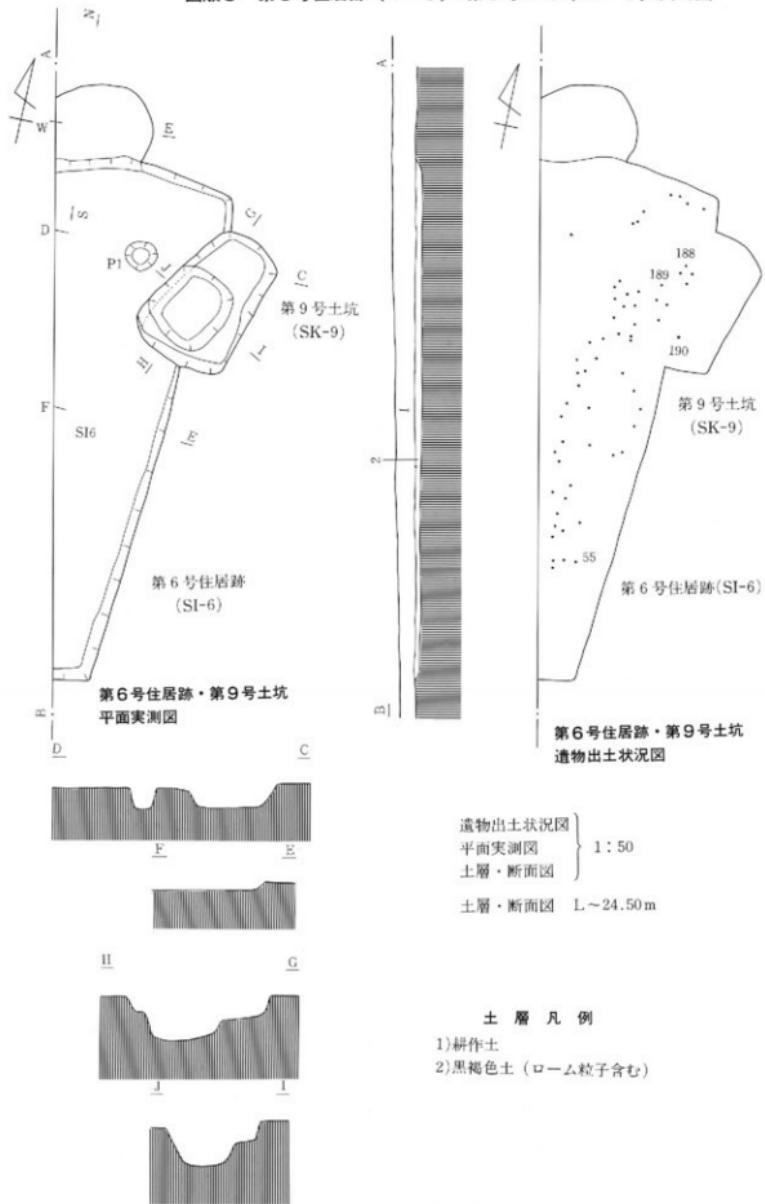
図版8 第4号、9号住居跡 (SI-4、9) 実測図



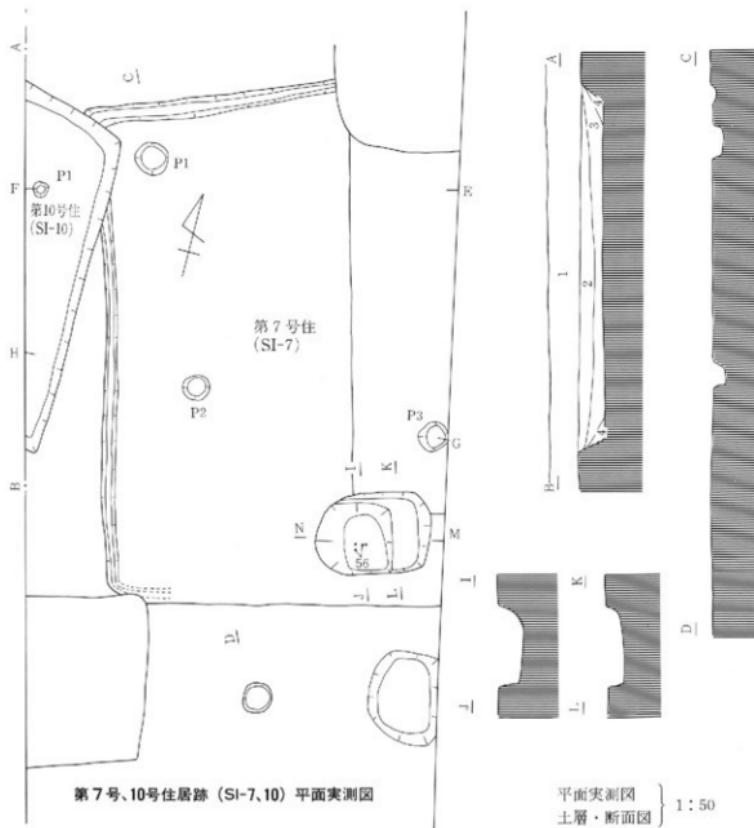
土層凡例

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1) 黒褐色土 (ローム粒、粘土ブロック含む) | 7) 黒褐色土 (粘土粒含む) |
| 2) 黒色土 (ローム粒含む) | 8) 黒褐色土 (粘土粒、炭化物含む) |
| 3) 黒褐色土 (ローム粒、粘土粒含む) | 9) 黒褐色土 (粘土粒、焼土粒含む) |
| 4) 黒褐色土 (ローム粒、粘土粒含む) | 10) 暗褐色土 (焼土粒、粘土粒含む) |
| 5) 黒褐色土 (焼土小ブロック含む) | 11) 暗茶褐色粒土 |
| 6) 黒褐色土 (粘土粒、粘土ブロック含む) | 12) K (擾乱) |

図版9 第6号住居跡(SI-6)・第9号土坑(SK-9)実測図



図版10 第7号、10号住居跡 (SI-7、10) 実測図



第7号、10号住居跡 (SI-7、10) 平面実測図

平面実測図
土層・断面図

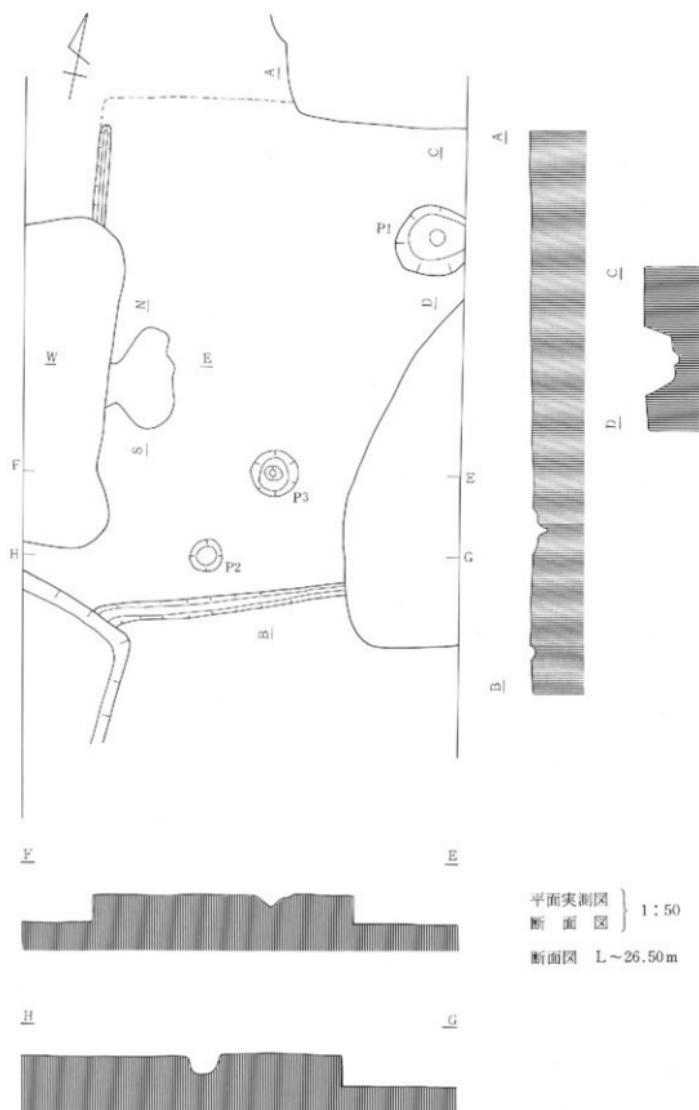
土層・断面図 L=24.00m

土層凡例

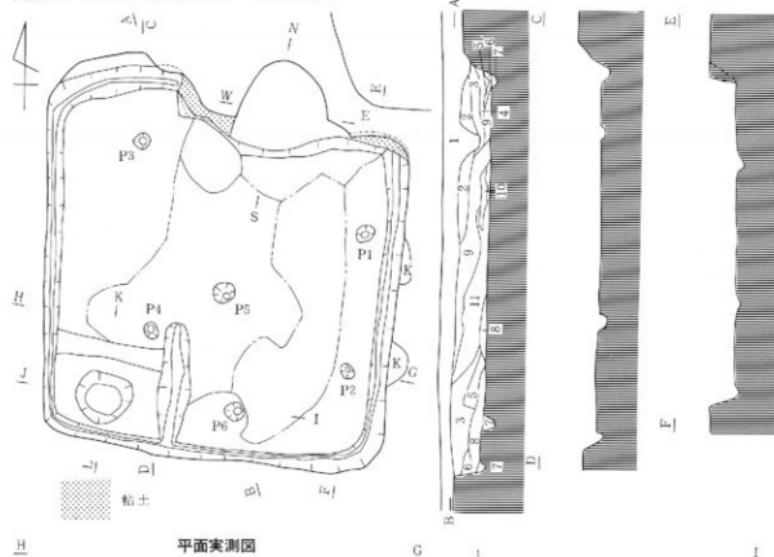
- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 3) 黒褐色土 (ローム粒含む)
- 4) 黒褐色土 (ロームブロック、ローム粒含む)



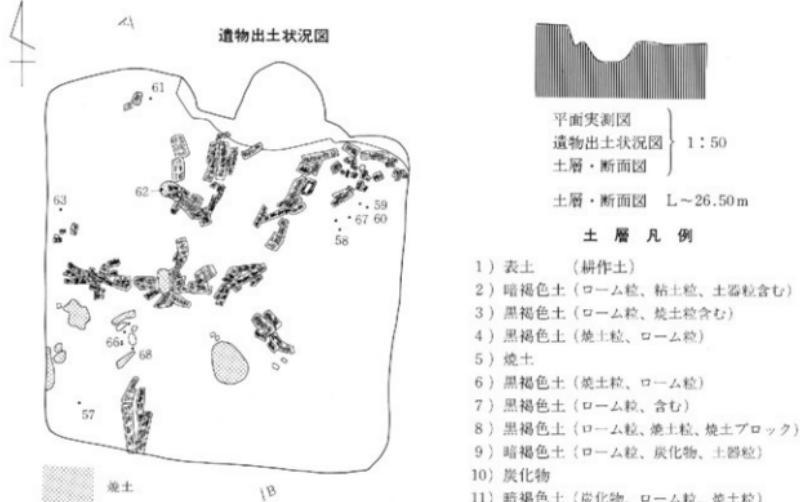
図版11 第8号住居跡（S I - 8）実測図



図版12 第11号住居跡 (SI-11) 実測図



平面実測図

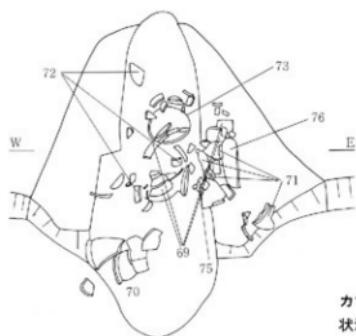


平面実測図
遺物出土状況図
土層・断面図

土層・断面図 L~26.50m

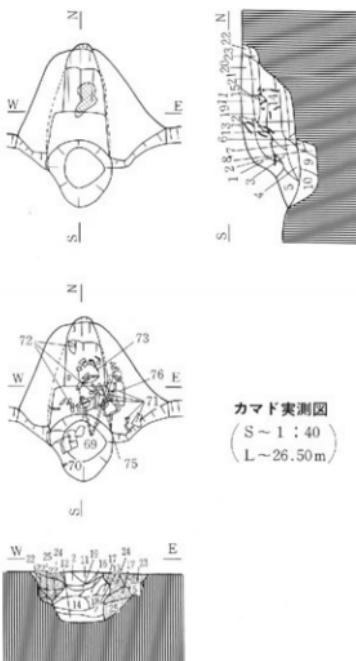
土層凡例

- 1) 表土 (耕作土)
- 2) 暗褐色土 (ローム粒、粘土粒、土器粒含む)
- 3) 黒褐色土 (ローム粒、焼土粒含む)
- 4) 黒褐色土 (焼土粒、ローム粒)
- 5) 焼土
- 6) 黑褐色土 (焼土粒、ローム粒)
- 7) 黑褐色土 (ローム粒、含む)
- 8) 黑褐色土 (ローム粒、焼土粒、焼土ブロック)
- 9) 暗褐色土 (ローム粒、炭化物、土器粒)
- 10) 炭化物
- 11) 暗褐色土 (炭化物、ローム粒、焼土粒)



カマド内遺物出土
状況実測図
(S ~ 1 : 20)

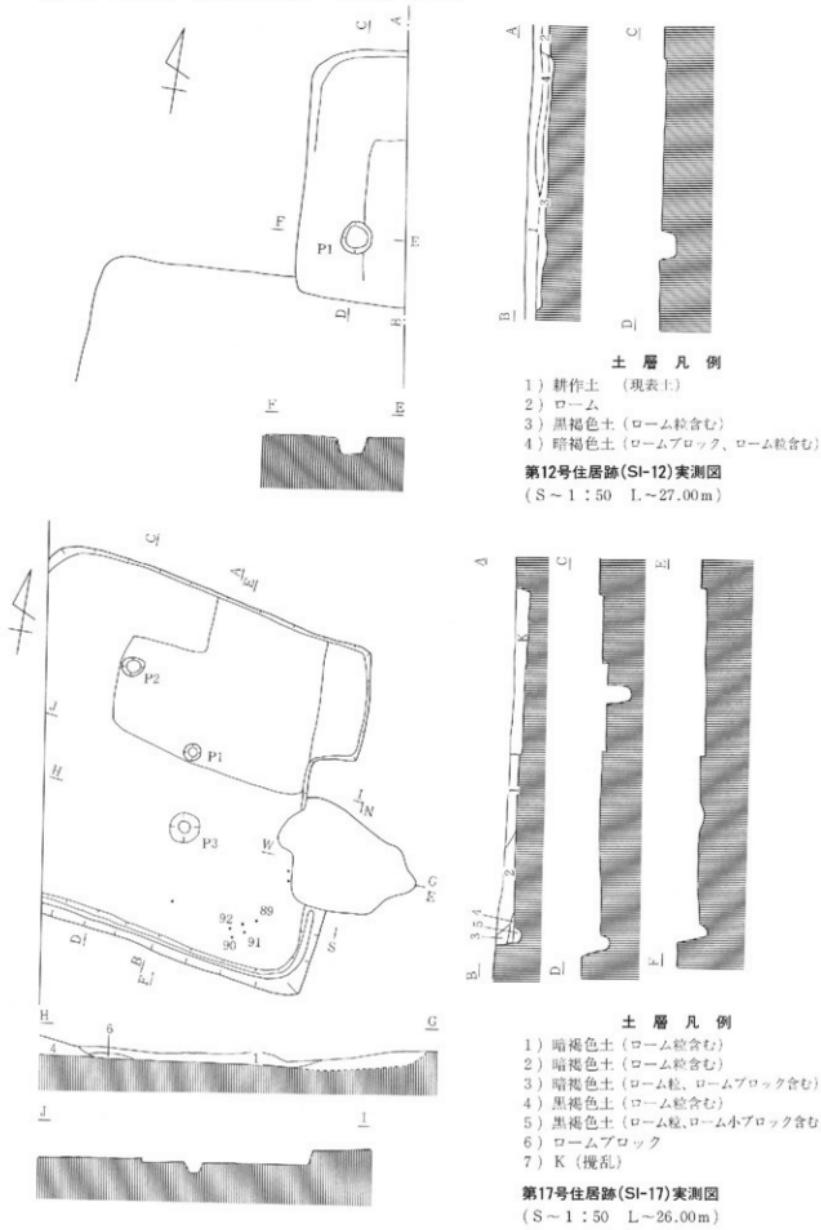
2



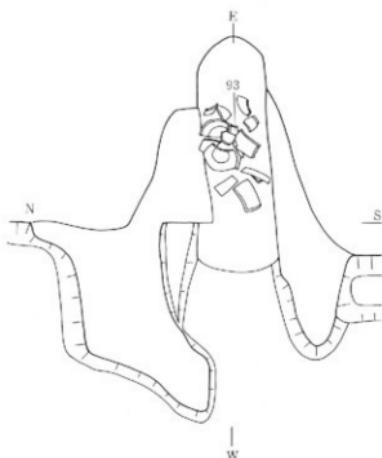
カマド土層凡例

- 1) 黒褐色土(粘土粒、炭化物、土器粒含む)
- 2) 黒褐色土(粘土粒、土器粒含む)
- 3) 黒褐色土(粘土粒、土器粒含む)
- 4) 黒色土(粘土粒、含む)
- 5) 黒色土(粘土粒、土器粒、ロームブロック含む)
- 6) 暗白色砂質粘土
- 7) 黄褐色土(ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 8) 黑色土(粘土粒、炭化物粒、粘土粒含む)
- 9) 黑色土(粘土粒、ローム小ブロック含む)
- 10) 黑色土(ロームブロック、ローム粒、粘土粒、粘土小ブロック含む)
- 11) 暗褐色土
- 12) 黑褐色土(粘土粒、粘土ブロック含む)
- 13) 黑褐色土(粘土ブロック、粘土粒含む)
- 14) 黑褐色土(焼土粒、焼土ブロック含む)
- 15) 暗白色砂質粘土
- 16) 暗褐色土(粘土粒、粘土ブロック含む)
- 17) 暗褐色土(焼土粒含む)
- 18) 暗褐色土(粘土粒、粘土ブロック含む)
- 19) 赤褐色土
- 20) 暗褐色土(粘土粒、焼土粒含む)
- 21) 黑褐色土(粘土粒、焼土粒含む)
- 22) 暗白色砂質粘土
- 23) 暗褐色土(粘土、粘土粒、炭含む)
- 24) 砂質粘土(炭化物、赤褐色粘土含む)
- 25) 砂質粘土(粘土粒子含む)

図版14 第12号、17号住居跡 (SI-12、17) 実測図



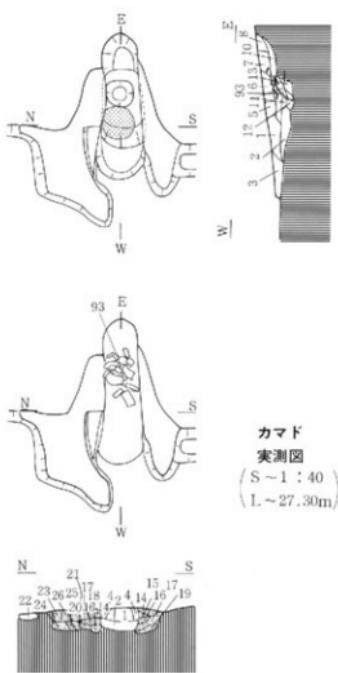
図版15 第17号住居跡 (SI-17) カマド実測図



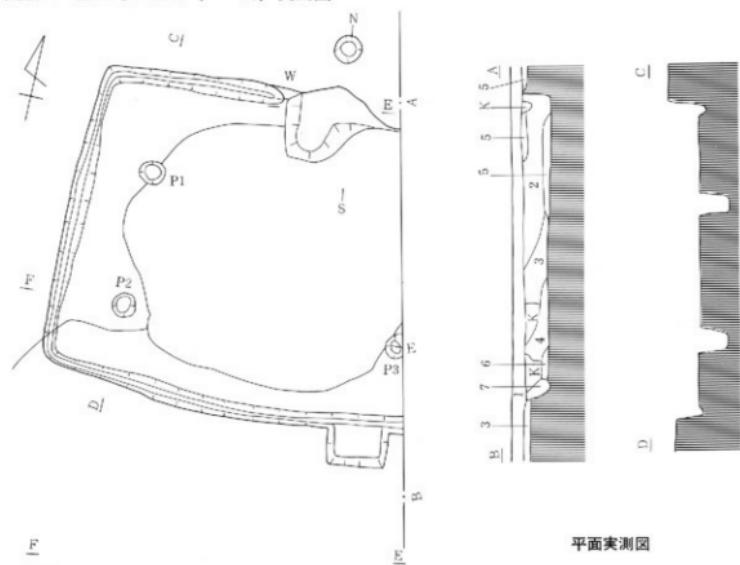
カマド内遺物出土状況図
(S - 1 : 20)

カマド土層凡例

- 1) 黒褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 2) 晴赤褐色土 (燒土粒子、含む)
- 3) 黒褐色土 (粘土粒、土器粒含む)
- 4) 暗赤褐色土 (砂質、燒土粒、燒土小ブロック含む)
- 5) 晴褐色土 (粘土粒子、燒土小ブロック含む)
- 6) 黒褐色土 (砂質、粘土粒子含む)
- 7) 暗褐色土 (砂質、粘土粒子、粘土小ブロック含む)
- 8) 晴褐色土 (燒土小ブロック、粘土粒含む)
- 9) 黑褐色土 (燒土小ブロック、粘土粒含む)
- 10) 暗褐色土 (粘土粒、燒土小ブロック含む)
- 11) 晴赤褐色土 (燒土粒含む)
- 12) 暗褐色土 (燒土粒含む)
- 13) 暗褐色土 (ローム粒、燒土小ブロック含む)
- 14) 暗白色砂質粘土
- 15) 暗褐色土 (砂質、粘土粒、土器粒含む)
- 16) 暗褐色土 (砂質、粘土粒、粘土ブロック含む)
- 17) 暗赤褐色粘土 (砂質、燒土粒、燒土小ブロック含む)
- 18) 暗赤褐色土 (砂質、燒土粒、粘土粒含む)
- 19) 暗褐色土 (粘土粒、ロームブロック含む)
- 20) 黑褐色土 (砂質、粘土粒、土器粒含む)
- 21) 黑褐色土 (粘土粒、含む)
- 22) 暗白色砂質粘土
- 23) 暗褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 24) 暗褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 25) 赤褐色土
- 26) ロームブロック



図版16 第13号住居跡(SI-13) 実測図



平面実測図



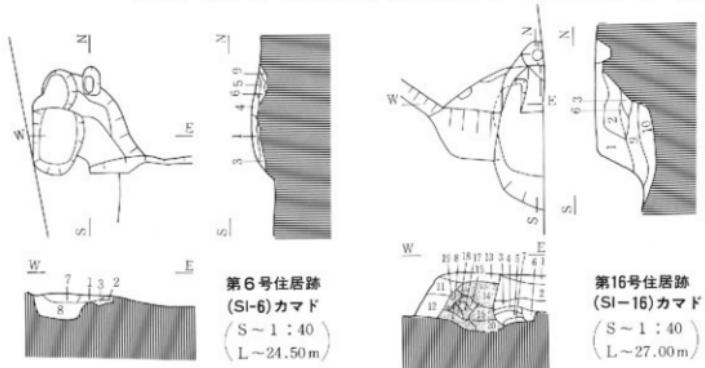
平面実測図
遺物出土状況図
土層・断面図

土層・断面図 L~27.00 m

土層凡例

- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土(ローム粒含む)
- 3) 黒褐色土(ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 4) 暗褐色土(ローム粒、土器粒子含む)
- 5) 暗褐色土(ローム粒、土器粒子含む)
- 6) ロームブロック
- 7) 黒褐色土(ローム粒含む)
- 8) K (擾乱)

図版17 第6号、8号、13号、16号住居跡 (SI-6.8.13.16) カマド実測図



第6号住居跡カマド土層凡例

- 1) 砂質粘土
- 2) 黒褐色土 (幾上粒、粘土粒含む)
- 3) 黒色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 4) 黑褐色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 5) 黄褐色土 (土器粒、粘土粒含む)
- 6) 黄褐色土 (燒土ブロック、燒土粒含む)
- 7) 黑褐色土 (粘土粒、燒土粒含む)
- 8) 黑褐色土 (粘土粒、粘土小ブロック、燒土粒含む)
- 9) ロームブロック

第8号住居跡カマド土層凡例

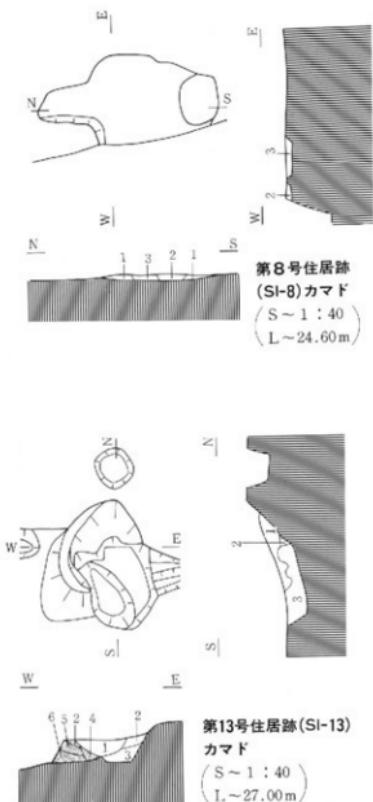
- 1) 黒褐色土 (粘土粒、燒土粒含む)
- 2) 黑褐色土 (粘土粒、燒土小ブロック含む)
- 3) 掘乱

第13号住居跡カマド土層凡例

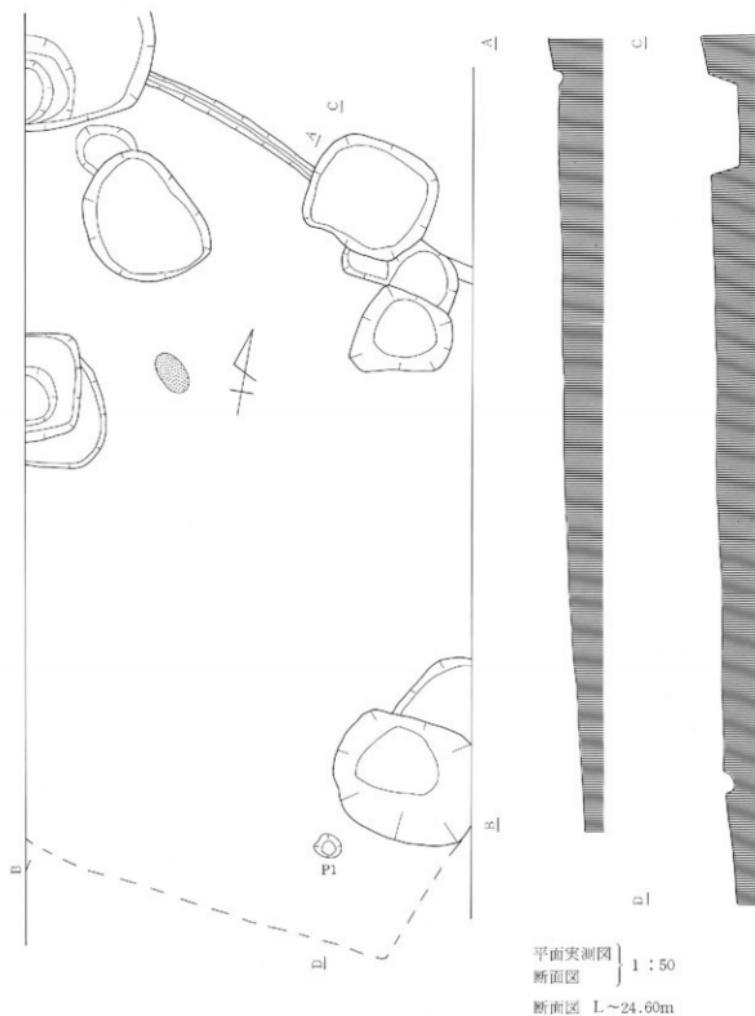
- 1) 黒褐色土 (粘土粒含む、擾乱)
- 2) 黑褐色土 (幾上粒、粘土粒含む)
- 3) 黄褐色土 (ローム粒含む)
- 4) 黑褐色土 (粘土粒、粘土小ブロック含む)
- 5) 黄褐色土 (ロームブロック、黒褐色土含む)
- 6) 喙褐色土 (ロームブロック、ローム粒、埋土含む)

第16号住居跡カマド土層凡例

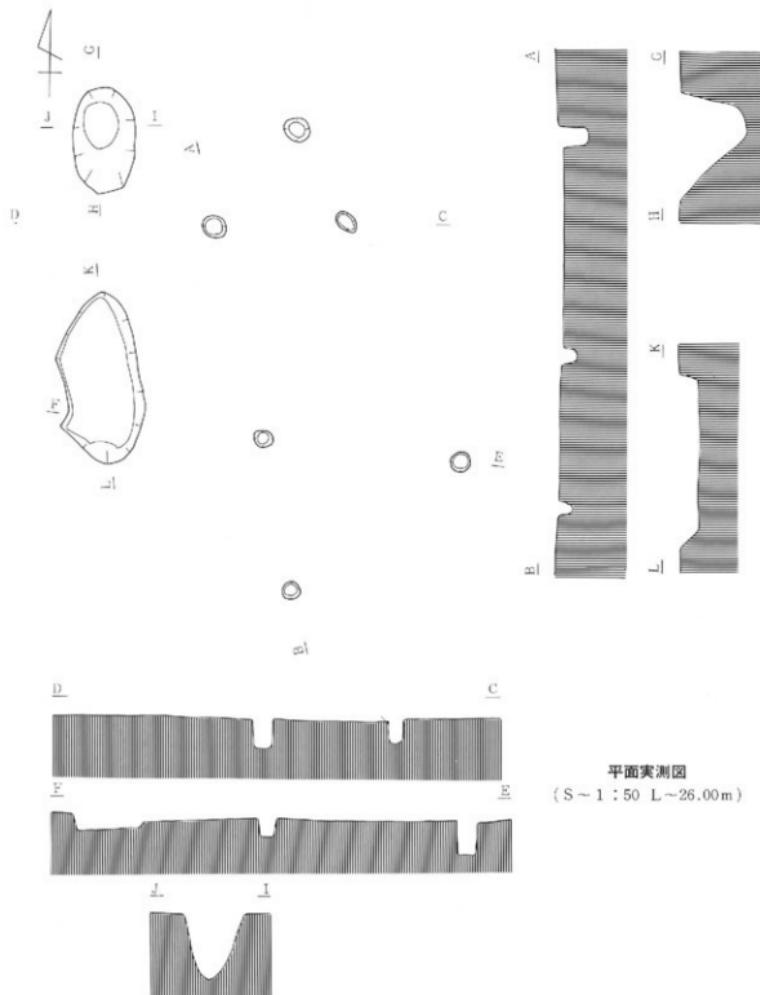
- 1) 黑褐色土 (粘土粒、土器粒含む)
- 2) 黑褐色土 (砂質、粘土粒、粘土小ブロック、ロームブロック含む)
- 3) 喙褐色土 (幾上粒、粘土粒、粘土ブロック、炭化物含む)
- 4) 黑褐色土 (幾上小ブロック、粘土粒、燒土粒含む)
- 5) 赤褐色土 (燒土粒、燒土ブロック含む)
- 6) 喙褐色土 (粘土粒、粘土ブロック含む)
- 7) 喙褐色土 (粘土粒、燒土粒含む)
- 8) ローム
- 9) 黑褐色土 (砂質、粘土粒、粘土小ブロック含む)
- 10) 黑褐色土 (粘土粒、ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 11) 黑色土 (ローム粒、粘土粒含む)
- 12) 喙褐色土 (ローム粒、粘土粒含む)
- 13) 黑褐色土 (粘土粒、砂粒含む)
- 14) 黑褐色土 (砂質、粘土粒、ローム小ブロック含む)
- 15) 黑褐色土 (粘土粒、燒土粒含む)
- 16) 黑褐色土 (粘土粒、炭化土粒、燒土ブロック含む)
- 17) 黑褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 18) 黑褐色土 (砂質、砂質粘土ブロック、粘土粒含む)
- 19) 黑褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 20) 黑褐色土 (粘土粒含む)
- 21) 掘乱



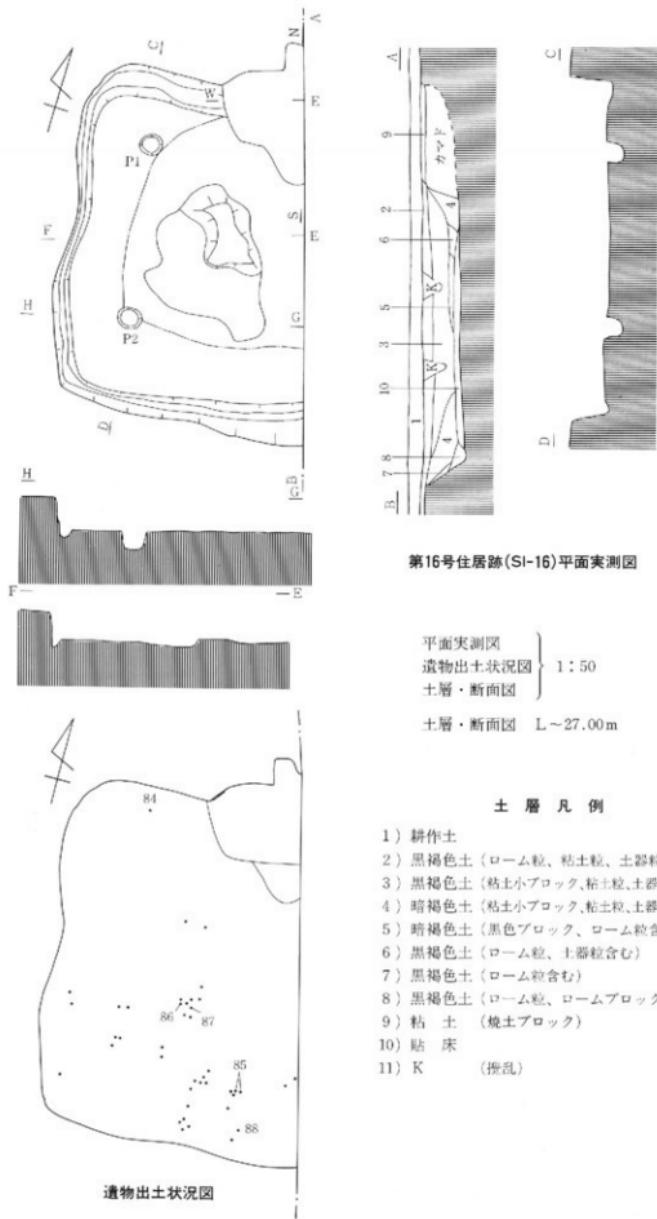
図版18 第14号住居跡 (SI-14) 実測図



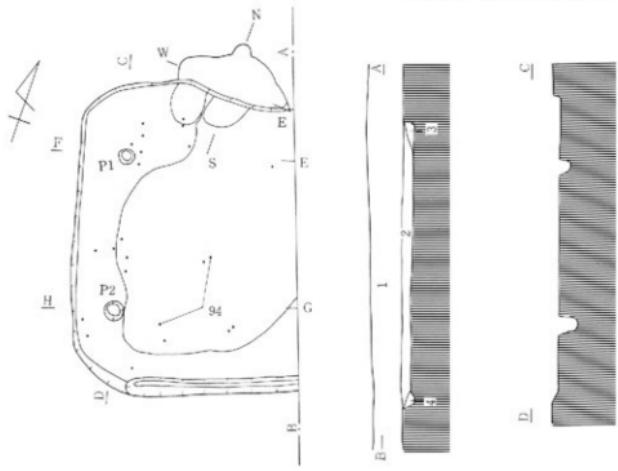
図版19 第15号住居跡 (SI-15) 実測図



図版20 第16号住居跡(SI-16)実測図



図版21 第18号住居跡 (SI-18) 実測図

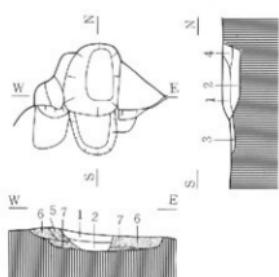


第18号住居跡 (SI-18) 平面図
(S ~ 1 : 50、L ~ 26.90m)



土層凡例

- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック、土器粒含む)
- 3) 黑褐色土 (粘土粒、粘土小ブロック、ローム粒含む)
- 4) 暗褐色土 (ローム粒含む)

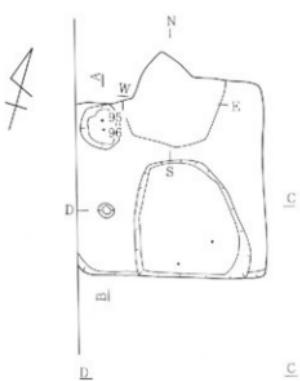


カマド土層凡例

- 1) 暗褐色土 (砂質、粘土粒、焼土小ブロック含む)
- 2) 暗褐色土 (ロームブロック、粘土粒、燒土粒含む)
- 3) 暗褐色土 (ローム小ブロック、粘土ブロック、粘土粒含む)
- 4) 黄褐色土 (粘土粒、褐色土含む)
- 5) 赤褐色砂質粘土
- 6) 暗白色砂質粘土
- 7) 黄褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)

第18号住居跡 (SI-18) カマド
(S ~ 1 : 40、L ~ 26.00m)

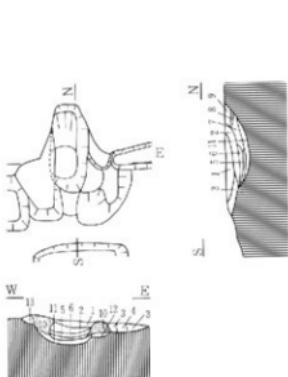
図版22 第19号住居跡 (SI-19) 実測図



第19号住居跡(SI-19)

実測図

(S ~ 1 : 50)
(L ~ 25.80 m)



第19号住居跡(SI-19)

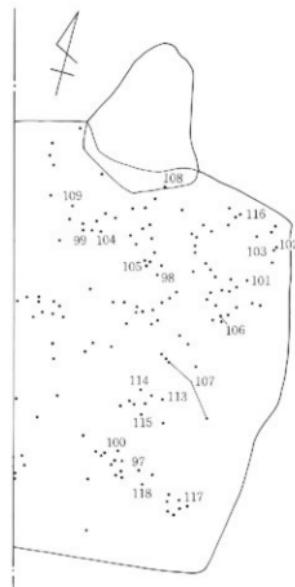
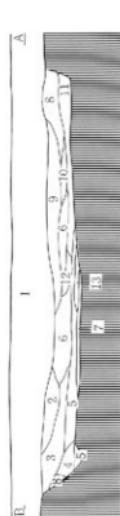
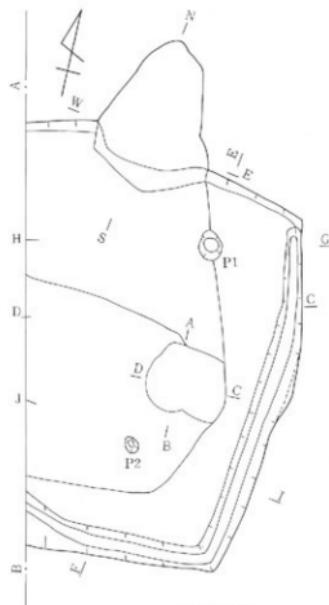
カマド実測図

(S ~ 1 : 40)
(L ~ 25.70 m)

カマド土層凡例

- 1) 黒褐色土(燒土粒含む)
- 2) 赤褐色土(燒土粒含む)
- 3) 黒色土(燒土ブロック含む)
- 4) 黄褐色土(分解ローム、混乱)
- 5) 暗褐色土(粘土粒、粘土小ブロック)
- 6) 黑褐色土(燒土粒含む)
- 7) 黑褐色土(粘土粒含む)
- 8) 暗白色粘土(砂質、黒色土粒含む)
- 9) 黄褐色土(ローム、粘土粒含む)
- 10) 暗白色砂質粘土
- 11) 黑褐色土(ローム小ブロック、燒土小ブロック、粘土含む)
- 12) 暗褐色土(ロームブロック、ローム粒、褐色土含む)
- 13) 暗褐色土(明、少量の粘土粒、焼土粒含む)

図版23 第20号住居跡 (SI-20) 実測図

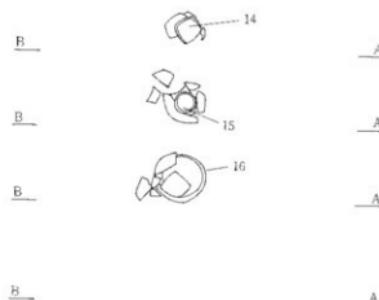
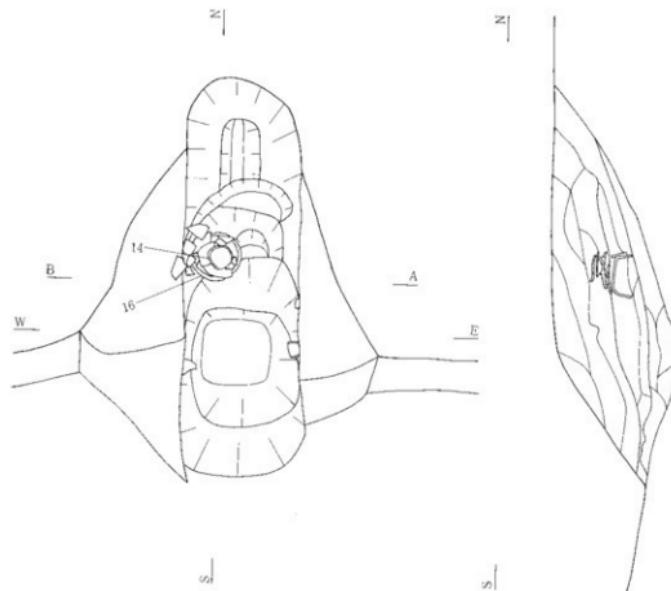


平面実測図
遺物出土状況図
土層・断面図 } 1:50
土層・断面図 L~25, 60m

土層凡例

- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土 (成土粒、焼土小ブロック含む)
- 3) 黒褐色土 (焼土粒含む)
- 4) 暗褐色土 (ローム粒含む)
- 5) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 6) 赤褐色土 (焼土粒、焼土ブロック含む)
- 7) 暗白色粘土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 8) 暗褐色土 (ローム粒、粘土質、粘土小ブロック含む)
- 9) 黑褐色土 (燒土粒、ローム粒、燒土小ブロック含む)
- 10) 黑色土 (焼土粒含む)
- 11) 黑褐色土 (燒土粒、粘土質、燒土小ブロック含む)
- 12) 赤褐色土 (焼土粒、白灰含む)
- 13) 黑色土 (燒土粒含む)
- 14) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)

図版24 第20号住居跡 (SI-20) カマド実測図 1

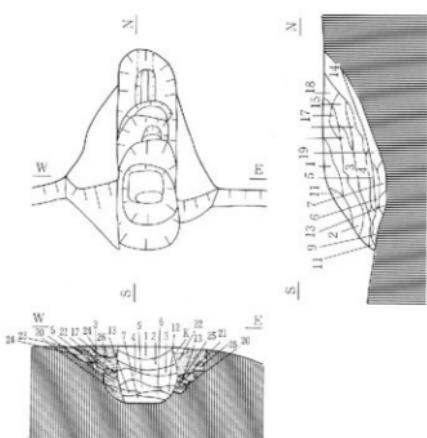


第20号住居跡
(SI-20)
カマド内遺物
出土状況図
(S ~ 1 : 20)

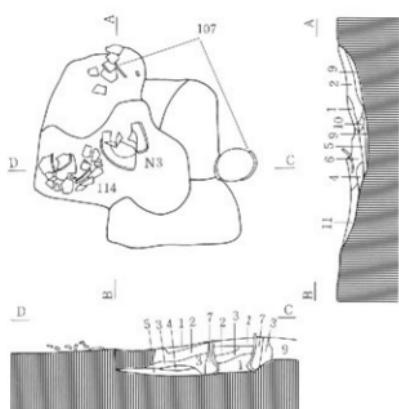


—A— 25.20m

図版25 第20号住居跡（SI-20）カマド実測図2



第20号住居跡（SI-20）カマド実測図
(S ~ 1 : 40、L ~ 25.60m)



第20号住居跡（SI-20）旧カマド実測図
(S ~ 1 : 40、L ~ 25.00m)

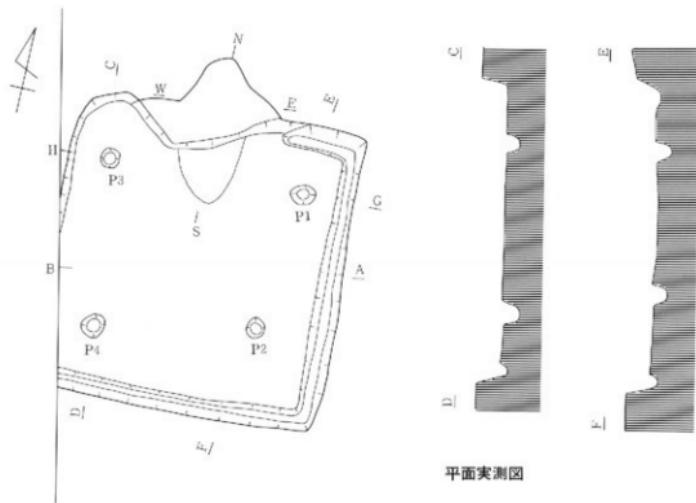
第20号住居跡カマド土層凡例

- 1) 暗褐色土（砂質粘土小ブロック、土器粒含む）
- 2) 暗褐色土（砂質粘土粒、土器粒、粘土小ブロック含む）
- 3) 暗白色砂質粘土—天井部
- 4) 黒褐色土（燒土粒、燒土小ブロック、粘土粒含む）
- 5) 赤褐色土（燒土）
- 6) 暗白色砂質粘土
- 7) 黑褐色土（分解している）
- 8) 暗褐色土（粘土粒、燒土粒含む）
- 9) 黑色土（燒土粒含む）
- 10) 暗褐色土（粘土粒含む）
- 11) 暗褐色土
- 12) 暗褐色土（粘土粒、燒土粒含む）
- 13) 黑褐色土（燒土粒子含む）
- 14) 赤褐色土（燒土ブロック、粘土粒含む）
- 15) 赤褐色土（燒土ブロック、黑色土含む）
- 16) 暗白色砂質粘土
- 17) 暗赤褐色土（燒土ブロック、粘土粒含む）
- 18) 暗褐色土（燒土小ブロック砂粒含む）
- 19) 暗褐色土（粘土ブロック、粘土粒含む）
- 20) 暗褐色土（粘土粒含む）
- 21) 暗赤褐色土（燒土粒含む）
- 22) 暗褐色土（燒土粒、粘土小ブロック、砂粒含む）
- 23) 暗褐色土（砂質、粘土粒含む）
- 24) 暗褐色土（粘土粒、粘土ブロック含む）
- 25) L B (ロームブロック)
- 26) 掘乱

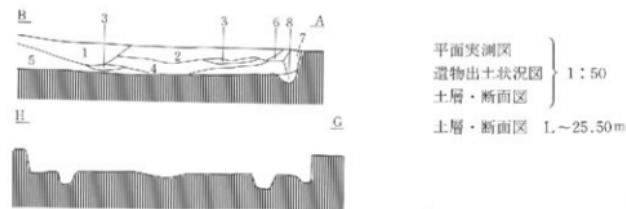
第20号住居跡旧カマド土層凡例

- 1) 黄白色粘土
- 2) 赤褐色土（燒土小ブロック、燒土粒含む）
- 3) 黑褐色土（灰、燒土粒、粘土粒含む）
- 4) 燃土（燒土ブロック含む）
- 5) 暗褐色土（ロームブロック、灰含む）
- 6) 黑色土（燒土粒、粘土粒含む）
- 7) 黑色土（燒土粒、粘土粒含む）
- 8) 黑褐色土（燒土粒、粘土粒、ロームブロック含む）
- 9) 暗褐色土（灰床、ロームブロック、ローム粒含む）
- 10) 粘土（灰、白色粘土、褐色土含む）
- 11) 黑色土（白色粘土粒、燒土ブロック含む）

図版26 第21号住居跡 (SI-21) 実測図



平面実測図



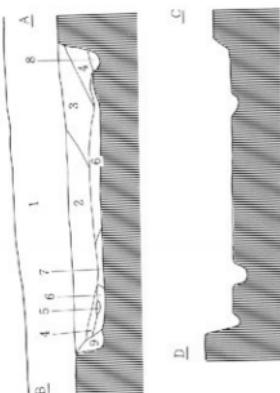
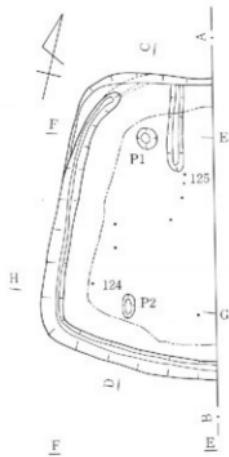
土層凡例

- 1) 黒色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 2) 暗褐色土 (ローム粒含む)
- 3) 暗褐色土 (ローム粒、粘土小ブロック、粘土粒含む)
- 4) 暗褐色土 (ローム粒、粘土小ブロック、粘土粒含む)
- 5) 黑褐色土 (ローム粒、ロームブロック含む)
- 6) 黑褐色土 (ローム粒、ロームブロック含む)
- 7) 黑褐色土 (ローム粒含む)
- 8) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック、粘土粒含む)



遺物出土状況図

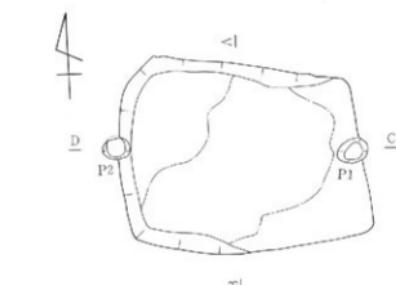
図版27 第22号、38号住居跡 (SI-22, 38) 実測図



土層凡例

- 1) 稲作土
- 2) 黒褐色土(ローム粒含む)
- 3) 黒褐色土(ローム粒含む)
- 4) 黒褐色土(ローム粒含む)
- 5) 焼土
- 6) 黒褐色土(ローム粒、炭化物粒、焼土粒含む)
- 7) 炭化物
- 8) 暗褐色土(ローム粒、ロームブロック含む)
- 9) 黄褐色土

第22号住居跡 (SI-22) 実測図 (S ~ 1 : 50)
(L ~ 25.50 m)

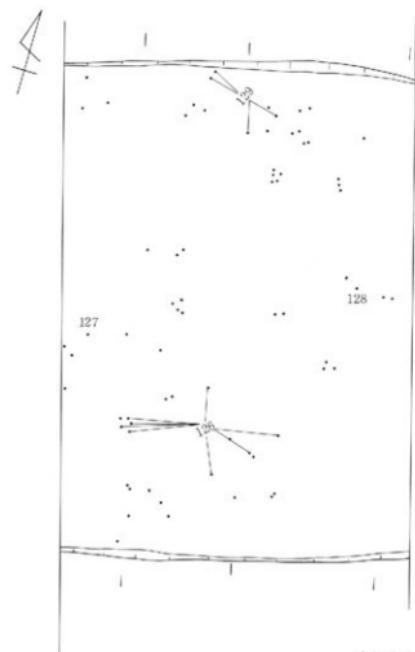


土層凡例

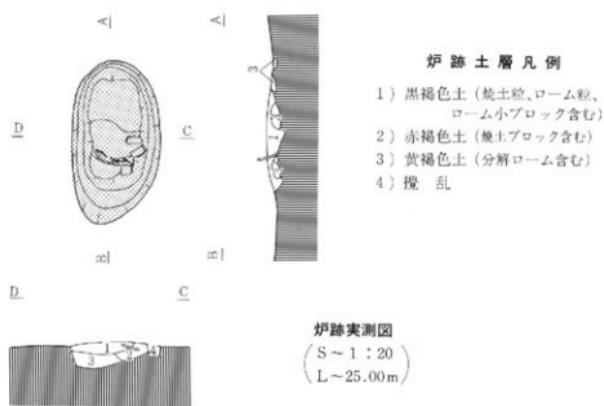
- 1) 黒色土
(ローム粒子、ロームブロック含む)

第38号住居跡 (SI-38) 実測図
(S ~ 1 : 20)
(L ~ 22.20 m)

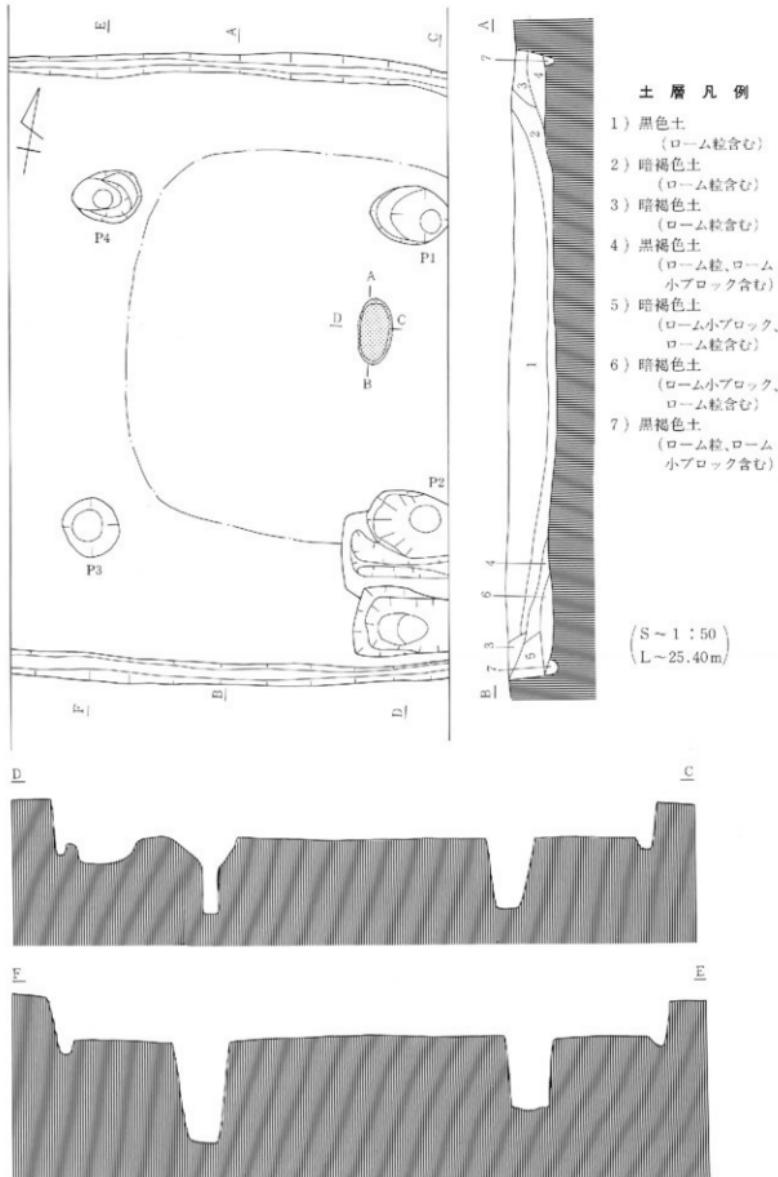
図版28 第23号住居跡(SI-23) 遺物出土状況、炉跡実測図



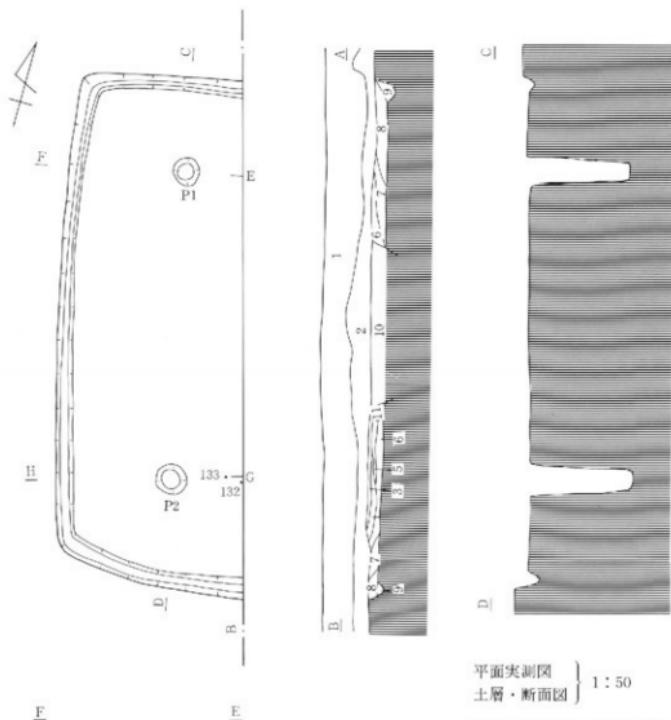
遺物出土状況図
(S ~ 1 : 50)



図版29 第23号住居跡 (SI-23) 実測図

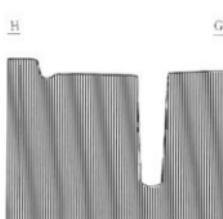
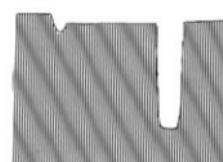


図版30 第24号住居跡(SI-24) 実測図

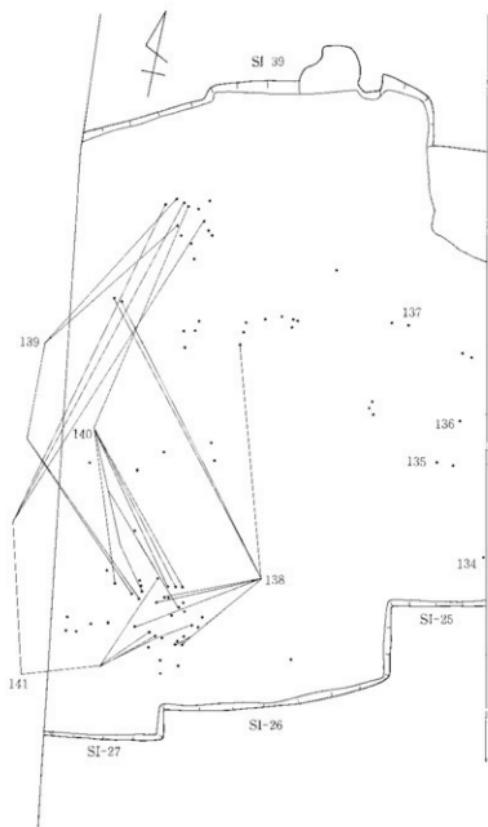


土層凡例

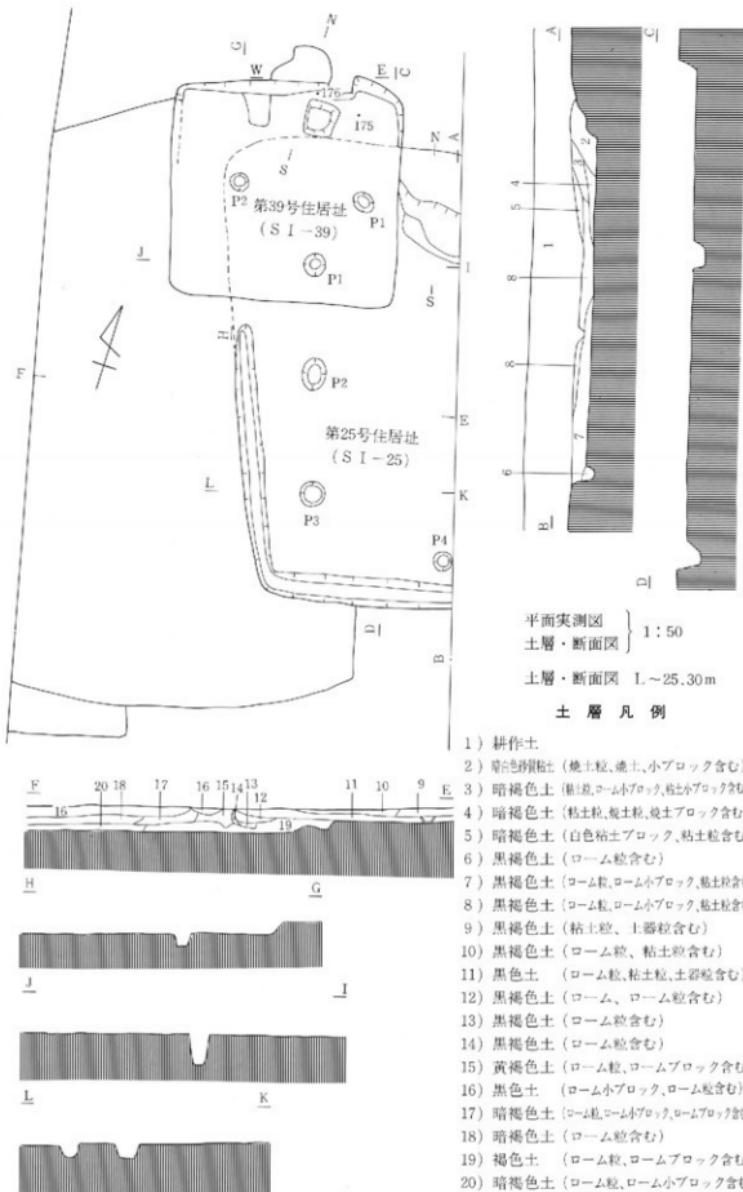
- 1) 耕作土
- 2) 暗褐色土 (粘土粒、土器粒、ローム粒含む)
- 3) 黒色土 (ローム粒、粘土粒含む)
- 4) 焼土
- 5) 黑褐色土 (ローム粒、焼土粒含む)
- 6) 暗褐色土 (焼土粒、ローム粒含む)
- 7) 暗褐色土 (粘土粒、ローム粒含む)
- 8) 黑褐色土 (ローム粒、粘土粒含む)
- 9) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 10) 黒色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 11) 黒色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)



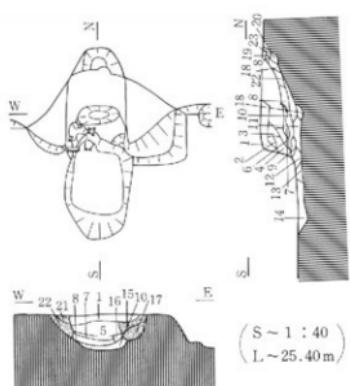
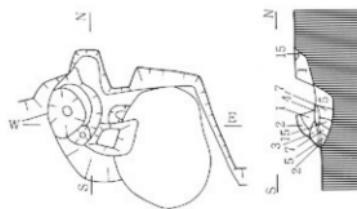
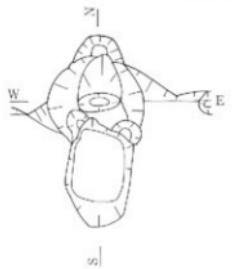
図版31 第25号・26号・27号・39号住居跡（SI-25・26・27・39）遺物出土状況図



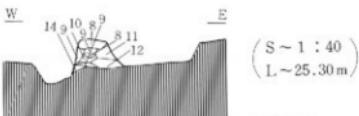
図版32 第25号、39号住居跡 (S I - 25, 39) 実測図



図版33 第21号、第25号、39号住居跡 (SI-21, 25, 39) カマド実測図



第21号住居跡 (SI-21) カマド実測図



第39号住居跡 (SI-39) カマド実測図

第21号住居跡 (SI-21) カマド土層凡例

- 1) 暗褐色土 (耕作土)
- 2) 砂質粘土
- 3) 黒褐色土 (粘土粒含む)
- 4) 黑褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 5) 黑褐色土 (粘土粒、焼土ブロック、砂質含む)
- 6) 暗褐色土 (粘土粒、焼土粒含む)
- 7) 赤褐色土 (焼土ブロック、焼土粒含む)
- 8) 黑褐色土 (粘土粒、焼土粒含む)
- 9) 黑褐色土 (焼土粒含む)
- 10) 赤褐色土 (焼土粒、焼土粒含む)
- 11) 黑褐色土 (焼土粒含む)
- 12) 暗褐色土 (粘土粒、焼土粒含む)
- 13) 黑褐色土 (粘土粒、ローム粒含む)
- 14) 鮎白色砂質粘土
- 15) 黑褐色土 (乾土粒、粘土小ブロック含む)
- 16) 赤褐色土 (乾土粒、粘土粒、燒土小ブロック含む)
- 17) 黑褐色土 (粘土、ブロック、燒土小ブロック含む)
- 18) 暗褐色土 (粘土粒含む)
- 19) 赤褐色土 (ブロック状をなす)
- 20) 黑色土 (粘土質含む)
- 21) 晴褐色土 (ロームブロック、ローム粒、燒土粒含む)
- 22) 黑褐色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 23) 掘乱

第39号住居跡 (SI-39) カマド土層凡例

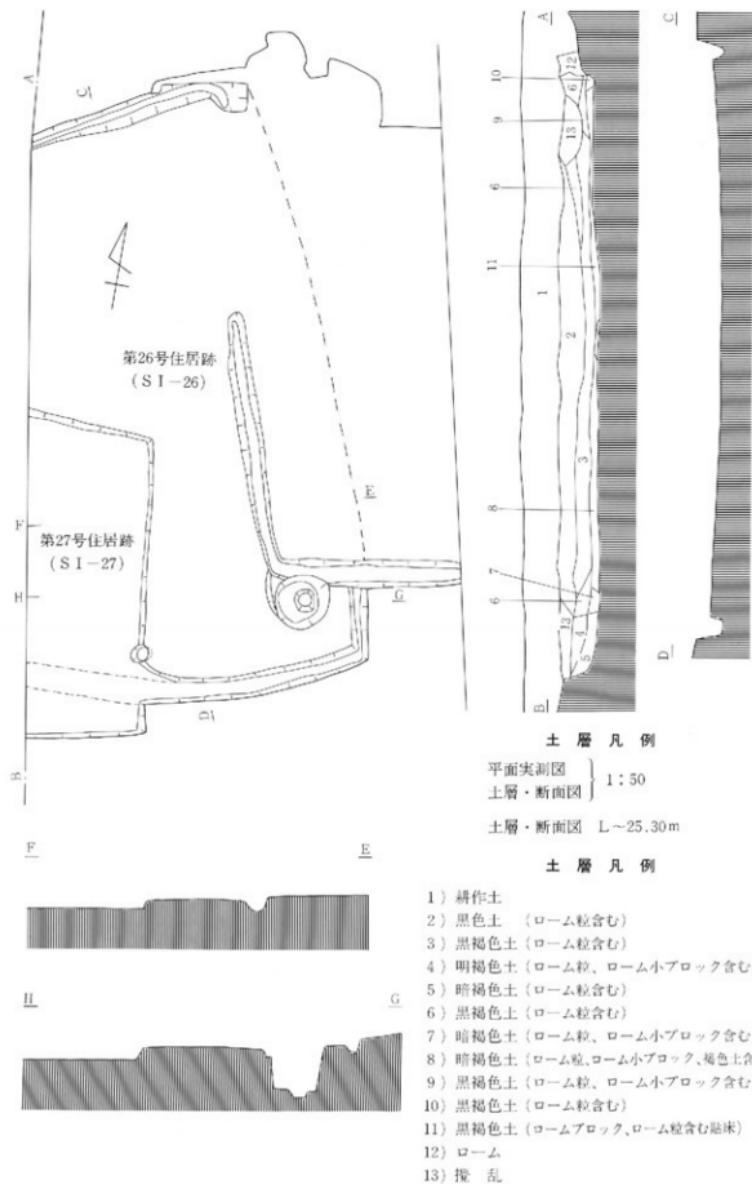
- 1) 黑褐色土 (砂質、粘土粒、焼土粒含む)
- 2) 鮎白色砂質粘土
- 3) 黑色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 4) 晴褐色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 5) 暗褐色土
- 6) 黑褐色土 (燒土粒含む)
- 7) 黄褐色土 (黑色土含む)
- 8) 鮎白色砂質粘土
- 9) 黑色土 (砂質、粘土粒含む)
- 10) 黑色土 (砂質、粘土粒含む)
- 11) 黑色土 (砂質、粘土粒含む)
- 12) 黑色土 (粘土粒、焼土ブロック炭化物粒含む)
- 13) 黑色土 (8と9の1層)
- 14) 黑色土 (8と9の2層)
- 15) ロームブロック
- 16) 掘乱

第25号住居跡 (SI-25) カマド土層凡例

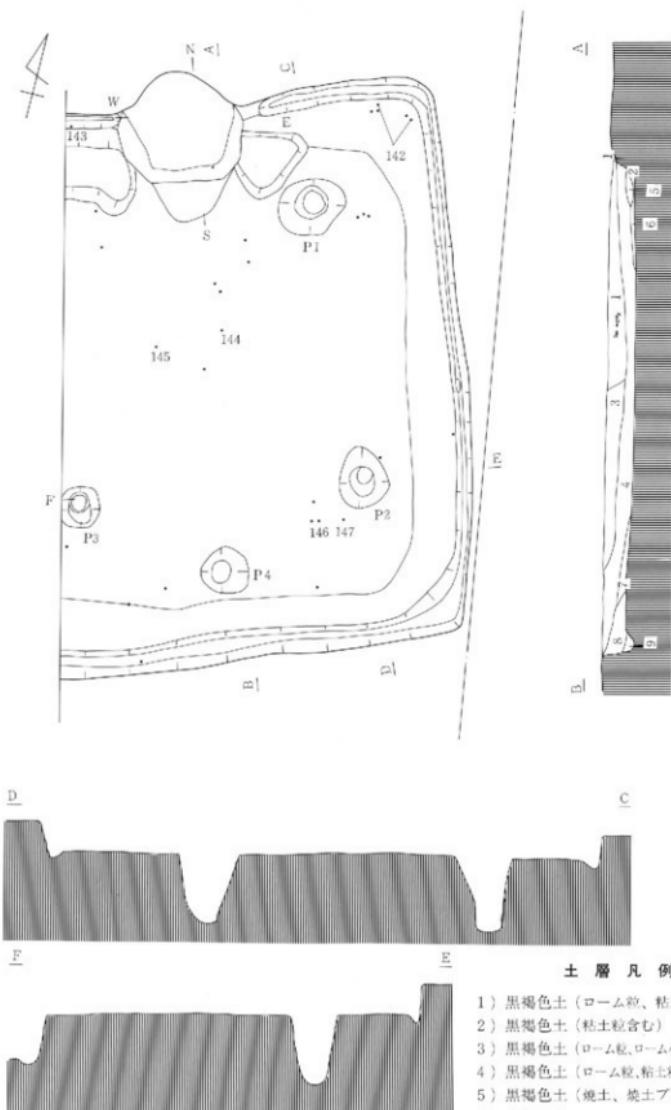
- 1) 赤褐色土 (焼土ブロック、焼土粒含む)
- 2) 黑褐色土 (焼土小ブロック、砂粒含む)
- 3) 黑色土 (燒土ブロック、燒土粒、燒土粒含む)
- 4) 暗褐色土 (燒土ブロック、燒土粒、砂粒含む)
- 5) 晴褐色土 (粘土粒、燒土ブロック、砂粒含む)
- 6) 黑褐色土 (燒土粒、粘土ブロック、粘土粒含む)
- 7) 暗褐色土 (分解)
- 8) 暗褐色土 (分解)

- 9) 燃土 (分解)
- 10) 暗褐色土 (粘土粒、燒土小ブロック、砂粒含む)
- 11) 赤褐色土 (砂質、粘土粒含む)
- 12) 晴褐色土 (燒土粒、ローム粒)
- 13) 黄褐色土 (燒土粒含む)
- 14) 黑色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 15) ローム

図版34 第26号、27号住居跡 (SI-26, 27) 実測図



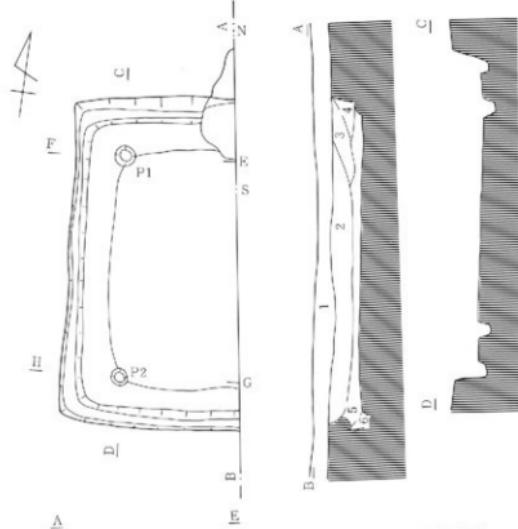
図版35 第28号号住居跡（S 1-28）実測図



平面実測図
土層・断面図 1:50 土層・断面図 L~25.30m

- 1) 黒褐色土（ローム粒、粘土粒含む）
- 2) 黒褐色土（粘土粒含む）
- 3) 黒褐色土（ローム粒、ローム小ブロック含む）
- 4) 黒褐色土（ローム粒、粘土粒、土器粒含む）
- 5) 黒褐色土（焼土、焼土ブロック含む）
- 6) 白色粘土
- 7) 暗褐色土（ローム粒含む）
- 8) 黑色土（ローム粒、ローム小ブロック含む）
- 9) 黑色土（ローム粒含む）

図版36 第29号住居跡（S I -29）実測図



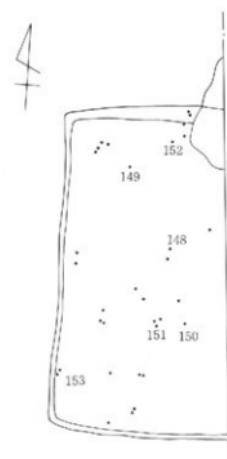
遺構実測図



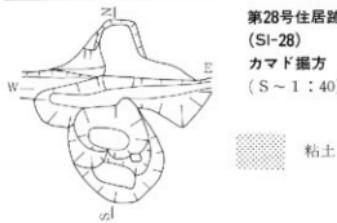
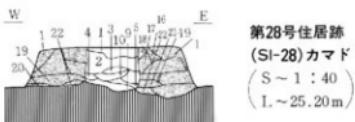
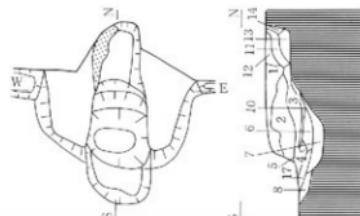
第29号住居跡土層凡例

- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック、粘土粒、土器粒含む)
- 3) 黒褐色土 (粘土粒、ローム粒含む)
- 4) 黒褐色土 (粘土粒、焼土粒含む)
- 5) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 6) 黒色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)

遺物出土状況図



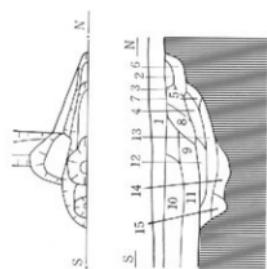
図版37 第28号、29号住居跡 (SI-28, 29) カマド実測図



第28号住居跡
(SI-28) カマド
(S ~ 1 : 40)
(L ~ 25.20 m)

第28号住居跡
(SI-28)
カマド掘方
(S ~ 1 : 40)

粘土



第29号住居跡
(SI-29) カマド
(S ~ 1 : 40)
(L ~ 25.20 m)



第29号住居跡
(SI-29)
カマド掘方
(S ~ 1 : 40)

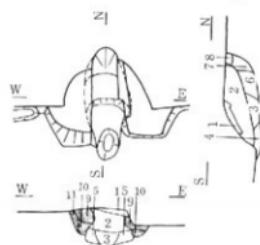
第28号住居跡カマド土層凡例

- 1) 明黒褐色土 (焼土小ブロック、焼土ブロック含む)
- 2) 赤褐色土 (焼土ブロック、焼土粒、粘土粒、粘土含む)
- 3) 赤褐色土 (焼土粒、焼土ブロック含む)
- 4) 黒褐色土 (焼土小ブロック、焼土粒、粘土粒含む)
- 5) 黑褐色土 (焼土小ブロック、焼土粒含む)
- 6) 黑褐色土 (ローム小ブロック、粘土粒、焼土粒含む)
- 7) 暗褐色土 (ローム小ブロック、ローム粒、焼土粒含む)
- 8) 黑褐色土 (ロームブロック、ローム粒含む)
- 9) 暗褐色土 (白色砂質粘土ブロック、焼土粒含む)
- 10) 焼土ブロック
- 11) 暗褐色土 (焼土粒、焼土ブロック含む)
- 12) 明黒色土 (焼土粒、粘土粒含む)
- 13) 暗褐色土 (粘土粒、ローム小ブロック含む)
- 14) 暗褐色土 (粘土粒含む)
- 15) 砂質粘土
- 16) 黑褐色土 (砂粒多含む)
- 17) 赤褐色土 (焼土小ブロック、焼土粒含む)
- 18) 黑褐色土 (焼土小ブロック、粘土粒、焼土粒含む)
- 19) 暗褐色土 (粘土粒、ロームブロック、ローム粒含む)
- 20) 黑褐色土 (粘土粒含む)
- 21) ロームブロック
- 22) 黑褐色土 (ローム粒、粘土粒含む)
- 23) 黑褐色土 (粘土粒、粘土ブロック、ローム小ブロック含む)

第29号住居跡カマド土層凡例

- 1) 表土 (現耕作土)
- 2) 砂質粘土 (黄白色)
- 3) 暗褐色土 (粘土粒、焼土粒含む)
- 4) 暗赤褐色土 (焼土小ブロック、焼土粒、粘土粒含む)
- 5) 暗白色砂質粘土
- 6) 黑褐色土 (焼土粒含む)
- 7) 黑褐色土 (粘土粒含む)
- 8) 黑褐色土 (粘土粒、粘土ブロック含む)
- 9) 黑褐色土 (粘土小ブロック含む)
- 10) 黑褐色土 (粘土粒、土器粒、ローム粒含む)
- 11) 黑褐色土 (粘土粒、粘土小ブロック、ローム粒含む)
- 12) 黑褐色土 (焼土小ブロック、焼土粒含む)
- 13) 暗褐色土 (粘土ブロック、粘土粒含む)
- 14) 暗褐色土 (砂質粘土粒、焼土粒含む)
- 15) 黑褐色土 (粘土粒、粘土ブロック、焼土粒含む)

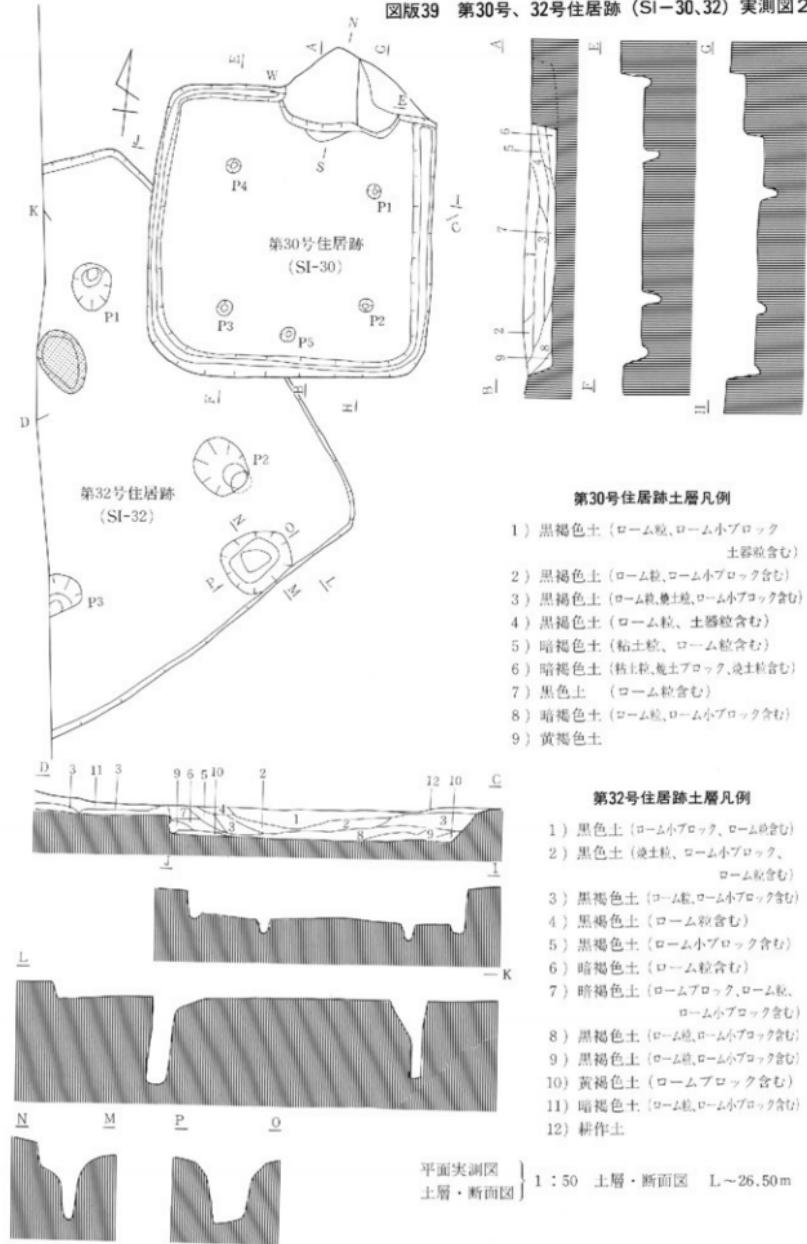
図版38 第30号、32号住居跡 (SI-30, 32) 実測図1



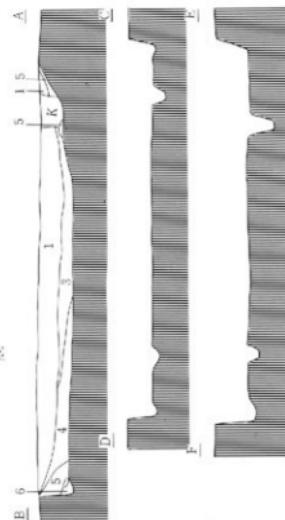
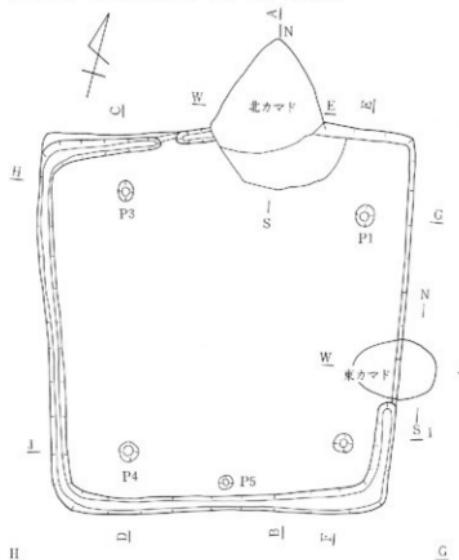
土層凡例

- 1) 黒色土 (多量の粘土粒子を含む)
- 2) 暗黄白色粘土 (砂質)
- 3) 黒褐色土 (少量の粘土小ブロック、粘土粒)
- 4) 暗褐色土 (粘土粒、少量の粘土小ブロック)
- 5) 暗赤褐色土 (少量の粘土粒、粘土粒、明)
- 6) 明黒褐色土 (ごく少量のローム小ブロック、粘土粒、明)
- 7) 黑褐色土 (ごく少量の粘土小ブロックを含み(すんでいる))
- 8) 黑褐色土 (粘土粒、粘土ブロックがランされている)
- 9) 砂質粘土
- 10) 黑褐色土 (少量の粘土粒、塊土粒)
- 11) 暗褐色土 (粘土粒、ローム小ブロック、粘土小ブロック)

図版39 第30号、32号住居跡 (SI-30,32) 実測図2



図版40、第31号住居跡 (SI-31) 実測図



平面実測図



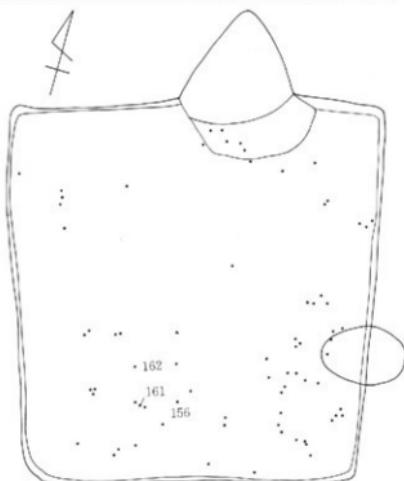
平面実測図
遺物出土状況図
土層・断面図

土層・断面図 L~25.00m

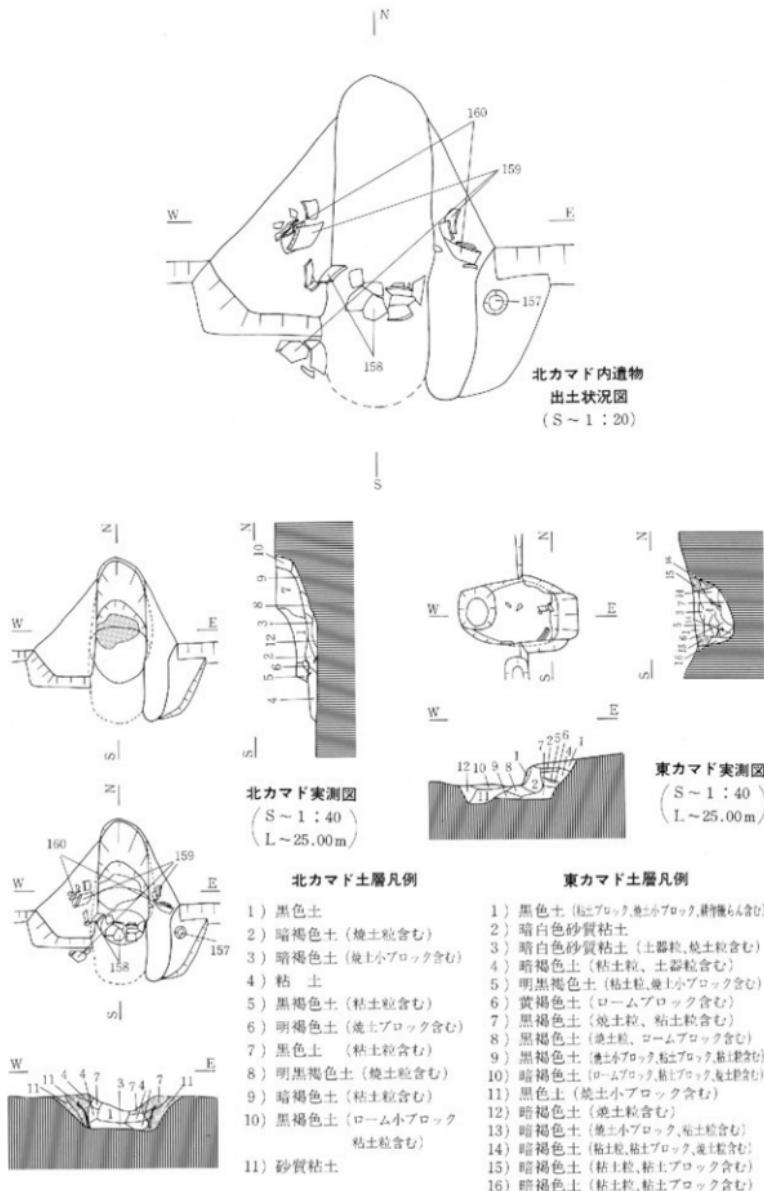
土層凡例

- 1) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック、土器粒含む)
- 2) 黑褐色土 (粘土粒子、ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 3) 黒褐色土 (粘土粒子、ローム粒含む)
- 4) 暗褐色土 (粘土粒子、ロームブロック含む)
- 5) 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒含む)
- 6) 暗褐色土 (ロームブロック、ローム粒含む)
- 7) K (擾乱)

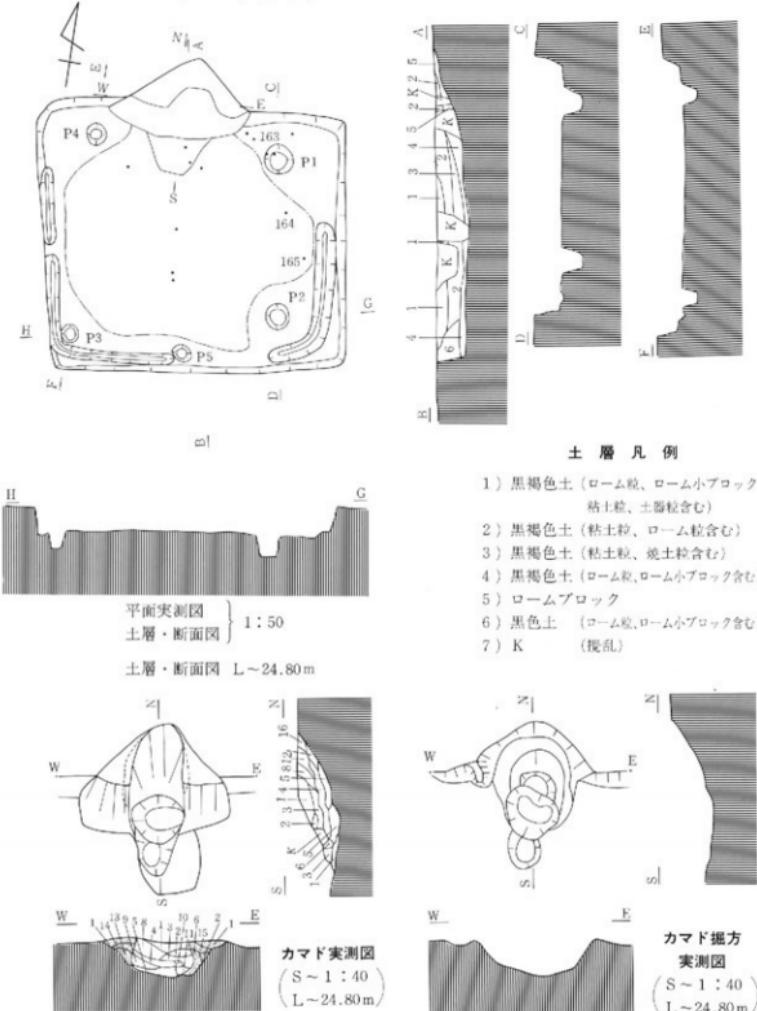
遺物出土状況図



図版41 第31号住居跡 (SI-31) カマド実測図



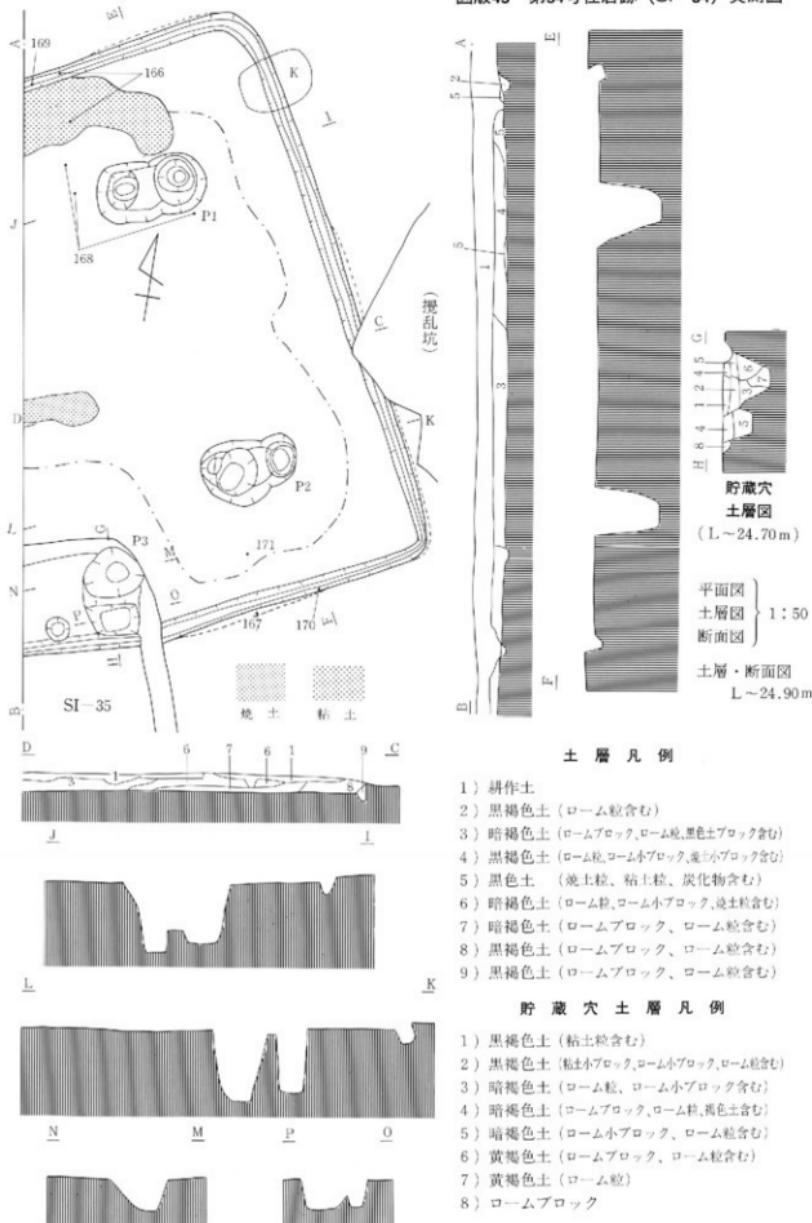
図版42 第33号住居跡 (SI-33) 実測図



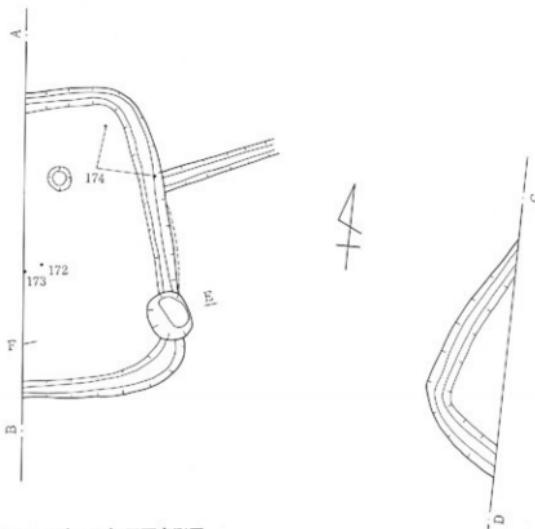
カマド土層凡例

- 1) 黒褐色土 (粘土粒含む)
- 2) 黄白色砂質粘土
- 3) 明黒褐色土 (燒土粒、粘土粒、炭化植物粒含む)
- 4) 赤褐色土 (燒土小ブロック、粘土粒含む)
- 5) 黑褐色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 6) 黄褐色土 (ロームブロック、粘土粒、燒土粒含む)
- 7) 黑褐色土 (燒土粒、燒土小ブロック含む)
- 8) 黑褐色土 (粘土小ブロック、燒土小ブロック含む)
- 9) 黄褐色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 10) 明黒褐色土 (粘土粒含む)
- 11) 黄褐色土 (ロームブロック含む)
- 12) 晴褐色土 (粘土粒含む)
- 13) 明黒褐色土 (燒土粒、粘土粒、粘土ブロック含む)
- 14) 暗褐色土 (燒土粒、粘土粒含む)
- 15) 暗褐色土 (粘土粒、燒土粒、褐色土含む)
- 16) 黑褐色土 (燒土小ブロック、粘土粒含む)

図版43 第34号住居跡 (SI-34) 実測図



図版44 第35号、36号住居跡 (SI-35,36) 実測図

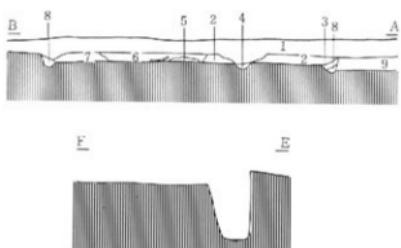


第35号住居跡 (SI-35) 平面実測図

平面図
土層・断面図 } 1:50
土層・断面図 L~24.90m

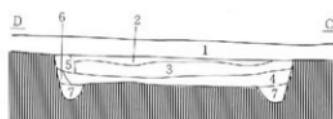
第36号住居跡 (SI-36) 平面実測図

平面図
土層・断面図 } 1:50
土層・断面図 L~24.90m



第35号住居跡土層凡例

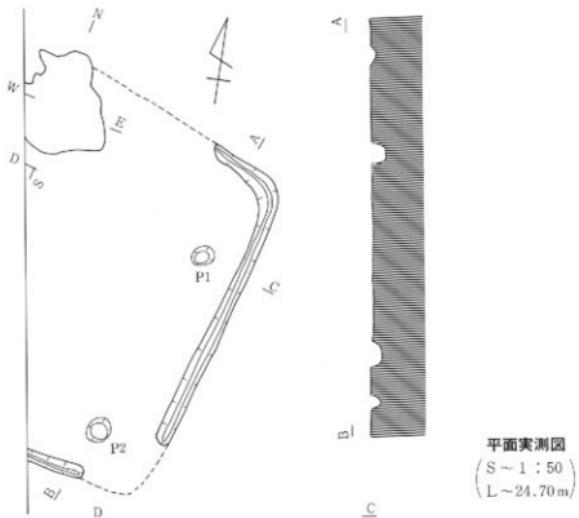
- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土 (粘土粒、ローム粒、土器粒含む)
- 3) 白色粘土
- 4) 黑褐色土 (燒土粒子含む)
- 5) 黒色土 (粘土粒、燒土粒子含む)
- 6) 黒色土 (粘土粒、土器粒含む)
- 7) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 8) 黑褐色土 (ローム粒含む)
- 9) 黒褐色土 (粘土粒、粘土ブロック含む)



第36号住居跡土層凡例

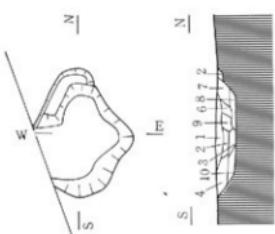
- 1) 耕作土
- 2) 黒褐色土 (ローム小ブロック含む)
- 3) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 4) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 5) 黒褐色土 (ローム粒、土器粒子含む)
- 6) 黒褐色土 (ローム粒含む)
- 7) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)

図版45 第37号住居跡 (SI-37) 実測図

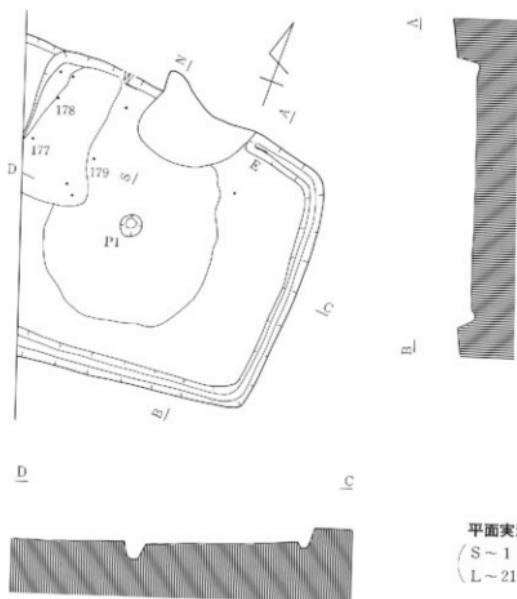


カマド土層凡例

- 1) 暗褐色土 (粘土粒、ローム粒、ロームブロック含む)
- 2) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック、粘土粒、粘土ブロック含む)
- 3) 暗褐色土 (燒土ブロック、ローム小ブロック、ローム粒、炭化物含む)
- 4) 明褐色土 (粘土粒、ローム粒、ローム小ブロック、炭化物含む)
- 5) 粘 土 (砂質、ローム小ブロック、褐色土含む)
- 6) 暗褐色土 (ローム小ブロック、ローム粒、粘土粒含む)
- 7) 赤褐色土 (燒土粒、粘土粒、ロームブロック含む)
- 8) 黄褐色土 (分解ローム)
- 9) ロームブロック
- 10) 暗褐色土 (粘土粒、ロームブロック、焼土ブロック含む)



図版46 第40号住居跡（SI-40）実測図



カマド土層凡例

- 1) 黒褐色土(粘土粒、粘土小
ブロック含む)
 - 2) 赤褐色土(燒土ブロック、燒土小
ブロック、燒土粒含む)
 - 3) 黄色粘土(自然層)
 - 4) 黒褐色土(燒土ブロック、
燒土粒含む)
 - 5) 暗褐色土(粘土粒、粘土小
ブロック含む)

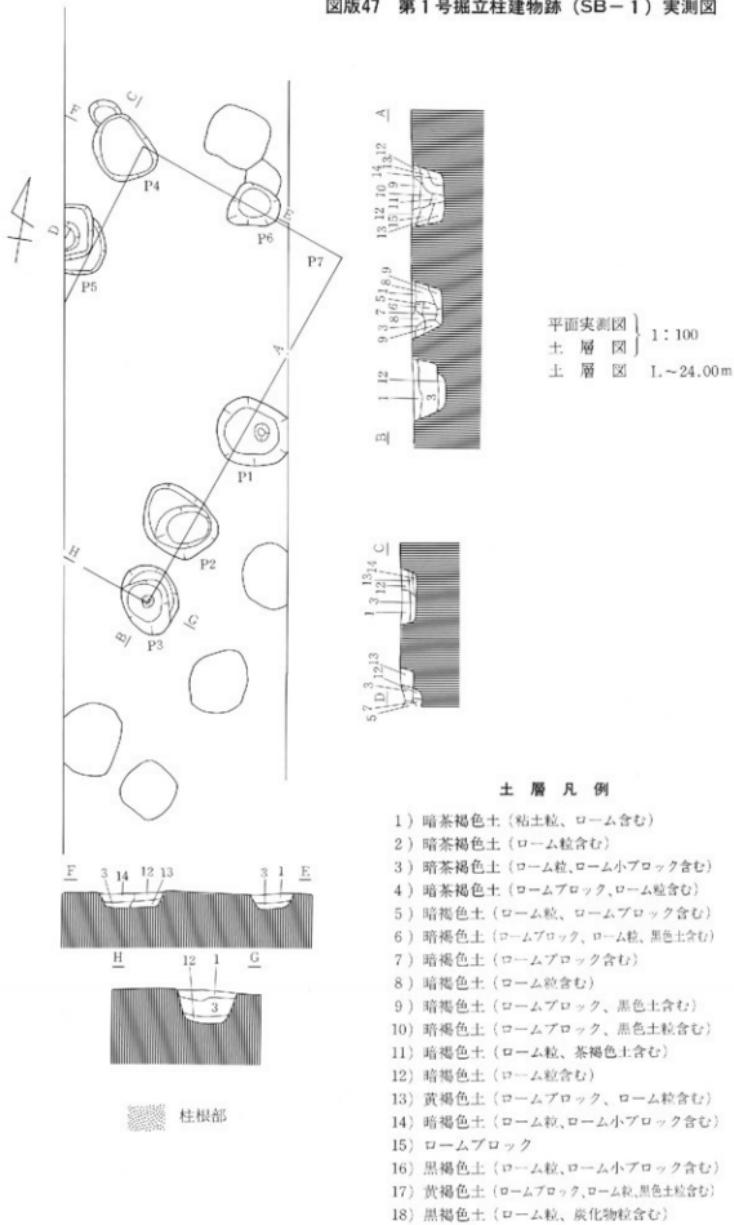
K) 攪乱

K) 搅乱

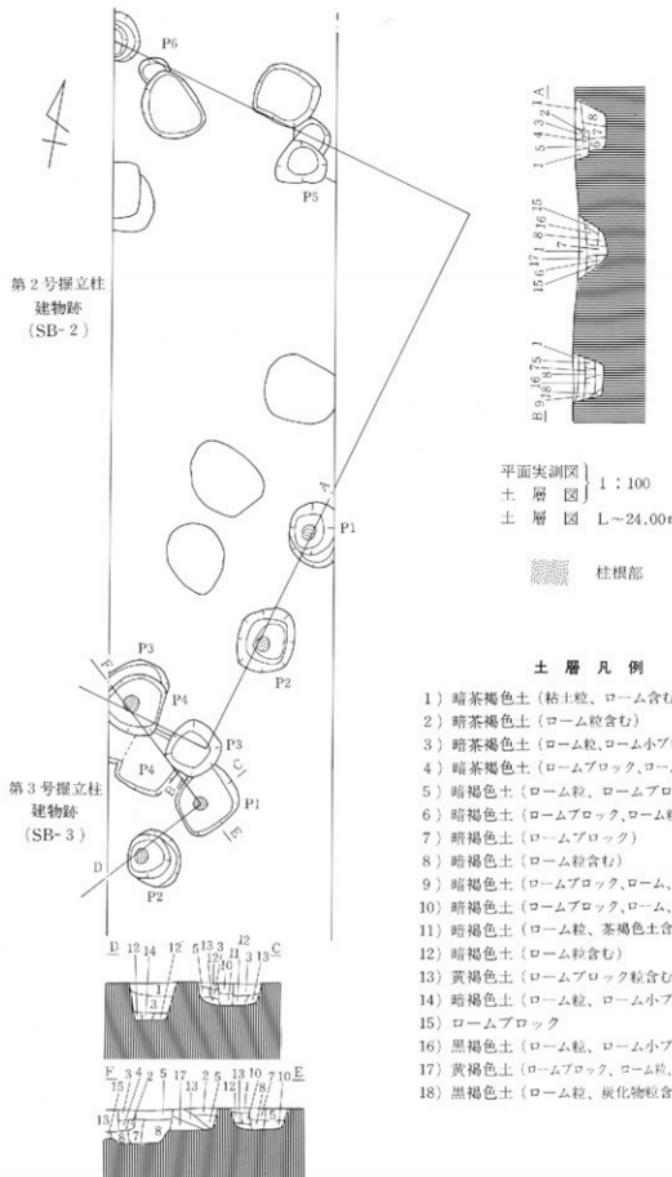
カマド寒測図

(S~1:50)
L=21.79m

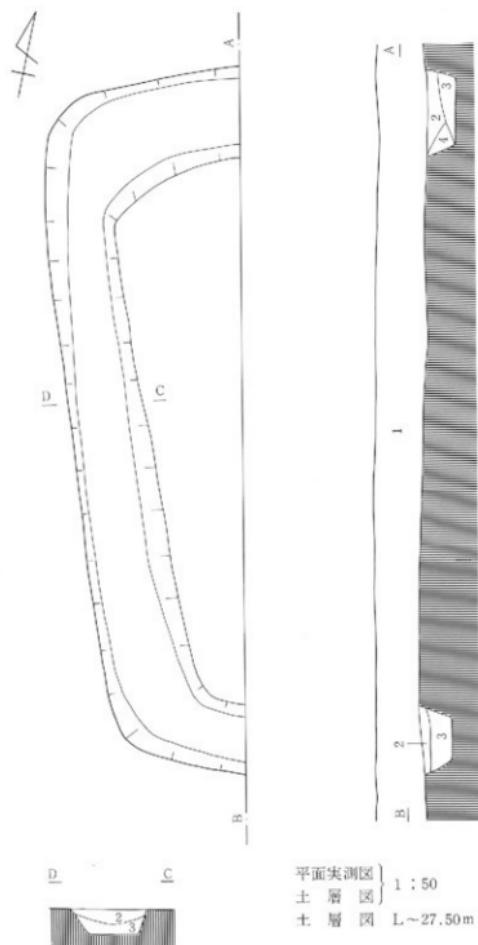
図版47 第1号掘立柱建物跡 (SB-1) 実測図



図版48 第2号・第3号掘立柱建物跡 (SB-2・3) 実測図



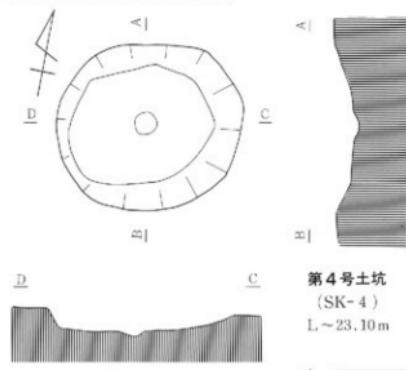
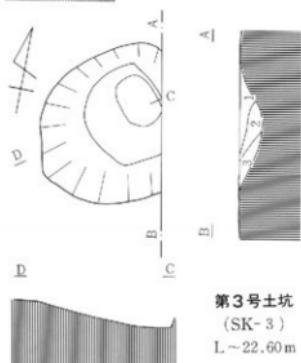
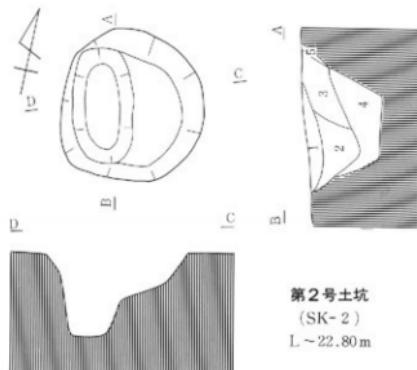
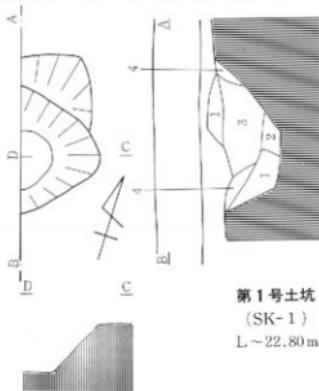
図版49 第1号方形周溝墓(SX-1)実測図



土層凡例

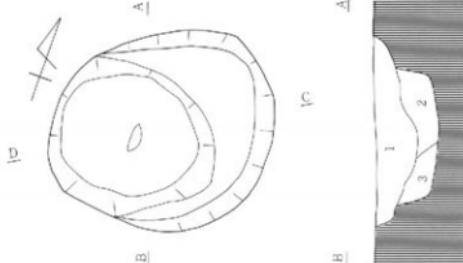
- 1) 耕作土
- 2) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
- 3) 暗褐色土 (1層より暗、ロームブロック、ローム粒含む)
- 4) 暗褐色土 (ローム粒、ローム微小ブロック含む)

図版50 土坑実測図 1

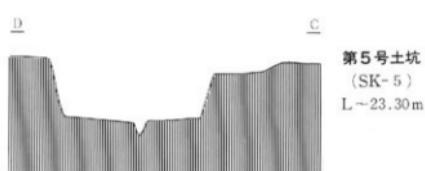


土層凡例

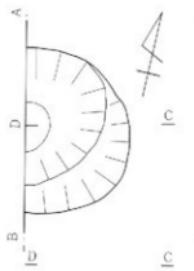
- 1) 黒色土(ローム粒含む)
- 2) 黒色土(ローム粒、
ローム小ブロック含む)
- 3) 黒色土(ローム粒含む)
- 4) ロームブロック
- 5) ロームブロック



土坑実測図 1
(SK-1 ~ 5)
S ~ 1 : 50



図版51 土坑実測図 2

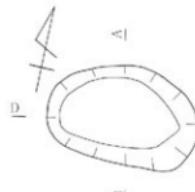


第6号土坑 (SK-6)

L ~ 23.50 m

土層凡例

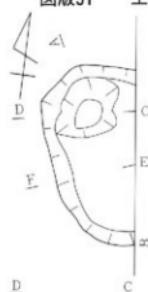
- 1) 黒色土(ローム粒含む)
- 2) 黒色土(ローム粒、ローム
小ブロック含む)



第7号土坑

(SK-7)

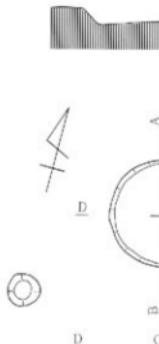
L ~ 23.70 m



第8号土坑

(SK-8)

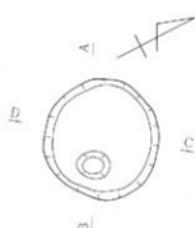
L ~ 23.70 m



第10号土坑

(SK-10)

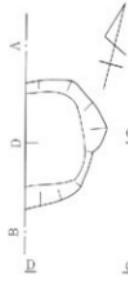
L ~ 25.80 m



第11号土坑

(SK-11)

L ~ 25.80 m



第12号土坑

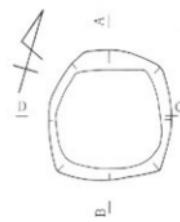
(SK-12)

L ~ 25.80 m

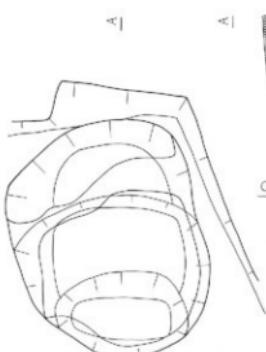
土坑実測図 2 (SK-6 ~ 8, 10 ~ 12)

S ~ 1 : 50

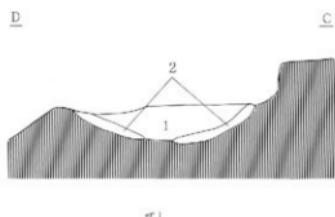
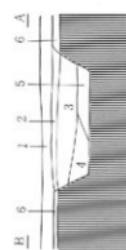
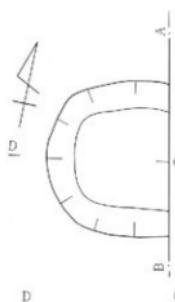
図版52 土坑実測図 3



第13号土坑 (SK-13)
L. ~ 27.00 m



第16号土坑
(SK-16)
L. ~ 25.30 m



第14号土坑
(SK-14)
L. ~ 27.00 m



SK14土層凡例

- 1) 表土 (現耕作土)
- 2) 黒褐色土 (ローム粒、粘土粒、土器粒含む)
- 3) 黒褐色土 (粘土小ブロック、粘土粒、土器粒含む)
- 4) 暗褐色土 (粘土粒、粘土小ブロック、土器粒含む)
- 5) 暗褐色土 (黒色土ブロック、ローム粒含む)
- 6) 黑褐色土 (ローム粒、土器粒含む)

SK15土層凡例

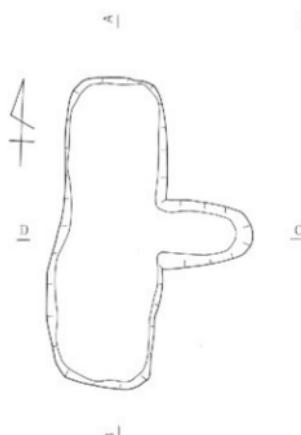
- 1) 黒色土 (炭化物、焼土粒含む)

SK16土層凡例

- 1) 黑褐色土 (粘土粒、黑色土ブロック、土器粒含む)
- 2) 暗白色砂質粘土

土坑実測図3 (SK13~16)

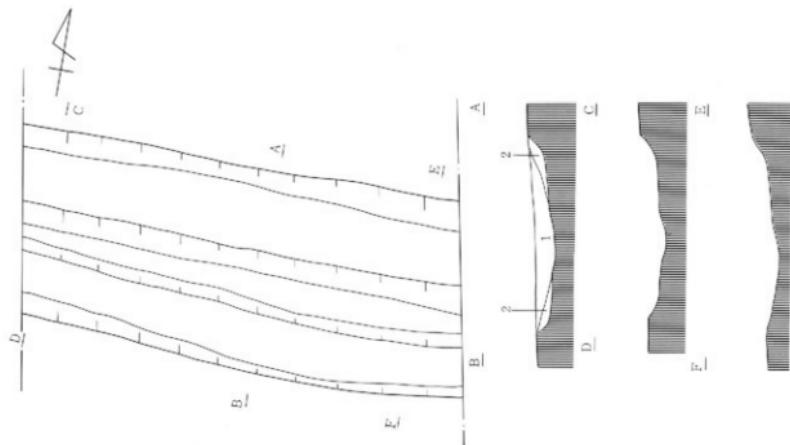
S ~ 1 : 40



第15号土坑
(SK-15)
L. ~ 26.50 m



図版53 第1号、2号溝 (SD-1、2) 実測図

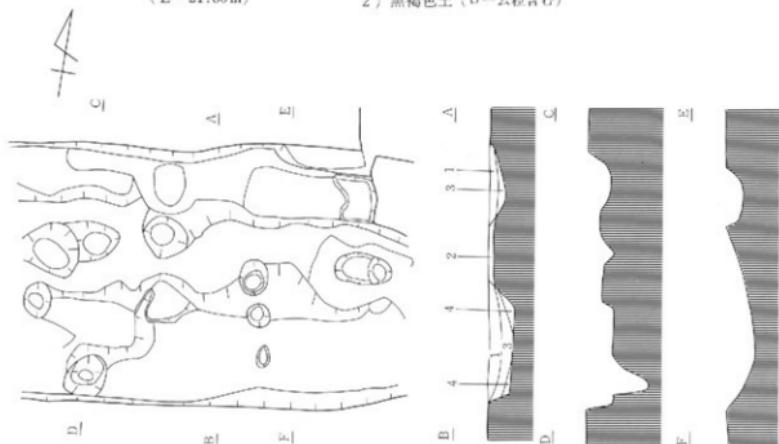


第1号溝 (SD-1) 実測図

($S \sim 1 : 50$)
($L \sim 21.80\text{m}$)

土層凡例

- 1) 明黒色土 (ローム粒含む)
2) 黒褐色土 (ローム粒含む)



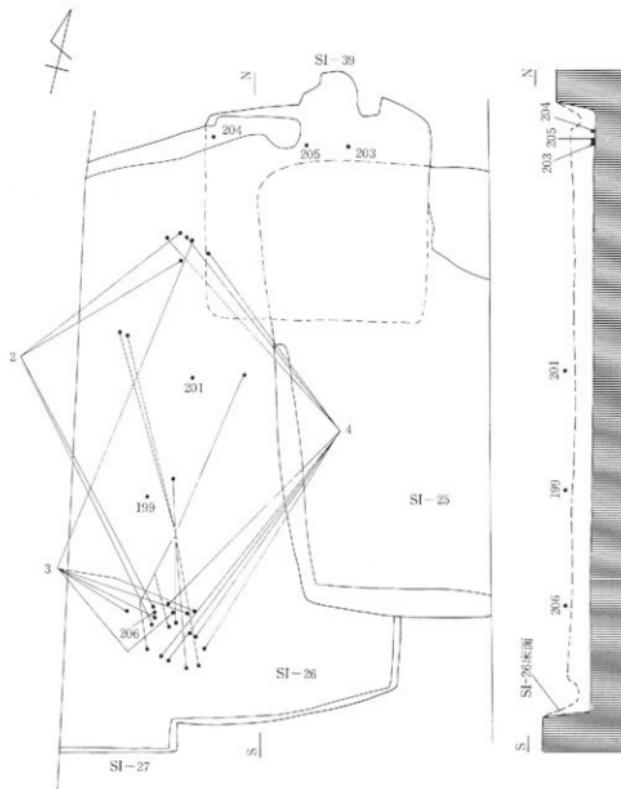
第2号溝 (SD-2) 実測図

($S \sim 1 : 50$)
($L \sim 27.20\text{m}$)

土層凡例

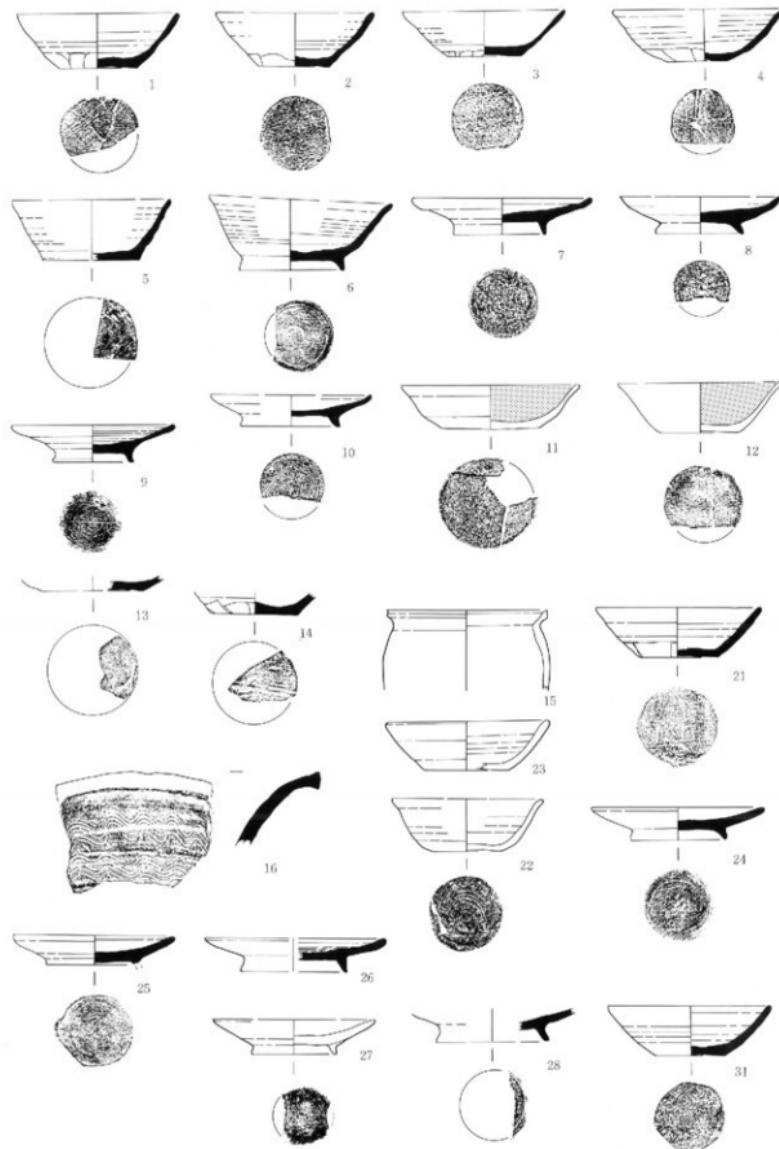
- 1) 黒褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
2) 黒色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)
3) 黒褐色土 (ローム粒含む)
4) 暗褐色土 (ローム粒、ローム小ブロック含む)

図版54 旧石器時代遺物出土状況実測図



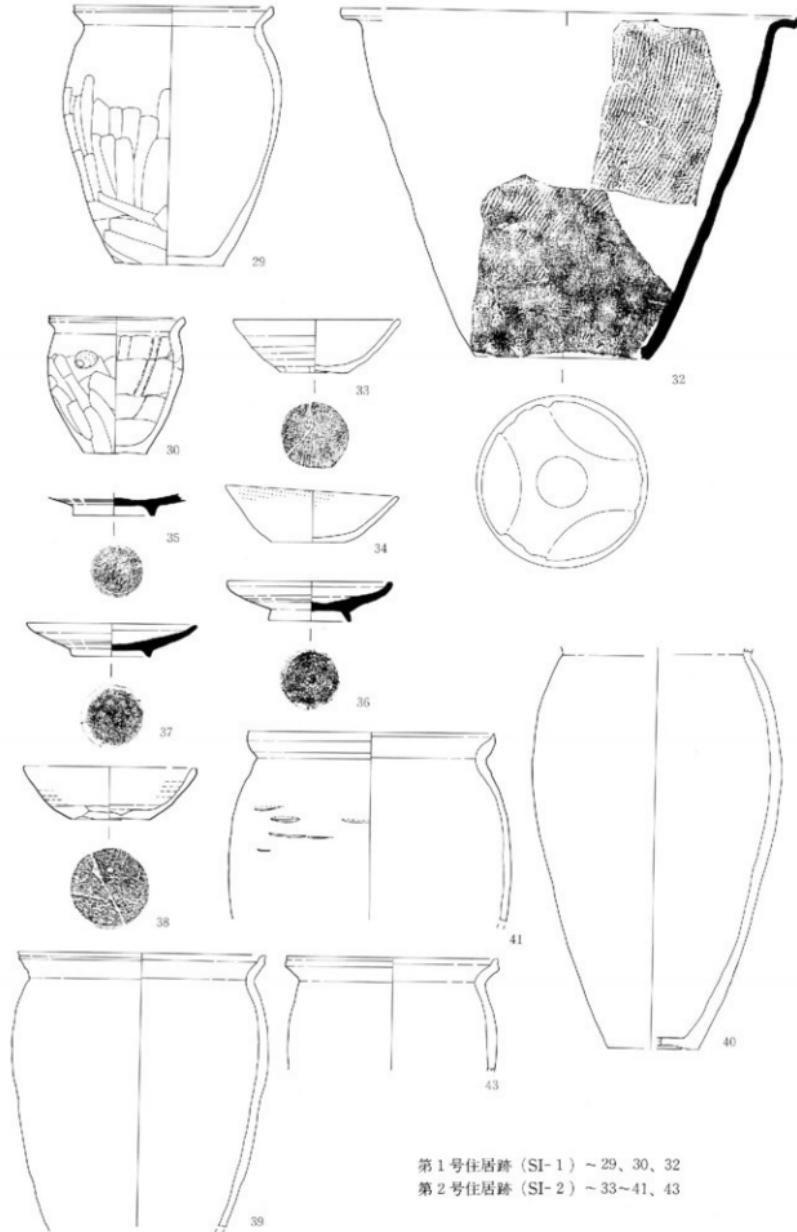
No.1～4 SI-26出土遺物
No.199～201・203～205～旧石器
S ~ 1 : 50 L ~ 25,30 m

図版55 出土遺物 1



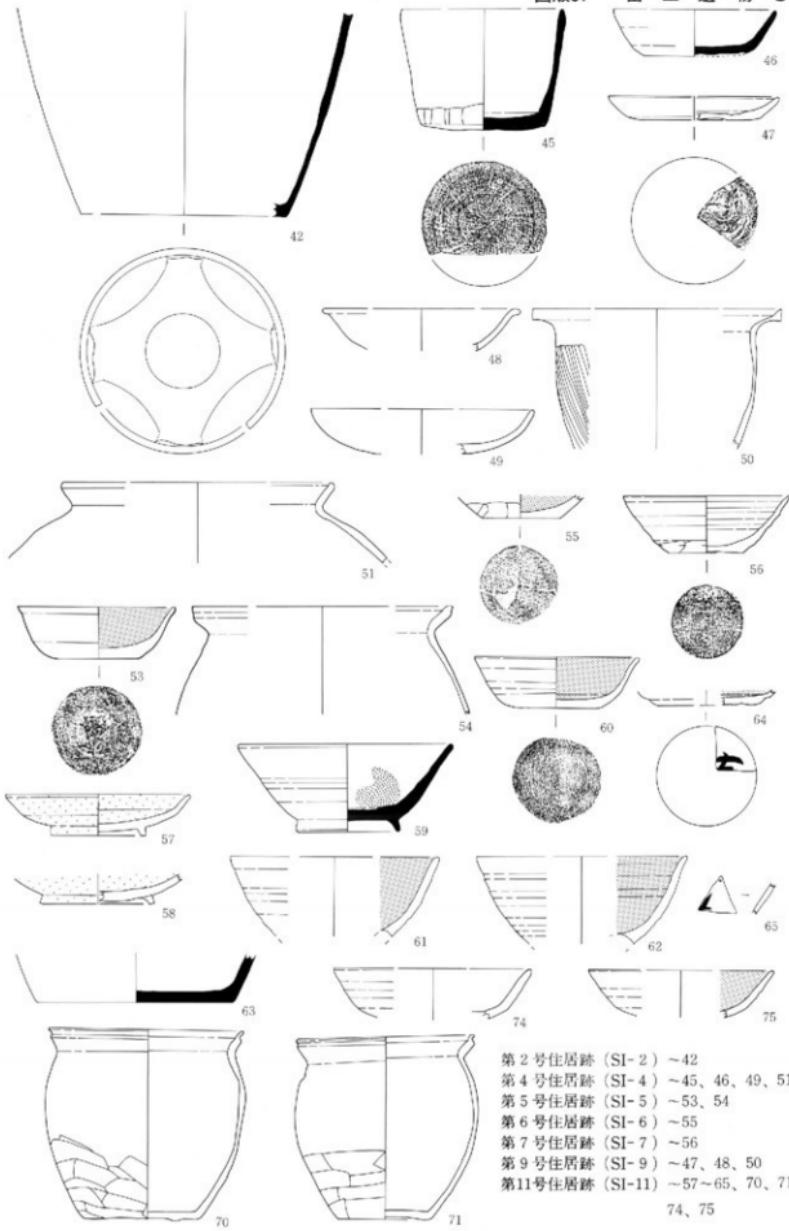
第1号住居跡(SI-1) 1~16、21~28、31

図版56 出土遺物 2

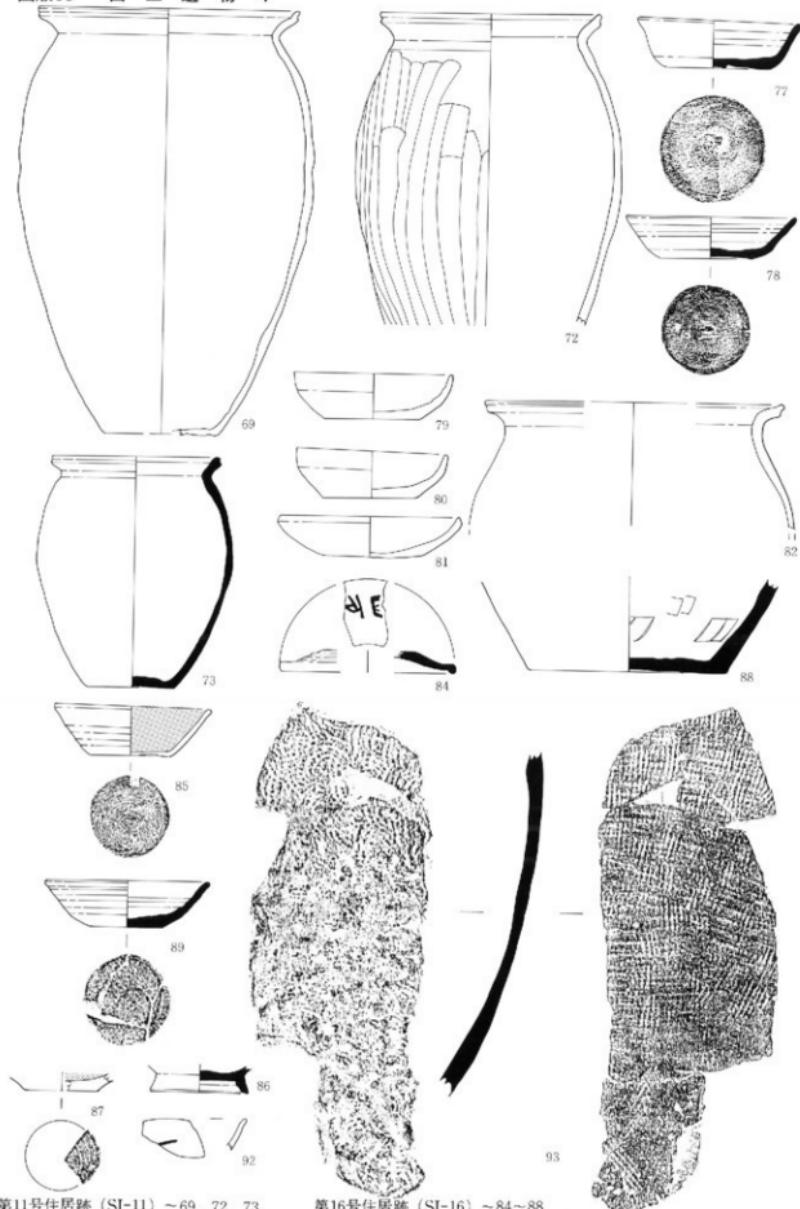


第1号住居跡(SI-1) ~ 29、30、32
第2号住居跡(SI-2) ~ 33~41、43

出土遺物 3



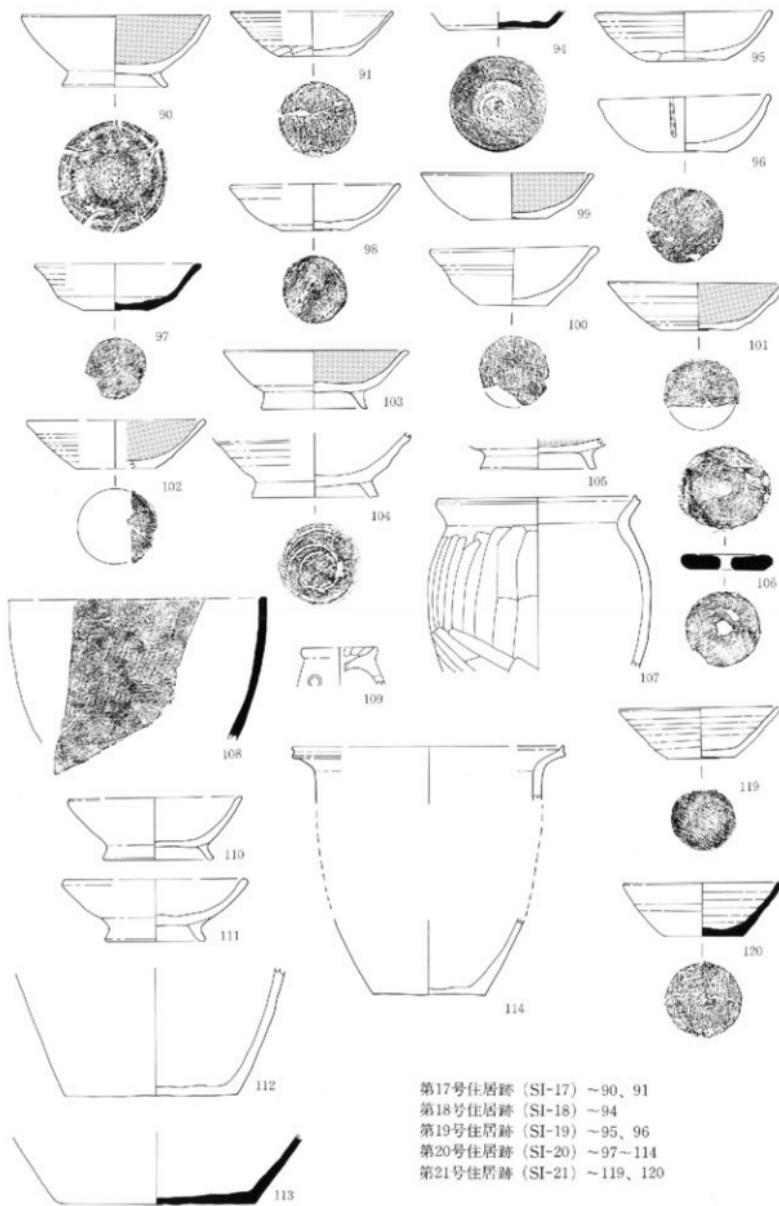
図版58 出土遺物 4



第11号住居跡 (SI-11) ~69、72、73
第13号住居跡 (SI-13) ~77~82

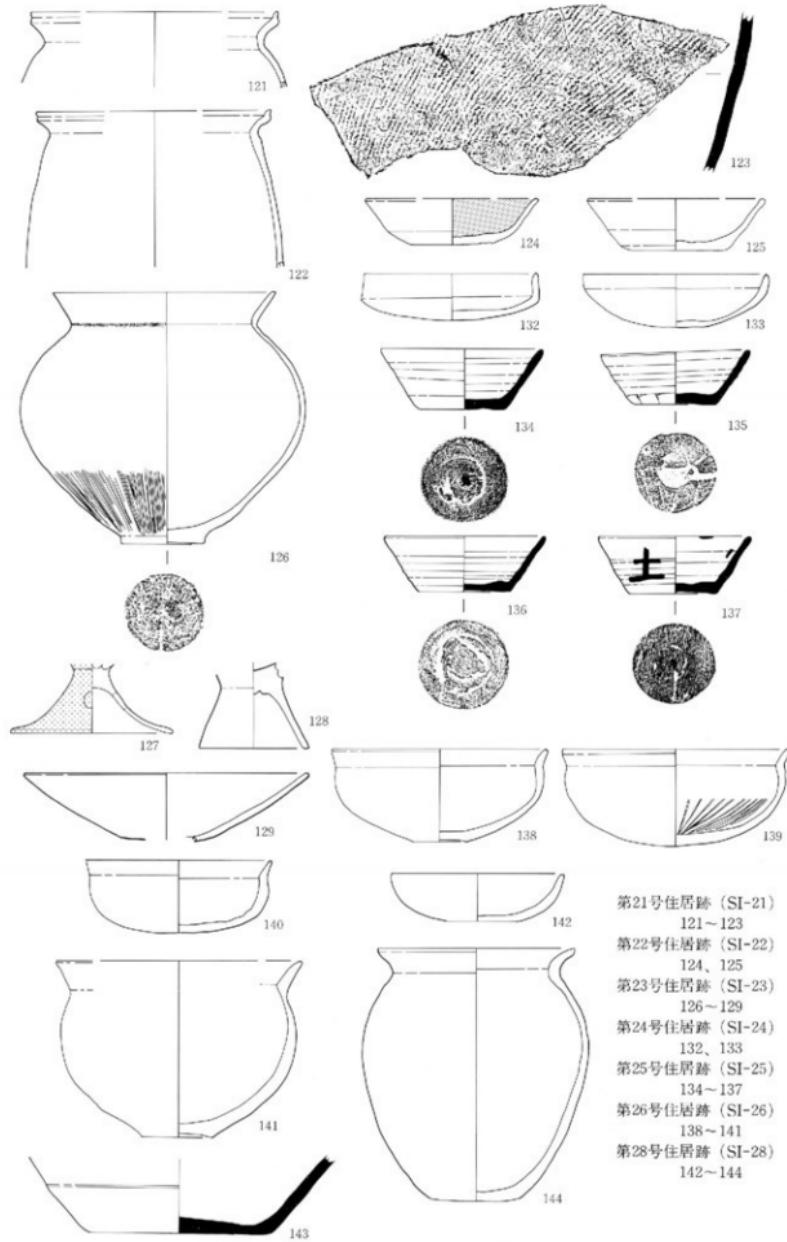
第16号住居跡 (SI-16) ~84~88
第17号住居跡 (SI-17) ~89、92、93

図版59 出土遺物 5

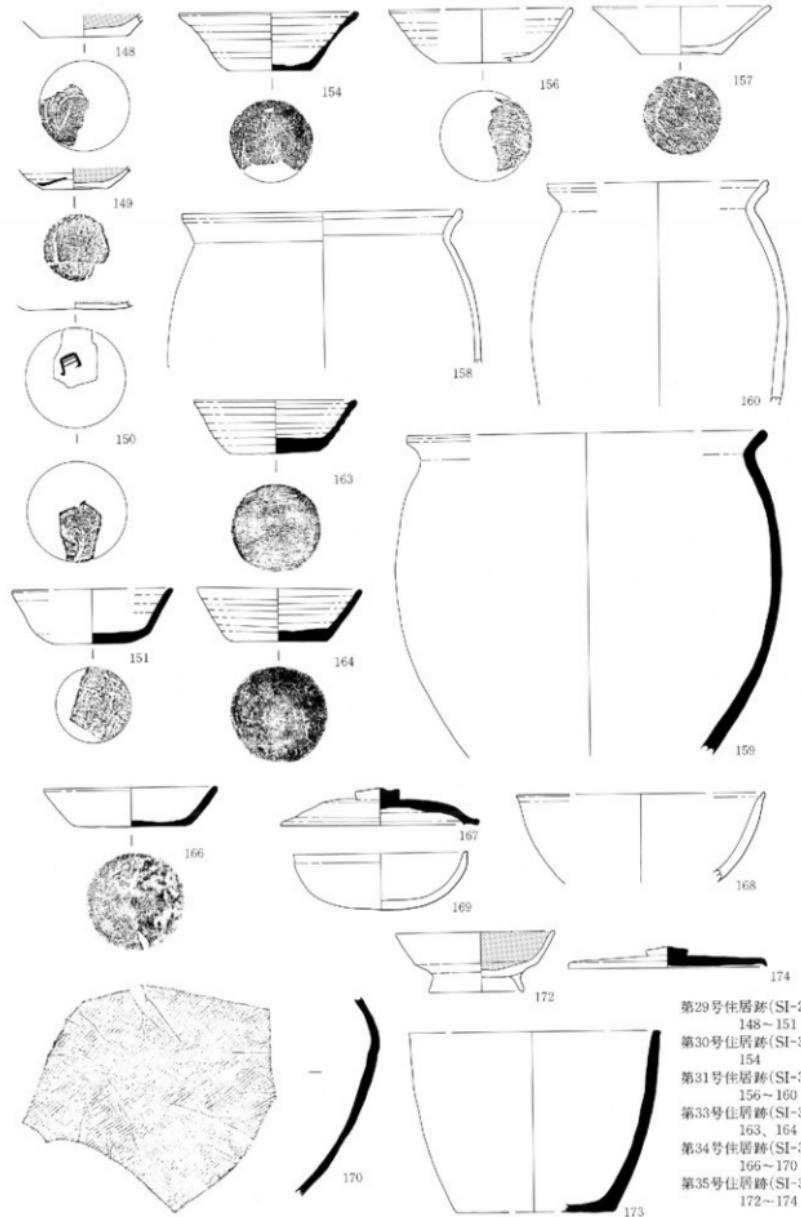


第17号住居跡 (SI-17) ~90, 91
第18号住居跡 (SI-18) ~94
第19号住居跡 (SI-19) ~95, 96
第20号住居跡 (SI-20) ~97~114
第21号住居跡 (SI-21) ~119, 120

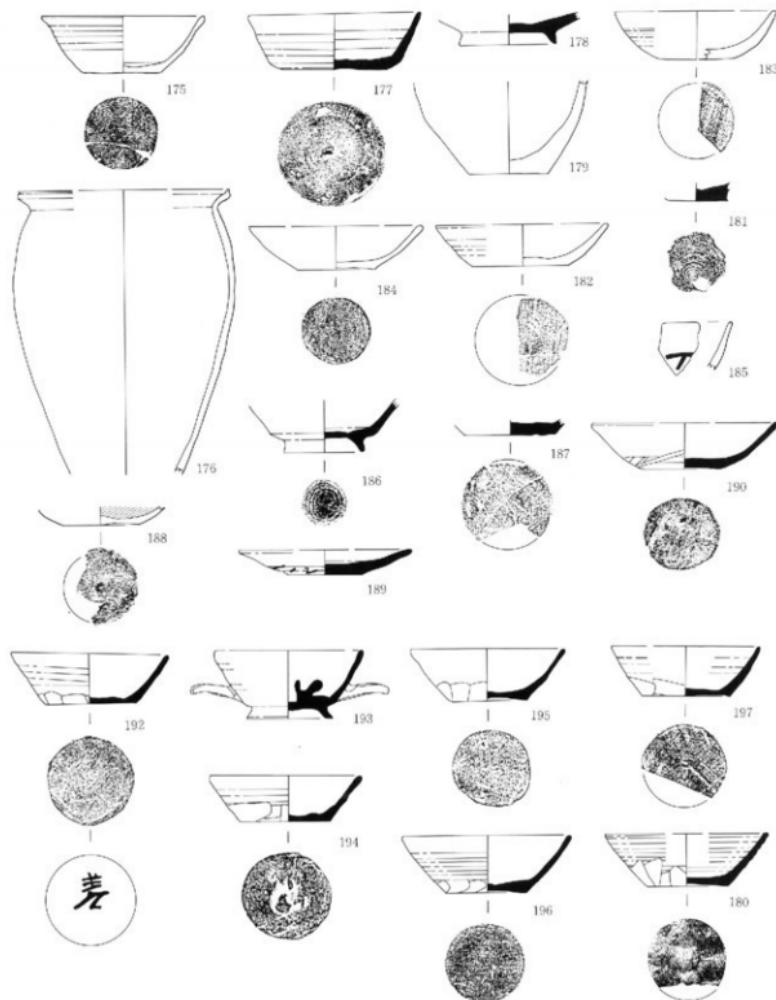
図版60 出土遺物 6



図版61 出土遺物 7



図版62 出土遺物 8



第39号住居跡 (SI-39)

175、176

第40号住居跡 (SI-40)

177~179

第50号住居跡 (SI-50)

180

掘立柱建物跡 (SB1-3)

181~185

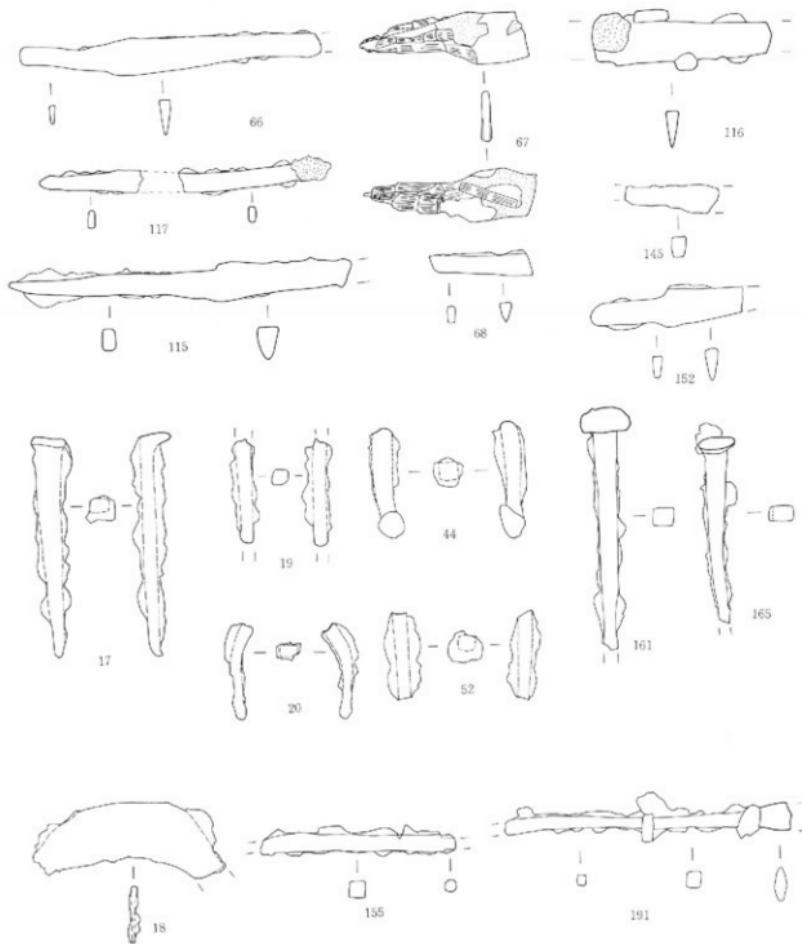
土坑内出土遺物

186~190

関連遺物

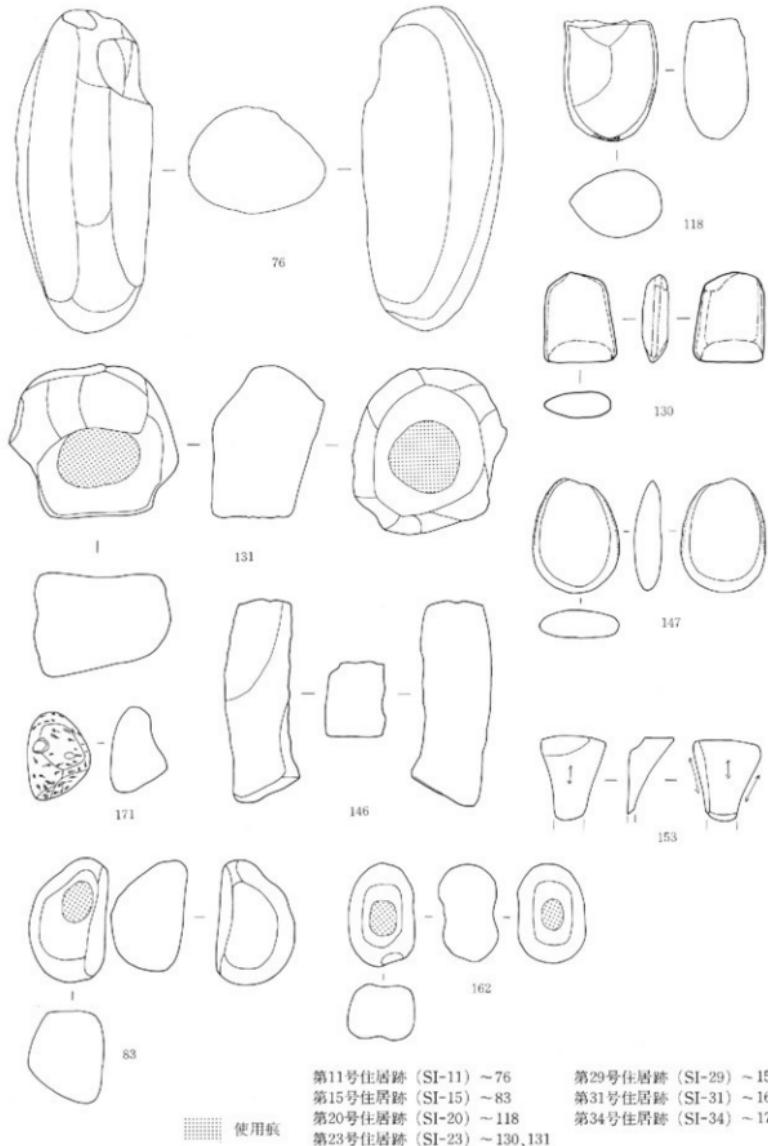
192~197

図版63 出土遺物 9



- 第1号住居跡 (SI-1) ~17、18、19、20
- 第2号住居跡 (SI-2) ~44
- 第9号住居跡 (SI-4) ~52
- 第11号住居跡 (SI-11) ~66、67、68
- 第20号住居跡 (SI-20) ~115、116、117
- 第28号住居跡 (SI-28) ~145
- 第29号住居跡 (SI-29) ~152
- 第30号住居跡 (SI-30) ~155
- 第31号住居跡 (SI-31) ~161
- 第33号住居跡 (SI-33) ~165
- 土坑内出土 (SK-30) ~191

図版64 出土遺物 10



第11号住居跡 (SI-11) ~ 76

第15号住居跡 (SI-15) ~ 83

第20号住居跡 (SI-20) ~ 118

第23号住居跡 (SI-23) ~ 130, 131

第28号住居跡 (SI-28) ~ 146, 147

第29号住居跡 (SI-29) ~ 153

第31号住居跡 (SI-31) ~ 162

第34号住居跡 (SI-34) ~ 171

図版65 遺跡周辺（平成5年）



0

1 km

図版66 遺跡全景（昭和49年）



0

500 m

図版67 遺跡全景（平成5年）



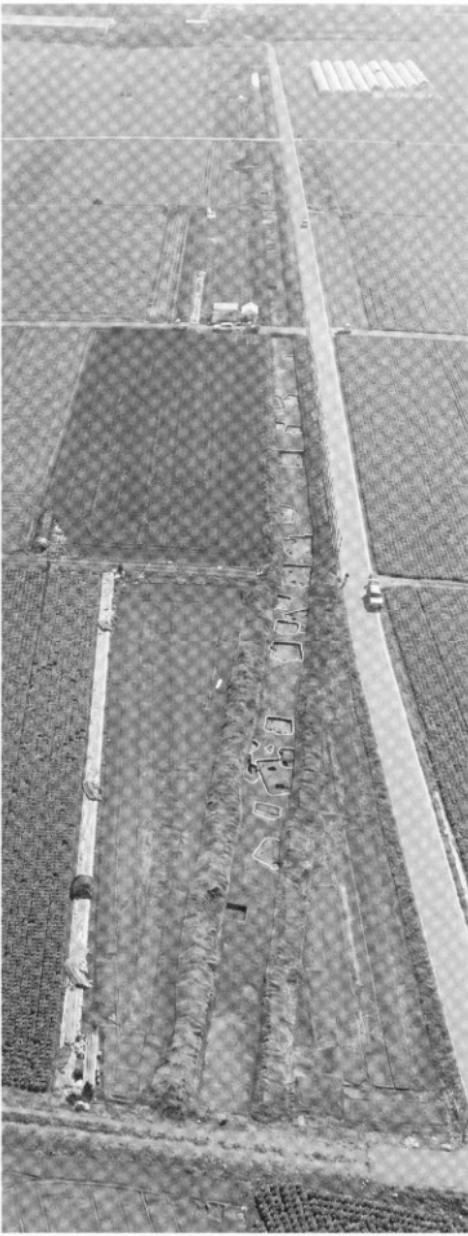
0

500 m

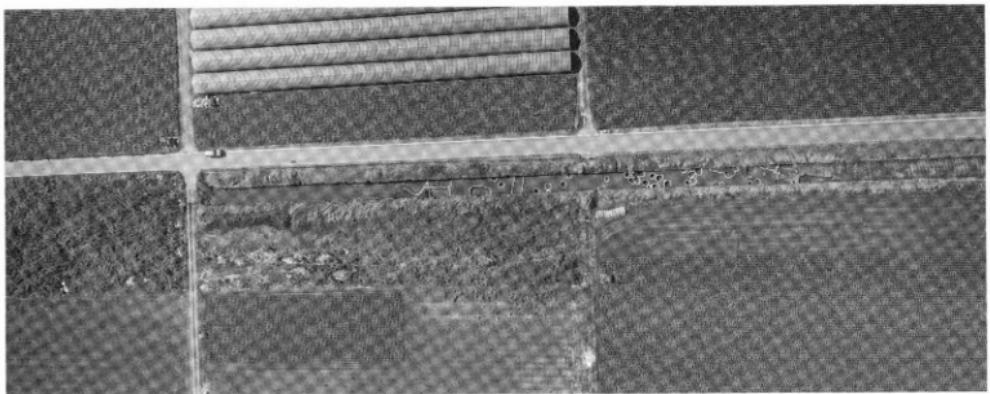
図版68 調査区全景 1



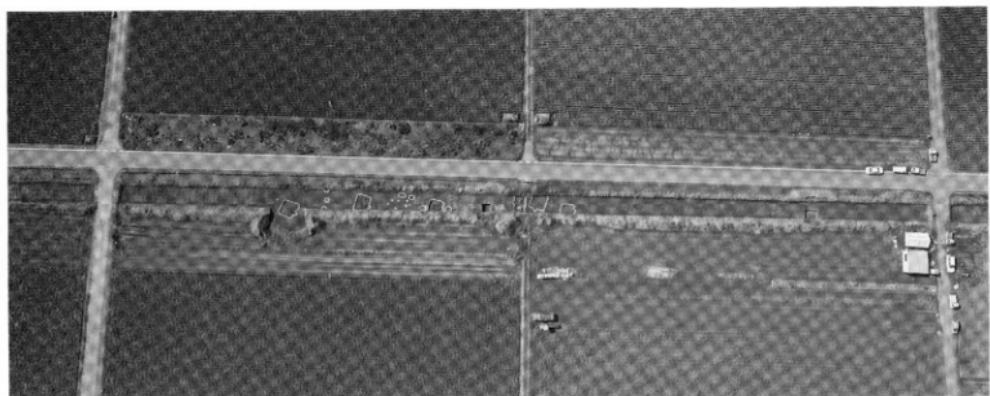
南側（1区）より北側（6区）方向



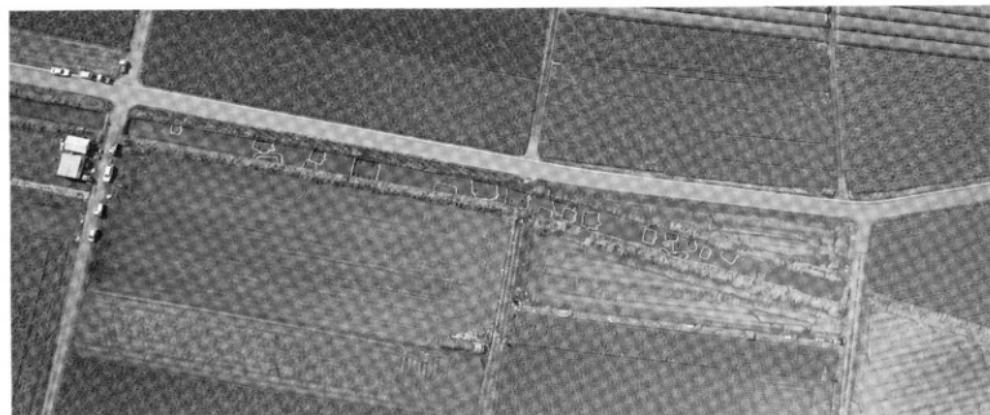
北側（6区）より南側（1区）方向



1区・2区全景

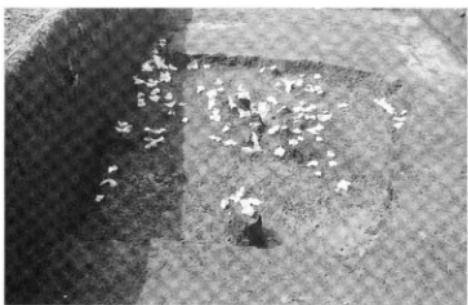


3区・4区全景

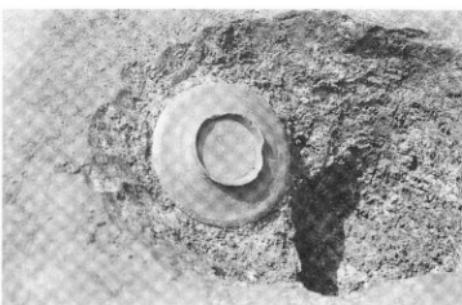


5区・6区全景

図版70 遺構1（第1号住居跡・SI-1）



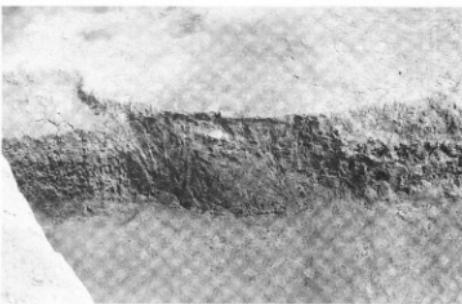
1、第1号住居跡遺物出土状況全景



5、第1号住居跡遺物（7）出土状況



2、第1号住居跡床面付近遺物出土状況全景



6、第1号住居跡カマド全景（調査前）



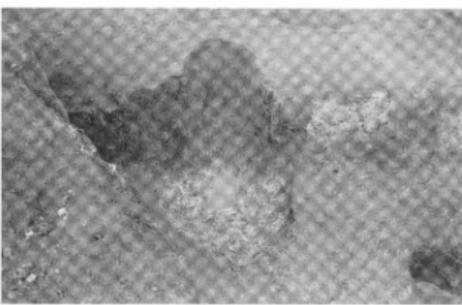
3、第1号住居跡全景



7、第1号住居跡カマド・遺物出土状況



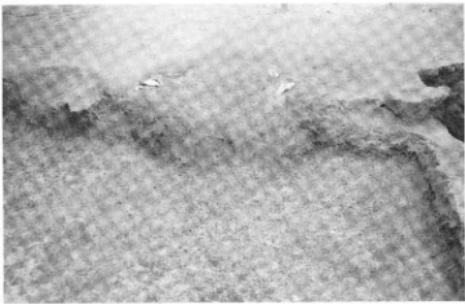
4、第1号住居跡完掘



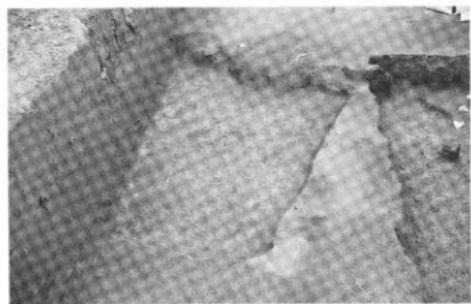
8、第1号住居跡カマド掘方



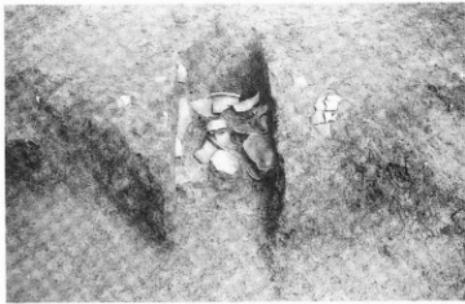
1、遺物出土状況全景



5、第2号住居跡(SI-2)カマド全景



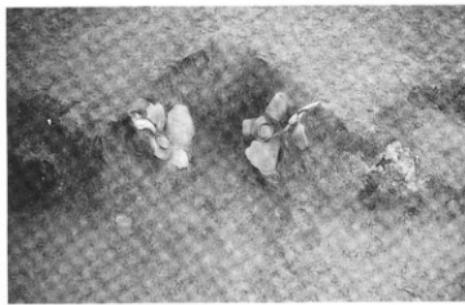
2、遺構全景



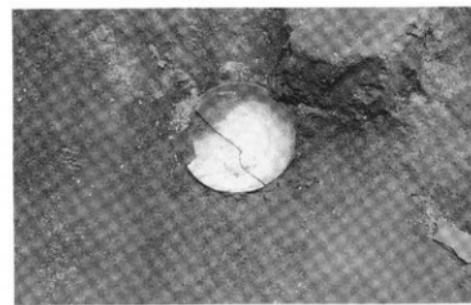
6、第2号住居跡(SI-2)カマド全景及遺物出土状況



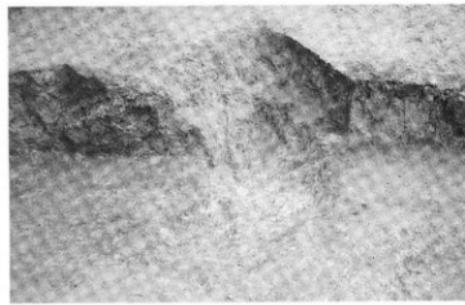
3、第5号住居跡(SI-5)遺物(53)出土状況



7、第2号住居跡(SI-2)カマド壁内遺物出土状況

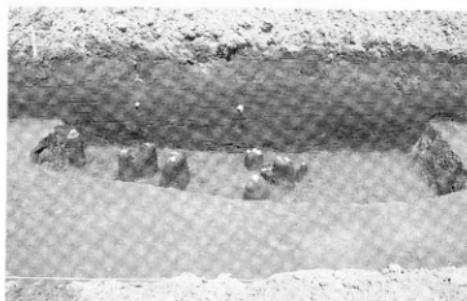


4、第2号住居跡(SI-2)遺物(33)出土状況

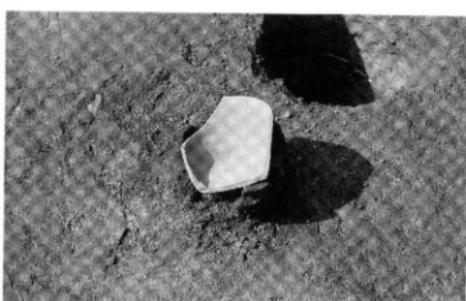


8、第2号住居跡(SI-2)カマド掘方全景

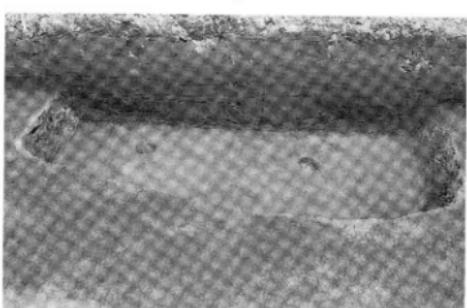
図版72 遺構3（第3、4、9号住居跡・SI-3、4、9）



1



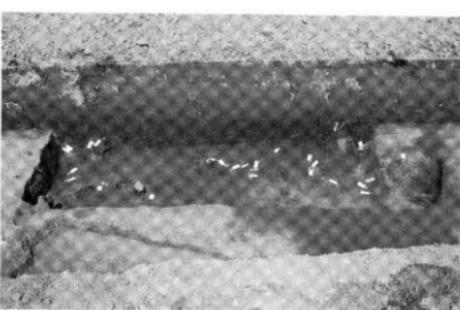
5



2



6



3



4

- | | |
|---|----------------------------------|
| 1 | 第3号住居跡(SI-3)
土層・遺物出土状況全景 |
| 2 | 第3号住居跡(SI-3)
全 景 |
| 3 | 第4号、9号住居跡(SI-4、9)
土層・遺物出土状況全景 |
| 4 | 第4号、9号住居跡
(SI-4、9) 全景 |
| 5 | 第4号住居跡
遺物(45)出土状況 |
| 6 | 第4号住居跡
遺物(46)出土状況 |

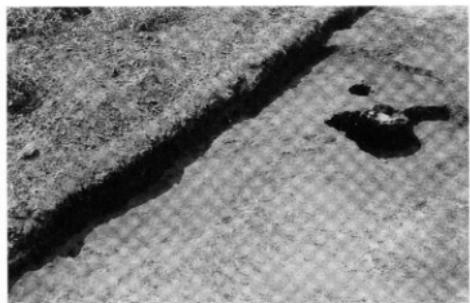
図版73 遺構4（第6号～8号、10号住居跡・SI-6～8、10）



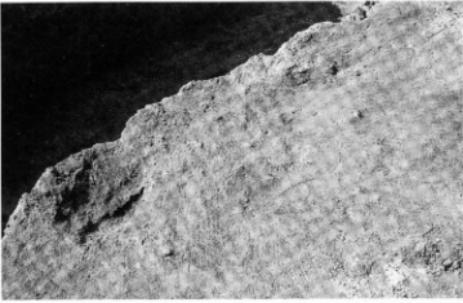
1



5



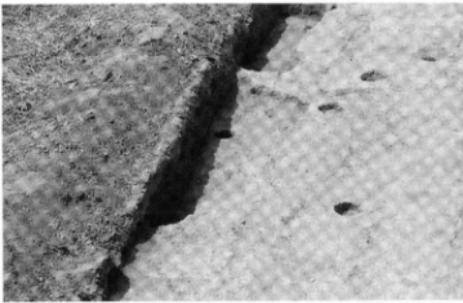
2



6



3



7



4

1	第6号住居跡（SI-6）遺物出土状況全景
2	第6号住居跡（SI-6）全景
3	第7号住居跡（SI-7）全景
4	第8号住居跡（SI-8）全景
5	第6号住居跡（SI-6）カマド掘方全景
6	第8号住居跡（SI-8）カマド掘方全景
7	第10号住居跡（SI-10）全景

図版74 遺構5（第11号住居跡・SI-11）



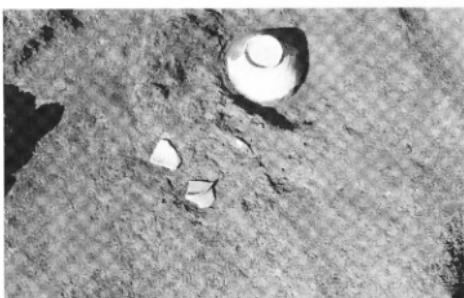
1、調査区内遺物出土状況全景



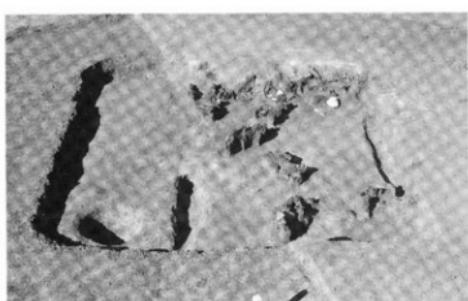
5、狼投（57）出土状況



2、調査区内遺構全景



6、遺物（58、59、67）出土状況



3、拡張後遺物出土状況全景



7、遺物（60）出土状況



4、拡張後遺構全景



8、刀子出土状況



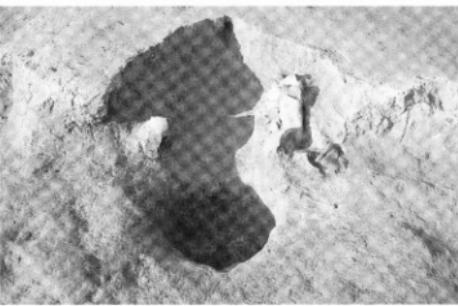
1



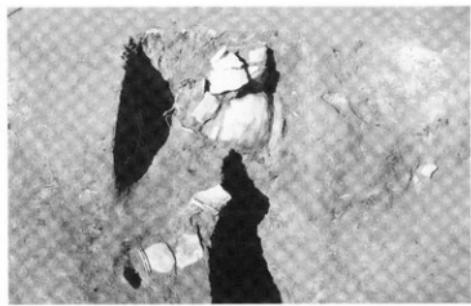
5



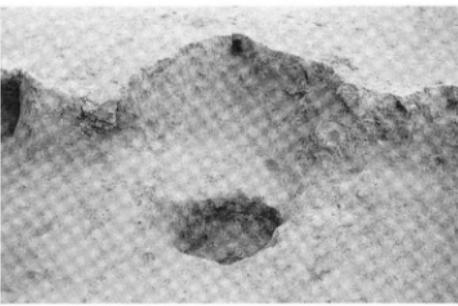
2



6



3



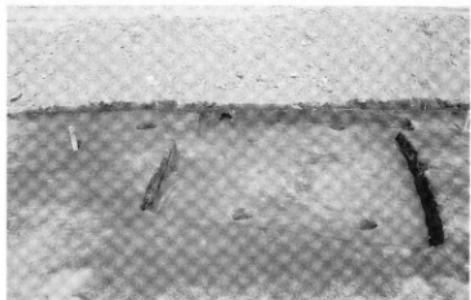
7



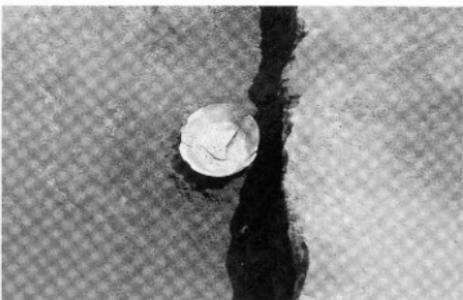
4

1	遺物(63) 出土状況
2	カマド全景(調査開始前)
3	カマド内遺物出土状況
4	カマド内遺物出土状況
5	カマド全景
6	カマド壁内遺物出土状況全景
7	カマド掘方全景

図版76 造構7（第12号、13号住居跡・SI-12、13）



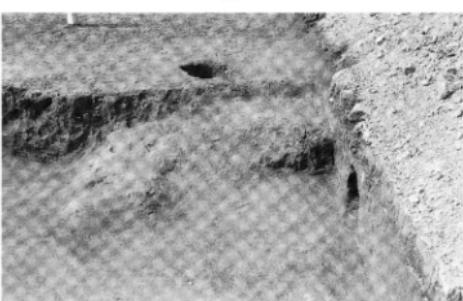
1



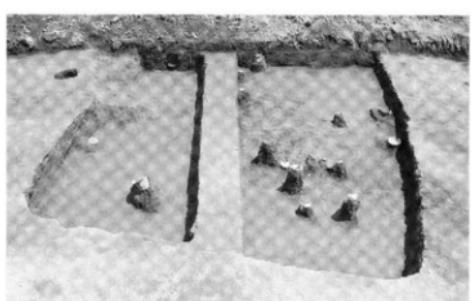
5



2



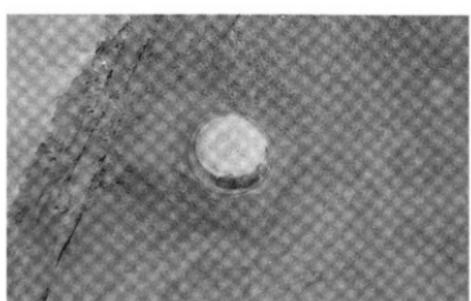
6



3

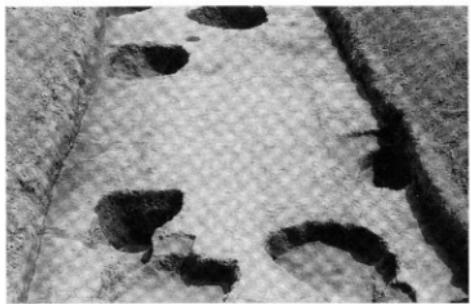


7



4

1	第12号、13号住居跡（SI-12、13）全景
2	第13号住居跡（SI-13）土層
3	第13号住居跡（SI-13）遺物出土状況全景
4	第13号住居跡（SI-13）遺物(78)出土状況
5	第13号住居跡（SI-13）遺物(77)出土状況
6	第13号住居跡カマド全景（調査前）
7	第13号住居跡カマド掘方全景



1、第14号住居跡 (SI-14) 全景



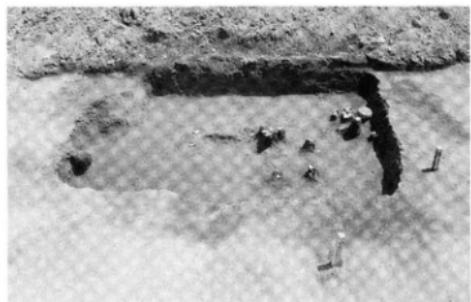
5、第16号住居跡 (SI-16) 遺物 (85, 88) 出土状況



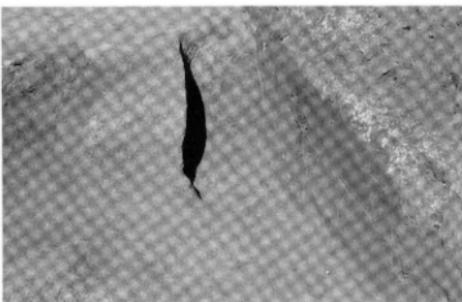
2、第15号住居跡 (SI-15) 全景



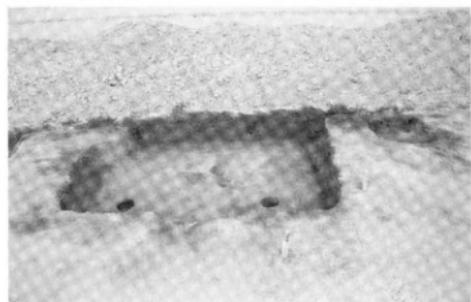
6、第16号住居跡 (SI-16) カマド全貌(調査前)



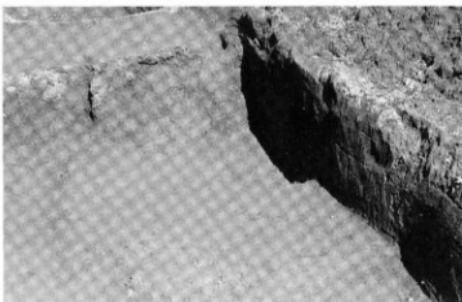
3、第16号住居跡 (SI-16) 遺物出土状況全貌



7、第16号住居跡 (SI-16) カマド全貌(調査後)

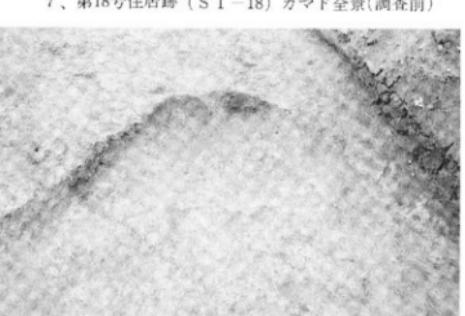
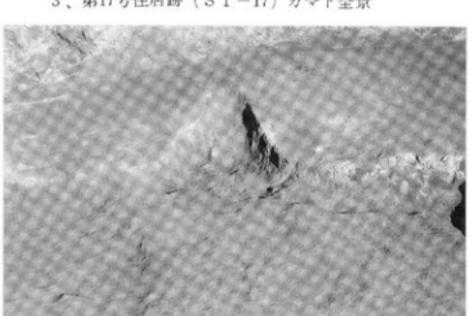
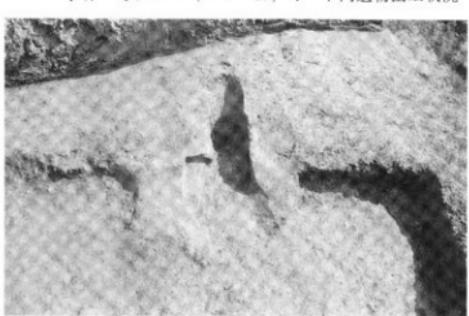
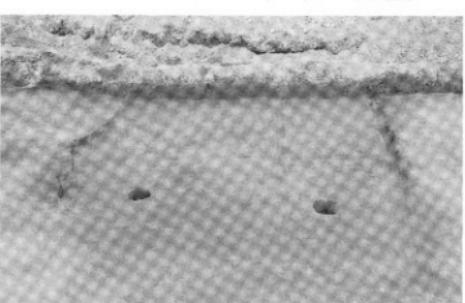
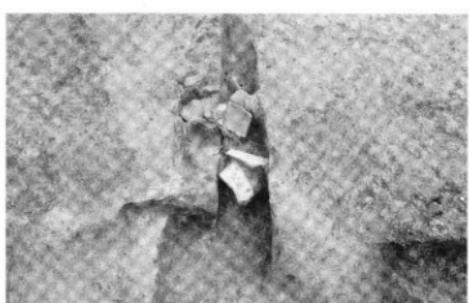
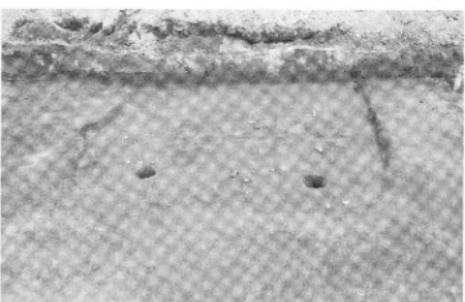
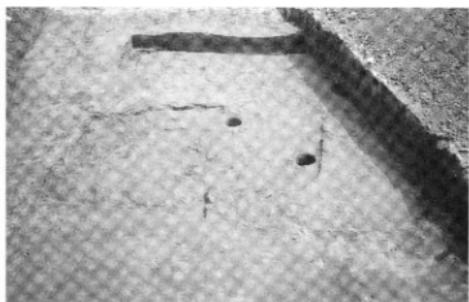


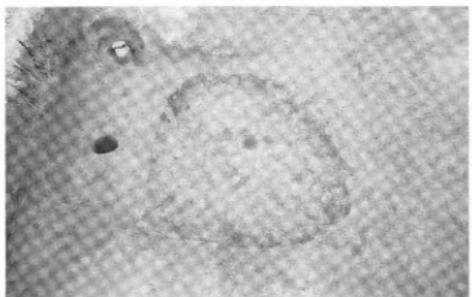
4、第16号住居跡 (SI-16) 遺構全貌



8、第16号住居跡 (SI-16) カマド掘方全貌

図版78 遺構9（第17号、18号住居跡・SI-17、18）





1、第19号住居跡（SI-19）遺構全景



5、第20号住居跡（SI-20）遺物出土状況全景



2、第19号住居跡（SI-19）貯藏穴内遺物出土状況



6、第20号住居跡（SI-20）遺構全景



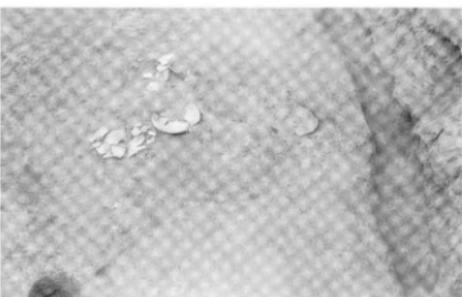
3、第19号住居跡（SI-19）カマド全景



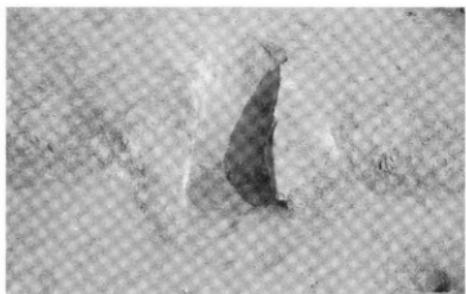
7、第20号住居跡（SI-20）新カマド全景（調査前）



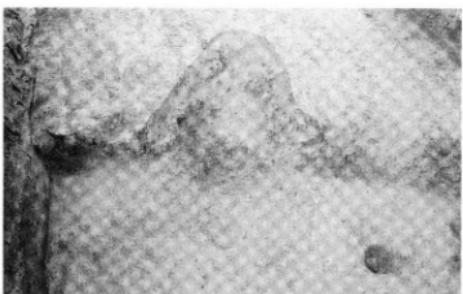
4、第19号住居跡（SI-19）カマド掘方全景



8、第20号住居跡（SI-20）旧カマド全景



1



5



2



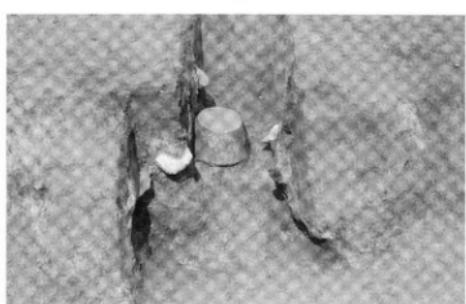
6



3



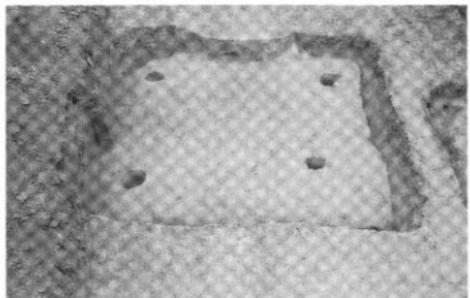
7



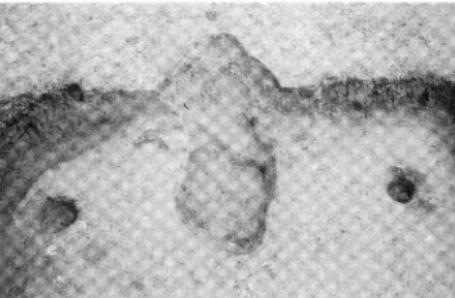
4

1	カマド全景
2	カマド内遺物（14、15、16）出土状況
3	同上面より
4	カマド内遺物（16）出土状況
5	カマド掘方全景
6	旧カマド内遺物（107）出土状況
7	旧カマド掘方全景

図版81 造構12（第21号、22号住居跡・SI-21、22）



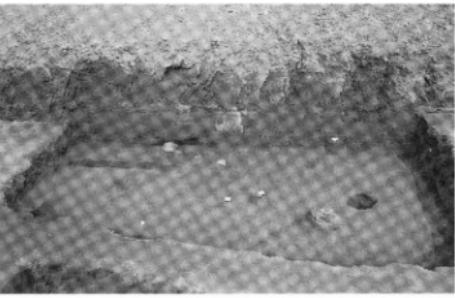
1、第21号住居跡（SI-21）遺構全景



5、第21号住居跡（SI-21）カマド掘方全景



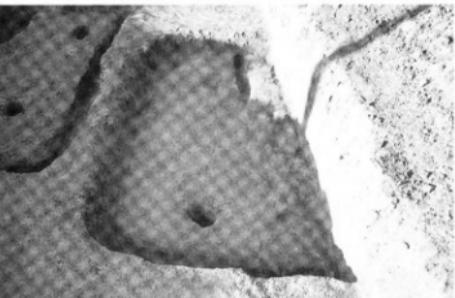
2、第21号住居跡（SI-21）遺物出土状況全景



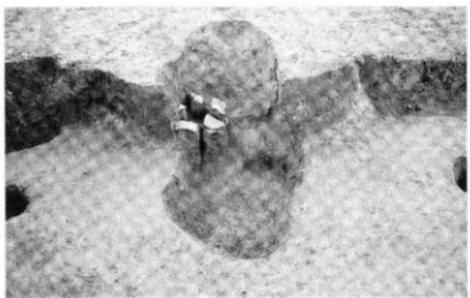
6、第22号住居跡（SI-22）遺物出土状況全景



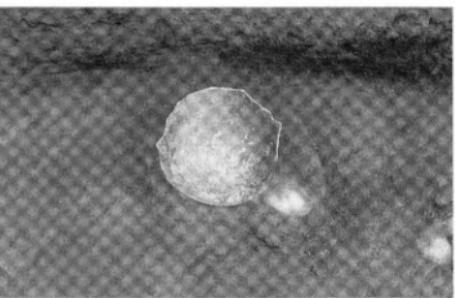
3、第21号住居跡（SI-21）カマド全景(調査前)



7、第22号住居跡（SI-22）遺構全景

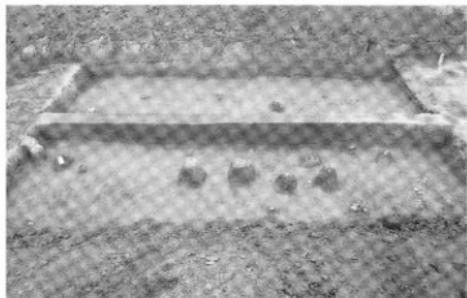


4、第21号住居跡（SI-21）カマド全景

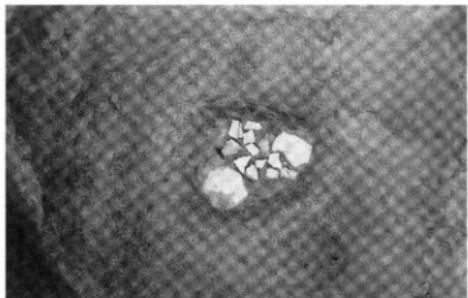


8、第22号住居跡（SI-22）遺物（124）出土状況

図版82 遺構13（第23号住居跡・SI-23）



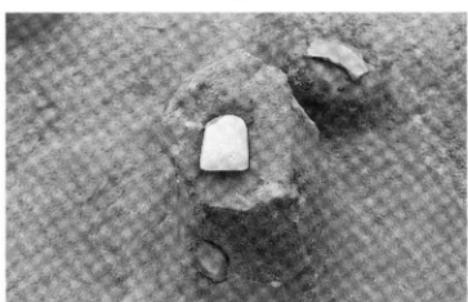
1



5



2



6



3



4

1 土層及び遺物出土状況

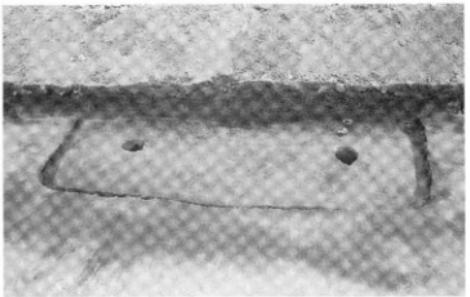
2 遺物出土状況全景

3 遺構全景

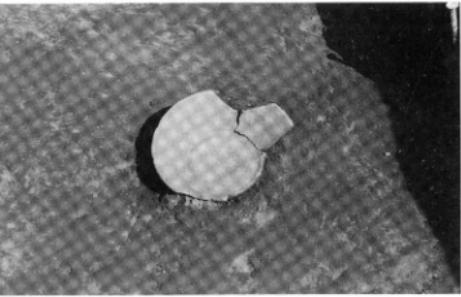
4 貯蔵穴内遺物出土状況全景

5 同近景

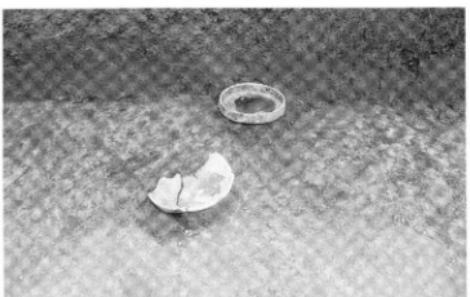
6 石斧(130)出土状況



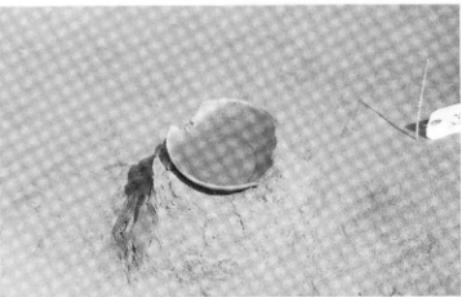
1、第24号住居跡（S I - 24）遺構全景



5、第25号住居跡（S I - 25）遺物（136）出土状況



2、第24号住居跡（S I - 24）遺物（132、133）出土状況



6、第25号住居跡（S I - 25）遺物（137）出土状況



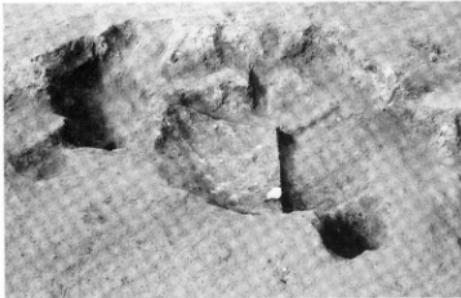
3、第25～27、39号住居跡（S I - 25～27、39）遺構全景



7、第25号住居跡（S I - 25）遺物（135）出土状況



4、第25号、39号住居跡（S I - 25、39）カマド全景



8、第39号住居跡（S I - 39）遺物（124）出土状況

図版84 造構15（第28号、29号住居跡・SI-28、29）



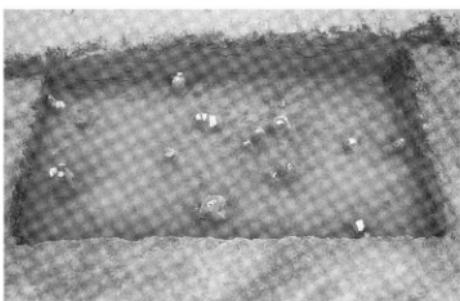
1、第28号住居跡（SI-28）遺物出土状況全景



5、第28号住居跡（SI-28）遺物（143）出土状況



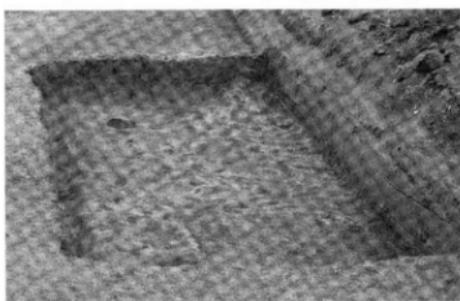
2、第28号住居跡（SI-28）遺構全景



6、第29号住居跡（SI-29）遺物出土状況全景



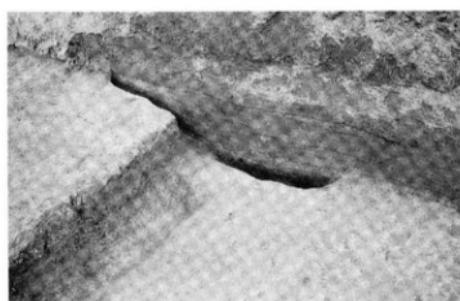
3、第28号住居跡（SI-28）カマド全景



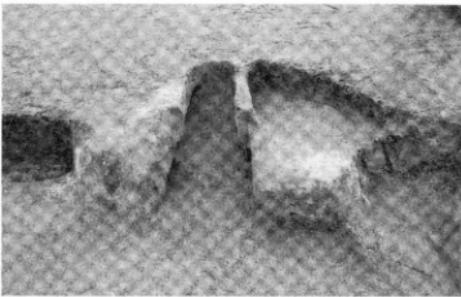
7、第29号住居跡（SI-29）遺構全景



4、第28号住居跡（SI-28）カマド掘方全景



8、第29号住居跡（SI-29）カマド全景



5



2



6



3



4

1 第30、32号住居跡（S I -30、32）
遺構・土層全景

2 第30号住居跡（S I -30）
遺構全景

3 第32号住居跡（S I -32）
遺構全景

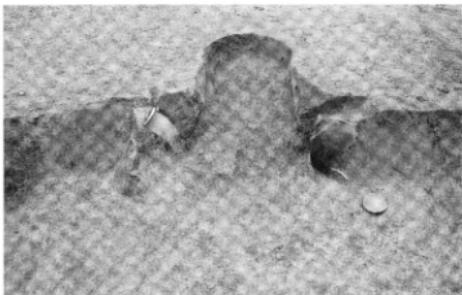
4 第30号住居跡（S I -30）
遺物（154）出土状況

5 第30号住居跡（S I -30）
カマド全景（調査前）

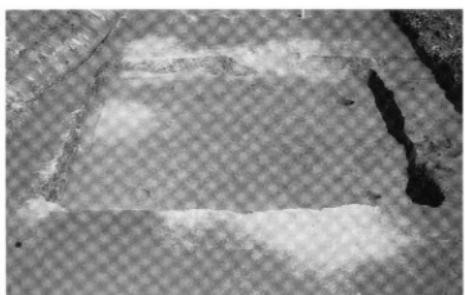
6 第30号住居跡（S I -30）
カマド掘方全景



1、遺物出土状況全景



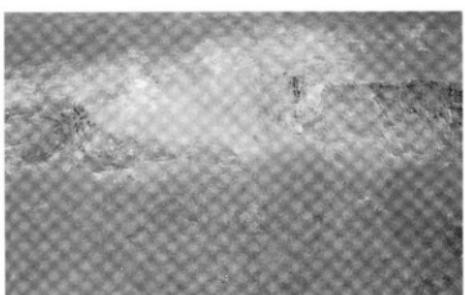
5、北カマド袖内遺物出土状況



2、遺構全景



6、北カマド掘方全景



3、北カマド全景（調査前）



7、東カマド全景（調査前）



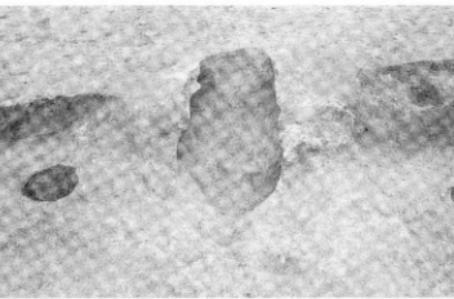
4、北カマド全景及遺物出土状況



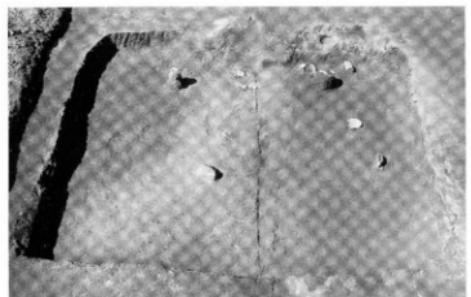
8、東カマド全景



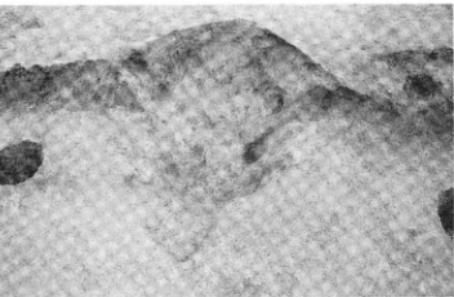
1、南北土層東面全景



5、カマド全景



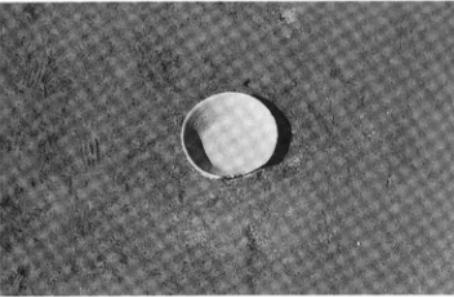
2、遺物出土状況全景



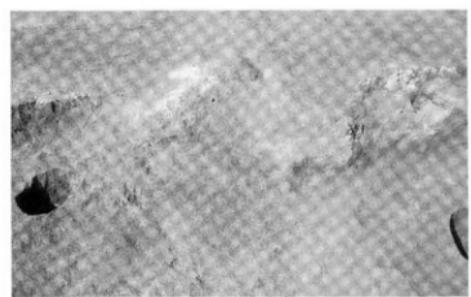
6、カマド掘方全景



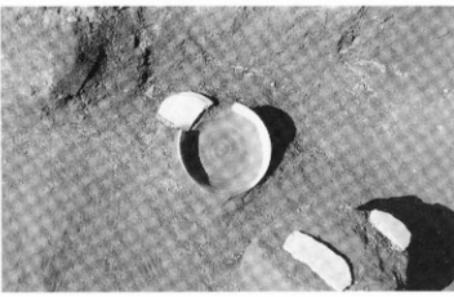
3、遺構全景



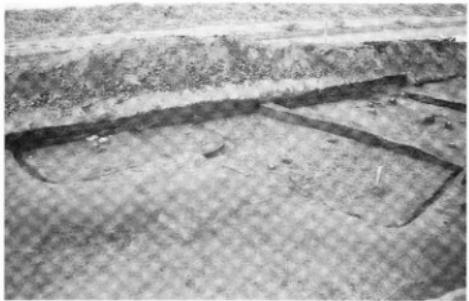
7、遺物（164）出土状況



4、カマド全景（調査前）



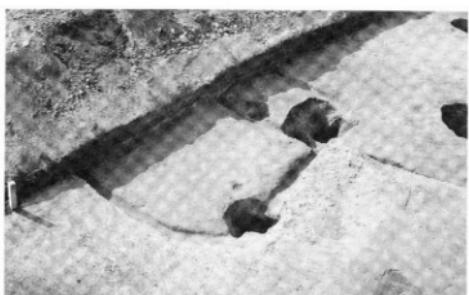
8、遺物（163）出土状況



1



5



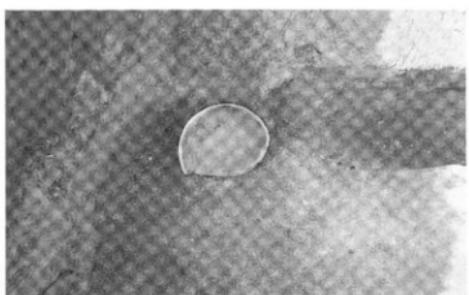
2



6



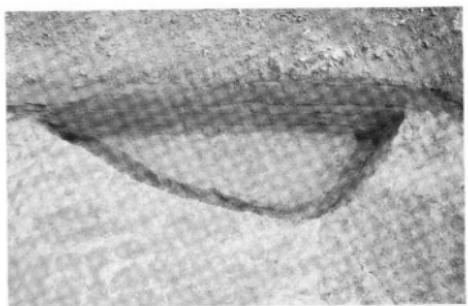
3



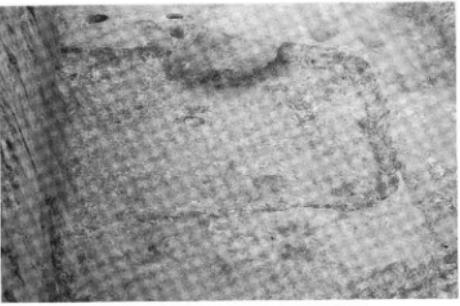
4

- | | |
|---|---|
| 1 | 第34号、35号住居跡（S I - 34、35）
土層・遺物出土状況全景 |
| 2 | 第35号住居跡（S I - 35）
遺構全景 |
| 3 | 第34号住居跡（S I - 34）
遺構全景 |
| 4 | 第34号住居跡（S I - 34）
遺物（169）出土状況 |
| 5 | 第35号住居跡（S I - 35）
遺物（172）出土状況 |
| 6 | 第34号住居跡（S I - 35）
カマド掘方全景 |

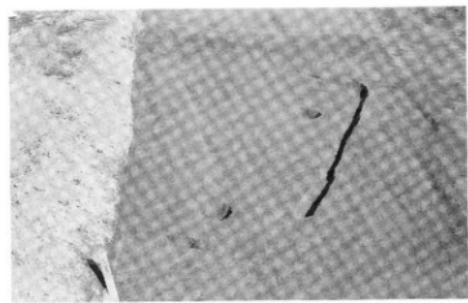
図版89 造構20（第36～38、40号住居跡・SI-36～38、40）



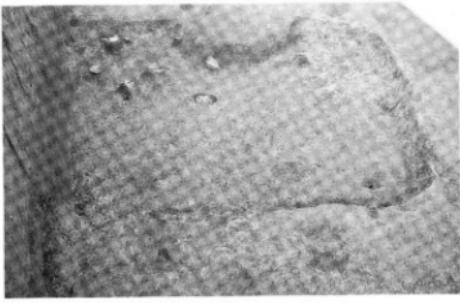
1、第36号住居跡（SI-36）遺構全景



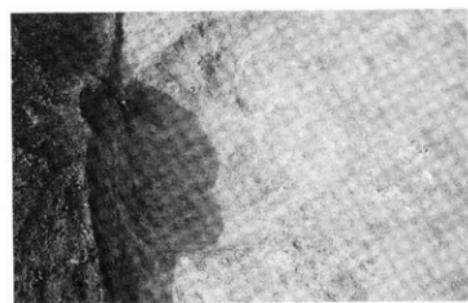
5、第40号住居跡（SI-40）遺構全景



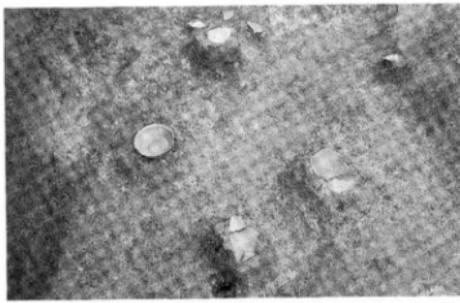
2、第37号住居跡（SI-37）遺構全景



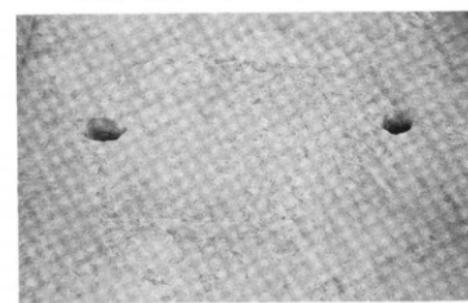
6、第40号住居跡（SI-40）遺物出土状況全景



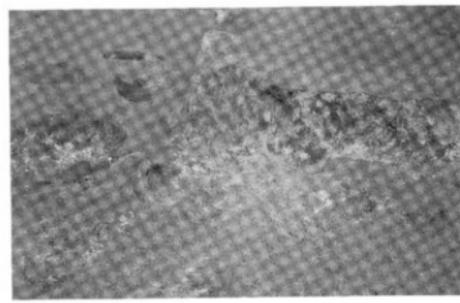
3、第37号住居跡（SI-37）カマド掘方全景



7、同近景



4、第38号住居跡（SI-38）遺構全景

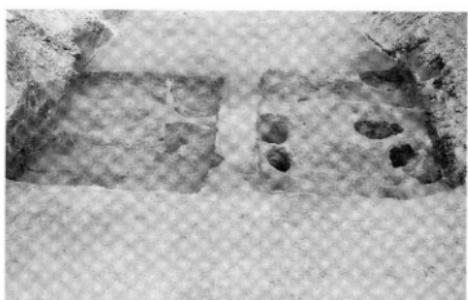


8、第40号住居跡（SI-40）カマド全景

図版90 遺構21（掘立柱建物跡、方形周溝墓、土坑1）



1



5



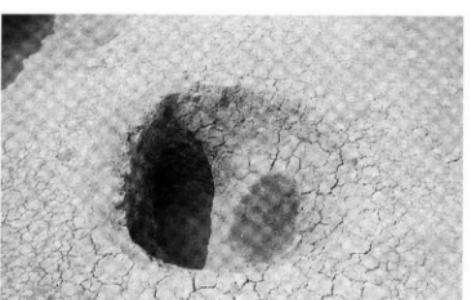
2



6



3



7



4

- | | |
|---|---------------------|
| 1 | 第1号～3号建物跡（SB-1～3）全景 |
| 2 | 同近景 |
| 3 | 第1号方形周溝墓（SX-1）全景 |
| 4 | 第1号溝（SD-1）全景 |
| 5 | 第2号溝（SD-2）全景 |
| 6 | 第1号土坑（SK-1）全景 |
| 7 | 第2号土坑（SK-2）全景 |



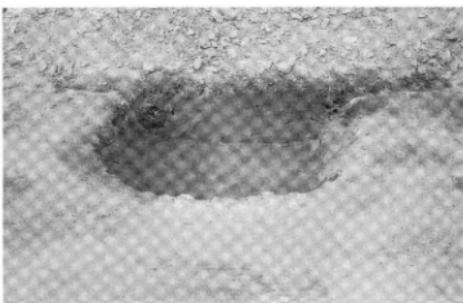
1、第3号土坑 (SK-3) 全景



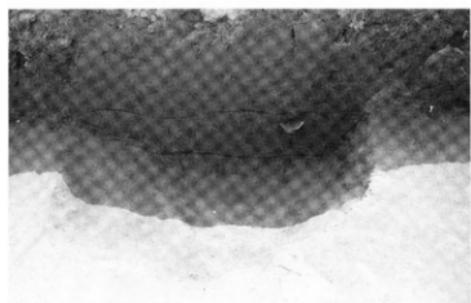
5、第9号土坑 (SK-9) 全景



2、第4号土坑 (SK-4) 全景



6、第14号土坑 (SK-14) 全景



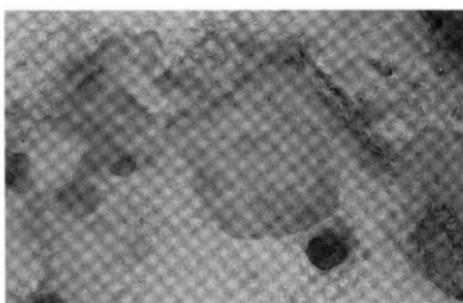
3、第6号土坑 (SK-6) 全景



7、第15号土坑 (SK-15) 全景



4、第7号土坑 (SK-7) 全景

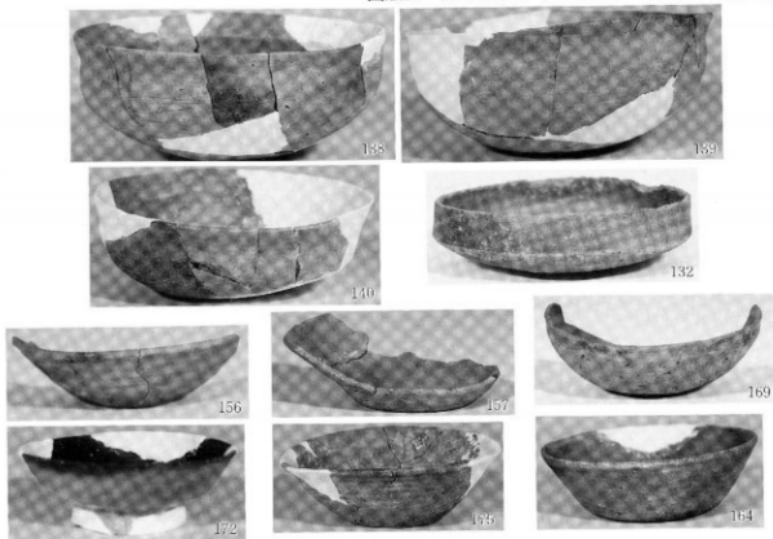


8、第16号土坑 (SK-16) 全景

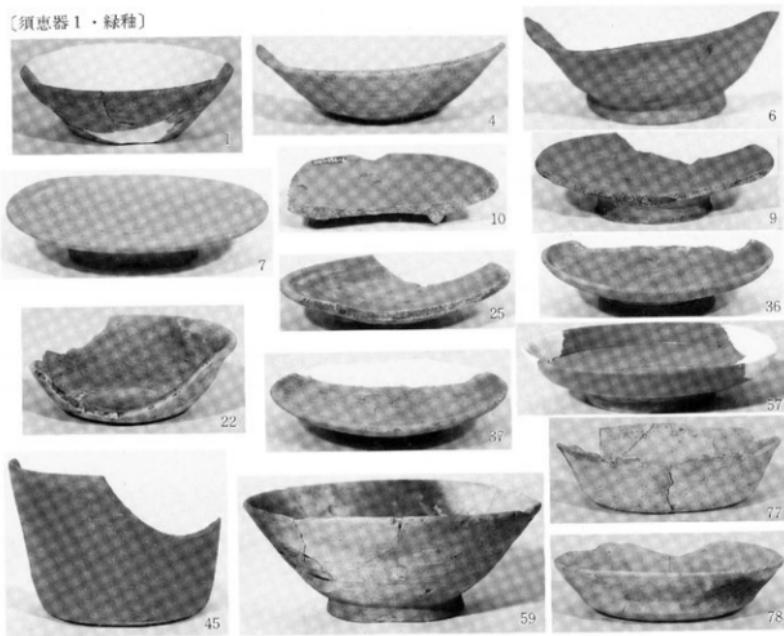
図版92 出土遺物1（土師器1）



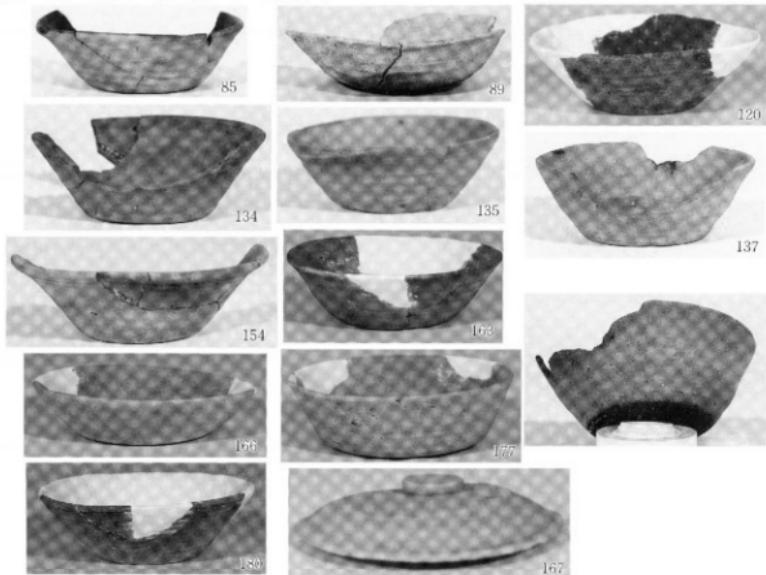
図版93 出土遺物2(土師器2、須恵器1、綠釉)



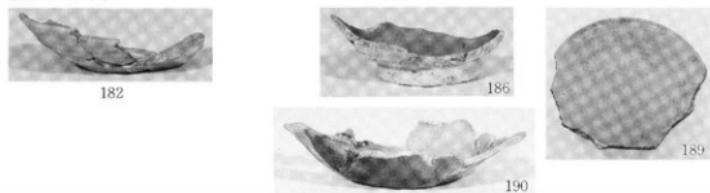
[須恵器1・綠釉]



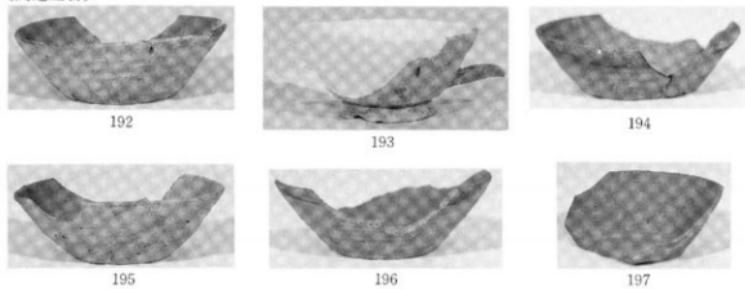
図版94 出土遺物3（須恵器2、土師器3）



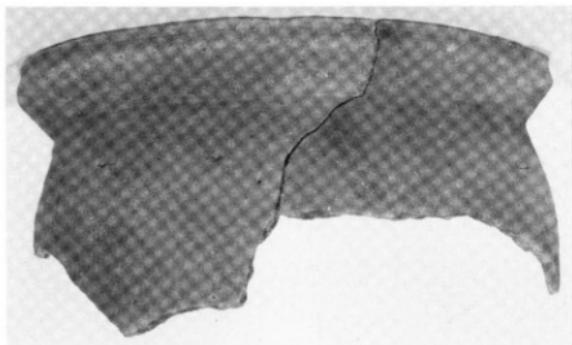
〔掘立・土坑〕



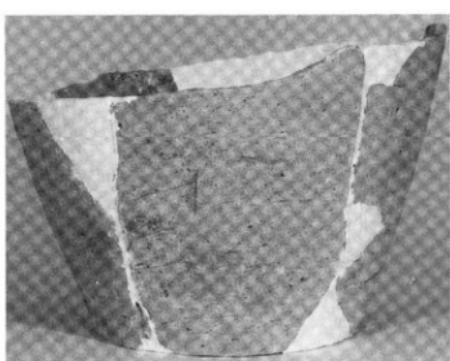
〔関連遺物〕



図版95 出土遺物4(斐1)



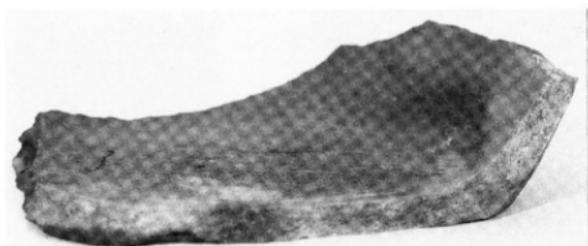
43



42

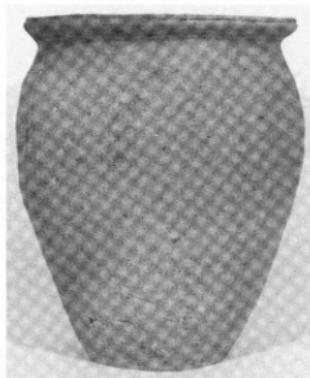


72

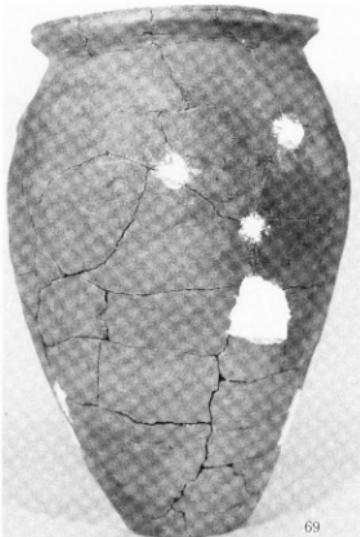


63

図版96 出土遺物5（甕2）



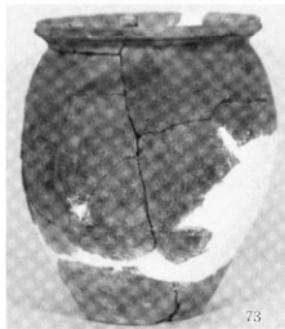
29



69



70



73

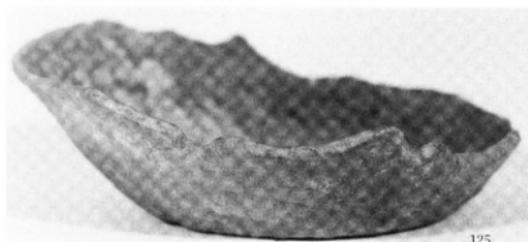
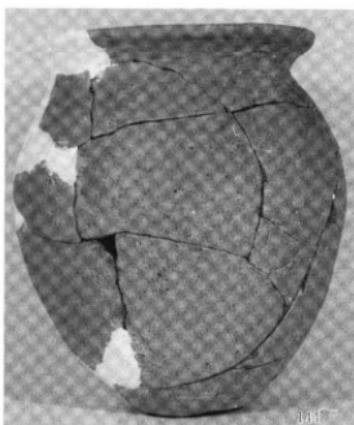
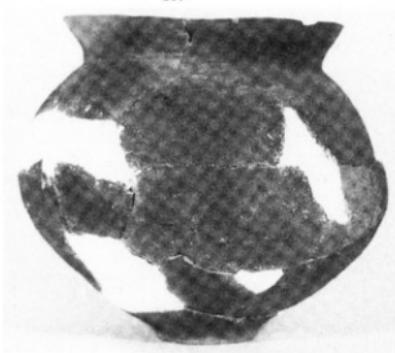
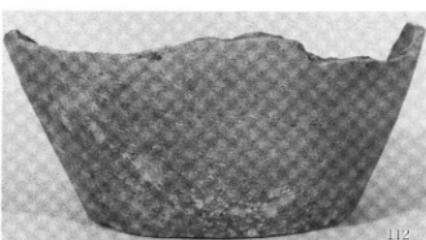
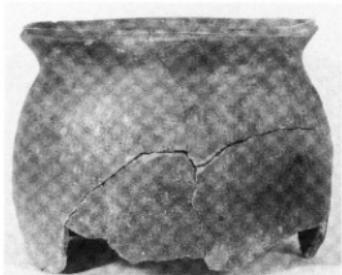
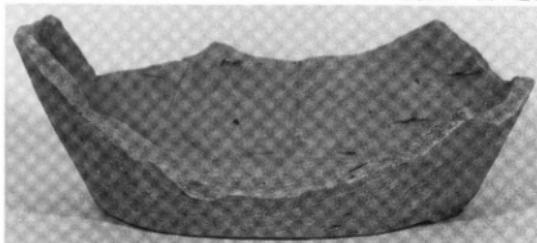


71

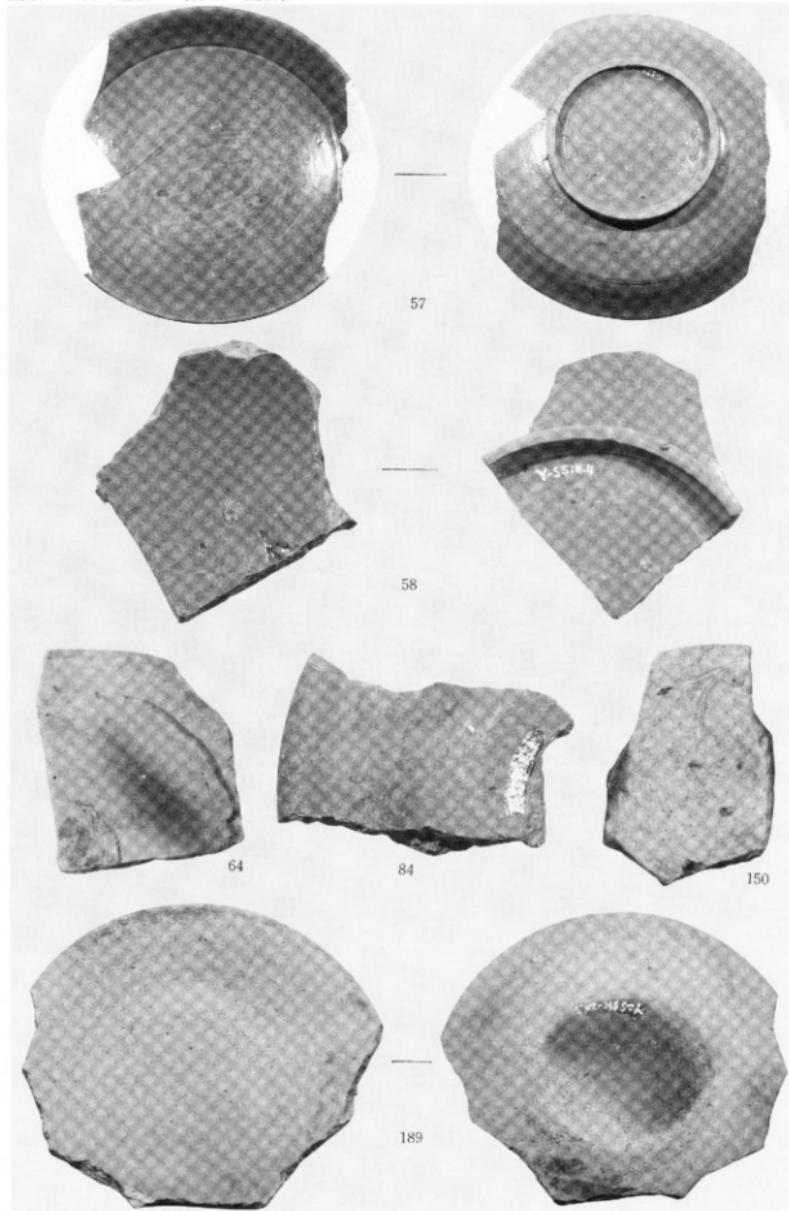


30

図版97 出土遺物6 (表3)



図版98 出土遺物 7 (縄袖・墨書)



図版99 出土遺物8（鐵器・石器）

〔刀子〕



66



152



116



115

〔釘〕

〔鉢〕



117



191



19



44



52



161

〔磨石〕



131

〔石斧〕



130



147

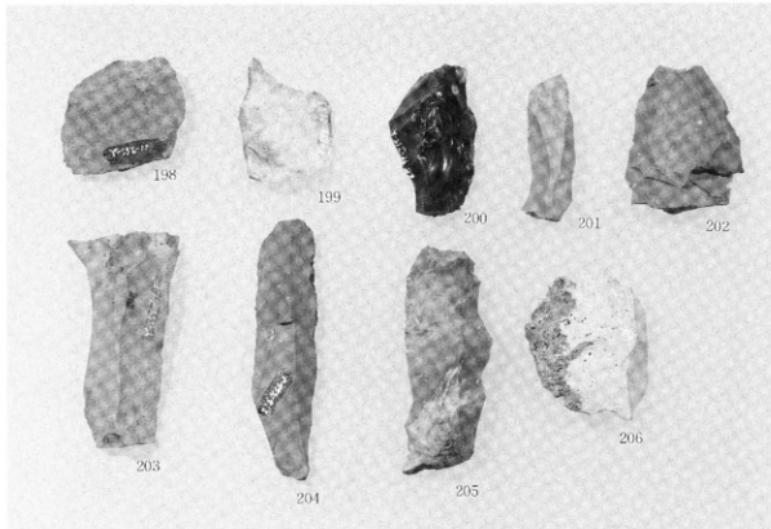


118



162

図版100 出土遺物9（旧石器、縄文・弥生）



旧石器時代出土遺物



縄文式土器・弥生式土器（右下の1点）

八千代町埋蔵文化財調査報告書第6集

茨城県結城郡八千代町
一本木遺跡発掘調査報告書

編集 常総考古学研究所
〒285 佐倉市大蛇町497-6
発行 平成9年3月31日
八千代町教育委員会
一本木遺跡調査会
印刷 八千代印刷有限会社